

京都府遺跡調査概報

第 55 冊

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

- (1) 奈 具 岡 遺 跡
- (2) 里 ケ 谷 横 穴 群
- (3) 堤 谷 遺 跡
- (4) 野 中 城 跡
- (5) 薬 師 古 墳 群

1 9 9 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 奈具岡遺跡遠景（西から）



(2) 奈具岡遺跡遠景（上から）



(3) 奈具岡遺跡検出遺構全景（上から）



(1) 水晶原石・玉未製品



(2) 水晶剥片類



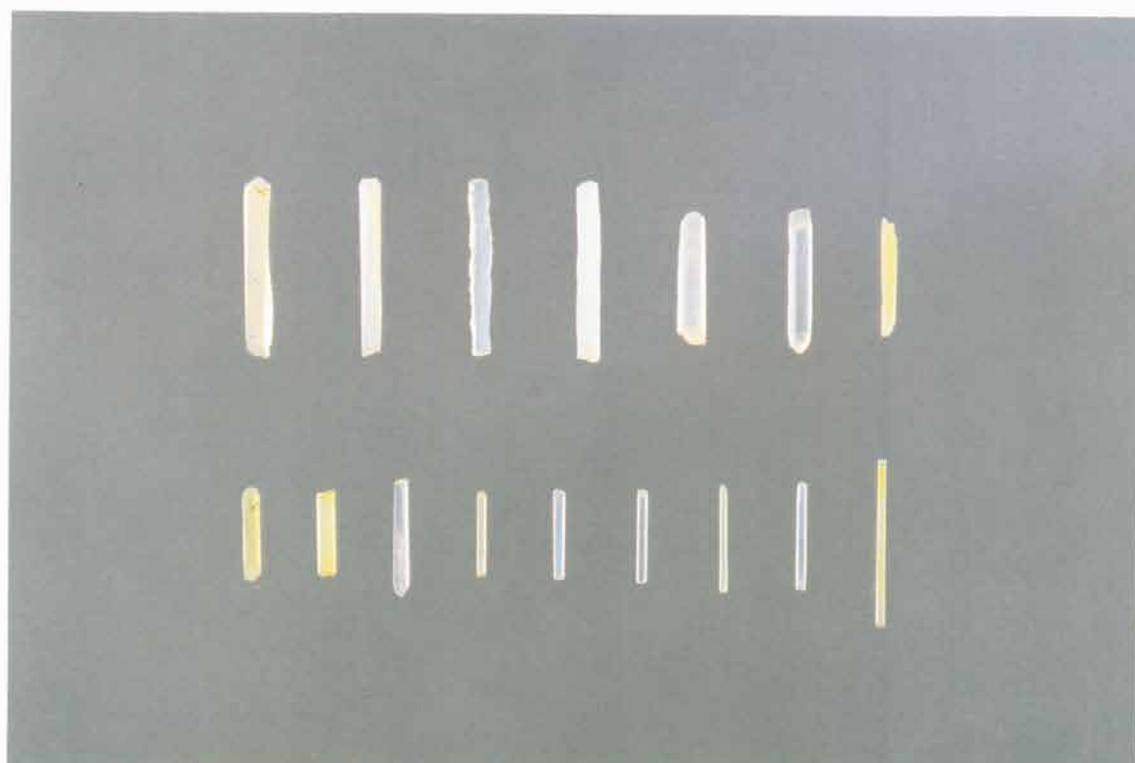
(1) 碧玉製管玉未製品



(2) 碧玉・綠色凝灰岩製玉類未製品・製品



(1) 瑪瑙製石針石核・未製品



(2) 瑪瑙製石針未製品・成品

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや10年余を経過し、さらに新しい10年に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去10年をふりかえてみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成4年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、丹後国営農地(東部・西部地区)関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会・大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- (1) 奈具岡遺跡 (2) 里ヶ谷横穴群 (3) 堤谷古墳群 (4) 野中城跡
(5) 薬師古墳群

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
丹後国営農地(東部・西部地区)関係遺跡			農林水産省 近畿農政局	
(1) 奈具岡遺跡	竹野郡弥栄町溝谷 奈具岡	平4.6.25～ 10.22		増田孝彦 田代 弘
(2) 里ヶ谷横穴群	中郡大宮町周枳 里ヶ谷	平4.8.24～ 平5.1.8		石崎善久
(3) 堤谷古墳群	熊野郡久美浜町 丸山堤谷	昭63.8.3～ 11.29 平3.5.7～ 9.10		荒川 史 森 正
(4) 野中城跡	熊野郡久美浜町 丸山野中	平3.8.23～ 9.12		森 正
(5) 薬師古墳群	熊野郡久美浜町 女布薬師	平4.5.18～ 8.11		黒坪一樹

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

はじめに	1
(1) 奈具岡遺跡	4
1. 位置と環境	4
2. 調査経過	7
3. 調査概要	11
4. 調査の成果と問題点	62
5. むすび	81
(2) 里ヶ谷横穴群	89
1. 位置と環境	89
2. 調査経過	93
3. 里ヶ谷横穴群分布状況	93
4. 各横穴の調査概要	95
5. むすび	119
付載 里ヶ谷横穴群出土の古人骨	125
(3) 堤谷古墳群	129
1. はじめに	129
2. 位置と環境	129
3. 調査の概要	131
4. まとめ	154
(4) 野中城跡	156
1. はじめに	156
2. 調査概要	156
(5) 薬師古墳群	158
1. はじめに	158
2. 位置と環境	159
3. 調査経過	159
4. 検出遺構	160
5. 出土遺物	165
6. まとめ	171

挿 図 目 次

(1) 奈具岡遺跡

第1図	周辺遺跡分布図	5
第2図	調査地及び周辺遺跡分布図	8
第3図	調査地トレンチ配置図	9
第4図	奈具岡遺跡遺構平面図	13
第5図	S H01平面実測図	15
第6図	S H02平面実測図	15
第7図	S H03平面実測図	16
第8図	S H04平面実測図	17
第9図	S H05平面実測図	18
第10図	S H06平面実測図	19
第11図	S H11平面実測図	20
第12図	S H14・15平面実測図	21
第13図	S H14中央土坑実測図	22
第14図	S H15中央土坑実測図	22
第15図	S H16平面実測図	23
第16図	S H17平面実測図	24
第17図	S H19平面実測図	25
第18図	S H21実測図	26
第19図	S H23実測図	27
第20図	S K01実測図	28
第21図	S K02実測図	28
第22図	S K03実測図	29
第23図	S B01・02実測図	30
第24図	鍛冶炉実測図	31
第25図	炭窯S K04実測図	31
第26図	各住居跡出土弥生土器実測図	33
第27図	鍛冶炉周辺出土須恵器実測図	34

第28図	水晶製玉生産関連遺物実測図	35
第29図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(1)	38
第30図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(2)	39
第31図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(3)	41
第32図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(4)	42
第33図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(5)	44
第34図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(6)	45
第35図	ガラス質安山岩製石針関連遺物実測図	47
第36図	瑪瑙製石針関連遺物実測図(1)	49
第37図	瑪瑙製石針関連遺物実測図(2)	50
第38図	石鋸・石鋸未製品実測図	52
第39図	砥石実測図(1)	54
第40図	砥石実測図(2)	55
第41図	砥石実測図(3)	56
第42図	安山岩製棒状不明磨製石製品	56
第43図	小形錐状石器	57
第44図	楔形石器・石鏃・石錐	57
第45図	有孔円盤状磨製石製品	57
第46図	その他の石器	59
第47図	花崗岩製不明磨製石製品	60
第48図	有舌尖頭器実測図	61
第49図	水晶製玉製作工程図	65
第50図	S H15・23玉作り関連遺物分布図	66
第51図	碧玉・緑色凝灰岩製管玉製作工程図	67
第52図	角柱体施溝部位模式図	71
第53図	石針製作工程図	73
第54図	石針先端部模式図	76
(2) 里ヶ谷横穴群		
第55図	調査地位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図	89
第56図	里ヶ谷横穴群・左坂古墳群・横穴群分布図	91
第57図	里ヶ谷横穴群地形測量図及び検出遺構配置図	94
第58図	里ヶ谷1号横穴出土遺物実測図	95

第59図	里ヶ谷2号横穴実測図	97
第60図	里ヶ谷2号横穴遺物出土状況図	98
第61図	里ヶ谷2号横穴出土遺物実測図	99
第62図	里ヶ谷3号横穴実測図	100
第63図	里ヶ谷3号横穴玄室内遺物出土状況	101
第64図	里ヶ谷3号横穴出土遺物実測図(1)	101
第65図	里ヶ谷3号横穴出土遺物実測図(2)	102
第66図	里ヶ谷4号横穴実測図	103
第67図	里ヶ谷4号横穴前庭部遺物出土状況	105
第68図	里ヶ谷4号横穴玄室内遺物出土状況	106
第69図	里ヶ谷4号横穴出土遺物実測図(1)	107
第70図	里ヶ谷4号横穴出土遺物実測図(2)	108
第71図	里ヶ谷5号横穴実測図	109
第72図	里ヶ谷5号横穴前庭部遺物出土状況	110
第73図	里ヶ谷5号横穴玄室内遺物出土状況	111
第74図	里ヶ谷5号横穴出土遺物実測図(1)	112
第75図	里ヶ谷5号横穴出土遺物実測図(2)	113
第76図	里ヶ谷6号横穴実測図	114
第77図	里ヶ谷6号横穴前庭部土層断面図	115
第78図	里ヶ谷6号横穴玄室内遺物出土状況	115
第79図	里ヶ谷6号横穴出土遺物実測図	116
第80図	S X01実測図	118
第81図	S X01出土遺物実測図	118
第82図	里ヶ谷横穴群変遷図	120
(3) 堤谷古墳群		
第83図	調査地及び周辺の遺跡	129
第84図	国営農地永留6団地平成3年度工区内埋蔵文化財分布状況	130
第85図	堤谷古墳群B-1～-3号墳測量図	132
第86図	B-1号墳主体部実測図	133
第87図	B-3号墳 墓壙1	134
第88図	B-3号墳 墓壙2	135
第89図	出土遺物実測図	136

第90図	B-5~B-11号墳地形測量図	138
第91図	B-5号墳墓壙1実測図	139
第92図	B-5号墳墓壙1上面遺物出土状況	140
第93図	棺内土器出土状況	140
第94図	B-5~B-11号墳墳丘測量図	141
第95図	B-5号墳墓壙2実測図	144
第96図	B-7号墳墓壙実測図	145
第97図	B-8号墳墓壙実測図	147
第98図	B-9号墳墓壙実測図	148
第99図	B-10号墳墓壙1実測図	149
第100図	B-10号墳土器出土状況	149
第101図	B-11号墳墓壙2・3実測図	150
第102図	B-11号墳墓壙1・2・3実測図	151
第103図	出土遺物実測図(1)	152
第104図	出土遺物実測図	153
(4) 野中城跡		
第105図	調査地位置図	156
第106図	Eトレンチ堀切平面図	157
第107図	堀切土層断面図	157
(5) 薬師古墳群		
第108図	調査地全体地形図	158
第109図	B・C地区遺構検出状況	161
第110図	B地区(中世墓群)平・断面図	162
第111図	C地区(石列遺構南東隅)平面図	164
第112図	出土遺物実測図(1)	165
第113図	石仏実測図(1)	166
第114図	石仏実測図(2)	167
第115図	石仏実測図(3)	168
第116図	五輪塔・宝篋印塔実測図(1)	169
第117図	五輪石塔・宝篋印塔実測図(2)	170
第118図	宝篋印塔・石製品実測図	171

付 表 目 次

付表1	昭和63年度、平成3・4年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----	1
付表2	国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----	2
(1) 奈具岡遺跡		
付表3	丹後地方玉作り関係遺物出土遺跡一覧表-----	69
付表4	S H23出土石針角柱体及び碧玉・緑色凝灰岩擦切り施溝部位別計測表-----	71
付表5	各種玉類法量表-----	72
付表6	奈具岡遺跡弥生時代住居跡法量表-----	81
付表7	奈具岡遺跡土坑法量表-----	81
付表8	奈具岡遺跡掘立柱建物跡一覧表-----	81
付表9	奈具岡遺跡水晶製玉作り関連遺物法量表-----	82
付表10	碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物法量表-----	82
付表11	奈具岡遺跡ガラス質安山岩製石針関連遺物法量表-----	85
付表12	奈具岡遺跡瑪瑙製石針関連遺物法量表-----	86
付表13	奈具岡遺跡石鋸法量表-----	86
付表14	奈具岡遺跡砥石法量表-----	87
付表15	奈具岡遺跡小形錐状石器法量表-----	87
付表16	奈具岡遺跡棒状不明磨製石製品法量表-----	88
付表17	奈具岡遺跡楔形石器・石鏃・石錐法量表-----	88
付表18	奈具岡遺跡その他の石器法量表-----	88
付表19	奈具岡遺跡花崗岩製磨製石製品法量表-----	88
(2) 里ヶ谷横穴群		
付表20	里ヶ谷横穴群出土須恵器観察表-----	122
付表21	里ヶ谷横穴群出土土師器観察表-----	124
(5) 薬師古墳群		
付表22	石製塔婆類一覧表-----	172

図 版 目 次

(1) 奈具岡遺跡

- 図版第1 (1) 奈具谷遺跡(谷部)・奈具岡遺跡(丘陵)調査前風景
(2) 奈具岡遺跡調査前風景
- 図版第2 (1) S H14・15・24検出状況(真上から) (2) S H04・05検出状況
- 図版第3 (1) 調査地近景(東から S H01を望む)
(2) 調査地近景(西から S H06を望む)
- 図版第4 (1) S H01検出状況(北東から) (2) S H01検出状況(東から)
- 図版第5 (1) S H06検出状況(北から) (2) S H06検出状況(西から)
- 図版第6 (1) S H14・15検出状況(北東から) (2) S H14・15検出状況(南西から)
- 図版第7 (1) S H15中央土坑断面の状況(西から)
(2) S H15中央土坑完掘状況(北西から)
- 図版第8 (1) S H16検出状況(南から) (2) S H16検出状況(南東から)
- 図版第9 (1) S H17検出状況(南西から) (2) S H17検出状況(東から)
- 図版第10 (1) S H11検出状況(西から) (2) S H20検出状況(北から)
- 図版第11 (1) S H21検出状況(南から) (2) S H21中央土坑(西から)
- 図版第12 (1) S H19検出状況(南から) (2) S H19検出状況(西から)
- 図版第13 (1) S H22・23検出状況(東から) (2) S H23検出状況(西から)
- 図版第14 (1) S H22検出状況(西から) (2) 鍛冶炉検出状況
- 図版第15 (1) S B01検出状況(東から)
(2) S B01・S H16・S H02検出状況(東から)
- 図版第16 (1) 炭窯(S K04)検出状況 (2) 炭窯(S K04)検出状況
- 図版第17 (1) 現地説明会風景 (2) 現地説明会風景
- 図版第18 (1) S H06出土碧玉 (2) S H01出土碧玉角柱体
(3) S H06出土石鋸 (4) S H03出土紅簾片岩
(5) S H16出土水晶 (6) S H15出土有孔円盤状石製品
- 図版第19 (1) S H17出土砥石 (2) S H06出土砥石
(3) S H06出土磨製石器転用石器 (4) S H17出土土器(壺)
(5) S H02出土土器(壺) (6) S H23出土土器(壺)

- 図版第20 (1)各遺構出土弥生土器(壺)
(2)各遺構出土弥生土器(甕:1~8、高杯:9・10)
- 図版第21 (1)水晶原石と水晶製玉未製品 (2)水晶剝片類
- 図版第22 (1)石核(7・8)・残核(1~4)・剝片(5・6)
(2)方形の石核(1~3)と板状剝片(4~8)
- 図版第23 (1)板状剝片(いずれも緑色凝灰岩製) (2)碧玉の擦切施溝分割過程
- 図版第24 (1)四角柱(1~13)・多角柱(14~18)・管玉(19~22・24)・角玉(23)
(2)安山岩製棒状不明磨製石製品
- 図版第25 各遺構出土石鋸(番号は第38図実測図に対応)
- 図版第26 (1)SH23出土石針石核及び角柱体
(2)SH23出土石針角柱体及び成品
- 図版第27 (1)SH23出土瑪瑙製石針石核及び未製品
(2)SH23出土瑪瑙製石針角柱体及び成品
- 図版第28 (1)SH23出土瑪瑙製石核 (2)SH15石針石核・角柱体・成品
- 図版第29 (1)砥石(SH01:6、SH06:5、SH11:2、SH19:3、SH23:1・4)
(2)SH23中央土坑出土砥石
- 図版第30 (1)SH17出土筋砥石 (2)砥石(SH01:3、SH02:4、SH03:5、SH06:
1・2・7、SH15:8、SH21:6)
- 図版第31 (1)石庖丁状の磨製石製品(SH04:2、SH06:1・4、SH21:3、包含層:5)
(2)磨製石斧(1~4・6・7)と敲石(5)
- 図版第32 (1)SH21出土瑪瑙製小形錐状石器
(2)SH23出土瑪瑙製小形錐状石器
- 図版第33 (1)SH21中央土坑出土碧玉製小形錐状石器(1~4)
(2)花崗岩製不明磨製石製品
- 図版第34 安山岩製石針製作工程
- 図版第35 瑪瑙製石針製作工程
- 図版第36 石針の細部
- 図版第37 水晶製管玉未製品の研磨状況:1 小形錐状の石器:2・3
石針角柱体頭頂部の施溝分割痕:4・5 石針石核の施溝分割痕:6・7

(2) 里ヶ谷横穴群

- 図版第38 (1)1~5号横穴全景(南東から) (2)4~6号横穴全景(南西から)
- 図版第39 (1)2・3号横穴全景(南から) (2)2号横穴全景(南から)

- 図版第40 (1) 2号横穴遺物出土状況(南東から)
(2) 2号横穴西袖部遺物・人骨出土状況(東から)
- 図版第41 (1) 3号横穴全景(南から) (2) 3号横穴玄室内遺物出土状況(南から)
- 図版第42 (1) 4号横穴全景(南から) (2) 4号横穴墓道状遺構(東から)
- 図版第43 (1) 4号横穴前庭部遺物出土状況(北西から)
(2) 4号横穴玄室内・人骨出土状況(南から)
- 図版第44 (1) 5号横穴全景(南から)
(2) 5号横穴前庭部上層遺物出土状況(東から)
- 図版第45 (1) 5号横穴前庭部下層遺物出土状況(西から)
(2) 5号横穴玄室内遺物出土状況(南から)
- 図版第46 (1) 6号横穴全景(南から) (2) 6号横穴全景(北から)
- 図版第47 (1) 6号横穴玄室内遺物出土状況(西から)
(2) 6号横穴前底部土層断面(南から)
- 図版第48 (1) S X 01全景(南から) (2) S X 01遺物出土状況(南東から)
- 図版第49 出土遺物(1)
- 図版第50 出土遺物(2)
- 図版第51 出土遺物(3)
- 図版第52 出土遺物(4)

(3) 堤谷古墳群

- 図版第53 (1) 堤谷古墳群全景(北から) (2) B-1号墳全景(南から)
- 図版第54 (1) B-1号墳墓壇全景(南から)
(2) B-1号墳墓壇内遺物出土状態(西から)
(3) B-1号墳墓壇土層断面(南から)
- 図版第55 (1) B-2号墳全景(北から) (2) B-3号墳全景(北から)
- 図版第56 (1) B-3号墳墓壇1遺物出土状態(北から)
(2) B-4号墳墳丘裾遺物出土状態(北東から)
- 図版第57 (1) B-5号墳調査前全景(南から) (2) B-5号墳調査後全景(南から)
- 図版第58 (1) B-5号墳墓壇1全景 (2) B-5号墳墓壇1上面土器群
(3) B-5号墳墓壇1棺内土器出土状態
- 図版第59 (1) B-5号墳墓壇2全景(南から)
(2) B-5号墳墓壇2上面土器出土状態
- 図版第60 (1) B-7号墳墓壇全景 (2) B-7号墳墓壇内土層断面(西から)

- 図版第61 (1) B-8号墳墓壙検出状況(北から) (2) B-8号墳墓壙全景(南から)
- 図版第62 (1) B-9号墳全景(南から) (2) B-9号墳墓壙全景(南から)
- 図版第63 (1) B-10号墳墓壙全景(東から) (2) B-10号墳墓壙上面土器群
(3) B-10号墳墓壙2全景 (4) B-10号墳墓壙3全景
- 図版第64 (1) B-11号墳全景(南から) (2) B-11号墳墓壙1全景(東から)
(3) B-11号墳墓壙3(土器棺墓) (4) B-11号墳墓壙4全景
- 図版第65 出土遺物(1)
- 図版第66 出土遺物(2)
- 図版第67 出土遺物(3)
- (4) 野中城跡
- 図版第68 (1)堀切 (2)堀切土層断面
- (5) 薬師古墳群
- 図版第69 (1)調査地全景(北東から) (2) A地区試掘状況(東から)
- 図版第70 (1) B地区中世墓群検出状況(東から)
(2) C地区石列遺構検出状況(東から)
- 図版第71 (1) C地区石列検出状況(南東隅) (2) C地区石仏検出状況(石列南辺)
- 図版第72 (1)五輪塔・石仏出土状況(C地区) (2)石仏出土状況(C地区)
- 図版第73 石仏・五輪石塔
- 図版第74 石仏(1)
- 図版第75 石仏(2)
- 図版第76 五輪石塔・宝篋印塔

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡 昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)に伴い、昭和63年度・平成3年度の2年度にわたり調査を実施した京都府熊野郡久美浜町堤谷古墳群、平成3年度に調査を実施した久美浜町野中城跡、平成4年度までに調査が終了した久美浜町薬師古墳群、竹野郡弥栄町奈具岡遺跡、中郡大宮町里ヶ谷横穴群の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、当調査研究センターでは、昭和60年度から開始し、付表2に示すように多大な成果があがっている^(注1)。

現地調査は、昭和63年度には当調査研究センター調査第2課調査第1係長水谷壽克、同調査員荒川 史があたり、平成3年度には、調査第2課調査第1係長水谷壽克、同調査員森正があたり、平成4年度には、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、黒坪一樹、田代 弘、石崎善久が担当した。

概報執筆にあたっては、各担当のほか、佐々木理(立命館大学学生)が執筆した。また、里ヶ谷横穴出土の人骨の鑑定は、京都大学理学部自然人類学研究室教授片山一道氏に依頼し、玉稿を賜った。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた^(注2)。また、調査にあたっては、久美浜町教育委員会、弥栄町教育委員会、大宮町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方々の御協力と御指導を賜った^(注3)。あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。(増田孝彦)

付表1 昭和63年度、平成3・4年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	奈具岡遺跡	京都府竹野郡弥栄町 溝谷小字奈具岡	平成4年6月25日 ～平成4年10月22日	調査第1係長 水谷壽克 主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一 田代 弘

2	里ヶ谷横穴群	京都府中郡大宮町 周枳小字里ヶ谷	平成4年8月24日 ～平成5年1月8日	調査第1係長 伊野近富 調査員 石崎善久
3	堤谷古墳群	京都府熊野郡久美浜町 丸山小字堤谷	昭和63年8月3日 ～昭和63年11月29日 平成3年5月7日 ～平成3年9月10日	調査第1係長 水谷壽克 調査員 荒川 史 調査第1係長 水谷壽克 調査員 森 正
4	野中城跡	京都府熊野郡久美浜町 丸山小字野中	平成3年8月28日 ～平成3年9月12日	調査第1係長 水谷壽克 調査員 森 正
5	薬師古墳群	京都府熊野郡久美浜町 女布小字薬師	平成4年5月18日 ～平成4年8月11日	調査第1係長 伊野近富 調査員 黒坪一樹

付表2 国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	概要
1	有明古墳群・ 横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月 ～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月 ～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山 古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀)
5	高山古墳群 高山遺跡	丹後町徳光	昭和61年7月 ～昭和62年9月	古墳6基(6世紀後半～7世紀前半) 中・近世墓30基、竪穴式住居跡1
6	普甲古墳群・ 稲荷古墳群	弥栄町井辺	昭和62年6月 ～昭和62年12月	古墳11基(5世紀前半～6世紀前半)
7	新ヶ尾東古墳群	弥栄町吉沢	昭和62年12月 ～昭和63年1月	古墳3基(6世紀中葉・後半)
8	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和62年5月 ～昭和62年6月	城跡(柱穴・土坑)13世紀
9	アバタ古墳群	久美浜町新庄	昭和62年7月 ～昭和62年11月	古墳2基(6世紀末～7世紀前半)
10	スクモ塚古墳群	峰山町内記 弥栄町荒木	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳4基(4世紀末～5世紀)
11	アバタ東1号墳	久美浜町新庄	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳1基(6世紀中葉)
12	アサバラ遺跡	久美浜町新庄	昭和63年5月 ～昭和63年7月	竪穴式住居跡5(5世紀後半～6世紀)
13	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和63年6月 ～昭和63年8月	城跡(土坑・溝)15世紀 土坑(弥生時代中期末～後期初頭)
14	太田古墳群 下後古墳群	弥栄町和田野	平成元年8月 ～平成元年10月	古墳3基(6世紀初頭～中頃) 土坑(弥生時代中期末～後期初頭)
15	川向1号墳	久美浜町大井	平成元年4月 ～平成元年7月	古墳1基(6世紀後半)

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

16	阿婆田窯跡群	大宮町大野	平成元年8月 ～平成2年1月	窯跡6基(8世紀初頭～後半)
17	下後古墳群 大田南古墳群	弥栄町和田野	平成2年4月 ～平成2年8月	古墳3基(5世紀代)
18	横浦古墓	久美浜町栃谷	平成2年4月 ～平成2年7月	近世墓1
19	山形古墓	久美浜町大井	平成2年4月 ～平成2年6月	中世墓15・茶毘跡1・建物跡1
20	遠所古墳群	弥栄町鳥取・ 木橋	昭和62年8月 ～昭和62年10月 昭和63年6月 ～平成元年2月 平成3年8月 ～平成4年3月	古墳24基(5世紀末～6世紀後半)
21	通り古墳群	大宮町大野	平成3年5月 ～平成3年10月	古墳3基(古墳時代前期末) 土坑3基(13世紀)

(1) 奈具岡遺跡(第4次)

1. 位置と環境

①遺跡の位置

丹後半島は、京都府最北端に位置し、半島中央部には太鼓山(標高683m)、金剛童子山(標高613m)等を主峰とする山地が形成されている。一方、日本海沿岸部は、半島先端の経ヶ岬を境とし、東は若狭湾沿岸にかけて変化に富んだ典型的なリアス式海岸となっているが、西側は比較的その変化が少ない。

ここに報告する奈具岡遺跡は、丹後半島のほぼ中央部、竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡に所在する。周辺の地形は、南北6km・東西1.5kmの沖積地を中心とし、竹野川がその中央を北流する。竹野川は勾配が緩やかで、流域は氾濫原となっており居住地としては適さない。竹野川両岸には河岸段丘が形成されるが、東岸側がよく発達している。段丘上には標高40mあまりの東西に長い樹枝状の丘陵が延びており、その丘陵間を屈曲しながら狭長な谷が続いている。この狭長な谷を抜け、竹野川により形成された平野部にさしかかる支流沿いには扇状地が形成され、集落が集中的に営まれている。

このように、竹野川に面した低丘陵上には多数の遺跡が分布しており、奈具岡遺跡も竹野川東岸の東西に延びる主尾根より北側に派生した尾根の丘陵斜面に立地している。

②周辺の遺跡

奈具岡遺跡の周辺の遺跡について、主に町内の遺跡を中心に概観してみたい(第1図)。

旧石器時代の遺跡は、周辺では確認されていない。縄文時代の遺跡は、晩期の土器片が散布する等楽寺遺跡が知られるのみである。今回の調査で縄文時代草創期と推定される有舌尖頭器1点が出土した。有舌尖頭器の出土例は丹後地方では、久美浜町内^(注4)や峰山町途中ヶ丘遺跡^(注5)、舞鶴市小橋遺跡^(注6)の3遺跡が知られ、今回の出土で5例目となる。

弥生時代前期の遺跡は、竹野川沿いの微高地に立地する鳥取橋遺跡・家谷遺跡で土器の散布が認められる程度で、明確な集落遺跡は確認されていない。

弥生時代中期になると、当遺跡の立地する丘陵の谷筋に沿って集落遺跡が認められるようになる。黒部遺跡、奈具遺跡^(注7)、奈具岡遺跡^(注8)がこれにあたり、いずれも一連のものと考えられる。奈具遺跡は谷の入口部分に、その北側には黒部遺跡、奈具岡遺跡は奈具遺跡の南側に、それぞれ竹野川により形成された沖積地を臨む舌状の台地に立地している。対岸にはオテジ谷遺跡があり、水田面からの比高差約25mを測る。急峻な尾根上で中期後半の住居跡が発見された^(注9)。



第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | |
|-----------|------------|----------------|-------------|-------------|
| 1. 調査地 | 2. 奈具遺跡 | 3. 奈具岡遺跡 | 4. 奈具岡南古墳群 | 5. 鳥取橋遺跡 |
| 6. 坂野遺跡 | 7. 坂野岡遺跡 | 8. オテジ谷古墳 | 9. 丸山古墳 | 10. いもじや古墳群 |
| 11. フキ岡遺跡 | 12. 城楽寺遺跡 | 13. 外村遺跡 | 14. 太田古墳群 | 15. 太田南古墳群 |
| 16. 普甲古墳群 | 17. 宮ノ森古墳群 | 18. ゲンギョウの山古墳群 | 19. ニゴレ古墳群 | |
| 20. 鳥取古墳群 | 21. 遠所遺跡群 | 22. カセ谷遺跡 | 23. 黒部銚子山古墳 | 24. 西小田古墳群 |
| 25. 高山古墳群 | | | | |

弥生時代後期になると、周辺各所で土器の散布がみられるが、集落遺跡として確認されたものとして奈具遺跡・奈具岡遺跡や、竹野川西岸に立地する坂野遺跡等が知られている。

また、中期後半から後期にかけては、奈具岡遺跡や坂野丘遺跡の立地する丘陵が、墳墓として利用されている。奈具岡遺跡では後期に比定される方形周溝墓・方形貼石墓が検出されている。坂野丘遺跡は、坂野遺跡の南側丘陵に立地し、中期後半から後期にかけての木棺直葬墓3基が確認されている。後期に比定される第2主体部からはガラス製勾玉・小玉約500点、碧玉製管玉等総数832点の大量の玉類が出土している。時期は異なるものの、今回の調査で確認された玉作り遺跡との関連を検討する必要があるだろう。

このほかに、弥生時代後期と考えられる遺跡には、フキ岡遺跡・城楽寺遺跡・外村遺跡がある。いずれも奈具岡遺跡から南側丘陵を越えた、溝谷川流域に展開するものである。

古墳時代になると、丹後地方では前期末に築造されたと考えられている加悦町蛭子山古墳を筆頭に、網野町網野銚子山古墳、丹後町神明山古墳などの大型前方後円墳が順に築造されるようになる。黒部銚子山古墳も、これらに次ぐ丹後地方で4番目の規模を誇る前方後円墳である。奈具岡遺跡から北へ2km離れた丘陵上に位置し、全長105m・後円部径60m・高さ15m・前方部幅42m・高さ10mを測る。

古墳時代中期には、ニゴレ古墳、ゲンギョウの山古墳群、普甲古墳群、宮の森3・4号墳、いもじゃ古墳群等が築造される。ニゴレ古墳は、東へ約2.5km離れた丘陵先端に立地する直径約30mの円墳である。墳頂部中央で確認された割竹形木棺から、衝角付冑や短甲、頸甲といった武器や鉄剣、鉄鏃、舟形埴輪・椅子形埴輪等の形象埴輪が出土している。

後期古墳では、太田古墳群や遠所古墳群があげられる。太田古墳群は南南西へ2.5km離れた丘陵上に位置し、後期古墳を中心に51基の古墳からなる。2号墳は、直径30mの円墳であり、主体部からは勾玉、管玉、ガラス小玉等の玉類が出土し、円筒埴輪や朝顔形埴輪の列が確認されている。遠所古墳群は、ニゴレ古墳の南側の丘陵上に展開するが、ここは大規模な製鉄遺跡としても知られ、古墳群も含め遠所遺跡群と呼ばれている。古墳群は、竪穴式横口式石室墳4基を含む、木棺直葬墳を中心とした24基の古墳からなる。

遠所遺跡群は、調査の結果、製鉄炉・鍛冶炉・須恵器登窯・炭窯等の生産遺跡であるとともに、これらに伴う集落跡も確認され、生産と生活が同一場所で行われていたことが明らかとなった。古墳群と同時期の5世紀末頃から、一時期中断する時期があるが13世紀頃までの生活の痕跡が認められる。確認された製鉄炉のうち2基は、6世紀後半に比定される。8世紀後半には、原料(砂鉄)から製品まで作る一貫した生産体制であったことも判明している。今回の調査では、8世紀初頭の鍛冶炉、それに伴うと見られる炭窯が検出されており、遠所遺跡群及び周辺の製鉄遺跡との関連が注目される。(佐々木 理)

2. 調査経過

調査地が立地する丘陵一帯は、造成計画面積68haの奈具団地が計画され、すでに平成3年度より造成工事が開始されている。

奈具団地造成予定地内には、竹野川を見下ろすことのできる丘陵を中心として、古墳・城跡・散布地など多数の埋蔵文化財が確認されている。

調査地は、弥生時代中～後期の集落跡・墳墓が確認された奈具遺跡・奈具岡遺跡^(註25)の立地する丘陵に挟まれた谷奥に位置している。発掘調査に先だって行われた分布調査では、この地点において、多数の遺物の散布を確認しただけでなく、丘陵上においても遺構の存在を示す地形を確認した。そのため、遠所遺跡群など、最近行われた丘陵部での調査結果を参考に、当該地での遺構の分布状況を検討した結果、水田部及び丘陵斜面にわたって遺構が広範囲に形成されている可能性が高まった。

これにより、関係者協議のうえ、試掘調査を実施して遺構の広がり把握したのち、その結果により発掘調査を実施するかどうか判断することとなった。

試掘調査は平成3年度に、発掘調査は平成4年度に実施する予定となった。

(1)平成3年度の試掘調査

試掘調査は、調査第2課主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一が担当し、平成3年7月1日から7月17日まで行った。

調査は、平成4年度造成予定地内の谷部にT1～17、丘陵部にT18・19の計19本のトレンチを設定し、掘削を行った(第3図)。その結果、水田部のT8～T17トレンチで、土器・木器を含む流路を確認した。土器は弥生時代中期から平安時代までのものがあつた。T16トレンチでは深さ約3mのところまで溝が確認され、柵状の木製品が弥生時代中期の土器とともに出土した。T16トレンチ周辺は北側丘陵から張り出す微地形が認められ、この地点に遺構が存在することが確認された。

丘陵部では、T18で玉作り関連遺物を包含する土坑、T19で竪穴式住居跡とみられる遺構と焼土などを検出し、集落がこの丘陵上に広がる可能性が高まった。

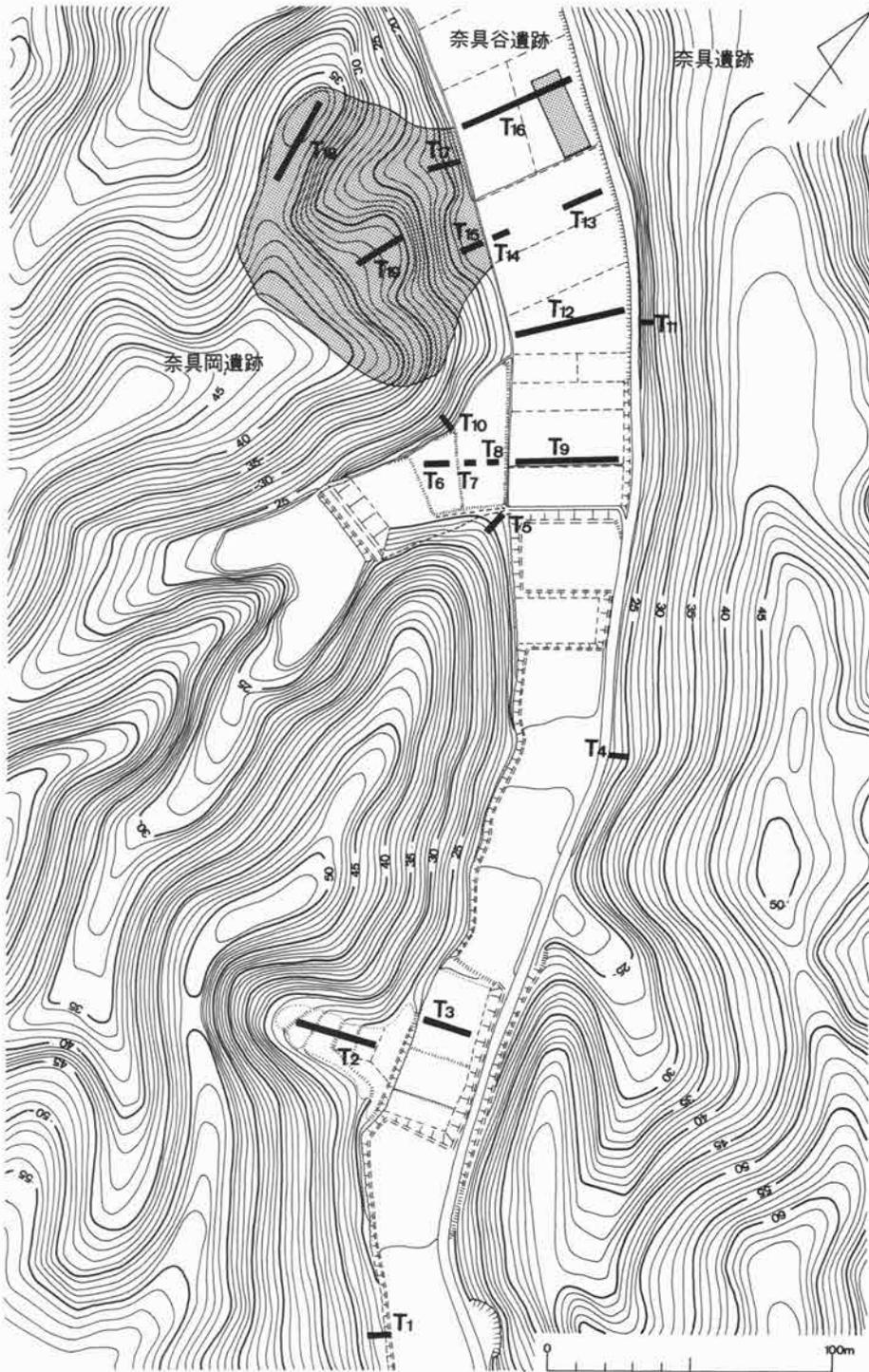
以上の成果を踏まえて協議した結果、T16トレンチ周辺の微地形部分については300㎡、丘陵部の造成対象範囲については面的な調査を行うこととなった。

京都府教育委員会により、谷部は奈具谷遺跡、丘陵部については、周知の遺跡である奈具岡遺跡と同一丘陵にあたることから、その範囲に含められた。奈具岡遺跡では、これまでに3回の調査が行われており、今回は第4次調査ということになる。



第2図 調査地及び周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|--------------|-----------------|-------------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 奈具谷遺跡 | 3. 奈具岡遺跡(第1～3次) | 4. 奈具谷遺跡 | 5. 奈具古墳群 |
| 6. 奈具岡北古墳群 | 7. 奈具岡古墳群 | 8. 奈具谷古墳群 | 9. 奈具岡西古墳 | 10. 新宮古墳群 |
| 11. 福西古墳群 | 12. 奈具神社裏古墳群 | 13. 小墓古墳群 | 14. 奈具岡南古墳群 | 15. 久原古墳群 |
| 16. 丸山古墳 | 17. 竜淵寺古墳 | 18. 溝谷城跡 | 19. 溝谷北古墳群 | 20. 八所古墳群 |



第3図 調査地トレンチ配置図

(2)平成4年度の発掘調査

発掘調査は調査第2課調査員田代 弘を主担当とし、主任調査員増田孝彦・調査員岡崎 研一がこれを補佐した。

①奈具谷遺跡の調査

調査地は水田の中にあり、遺構面が最深部で3mと深い。濁水や土砂の流出など周辺水田への影響が心配されたため、調査に先立って沈砂池と堤防を築いて安全策をとった。

また、地盤が軟弱であるために壁面の崩落が予想されたので、トレンチの四周に7m前後の松杭を打ち、コンパネで防護壁を設けた。沈砂池と堤防・防護壁の工事を6月25日に開始し、7月18日に完了した。翌、19日より調査を開始した。調査は、奈具岡遺跡調査の都合もあり、2週間ほどで目途をつける必要があったので、遺構の残存状況の明確な弥生時代中期の遺構検出に主眼を置いて調査を進めた。その結果、杭と板で護岸した流路を約30m検出した。第Ⅳ様式土器を主体とした土器群・木器など多数の遺物を検出した。

②奈具岡遺跡(第4次)の調査

奈具谷遺跡の調査を進める一方、奈具岡遺跡の調査に着手した。奈具谷遺跡の調査中、立木伐採・処理を行い、奈具谷遺跡の調査から引き続いて8月1日に精査に着手した。試掘調査は丘陵稜上のみで限定されたものであったので、遺跡の規模と広がりをも正確に把握するために、谷部と斜面を中心にトレンチ調査を行った。その結果、遺構は丘陵稜上のみではなく、谷部・斜面にも及んでいることがわかった。谷部では遺構面までの深さが深いところで4mを超えるなど、多量の土砂が流入しており、旧地形は現地形と大きく異なっていることが明らかになった。そこで、重機により造成予定地全域の表土除去を行った後、精査を開始した。

調査の結果、後述するように、弥生時代中期の建物跡22基・土坑3基、奈良時代の掘立柱建物跡2棟、鍛冶炉・炭窯各1基などの遺構と多数の遺物を検出した。弥生時代の遺構の大半には玉作り関連遺物が包含されており、玉作り工房群である可能性が考えられる。遺物の集中度の高かった一部の住居跡(SH14・15・21・23)について埋土を採取して水洗選別したところ、碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品をはじめ、石針など微細な遺物が多数確認された。鍛冶炉は掘立柱建物跡のほぼ中央に位置していることから、両者は関連する遺構と判断した。炭窯もこの遺構に関連するものと思われる。

奈具谷・奈具岡両遺跡の図面実測・写真撮影はその都度、各担当が行った。調査終了期限が迫った10月25日に現地説明会を行い、10月29日に調査を終了した。

報告にあたっては奈具谷・奈具岡両遺跡の報告を同時に行うべきであるが、両遺跡ともに遺構・遺物が多数にのぼり、整理期間・頁数の制限もあるので、今回は奈具岡遺跡のみの報告としたい。奈具谷遺跡については来年度、その責を果たしたい。

なお、本概要報告作成にあたっては、検出遺構の図面のトレースを増田孝彦、玉類・石製品類の実測・トレースを田代 弘、土器の実測・トレースを岡崎研一と田代がそれぞれ分担して行った。住居跡から採取した土砂の水洗・選別は尾崎昌之・岡崎研一・田代 弘があたり、小笠原彰(立命館大学生)が補佐した。遺物法量表・グラフは佐々木理(立命館大学生)の補助を得て田代が作成した。

本文執筆は、佐々木が位置と環境、増田が調査経過と奈良時代の遺構、河野一隆が奈良時代の土器、その他を田代が執筆した。文責は、文末に記した。

(増田孝彦・田代 弘)

3. 調査概要

(1) 検出遺構(第4図)

今回の調査地は、標高20mから30mにかけての丘陵斜面であり、調査地内には3本の尾根と2つの谷部がある。遺構はこれら尾根上、谷部、尾根斜面、谷斜面など至るところに形成されている。遺構の種類には、円形・方形の竪穴式住居跡、テラス状を呈する遺構、土坑、掘立柱建物跡、鍛冶炉、炭窯、ピット等各種あり、これらの遺構に伴って土器・石器が多数出土している。

遺構の形成時期は、出土遺物からみて2時期に分けることができる。ひとつは弥生時代中期で、住居跡やテラス状を呈する遺構・土坑など多数の遺構が作られた時期であり、この時期に属するものが最も多い。もうひとつは掘立柱建物跡・鍛冶炉・炭窯など奈良時代のものである。時期の確認できる遺構はこのいずれかの時期に属しており、このほかの時期の資料は包含層においてわずかに認められたにすぎない。

以下、時期別、遺構の種類別に概述する。

なお、遺構番号は現地調査時に発見順に付したものを未整理のまま用いており、調査の結果遺構でなかったことが確認されたSH08・09などは欠番とした。また、2つの遺構が重複している可能性が考えられたSH01などは、SH01-1、SH01-2などと表記してある。現在、遺構・遺物ともに整理作業中であり、その途上での報告である。図や説明に不都合な点が多々あるがご寛恕願いたい。

①弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、竪穴式住居跡(S H14・15・16)、斜面を削り出して造ったテラス状の遺構(S H01～07・10～13・17～23)、土坑(S K01～03)などがある。遺構は、調査地西半の谷部と丘陵部に集中する傾向がみられる。この谷部は、標高28mから31mの範囲にかけて広い平坦面が造り出されており、大規模な地業の痕跡がうかがえる。この平坦面の上にS H14・15・16などの竪穴式住居跡が立地している。その後、この平坦面はある程度埋没し、奈良時代になって部分的に再利用される(S B01・02、鍛冶炉)。

テラス状の遺構は、3m前後のものから長さが15m前後と規模の大きなもの(S H13)まであり、形態も円形(S H06・23など)、半円形(S H07・13など)、長方形(S H01・11・17など)とさまざまである。これらは斜面地を削り出して造り出されており、不定形なものが多い。支柱穴も明確ではなく、床面に小さなピットが散在するものが多く、壁面に沿って杭列状に並ぶ例がいくつかみられる。土坑は、調査地西端の丘陵上で3基確認しており、うち2つからは石針未製品など玉作りに関する遺物が出土している。

弥生時代の遺構からは、わずかではあるが土器片が出土しており、弥生時代中期に属すると考えている。また、S H07・12・13・18を除くすべての遺構から、碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉未製品・剝片、工具類などの玉作りに関連する遺物を検出している。玉作り関連遺物は、S H14・15・21・23での出土量が多く、中でもS H23に集中する傾向がある。

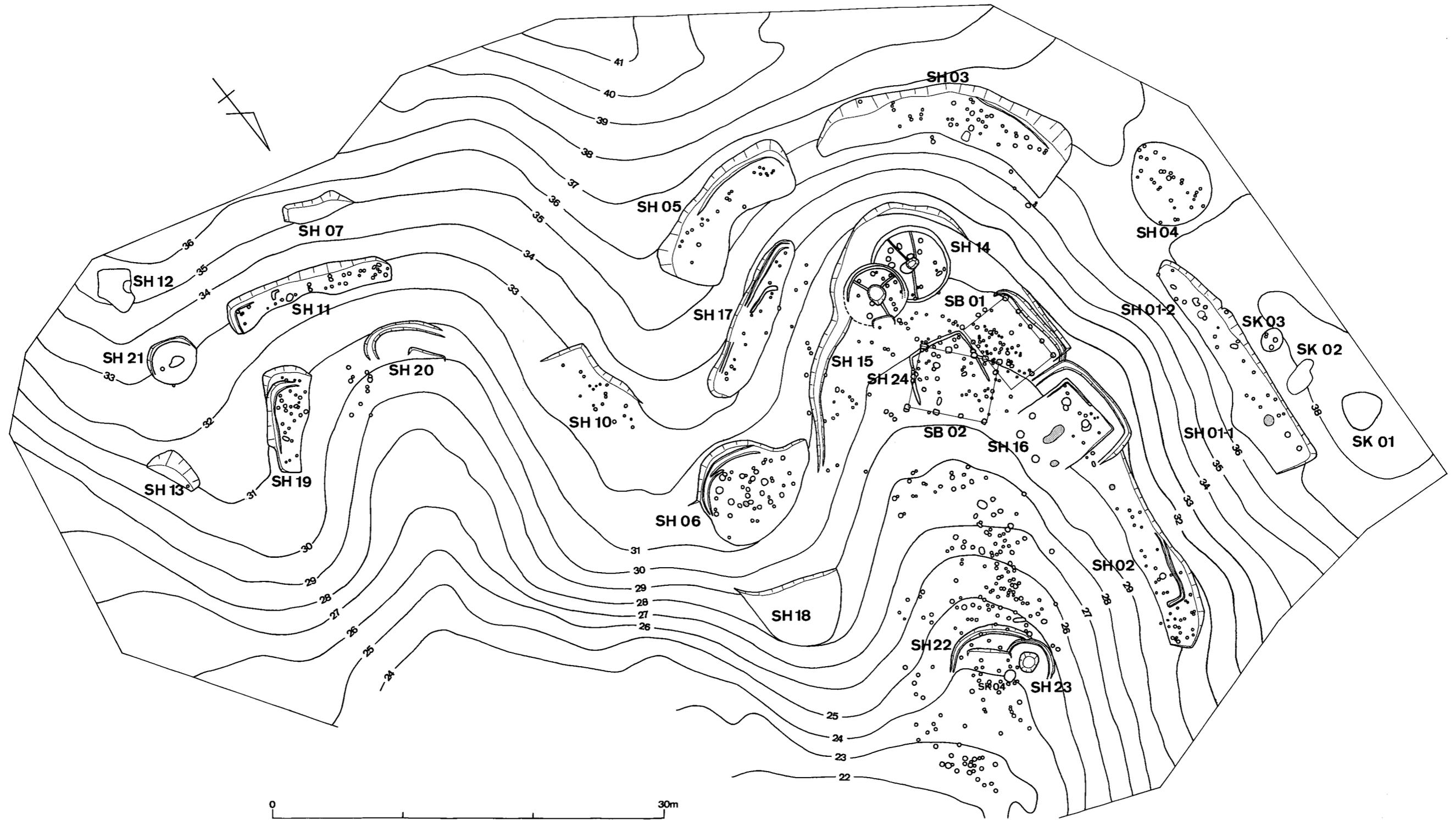
住居跡

S H01(第5図)

標高35mから36mの丘陵斜面に立地する。斜面の上位側を主に削り、平坦面を造り出すテラス状の遺構である。検出当初は19m前後の長さを持つ長大な遺構と考え、S H01と名付けたが、掘削完了間際になって、2つの遺構が重複している可能性が高まり、先に造られた遺構をS H01-1、これを切って後に造られた遺構をS H01-2と名称変更した。

S H01-1 長さ11.3m以上・幅約3.6mを測る。丘陵上位側の壁面の高さは約50cmである。遺構の北側は「L」字形に掘られている。南側はS H01-2に切られていて明確でない。丘陵の下位側には明確な遺構はない。床面は丘陵下位側に向かって緩やかに傾斜しているが、おおむね平坦に造られている。床面の中央やや北寄りに焼土がみられる。焼土は、径70cm前後の楕円形を呈する。また、床面には径10cmから30cm前後のピットがあり、この内の5つは壁面に沿って列状に穿たれていた。支柱穴となるようなしっかりとしたピットは認められない。焼土周辺から弥生土器片、玉作り関係の遺物が少量出土している。

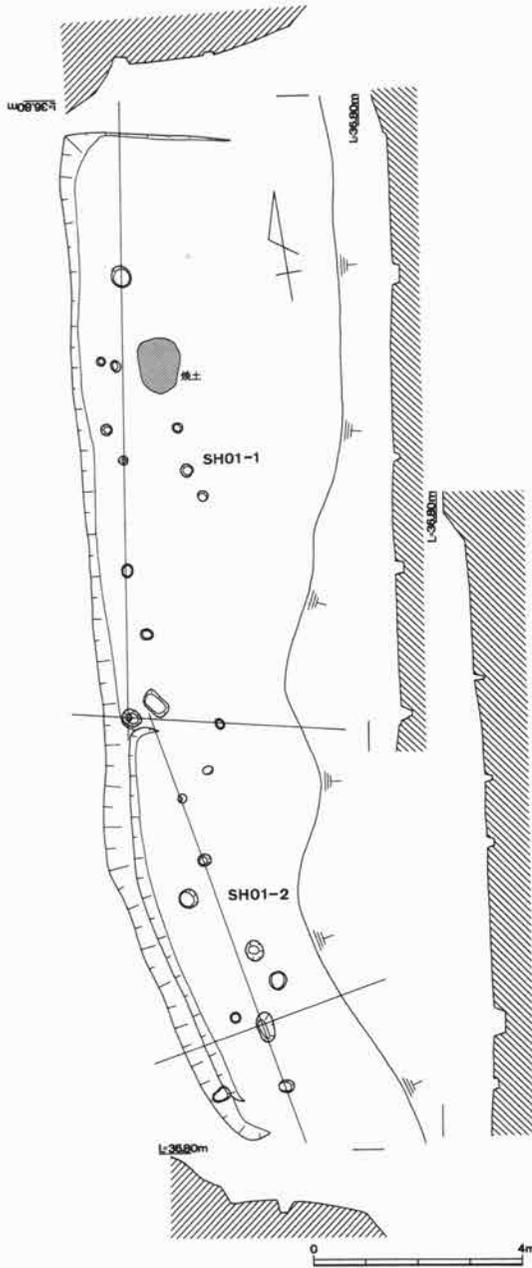
玉作りに関する遺物は、碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉に関するものである。第1工程の方形の石核、板状剝片3点、擦切施溝分割痕のある残核2点、角柱体6点、剝片1点があ



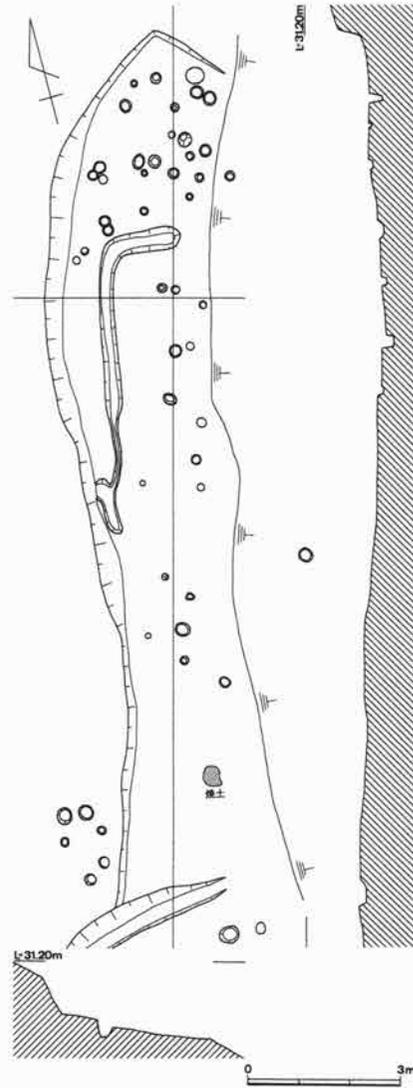
第4图 奈具岡遺跡遺構平面図

る。このほかに、石鋸2点、筋砥石1点、瑪瑙原石1点、碧玉ないし鉄石英剥片1点がある。

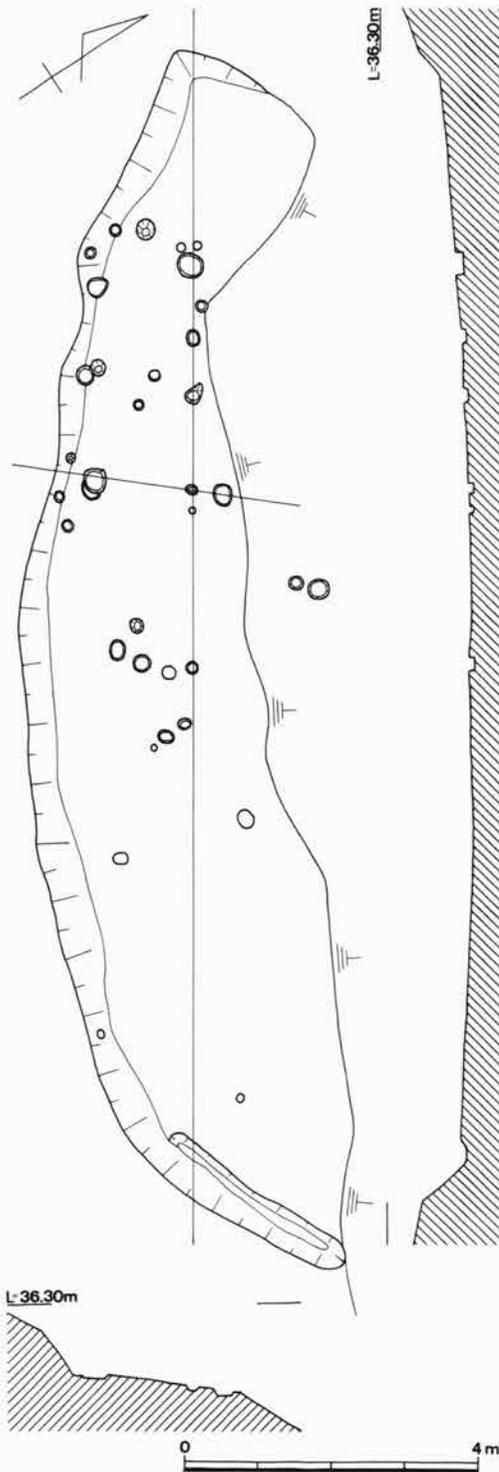
SH01-2 SH01-1を削平して造られた遺構である。長辺と床面をSH01-1と共有する。長さ約7.8m・幅約2.2mを測る。丘陵上位側の壁面の高さは約76cmである。床面はほぼ平坦に造られている。床面中央やや北寄りのところに径60cm前後の焼土がある。また、SH01-1と同じく径10~20cm前後の小さなピットが床面に散在し、その内のいくつかは壁面の長辺に平行して列



第5図 SH01平面実測図



第6図 SH02平面実測図



第7図 SH03平面実測図

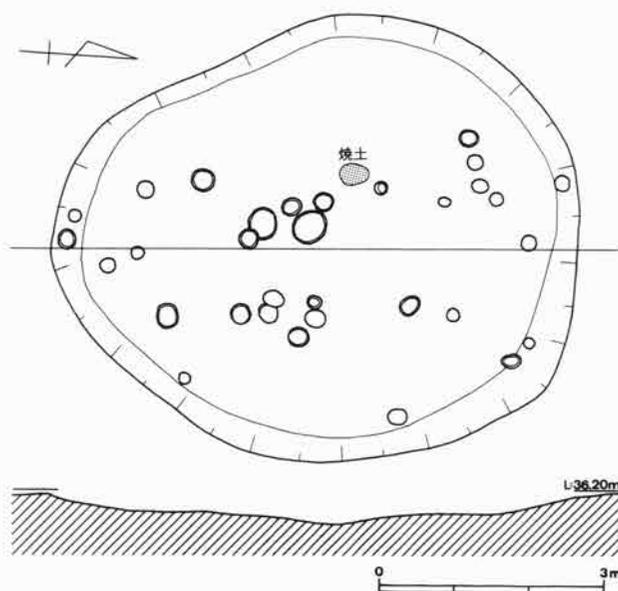
状に並ぶ。支柱穴となるような大形で規則的なピットはない。弥生土器細片と緑色凝灰岩剥片1点が出土した。

SH02(第6図) 長さ約17m・幅約3mのテラス状遺構である。南端はSH16に切られている。丘陵斜面を大きく削り出して平坦な床面を造り出す遺構であり、SH01・03・17のような完結性は認められない。床面には大小のピットがあるがまとまりはない。床面の北寄りに「L」字形の溝が認められた。この溝は幅30~40cm・深さ10~20cm、断面形は「U」字形である。南端には径50cm前後の焼土が認められた。この平坦面からは、弥生土器、碧玉ないし緑色凝灰岩製の板状剥片1点、角柱体1点、水晶原石3点、水晶製管玉未製品1点、砥石2点(うち1点は筋砥石)などが出土している。水晶製品はいずれも煙り水晶であり、原石の大きなものは170gもある。

SH03(第7図) 標高35mから37mの地点に造られたテラス状の遺構である。斜面を弧状に削って平坦面を造り出し、遺構としている。長さ約15m・幅約3mと規模の大きな遺構である。床面は平坦に造られ、斜面下位側に向かって緩やかに傾斜する。床面から傾斜地にかけて長さ1m・幅60cm前後の焼土がある。床面には小さなピットが散在するほかは、明確な遺構は認められなかった。遺構埋土からは弥生土器

片をはじめ水晶剝片1点、
瑪瑙原石1点、筋砥石2点
石鋸1点、紅簾片岩の剝片
15点が一括して出土してい
る。紅簾片岩の剝片中には
接合資料があり、この遺構
で石鋸の製作が行われたこ
とを示している。

S H04(第8図) S H
01とS H03のある丘陵の稜
状は、両遺構のある半ばほ
どの地点が鞍部になっている。
この鞍部は平坦でS H
04はこの地点に位置する。



第8図 S H04平面実測図

S H04は、長軸約7m・短軸約6mの楕円形の遺構である。明確な掘形をもたず、床の断面形が浅い皿状になるように削平して遺構を造り出している。中央やや西寄りの地点に径60cmほどの楕円形の焼土がみられた。遺構内には多数のピットが散在しているが、まともにはみられない。この遺構からは、わずかであるが碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉と水晶製玉作りに関する資料が出土した。

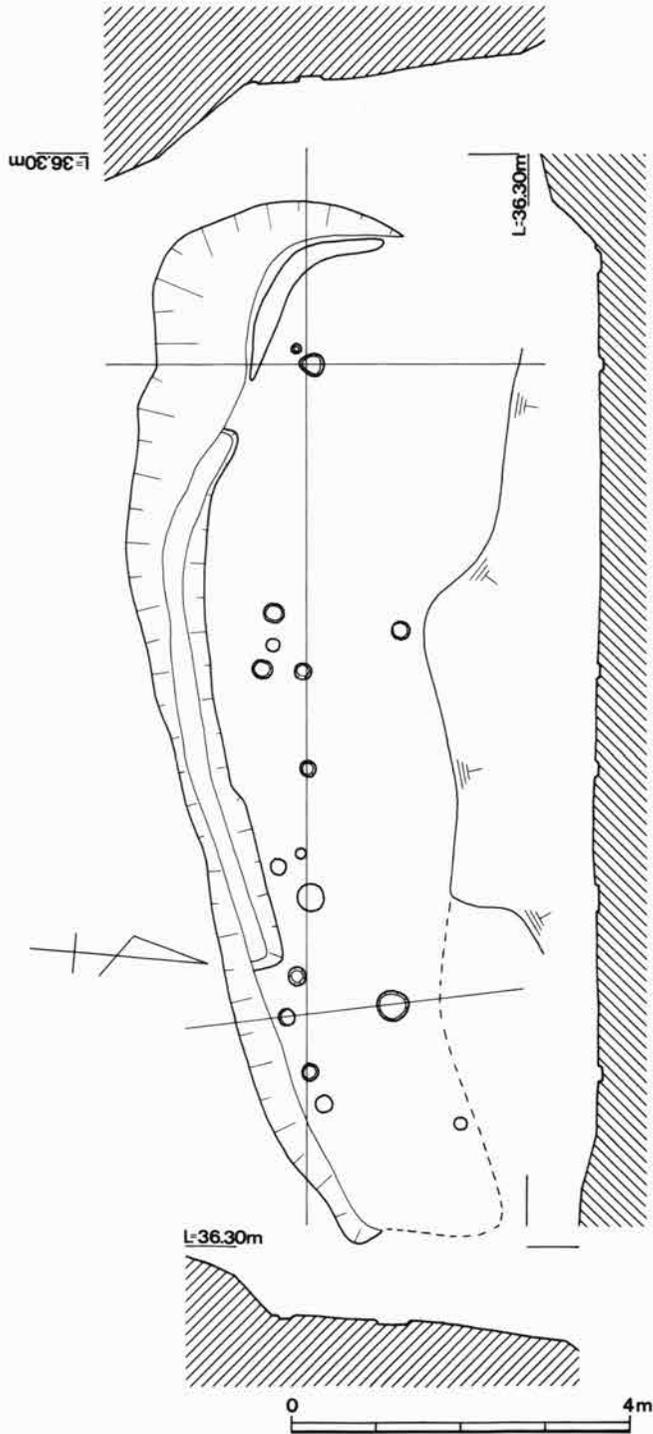
水晶製玉作りに関するものに管玉状の未製品1点、石鋸状の形態をもつ調整剝片1点、剝片1点がある。碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉生産に関するものとしては、板状剝片1点、剝片2点、石鋸1点がある。また、アプライト製の石庖丁磨製石製品1点が出土した。土器は微細な破片がみられた程度であった。

S H05(第9図) S H03に隣接して造られており、標高もほぼ同じである。斜面を弧状に削って平坦面を造り出して遺構としたもので、長さ約12m・幅約3mを測る。床面は平坦に造られ、斜面下位側に向かってわずかに傾斜する。西壁と南壁半ばにかけて周壁溝が掘られていた。周壁溝の幅は約30cm、深さ約10cm前後である。床面には小さなピットが散在するのみで、特に顕著な遺構は確認できなかった。埋土から弥生土器片と石鋸1点、瑪瑙の削片が数点出土している。

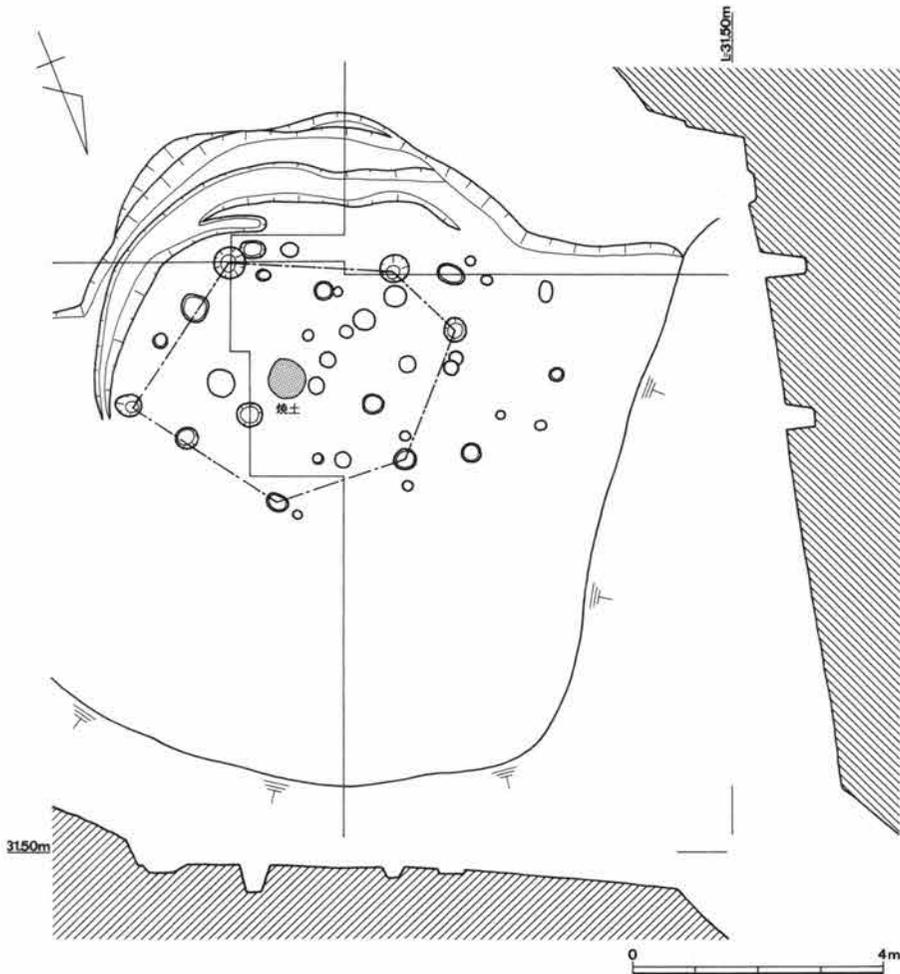
S H06(第10図) 調査地中央部に位置する丘陵の前端部に作られた半円形の住居跡である。丘陵の基部側を半月形に削り落として円形の平坦面を造り出している。平坦面は、丘陵前端部側に向かって緩やかに傾斜しながら崖面に至る。丘陵基部側には高さ80cmほど

ある壁面がしっかり造られ、床面には掘形に接して最大幅60cm・長さ10cm程の周壁溝が設けられている。周壁溝は遺構掘形と同じく、弧状である。床面中央部には径約60cmの楕円形の焼土がある。床面には径が10cmから40cm程度のピットが多数あり、深さも5cm前後から60cm前後のものまでさまざまである。支柱穴は必ずしも明確ではないが、類似する土色をもつ。径40cm前後の比較的しっかりとしたピットを拾って復原すると、図(一点破線で結んだ柱穴)のようになる。この住居跡の床面・周壁溝からは、弥生土器片をはじめ、玉作り関連の遺物がまわって出土している。

玉作り関連遺物には、碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉未製品(擦切施溝分割痕のある残核1点、板状剥片5点、角柱体1点)、水晶原



第9図 SH05平面実測図

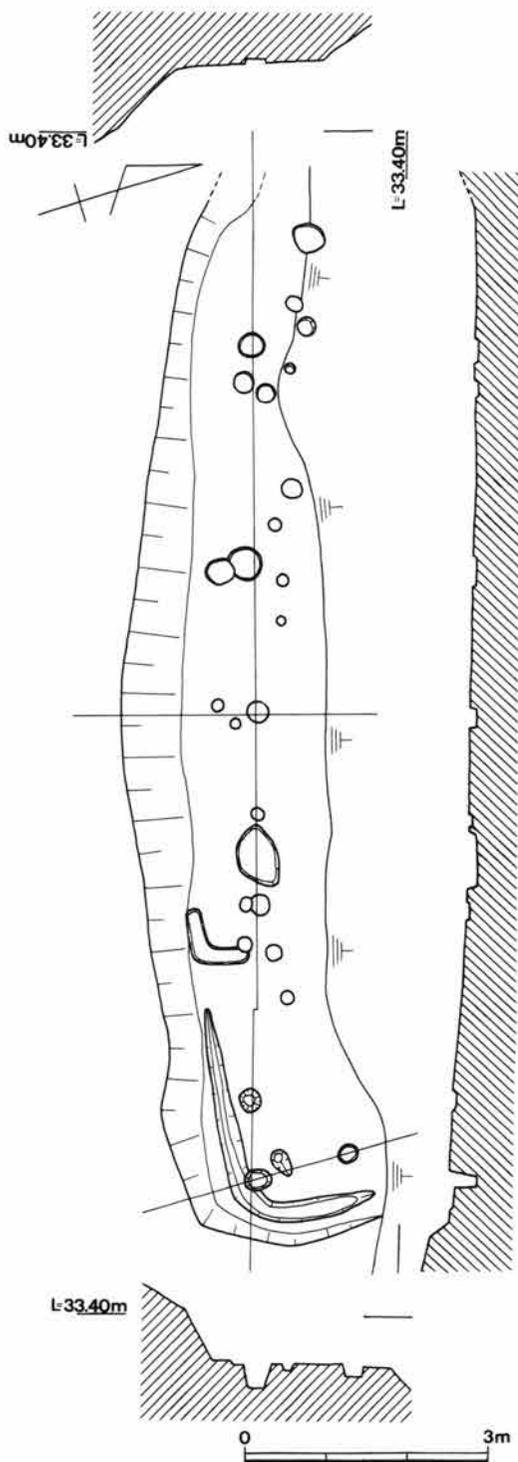


第10図 SH06平面実測図

石及び剥片(原石2点・剥片3点)、石鋸5点、砥石(棒状の大型砥石・筋砥石2点・板状の砥石1点、小形砥石2点)、瑪瑙製楔形石器1点、瑪瑙剥片2点等がある。このほかに、磨製石斧を転用した敲石、石庖丁状の磨製石製品2点がある。

SH07 標高35mから36mの地点に位置する。急な斜面を削り、狭い平坦面を造り出している。長さ約5m・幅約2m、壁面の高さは約60cmである。床面は谷に向かいやや傾斜するが、ほぼ平坦に造られている。柱穴・周壁溝等の施設はみられない。埋土中から弥生時代中期の土器片が多数出土した。土器片はいずれも細片である。

SH10 調査地中央部に位置する丘陵の東斜面に立地する。緩傾斜地を削って平坦面が造られている。遺構の残りはあまりよくなく、遺構を削り出した痕跡を部分的に確認したのみである。平坦面は長さ約9m・幅約2m、壁面は30cmほどが残っている。床面には、

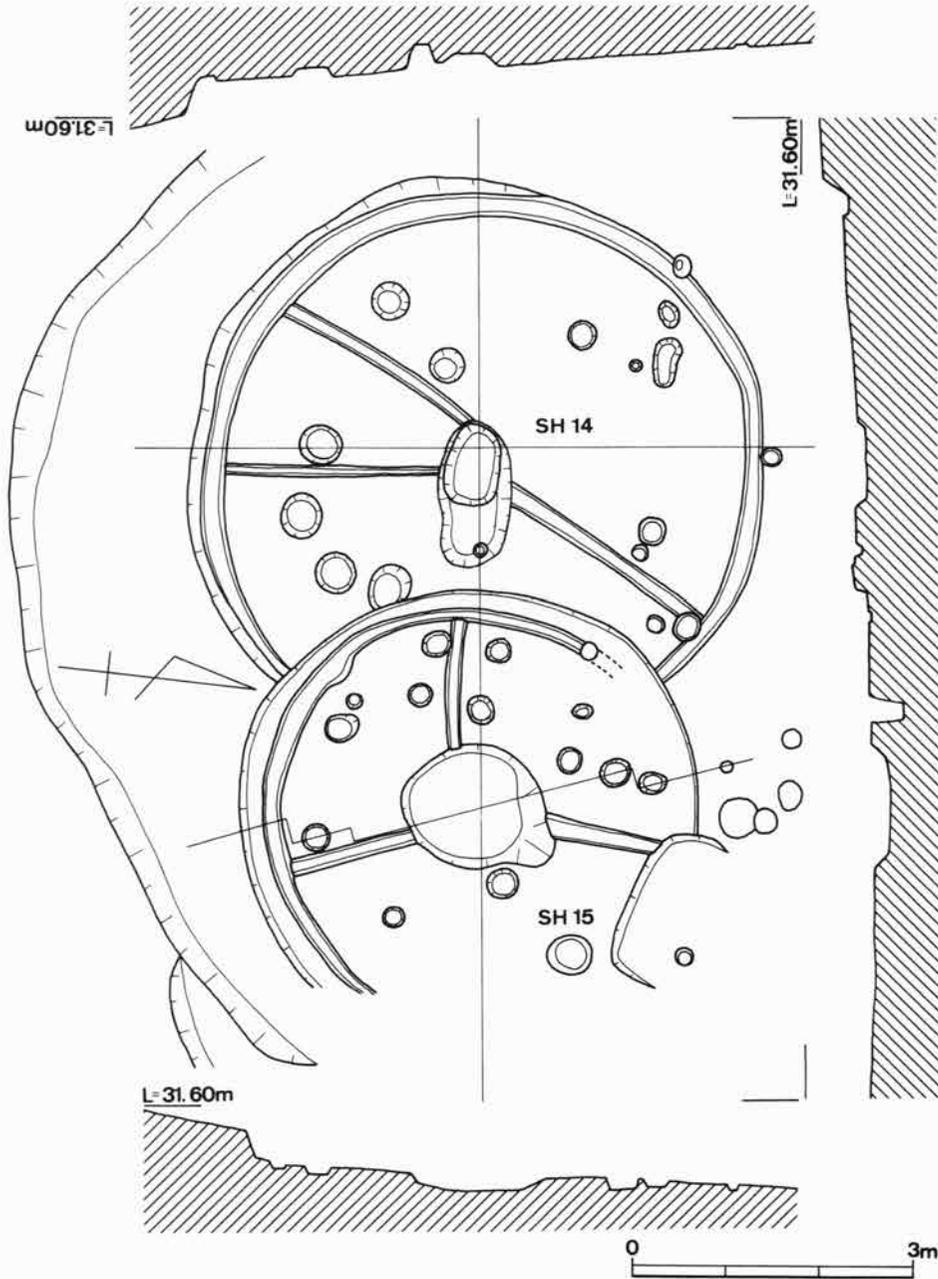


第11図 SH11平面実測図

径20cm・深さ20~30cm前後のピットが散在していた。遺構埋土からは、碧玉ないし緑色凝灰岩製の板状剥片1点、擦切施溝分割痕のある残核1点、砥石1点、石鋸1点、碧玉ないし鉄石英製の垂角礫1点が出土している。碧玉ないし鉄石英製の垂角礫は、長さ8cm・幅4cm、厚さが4cmほどのもので、SH21で数多く出土した同石材製の小形錐状石器及びその剥片等の石核として搬入されたものと思われる。

SH11(第11図) 谷部の傾斜面を削り出して作った方形のテラス状遺構である。長さ約9m・幅約2mで、南壁の高さは約80cmを測る。床面はほぼ平坦で、斜面下位側に向かい緩やかに傾斜する。東壁と南壁の一部に周壁溝がめぐる。周壁溝は幅約30cm・深さ10cm前後であり、南壁では途中浅くなり終わる。床面中央やや東寄りのところに長軸約60cm・短軸約50cm・深さ約20cmを測る楕円形の焼土坑がある。土坑埋土中には炭・灰が若干認められた。床面にはピットが散在し、一部南壁に沿って列状に並んでいた。この柱穴は径が20cm前後、深さ20~40cm前後である。遺構埋土から、弥生土器片のほか、緑色凝灰岩製の板状剥片1点、筋砥石1点、磨製石斧を転用した敲石、打製石鏃1点などが出土している。

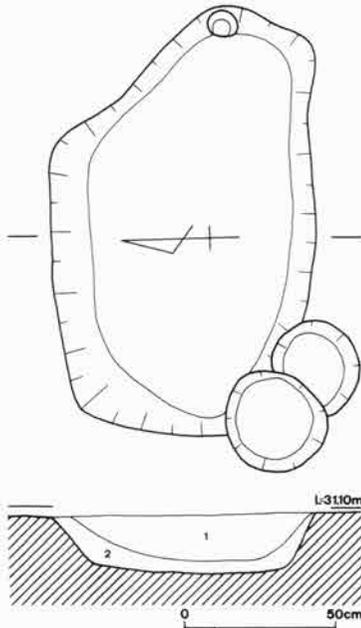
S H12 丘陵の稜上に立地し、S H21の上方に位置する。標高は35m前後で、S H07とほぼ同じである。丘陵基部側を削り落として平坦面を造り出す遺構である。長さ3.2m・幅2.5mの楕円形の遺構である。床面の断面形は中央がやや凹んだ浅い皿状を呈し、壁面



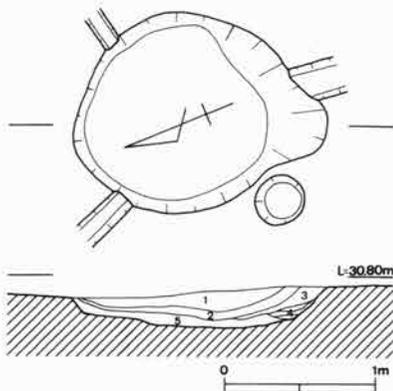
第12図 S H14・15平面実測図

はSH07のようにしっかりと造られていない。弥生時代中期の甕口縁部破片が出土した。

SH13 丘陵の斜面に立地している。斜面を半月形に削って平坦面を造り出す遺構である。長さ約4m・幅約2mを測る。柱穴・土坑などの施設は認められない。埋土に弥生土器の細片を少量含んでいる。この遺構は、SH07よりすこし小さいがほぼ同形同大であり、同じような目的で造られたものであろう。



第13図 SH14中央土坑実測図
1. 暗茶褐色土 2. 黒褐色土

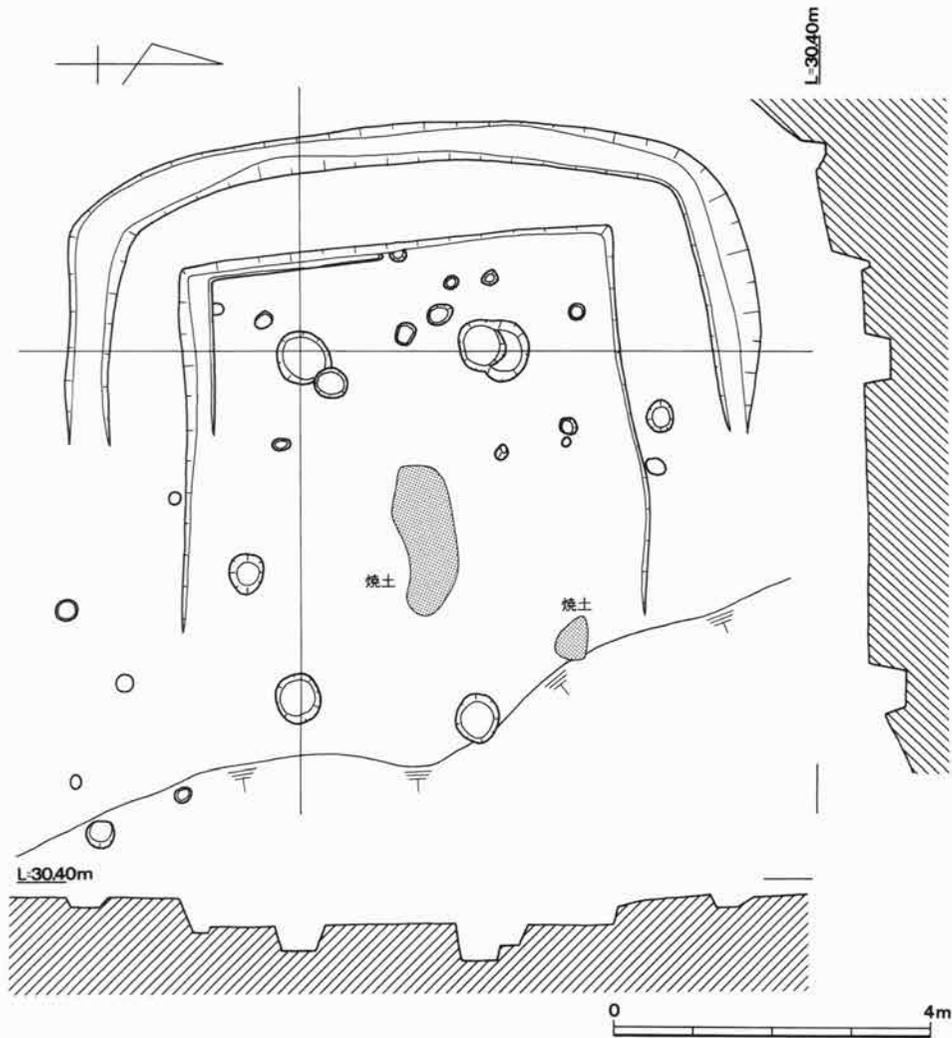


第14図 SH15中央土坑実測図
1. 黄褐色砂質土 2. 黒褐色土(炭・灰混じり)
3. 暗黄褐色砂質土 4. 暗茶褐色土
5. 茶褐色土

SH14(第12図) 直径約6mの円形住居跡である。壁面の高さは約20cm分を検出したが、斜面下位側では壁はほとんど検出できなかった。壁面に沿って幅20cm・深さ10cm前後の周壁溝がめぐっている。床面は水平に造られ、中央に長さ約1.5m・幅約80cmの東西に長い楕円形土坑が掘られている。この土坑は西寄りの部分が50cmほど深く掘られており、焼土、炭、灰がみられた。土坑と周壁溝は3条の溝で連結している。溝は周壁溝と同じような規模をもつがやや浅い。斜面下位側に向かって深くなる傾向がみられる。床面にはピットがいくつかみられたが、主柱穴は不明である。SH15に一部切られている。床埋土・土坑埋土からは弥生土器片、玉作り関係遺物などが出土した。

玉作り関係遺物には、碧玉・緑色凝灰岩製石核及び残核5点、板状剥片38点、擦切施溝のある角柱体12点、四角柱体8点、多角柱体14点、成品3点、剥片・削片類72点、鉄石英製の擦切施溝のある角柱体1点、石鋸及びその剥片15点(成品は1点のみ)、安山岩製石針未製品20点以上、安山岩剥片・削片50点以上、水晶削片30点以上などがある。

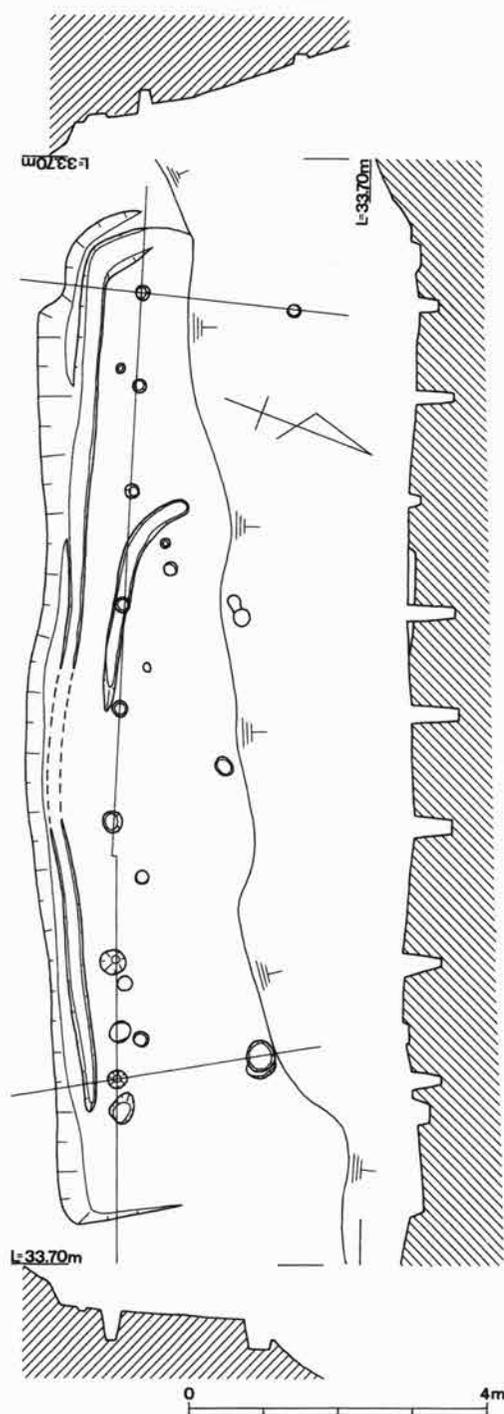
SH15(第12図) 直径約5mの円形住居跡である。高位側で壁面約40cm分を確認した。SH14を切って造られた遺構である。床面は水平に造られている。中央に長軸径1.7m・短軸1.3



第15図 SH16平面実測図

m・深さ50cm程の楕円形土坑がある。土坑埋土には炭・灰などがみられ、砥石の研ぎ汁とみられる石英の細粒砂が数ミリの層となって検出された部分もあった。土坑底面は焼けておらず、明瞭な焼土塊もみられなかった。床埋土・土坑埋土からは弥生土器片、玉作り関係遺物などが多数出土している。遺物は土坑とその周辺に集中する傾向がみられた。玉作りに関する遺物の内訳は以下のとおりである。

水晶剥片・削片が530点以上、石鋸とその剥片・削片85点(石鋸32点)、碧玉・緑色凝灰岩製石核及び残核26点、板状剥片34点、擦切施溝のある角柱体30点、四角柱体29点、多角柱体21点、成品6点、剥片・削片227点以上、砥石5点以上、安山岩製石針石核7点、擦



第16図 SH17平面実測図

切施溝のある角柱体72点、四角柱体21点、六角柱以上の多角柱体22点、石針12点、剝片・削片145点以上、瑪瑙製石針石核7点、擦切施溝のある角柱体5点、四角柱体2点、六角柱以上の多角柱体11点、安山岩剝片・削片類30点以上、瑪瑙製小形錐状石器8点。その他、黒曜石の剝片が2点出土している。

SH16(第15図) 方形の竪穴式住居跡である。東西長約6.3m・南北長5.4m・深さ約30cmを測る。壁面は直立する。遺構の東端は斜面に及ぶ。床面と斜面にかけ、径60cm前後・深さ50cm前後の支柱穴とみられる大型の柱穴が4個、長方形に配置されている。柱穴の状態からみて東辺の壁面は最初から造られていなかったようだ。床面には径10cm前後のピットが散在し、中央には焼土があった。焼土は長さ約2m・幅約1mにわたり認められ、東西に長い。南辺から西辺にかけて部分的に周壁溝が掘られている。また、この住居跡の西辺側、すなわち斜面上位側に周溝が設けられている。周溝は3辺を囲むように掘られているが、途切れて陸橋状になっている。周溝の幅は約50cm、最も深いところで1mを測る。住居跡の床面から弥生土器破片と若干の玉作り関連遺物が出土した。

玉作り関連の遺物には、碧玉・緑

色凝灰岩製の石核1点、板状剥片1点、水晶剥片2点、水晶製楔形石器1点、瑪瑙剥片1点がある。ほかに、ガラス質安山岩剥片1点、磨石状の球石、黒曜石剥片3点が出土した。

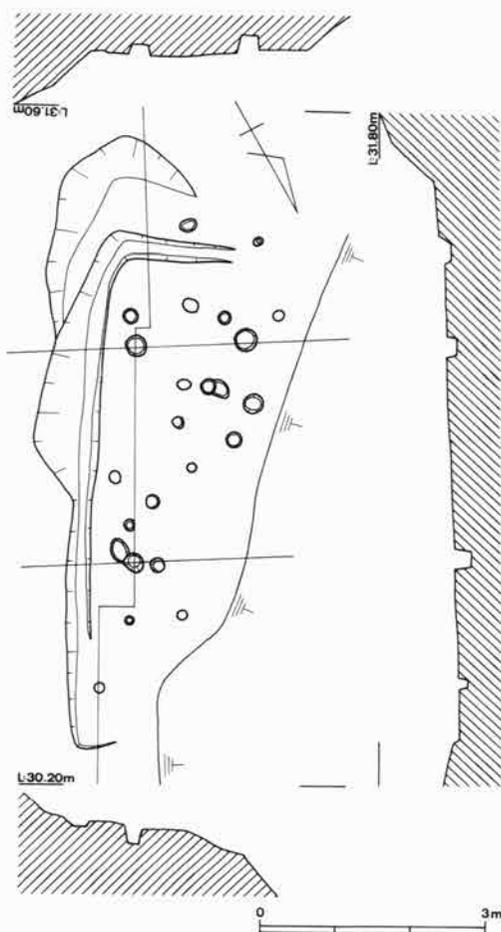
S H17(第16図) S H05とS H14・15の間の斜面を削られて造られた方形のテラス状遺構である。標高32mから33mの急斜面に立地する。長さ約13.3m・幅3mを測る。丘陵基部側にあたる南壁は、80cmと深く掘られている。西壁・東壁は短い。西壁と南壁に沿って周壁溝がめぐる。周壁溝は幅約30cm、深さ10cmから20cmである。床面中央付近に弧状の短い溝が認められた。床面には、南壁に沿って計8個のピットが1.2mから1.6m間隔で一列に並んでいる。このピットは径20cm前後、深さ40cmから60cmである。

遺構埋土から、弥生土器片、碧玉残核1点、水晶剥片1点、石鋸1点、のみ状磨製石器1点、6条の溝を有する筋砥石1点、擦切施溝分割痕のある磨製石斧1点が出土した。

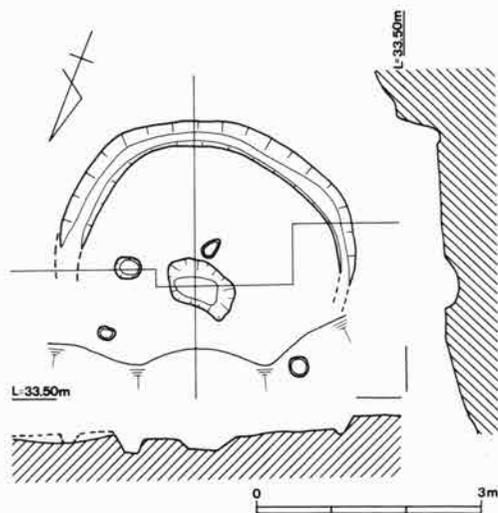
S H18 丘陵前端部の急斜面を削り出して造られた遺構である。S H06の直下に位置する。丘陵基部側を直線的に削って平坦面を造る。基部側には幅20cm・深さ10cm程度の浅い溝が掘られていた。床面に施設は認められない。弥生土器の細片が出土した。

S H19(第17図) 丘陵斜面を削り出して造った方形のテラス状遺構である。長さ7.7m・幅約3mを測る。斜面上位側の壁面は高さ50cmとよく残っているが、北壁はわずかに痕跡をとどめるのみである。床面は平坦である。壁面に沿って溝が設けられている。周壁溝は幅約20cm・深さ10cmである。床面には径10cm前後のピットが散在し、支柱穴とみられるしっかりとした柱穴が3個みられた。床面及び周壁溝埋土からは、弥生土器片をはじめ、玉作りに関連する遺物などが出土している。

玉作り関連遺物には、碧玉の残核1点、石鋸1点、筋砥石2点がある。そのほか、凹み石1点、花崗岩製の円筒形



第17図 S H19平面実測図



第18図 SH21実測図

S H21(第18図) 丘陵の稜上に立地する。丘陵を半月形に削り出し、円形に近い平坦面を作る遺構である。床面は丘陵前端に向かって緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦である。基部側に造られた壁面は高さが約1mである。床面には壁面に接して周壁溝がめぐっている。周壁溝の幅は約20cm、深さ約10cmである。床面中央やや北寄りに長楕円形の土坑がある。長軸約1.1m・短軸約65cm・深さ約30cmで、断面形は浅い皿状である。土坑は壁面がわずかに焼け、埋土には若干の炭・灰が認められた。床面にはピットが認められたが、いずれも浅く配列が不規則であり、支柱穴の構造はわからない。

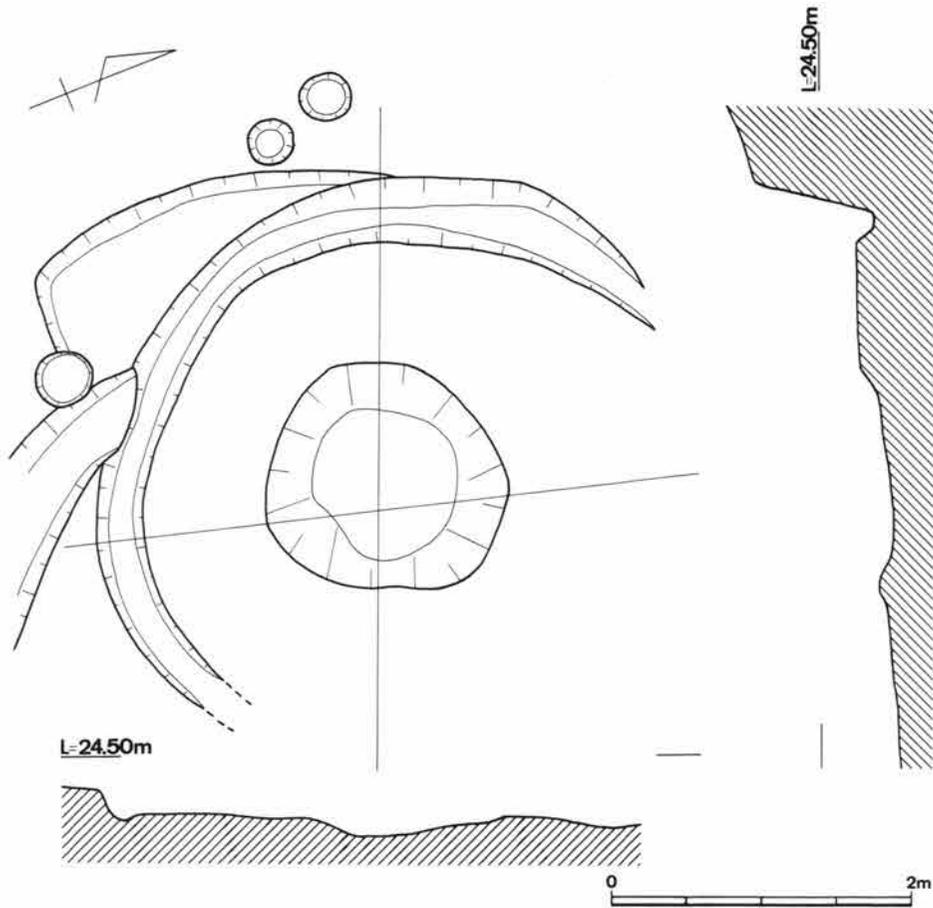
床面、周壁溝、中央の土坑埋土中からは、弥生土器の細片のほか、玉作り関連遺物、その他の石器類などが出土している。

玉作り関連遺物の内訳は次の通りである。緑色凝灰岩製板状剥片1点、水晶剥片及び削片10点、石鋸5点、紅簾片岩剥片5点、砥石3点(筋砥石1点、板状砥石2点)、小形錐状石器24点(瑪瑙製16点、碧玉ないし鉄石英8点)、瑪瑙剥片及び削片70点以上、瑪瑙製石核1点、碧玉ないし鉄石英製の調整剥片・剥片・削片(154点以上)、鉄石英転礫1点。その他には、花崗岩製の円筒状の磨製石製品、石鏃1点、石庖丁状の磨製石製品2点がある。

S H22 S H23を切って造られている。弧状の溝があり、その内側に方形テラス状の遺構が作られている。溝は最大幅80cmほどで、丘陵下位側に向かって浅くなって終わっている。方形テラス状の遺構は南側の一部が残っただけで、大半は流失している。長辺は約6mを測る。周溝を伴う住居跡と考えられる。遺構埋土から弥生土器破片をはじめ、碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品、石針未製品、砥石、石鋸など玉作り関係遺物が若干出土している。

不明磨製石製品1点等が出土した。

S H20 標高31mの地点に位置している。丘陵間の狭い谷地形の急な斜面に立地し、遺構の大半は流失しているものと思われる。斜面に平行して掘られた溝の一部を検出した。溝は弧状にめぐり、幅約60cm・深さ約30cm前後、断面形は「U」字形である。溝の北側には平坦な底面を有する土坑状の掘形がみられた。住居跡の残骸であろう。埋土から弥生土器の細片が出土している。



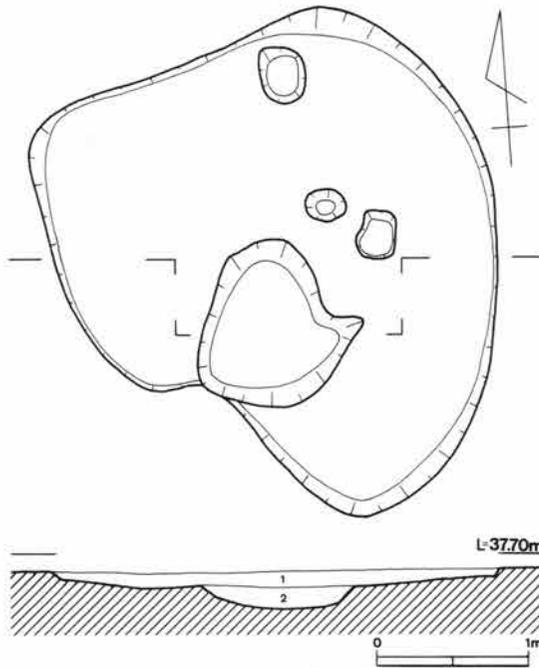
第19図 SH23実測図

S H23(第19図) S H22の完掘後に検出した遺構である。急な斜面を削り取って円形の平坦面を造り出した遺構である。壁面に沿って幅約30cmほどの周壁溝が設けられている。周壁溝の深さは10~20cmで、北側が深く、南側が浅い。床面は斜面下位側に向かって傾斜するが、ほぼ平坦である。柱穴は検出できなかった。床面の中央には長軸約1.6m・短軸約1.4mの楕円形土坑が掘られていた。断面形は皿状であり、深さ約30cmほどである。土坑内には炭・灰がみられ、S H15中央土坑でみられたような石英の細流砂の薄い層も部分的にみられた。土坑内には大型の砥石9点が落ち込んだ状態で出土している。

床及び土坑埋土からは弥生土器片をはじめ多数の玉作り関連遺物が出土している。玉関係遺物の内訳は以下のとおりである。水晶剥片及び削片840点以上、石鋸とその剥片・削片220点(うち46に刃部あり)、碧玉・緑色凝灰岩石核234点・板状剥片151点・擦切施溝のある角柱体69点・四角柱体129点・多角柱328点・成品38点・剥片と削片1837点以上、鉄石

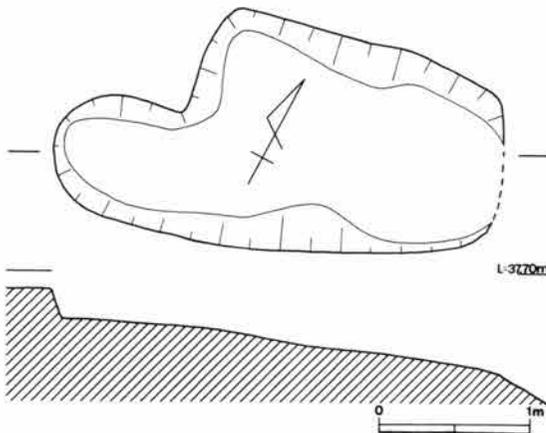
英剥片1点、安山岩製石針石核5点以上・板状剥片27以上・擦切施溝のある角柱体223点、多角柱21点、成品48点、剥片と削片719点以上、瑪瑙製石針石核5・擦切施溝のある四角柱152・多角柱2・成品37、瑪瑙製小形錐状石製品44点などである。

S H 24 S H 14・15の北側に位置する溝状の遺構である。溝は「コ」の字形に掘られ、北側は開いている。東西長約5.5m・南北長約4.5mで、溝は断面形が「U」字形で幅25～



第20図 SK01実測図

1. 黒色土 2. 黒褐色土(炭・焼土混じり)



第21図 SK02実測図

30cm前後・深さ約10cmを測る。溝の周辺には多数のピットがあるが、奈良時代の遺構と重複しており、関連は明確でない。この遺構の法量・立地は、S H 16とほぼ同じであり、S H 20のように削平あるいは流失し、住居跡の周壁溝あるいは周溝の一部のみが遺存したものと考えられる。遺構埋土から碧玉・緑色凝灰岩剥片、石鋸、弥生土器破片が少量出土した。S H 23を切って造られた遺構である。

(田代 弘)

土坑

調査地の北西端に位置する丘陵の稜上で3基の土坑を検出した。いずれも楕円形ないし不整形をした不定形土坑である。これらは埋土中に弥生時代中期頃の弥生土器を含んでおり、直下に形成されたS H 01など弥生時代中期に形成された他の遺構群と関連をもつ遺構と思われる。S K 01・02から玉作りに関連する遺物が出土した。

S K 01(第20図) 長軸約3.5m・短軸約3m、最深部で約40cmを測る不定形な土坑である。全体

に浅く、皿状の断面形をもつが、中央付近はやや深く掘られている。埋土には、焼土塊や炭がみられ、やや深く掘られた中央部分では炭・灰の出土が顕著であった。

土坑の埋土の中からは、弥生時代中期頃の土器片や碧玉角柱体、ガラス質安山岩製石針及びその未製品、水晶製錐等と、玉作り関連の遺物が少量ながらも出土した。

S K 02(第21図) 長軸約3m・短軸約1.5m・深さ約30cmの楕円形土坑である。丘陵斜面にかけて造られ、北側は完結していない。埋土には焼土・炭の混入が目立った。埋土中から弥生土器細片・石鋸・ガラス質安山岩製石針及び未製品、瑪瑙の削片などが出土した。

S K 03(第22図) 長軸約2.5m・短軸約2.5m・深さ約20cmの楕円形土坑である。断面は皿状を呈する。埋土は地山と同色の黄褐色系であるが、焼土塊、炭の混入が顕著であった。埋土から弥生土器細片、黒曜石の削片数点が出土した。S K 01・02に隣接しており、類似する土層を有しており、相互に関連する遺構であろう。

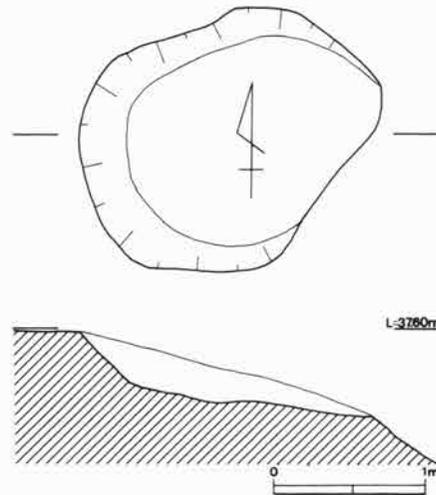
(田代 弘)

②奈良時代の遺構

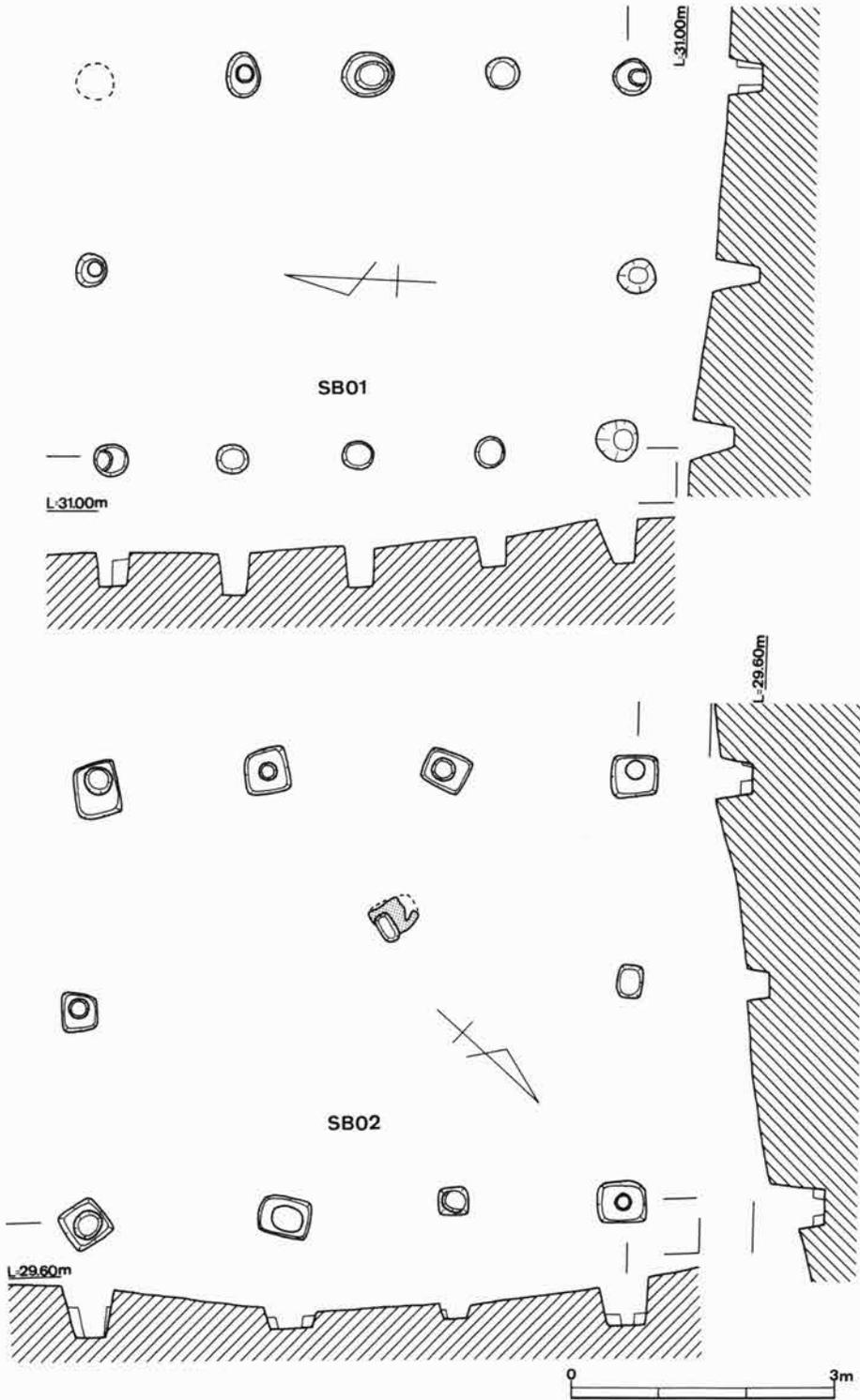
奈良時代の遺構には、掘立柱建物跡2棟(S B 01・02)、柵列(S A 01)、鍛冶炉1基、炭窯1基がある。掘立柱建物跡は、南北棟(S B 01)と主軸を北西-南東にとるもの(S B 02)があり、両者は重複している。柱穴の切り合い関係はなく、どちらが先に造られたかはわからない。S B 01の柱穴、鍛冶炉周辺から奈良時代の須恵器(瓶・杯身)の破片が少量出土しているが、断片資料であって時期は明確でない。鍛冶炉はS B 02のほぼ中央に位置することから、S B 02に関連する遺構と考えた。また、炭窯は遺物を伴わず時期を決めたいが、この鍛冶炉との関連性を重視し、奈良時代の遺構の一つとして報告することにした。

S B 01(第23図) 尾根の等高線に沿った小規模な斜面の削り出しを行い、整地したところに設けられた、梁間2間×桁行4間の南北棟の建物跡である。建物跡(S B 02)の北西角と切り合い関係を有する。柱掘形は、直径30~40cmの円形である。柱間は、梁間2.1m、桁行は1.4mである。北東角の柱穴は、斜面側になるためか検出できなかった。

S B 02(第23図) 谷中央部の整地層上に建てられたもので、梁間2間×桁行3間の建



第22図 S K 03実測図



第23図 S B 01・02実測図

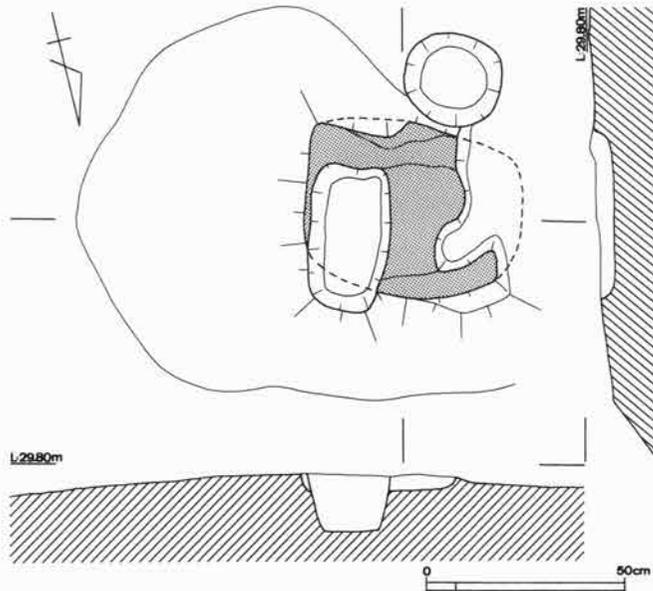
物跡である。柱掘形は、一辺50~60cmの隅丸方形である。方形であるが梁間中央の柱と、北東側桁行の1か所は、他の柱穴掘形に比べてやや小さい。柱間・梁間は2.4m、桁行2mである。北西辺桁行寄りの中央付近に鍛冶炉がある。

鍛冶炉(第24図) S B02北西辺桁行寄りの中央付近より検出した

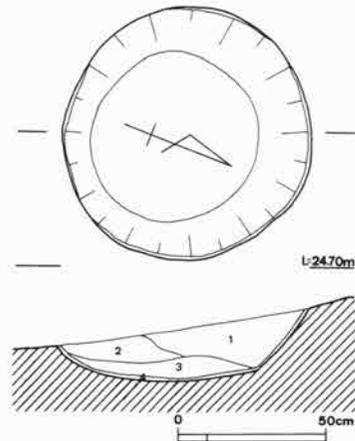
ものである。鍛冶炉上端は大半が削平されており、下部のみ検出した。削平が著しいことや、炉本体が部分的に柱穴等により壊されているために、その原形は不明である。残存する平面形は隅丸長方形を呈し、長軸0.7m×短軸0.4mを測る。鍛冶炉掘り込みは、深さ0.3mが残存する。内部は全面炉壁粘土で覆われ、掘り込み周壁は熱作用のため赤化している。内部からは木炭、鍛冶滓の出土は認められなかったが、鍛冶炉周辺より椀形鍛冶滓が3点ほど出土した。この椀形鍛冶滓の冶金学的分析を、新日本製鉄株式会社の大沢正己氏に依頼したところ精錬鍛冶滓であるとの結果をいただいた。対岸の奈具遺跡の製鉄炉に関連するものと考えられるが、この関係については後日、詳しく報告したい。

炭窯 S K04(第25図) S H23上面付近の丘陵斜面で検出したもので、残存する規模は直径約0.8m・深さ約0.2mを測る円形の炭窯である。掘り込み壁面には厚さ約3cmの窯壁が認められ、掘り込み周壁は熱作用のため赤褐色に変化している。内部埋土は、3層からなり最下層からは、焼土塊、灰、木炭小片の堆積が認められた。S B02内の鍛冶炉、奈具遺跡の製鉄炉に関連するものと考えられる。

(増田孝彦)



第24図 鍛冶炉実測図



第25図 炭窯 S K04実測図

(2) 出土遺物

検出遺構には、前述したように、住居跡、テラス状の住居跡と思われる遺構、土坑、溝などの各種遺構を検出した。これらの遺構の多くからは、土器をはじめ、碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉未製品・同剝片類、水晶製管玉未製品・同剝片類、石鋸、ガラス質安山岩製石針・瑪瑙製石針及び未製品類、砥石類、有孔円盤状石製品、石錐、小形錐状の石器、楔形石器、敲石など、玉作りに関する石器類が多数出土している。石鏃、磨製石斧、不明磨製石製品、石庖丁状の磨製石器などもこれらに伴出した。

これ以外に、単独出土品として縄文時代草創期に属する有舌尖頭器がある。

a. 土器

土器は各遺構に伴って少量ずつ出土しているが、細片化・摩滅したものが多く、良好な資料は少ない。第Ⅲ様式新相の特徴を持つものが主体を占め、明確な凹線文をもつものやそれ以降の時期を示す資料は認められない。

以下、器種ごとに説明することにした。

住居跡出土の弥生土器(第26図)

各住居跡からは壺や甕の口縁部、体部、底部などの破片が少なからず出土しているが、細片化したり、器面が風化・摩滅しているものが多く、良好な資料はあまりみられない。主な資料について説明する。

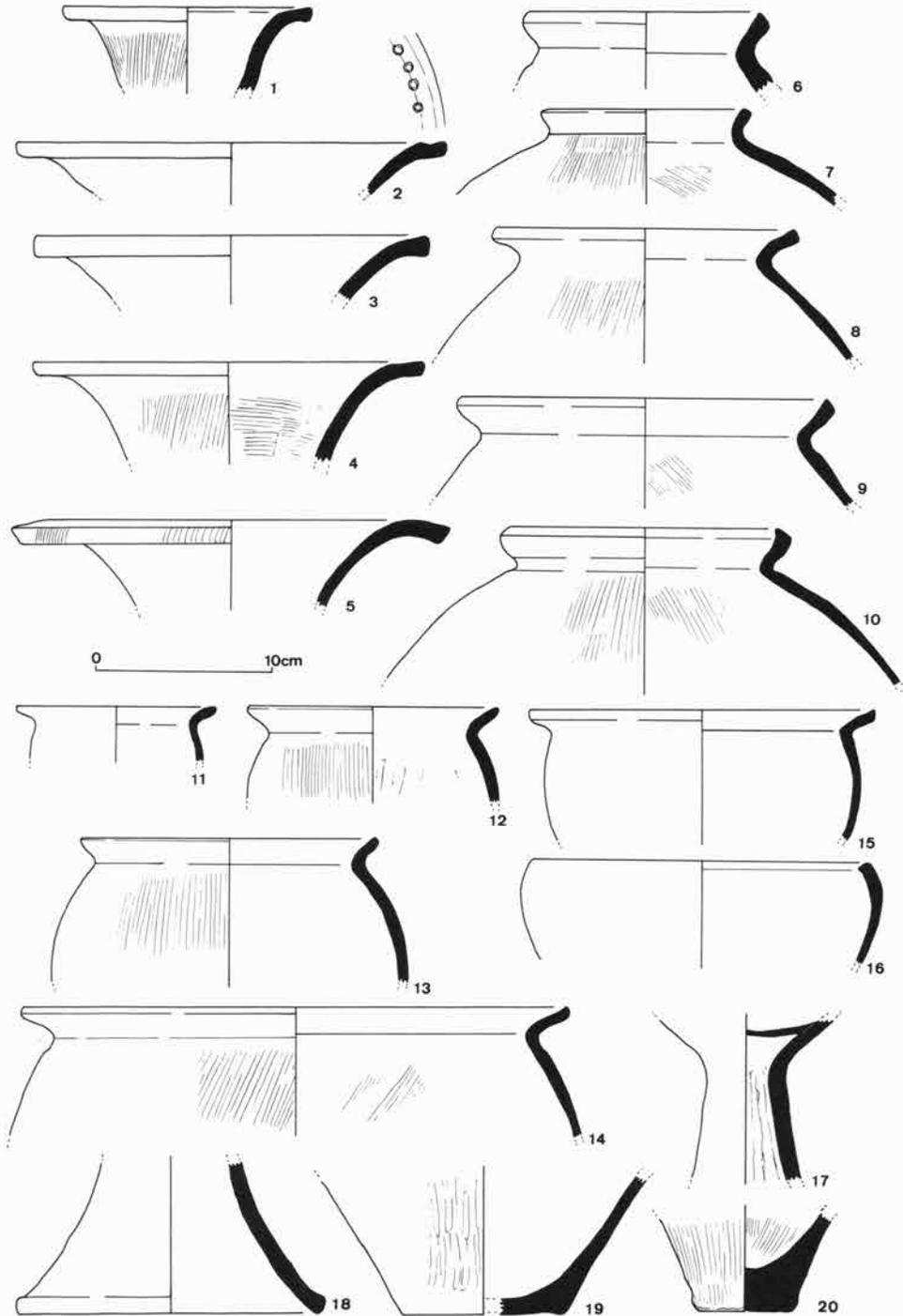
1～5は、広口壺である。大きくラッパ状に開く口縁部をもつ。1は頸部が直線的に立ち上がり、口縁が短く外反する。頸部外面にハケ目、口縁部を横ナデする。2は、口縁部内面に竹管文をめぐらす。4は、内外面にハケ目がある。5は、口縁部が大きく外反、口縁端部に外傾する面を作る。口縁部に部分的にハケ原体木口による刻み目を部分的に施している。6～10は、「く」字形に屈曲して立ち上がる短い口縁をもつ壺である。7は、口縁が直立するように立ち上がる。器体内外面にハケ目、口縁部に強いナデを施す。10は、口縁端部をつまみ上げて端面を拡張している。内外面ともにハケ目がある。

11～14は、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕である。12～14のように、口縁がやや内湾するものが多くみられる。11は、小形の甕である。12は、体部外面をハケ目、内面に部分的なヘラ削りがある。13・14は、体部の内外面ともハケ目である。

15・16は、鉢である。15は、口縁部が「く」の字形に外反し、端部を上方に少し拡張している。内面にハケ目がある。16は、台付鉢であろう。口縁端部が内傾する。

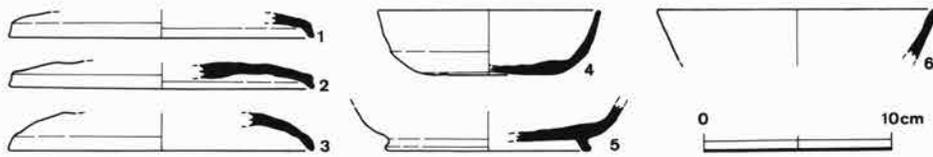
17は、高杯脚部である。杯部と脚端部を欠損している。杯部の内底面は、円盤充填手法による。脚部内面には絞り目がみられる。

(田代 弘)



第26図 各住居跡出土弥生土器実測図

SH02:4・14・17・19・20 SH03:13 SH04:2・6・7 SH11:15・16 SH15:5・8
 SH17:10 SH19:3・9・11・12 SH20:1 SH23:18



第27図 鍛冶炉周辺出土須恵器実測図

鍛冶炉周辺出土須恵器(第27図)

鍛冶炉に伴うと考えられる遺物として須恵器6点がある。蓋(1~3)は、端部を丸くおさめた扁平な作りである。杯A(4)は、口縁部を強い横ナデによって整形し、口径11.6cm・器高3.4cmを測る。杯B(5)は、外に踏張る高台が特徴である。生産地が不明なので年代観については慎重にならざるを得ないが、形態のみでいうならば8世紀初頭頃から前半におさまる。したがって、鍛冶炉の操業年代の一点もこの間におさえられよう。

(河野一隆)

b. 石製品

①玉類

玉作り関連資料は、SH01~06、SH10・11、SH14~17、SH19~23、SK01~03と、検出以降の大半から出土している。しかし、遺物はどの遺構にも等質的に分布するわけではなく、SH06・SH14・15・SH21~23に集中しており、それ以外ではSH13やSH16などのように数点から十数点と少なく、偏在する傾向が認められた。

(a)水晶製玉作り関連遺物(第28図)

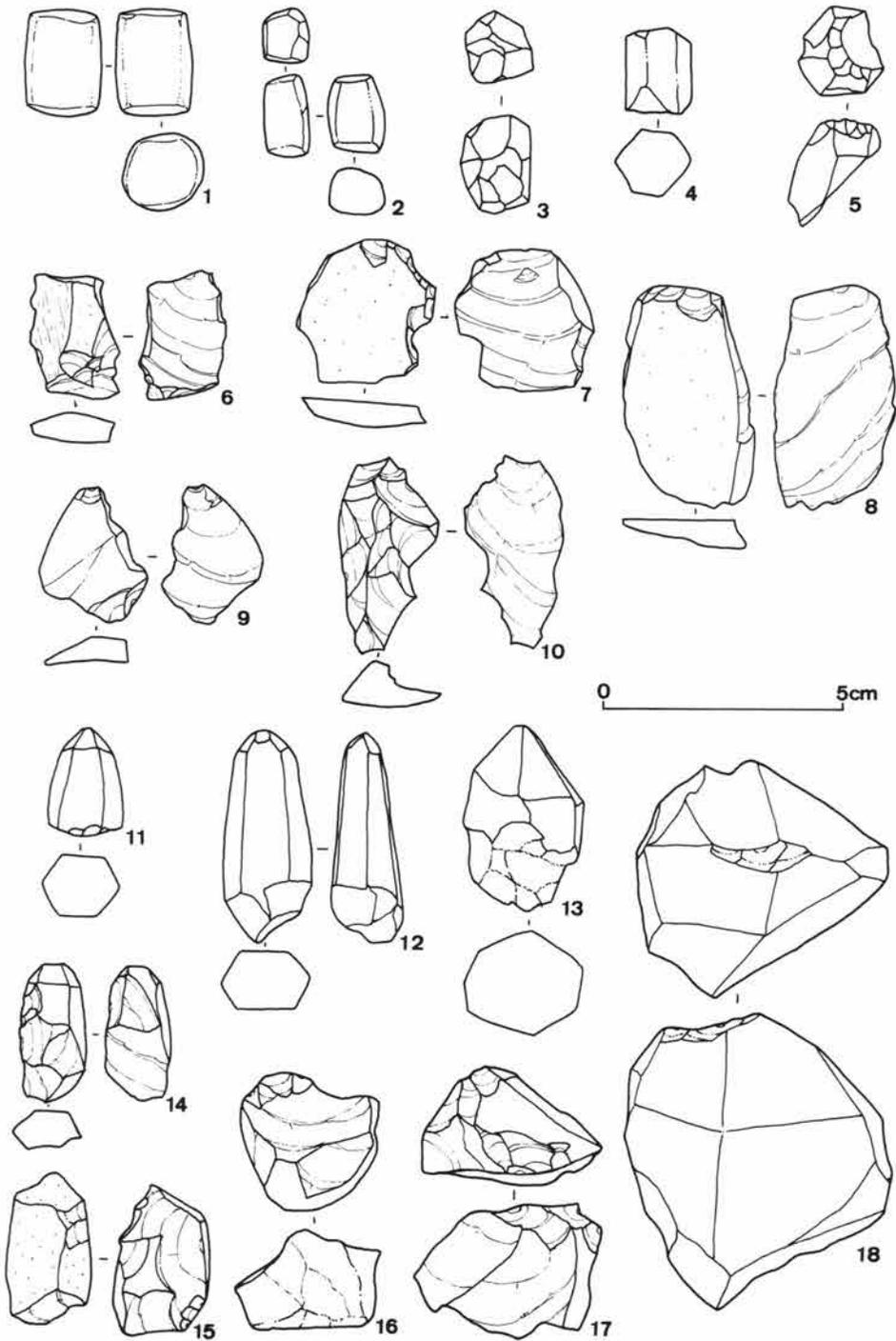
当遺跡における玉生産は、碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産が主流であり、水晶製玉生産はその一部を担うにすぎない。したがって、碧玉・緑色凝灰岩製品の出土量に比べ水晶は格段に少なく、未製品も3点を数えるにすぎない。水晶玉材が碧玉質材を凌駕する鳥取県西高江遺跡^(注26)や島根県平所遺跡^(注27)の水晶工房跡とは対照的である。

当遺跡の水晶製玉は完成品は出土していないが、成品に近い未製品をみると中膨らみの円筒形をなしており(1)、太身の管玉状の成品が想像される。当遺跡ではこの一種が確認されたのみである。

断片的ではあるが、原石採集段階の後、荒割、調整、研磨までの工程をうかがえるものがあるので図示して説明する。なお、水晶は錐状の部分を菱面体、六角柱の部分を柱面体と呼ぶ^(注28)。

ア. 水晶原石の採集

丹後地域には花崗岩帯が広く分布し、峰山町大路・長岡・大滝、大宮町河辺・口大野・谷内・森本・三重、岩滝町男山などに数多くのベグマタイトが知られ、これに伴い水晶の



第28図 水晶製玉生産関連遺物実測図

産出が確認されている^(注29)。かつては遺跡周辺でも弥栄町井辺や小金山周辺で産出したという。当時、水晶原石は近接地において、比較的容易に入手できたのであろう。なお、峰山町大路のペグマタイトを見学した際、無色透明なものと煙水晶を同一地点で採取している。

原石は、12・13・14・18のような水晶結晶体がみられる。これらは岩体から割り取られて集落内に搬入されたものである。峰山町大路や大宮町口大野のペグマタイトでは透明で良質な石英脈がみられ、玉材として利用可能な岩塊を得ることができる。出土資料中にも石英剥片が散見し、水晶結晶体が母岩とは考えにくい剥片資料も多い。水晶結晶体とあわせて良質な石英塊が素材として用いられたのであろう。

玉素材として用いられた水晶には無色透明なもの(2・11・14・17)と茶褐色を呈する煙水晶(1・12・13・18)とがある。

イ. 製作工程

荒割工程 採集原石を分割する工程で、水晶結晶体の菱面体と基部を打割して六角柱(4)を作出する工程である。5・11・17は、除去された菱面体である。16は基部である。柱面を横にしてほぼ垂直に加撃しているようである(16・17)。

調整工程 六角柱状に作出された荒割未製品の柱面及びその稜を除去して玉の原形を作る工程である。玉の原形は器表面がごつごつした楕円球状を呈する(3)。柱面の除去は、主に六角柱の上下の打割面を打面として稜頂部を加撃して行う。7～9・15は、除去された柱面及びその稜である。6には打割に先立つ研磨痕がみられる。10は、背面を剝離痕が覆う例である。

荒割未製品の調整は、以上のような平坦打面への加撃ばかりでなく、両極打法も用いられたようで、それに伴うとみられるスポール等も出土している。

研磨工程 前段階で得られた未製品に研磨を加える工程である。研磨工程は調整作業も兼ねており、不定形な玉の原形を研磨作業によって目的の形態に近づける。研磨は初期段階では四角柱を意識して行われ(②)、次第に円柱状に整えてゆく(①)。四角柱から円柱状の未製品に向かう過程を示す資料は出土していないが、おそらく次の段階で稜加工を中心とした研磨作業へ移って多角柱とし、その後、円筒状へと向かうのであろう。

②の段階ではすでに研磨調整痕が器面を覆い、打割に伴う剝離痕はほとんど見られない。①では器体がほぼ円筒形となり、上下の平面形も円形に近付いている。器面は透明感をもつには至っていないがなめらかであり、完成まで貫孔と仕上げの工程を残すだけとなっている。4は、研磨状況からみて今後の作業によって大きく変形されることはないと思われるので、本例は太身の管玉の未製品と考えられる。

(田代 弘)

(b) 碧玉・緑色凝灰岩管玉とその未製品

当遺跡からは、碧玉・緑色凝灰岩製管玉製作に関する一連の資料が出土しており、石核の作出段階から仕上げまでの製作の全工程を知ることができる。全工程を6段階にわけることができる。以下、各工程毎にその代表的なものを図示して説明していくことにする。なお、今回の調査で検出した碧玉と緑色凝灰岩は、中間的な岩相をもつものが多く、その区別は肉眼では必ずしも明確でない。両者の典型的資料を基準として(山城郷土資料館橋本清一氏教示)、主観的に判別した。硬質材としたものは碧玉、軟質材としたものは緑色凝灰岩をさしている。

ア. 原石の搬入

原石そのものの出土例がなく、原石がどのような形状で搬入されたかは明らかでない。第29図1～5に示すような風化礫面を有する剥片・残核や、7の石核の形状からみて、拳大ないし、それ以下の比較的小形の転礫を素材として搬入して用いたと考えられる。

碧玉産地として名高い鳥根県玉湯町花仙山では、碧玉は安山岩体のなかに脈状に認められる。風化して土壌化した安山岩体の部分では、脈状を呈しながらも転礫同様の産状を呈している^(E30)。また、近畿北部では、兵庫県日高町猪爪にある玉谷とよばれる碧玉産地が知られているが、ここでは緑色凝灰岩の厚い堆積中に脈状あるいは塊状に産出し、岩塊から遊離して転石となったものも多い^(E31)。いずれの場合も転石の採取は容易である。このような転石の中から良品を採取して集落内に搬入したのだろう。

出土した碧玉・緑色凝灰岩の産出地は明らかでない。玉材としての利用に適する碧玉の産出地は、丹後半島内ではいまだ確認されていないが、緑色凝灰岩の露頭は丹後町から久美浜町にかけての沿海部に多数認められる。これらの露頭の多くは軟質で粗く、これまで玉材との関連で取り上げられたことはなかった。しかし、網野町小浜から掛津にかけては緻密で硬い良質な緑色凝灰岩が漂石として存在し、波打ち際から海中にかけて良好な露頭を認めることができる。この地点を玉材産出地のひとつの候補として挙げておきたい。小浜の緑色凝灰岩産出地には濃緑色を呈する碧玉様の溶結部を含む岩塊もあり、近接地に碧玉産地が潜在する可能性も考えておく必要がある。

イ. 管玉の製作工程**第1工程 原石から石核を作る段階**

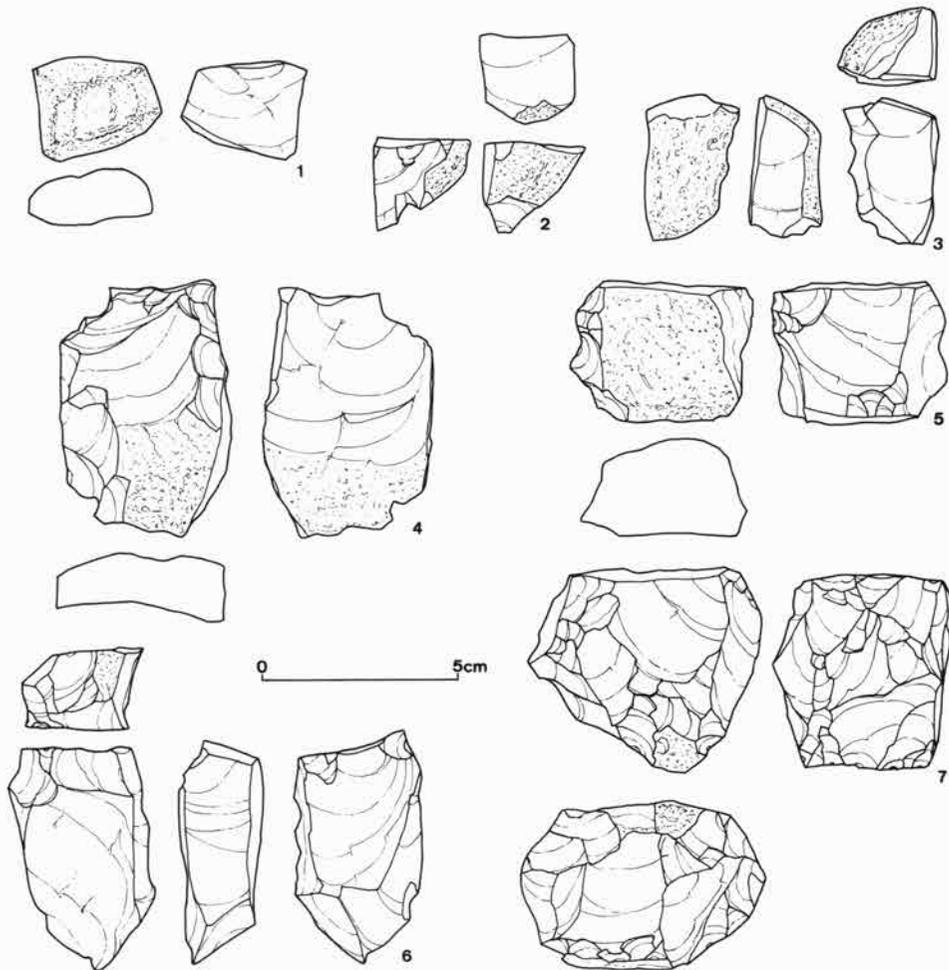
打割・擦切施溝分割等により平坦面を作り出す。板状剥片剥取を目的とするため、方形ないし長方形の石核となる(7・8・9)。7は打割のみによるもの、8・9は擦切施溝分割によるものである。7は器体のほぼ前面を剝離痕が覆う。8は一面に礫面を残している。残りの5面は、擦切施溝分割後にていねいに研磨されている。9はすべての分割面に剝離面がみ

られ、擦切施溝分割された直後の状態を示す資料である。作業は、9→8の順に進行する。

3・4は石核作出に伴う剥片であるが、擦切施溝分割を有する1・2などの残核の例から、素材の優良によってはこれらの剥片も石核として利用した可能性を考えることができる。石核作出に伴って生じた剥片を、次の工程で得られる板状剥片同様に利用した場合もあるのであろう。

第2工程 石核から板状剥片を作出・あるいは分割して、角柱体を得るまでの工程

石核から板状剥片を作出する工程と板状剥片から角柱体を作出する工程を分離して、前者を第2工程、後者を第3工程とするのが一般的である。この遺跡では、板状剥片作出か

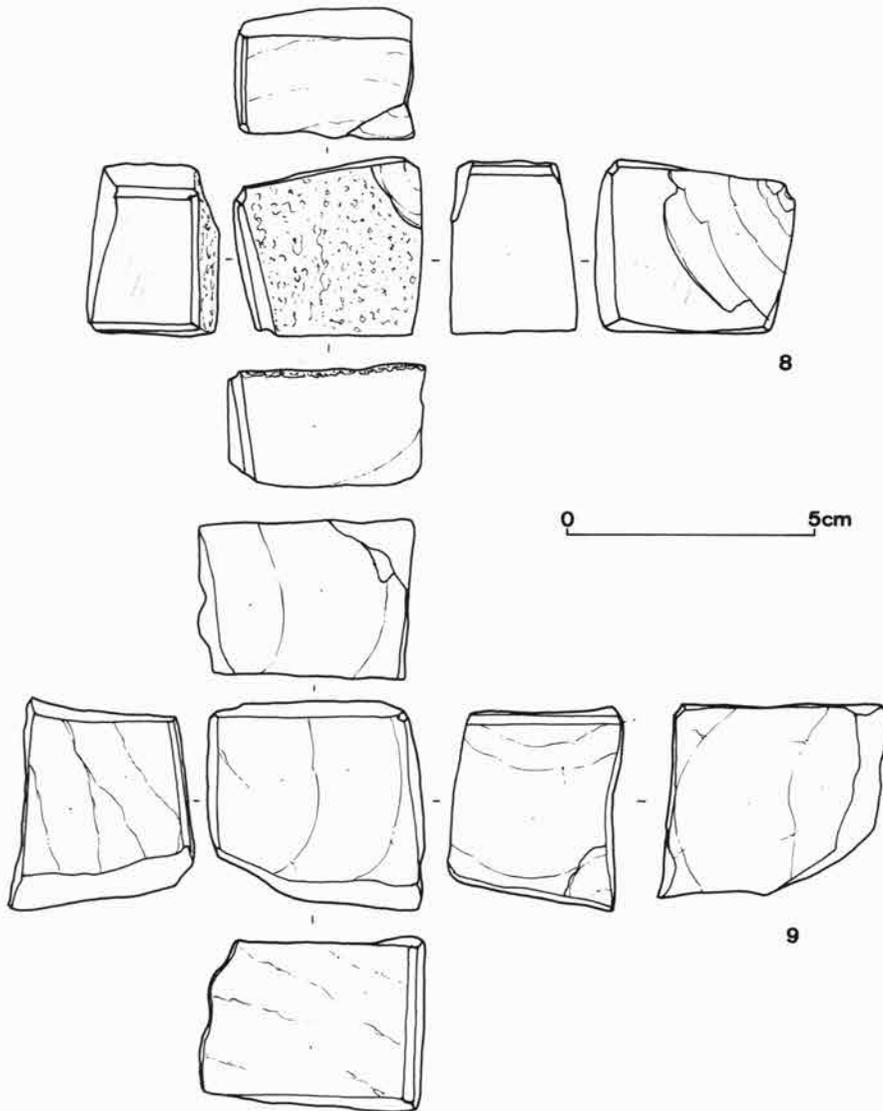


第29図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(1)
石核・残核・剥片

ら角柱体作出にいたる間に、石材の硬度に応じて異なった手法が用いられており、この手法の違いを明確にするため、ここでは二つの工程を一括することとした。

第1工程で得られた石核の平坦面を利用し、擦切施溝分割を繰り返し角柱体を作成する段階である。前述したような石核作出に伴い生じた剥片を板状剥片として利用する例や、打割のみで板状剥片を作成する例(5)などはこの工程から擦切施溝分割が用いられる。

擦切施溝分割手法によって石核を分割して目的とする角柱体を得るにあたっては、二つ



第30図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(2)
石核

の手法(手法Ⅰ・Ⅱ)が認められる。

手法Ⅰ 軟質の素材(緑色凝灰岩)を対象とする手法で、擦切施溝分割手法とあわせて研磨調整が大きな役割をはたしている。8・9のような石核を施溝分割し板状剝片を作る。分割後に分割面をていねいに研磨して管玉直径に近い厚さまで板状剝片を調整し、最終の分割によって目的とする角柱体を連続的に得る手法(11~25・41)である。16~25のような薄い板状剝片がこの手法を特徴づけるものである。16~25の板状剝片の厚さは5mm以下であり、当遺跡で主体的に生産されている管玉直径に限りなく近い厚さである。

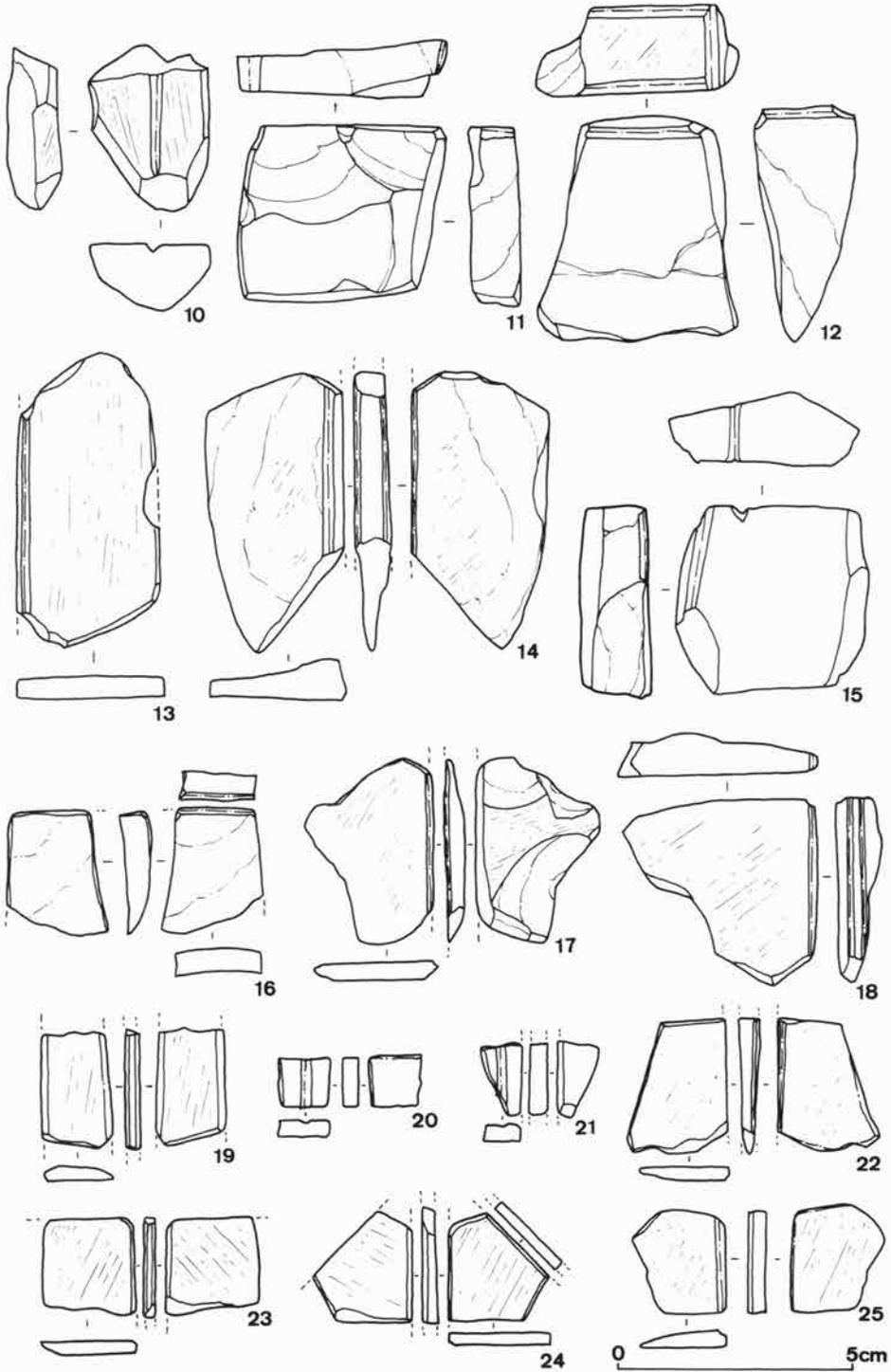
板状剝片には、厚さが1cmから2cmと厚い大形のもの(11・12・15)、5mm~1cm前後の厚みをもつもの(13・14・16・18)、5mm以下の薄いもの(17~25)などが認められる。11は一辺4cm前後の方形を呈し、8・9の平面形とはほぼ等しい。12の頭部には平行する2条の擦切施溝分割痕があり、石核を切り取って分割するようすがうかがわれる。14は、側辺が研磨調整され、調整後に側辺側から擦切施溝分割を行っている。石核から分割した直後の板状剝片である。13・17は分割面をていねいに研磨調整したもので、14の次の工程を示す資料である。その後、さらに研磨されて厚さ3mmから4mmの整った板状剝片に仕上げられる(19・22~25)。そして、3mmから4mmずつ擦切施溝分割手法により切り取られ、目的とする四角柱体が作られる(20・21・41・46・70~74)。擦切施溝は最終段階では両面に施される場合が多い(18・19・23・41)が、片面のみに施して割り取る例もある(24)。

この手法は、同一規格品を量産するのに適した手法である。

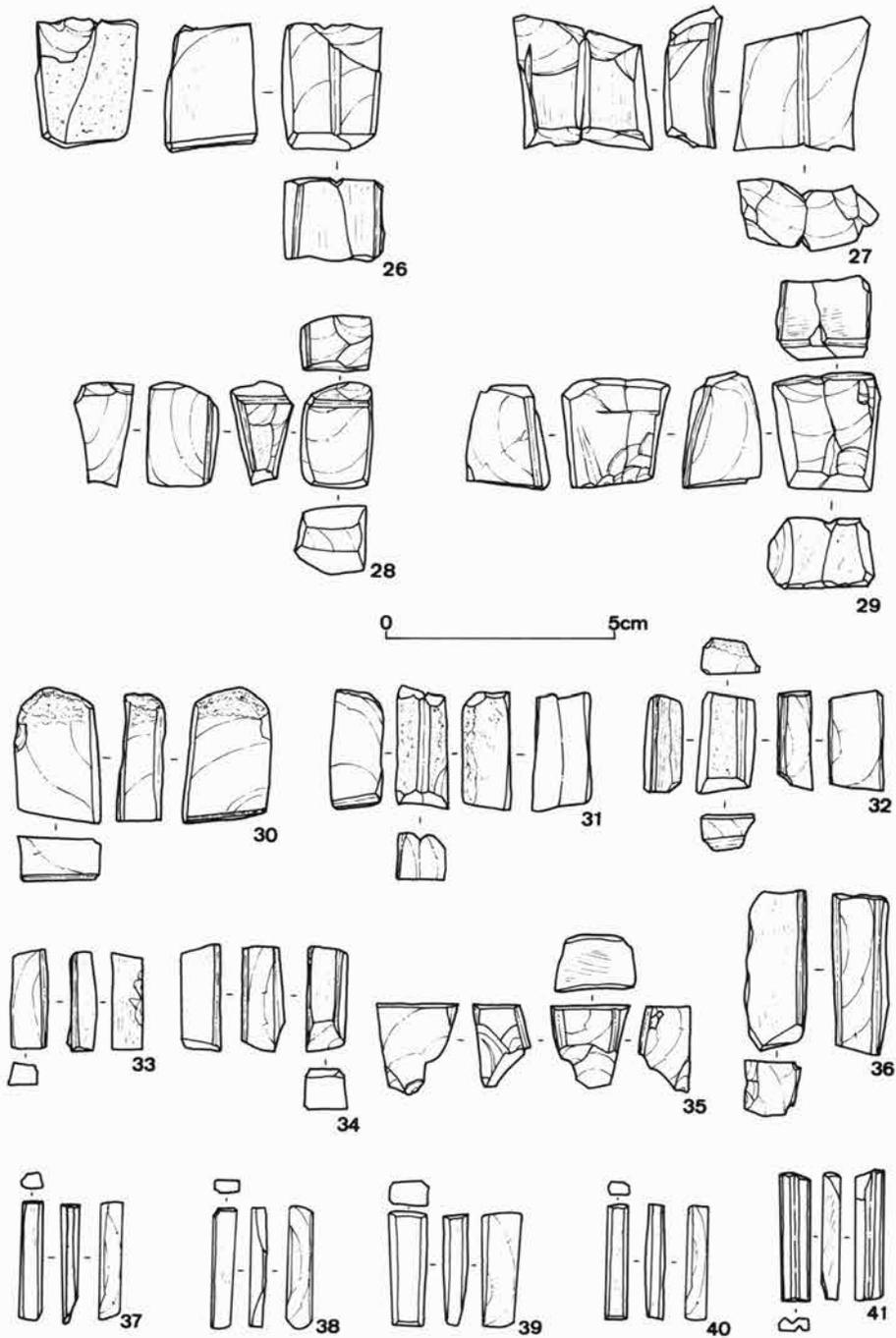
手法Ⅱ 擦切施溝分割によって二分の一、四分の一と分割して直方体を作出していく手法で、手法Ⅰのような薄い板状剝片を介しない(26~36)。分割によって生じた平坦面に対する研磨調整も手法Ⅰほど顕著でない。硬質材(碧玉)を対象とする技法であり、軟質材(緑色凝灰岩)にはみられない。

26・27・29・31は接合資料であり、分割の過程をよく示している。26は、擦切施溝分割手法によって作られた長さ約3cm・幅約2cm・厚さ2cmほどの角柱体である。主剝離面側に擦切施溝して2分割したものである。この分割によって板状剝片が得られる。30に図示した板状剝片はこの作業で得られた剝片とほぼ同形同大である。30を2分割すると31・32・34のような角柱体得られる。27・29は30よりやや大形の資料であるが、この間の作業内容を示す好資料である。次に、これを分割して扁平な角柱体を得る(31)。33や39がこの作業で作られた角柱体であろう。さらに、幅広の面に対して2分割し(42~45)、目的の角柱体を得る(37・38・47・52)。この四角柱体は長さが1.5cmから2cm、一辺が3~4mm前後である。

当遺跡では、径3mm前後・長さ7mm前後の管玉の生産が主に行われており、大形品1点



第31図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(3)
板状剥片(軟質素材・手法Iによる)



第32図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(4)
 手法Ⅱ(硬質素材による角柱体の作出) *41のみ軟質素材

を除いて1cmをこえる完成品は認められない。第2工程で最終的に得られた四角柱体は、成品の約2倍の長さを有しているといえる。第3工程以下で作業対象としている未成品の法量はほぼ完成品に近づけられているので、それまでに、四角柱体の長さを整える調整工程があるものと思われる。

以下の資料がこの調整工程を示すものであろう。

幅3mm前後の四角柱体には、長さが1.5cmから2cmのもの以外に、長さ1cm前後の小形のグループが認められる(55~64)。56・57・61・62などは成品の長さにほぼ等しい。これらの一端ないし両端は折損しており、第2工程で最終的に得られた四角柱体を折って作出された可能性がある。多くは長さを調整する際に生じた残屑であろうが、56・57をみると長さは45のちょうど半分であり、ひとつの四角柱体から2つの小形の四角柱体を取る工夫がなされていたのかもしれない。これらの資料は、第2工程最後の調整工程を示す資料として位置づけられよう。

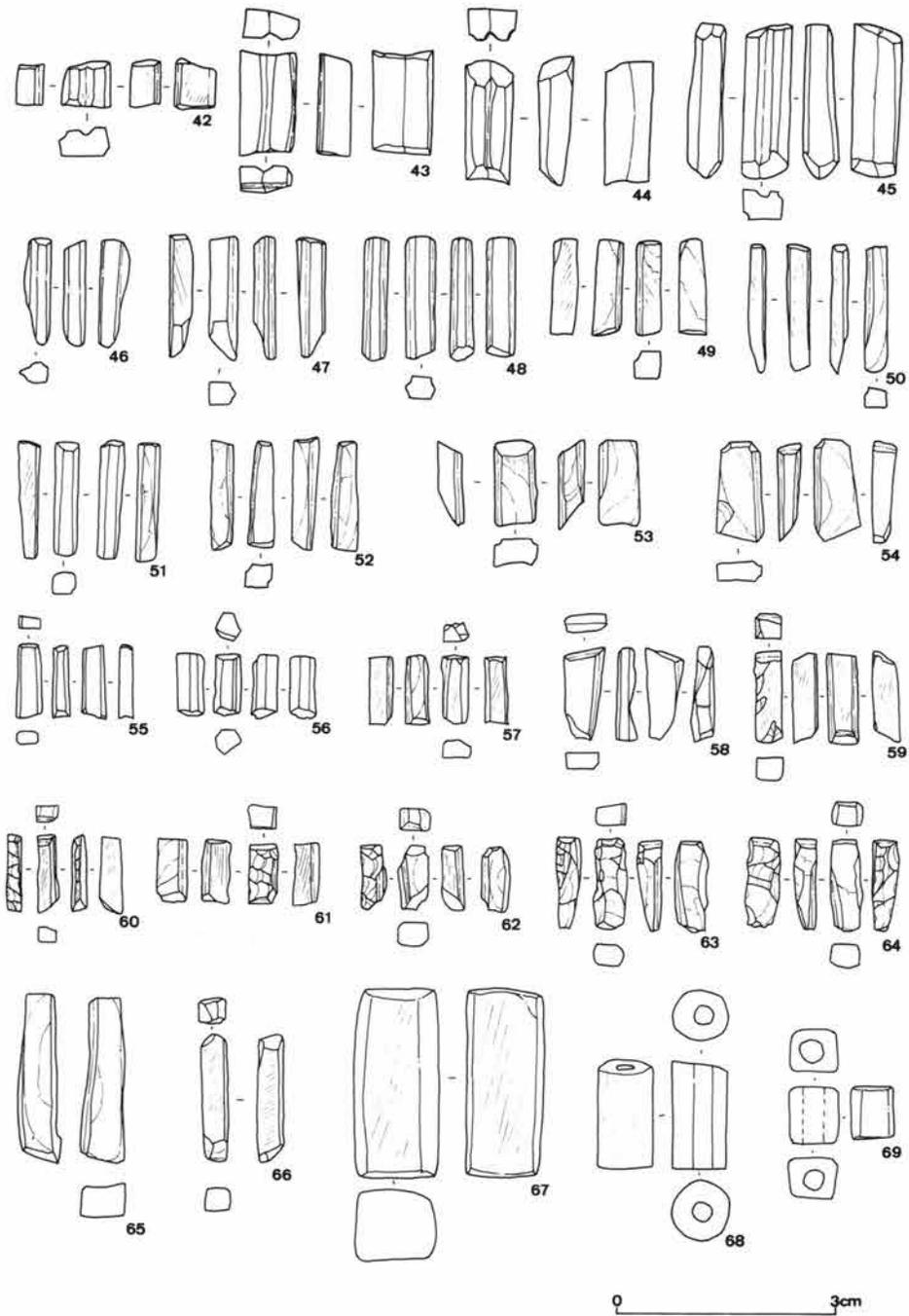
I・II、2つの手法はSH01・06・14・15・23などで共存しており、時期差を示すものではない。素材の軟質・硬質、あるいは形状などに応じた手法であると考えられる。峰山町扇谷遺跡(第II様式)^(注32)・峰山町途中ヶ丘遺跡(第I~V様式)^(注33)でも両者が共存し、軟質材(緑色凝灰岩)は手法I、硬質材(碧玉)には手法IIが用いられる傾向が認められる。一方、兵庫県豊岡市女代神社南遺跡(第III~IV様式)^(注34)・舞鶴市志高遺跡(第III~IV様式)^(注35)・桑飼上遺跡^(注36)では主に硬質材(碧玉)を用い、手法IIによって管玉生産が行われている。

第3工程 角柱体の側稜調整の工程

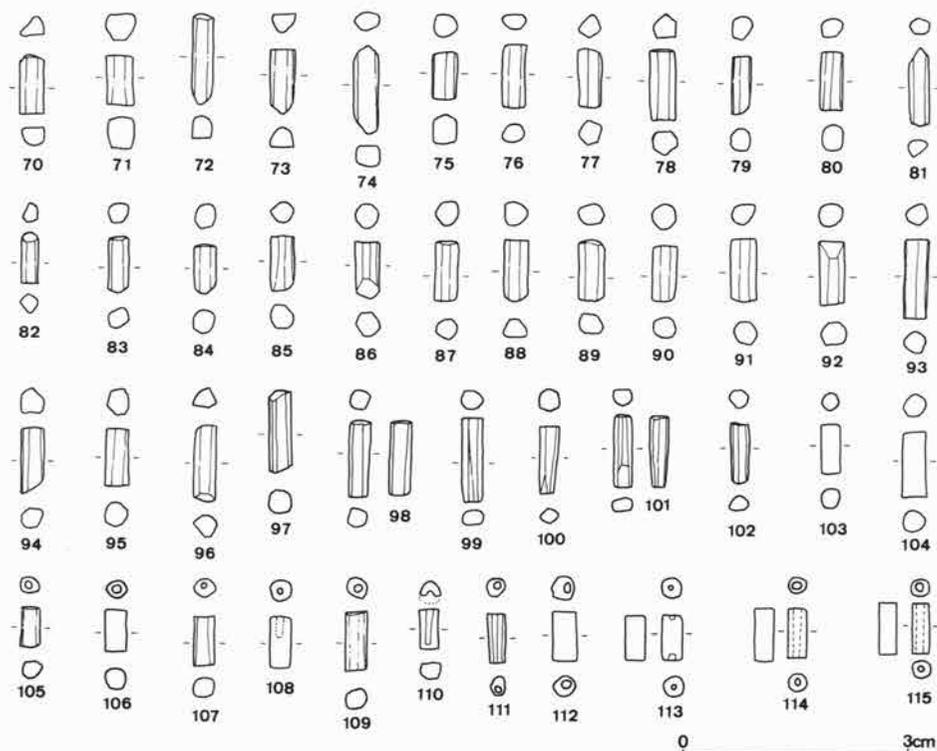
施溝分割によって得られた角柱状未製品を調整・加工する段階である。この段階は研磨調整または調整剥離によって、より整った四角柱へと整形する(66・67)。第2工程で説明したように軟質材は、この段階までに目的とする角柱体に近づいており、これらについてはここでは施溝痕の残る側縁に対し若干の研磨調整を行うのみで、次の段階へ移行するようである。調整剥離は、碧玉質の硬質材を用いた一部のものにみられる(56・57・59~64)。調整剥離したものは剥離後に研磨調整で器体を整える(57・59・60)。調整剥離は側辺を対象とするものが多く、全面に及ぶものはわずかである。剥離はあくまで器体調整を目的としており、補助的・部分的なもので器体整形の主たる技法とはなっていない。

第4工程 多角柱体を作る工程

研磨調整により多角柱状未製品を作る段階である。前段階で四角柱状に研磨したものを順次、角をとって多角柱未製品とし、円柱へと近づけていく(75~104)。75~96は六角柱、97~102は八角柱である。103・104は仕上げ直前にまで研磨が進んでいる。



第33図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図(5)
 42~65. 角柱体 66・67. 四角柱体 68. 太身の管玉 69. 角柱



第34図 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物実測図6)
多角柱体・成品

第5工程 穿孔工程

多角柱状未製品に穿孔する段階である。105～113に示す資料がこの段階に属するものである。105～110は、片面側からのみの穿孔があるもので、わずかなくぼみをもつだけのもの(105～107・109)、半ばほどまで進んでとまったもの(108)、貫通直前で折損したもの(110)などがある。111～113は、両面側から穿孔されたものである。111は、浅いくぼみが施された段階であり、112・113は、これよりやや作業が進み1mm程度の穴があげられている。穴の先端はいずれも「U」字状である。

穿孔は、これらの例から、片面側からのみ行う場合と、両面側から同時に行っていく場合があることがわかる。

第6工程 仕上げの工程

穿孔した多角柱状未製品を磨いて、114・115のような円柱形の管玉に仕上げる段階である。器表面に稜は認められず、平滑で光沢のある器面に仕上げられている。

(田代 弘)

②工具類

(a)石針(第35図)

玉の穿孔に用いられたと考えられる磨製石製品である。円柱状を呈し、端面に使用痕とみられる磨耗痕跡をとどめるものがある。ガラス質安山岩製のもの、瑪瑙製のもの、結晶片岩系の石材を用いたものの3種類がある。ガラス質安山岩製と瑪瑙製がその大半を占め、結晶片岩系の石材を用いたものは2点のみである。完成品は少なく、大半が折損している。安山岩製のものは第35図29、瑪瑙製のものは第37図32が完存資料であり、全形をとどめる数少ない資料である。

石針には径1mm前後のものと同径2mm前後のものがある。径1mm前後のものが主体を占め、径2mm前後のものは少ない。前者は径3mm前後の細身・小形の管玉、後者は太身の管玉と角玉の孔径に対応している。

①ガラス質安山岩製と瑪瑙製石針については、成品以外に原石、石核、角柱状未製品、多角柱状未製品など、その製作過程を示す多数の未成品が出土している。これらを観察すると、擦切施溝分割と研磨整形を主な技法として用いており、石針の製作技法が碧玉・緑色凝灰岩製管玉製作技術と結びついていることがわかる。しかし、石核や角柱体作出など細部では内容を異にしており、石針固有の手法が認められる。また、ガラス質安山岩製石針と瑪瑙製石針はおおむね同一手法によって製作されているが、この両者にもわずかな違いが認められる。

なお、ガラス質安山岩としたものには漆黒色で緻密なもの、ザラザラとしてやや白っぽいもの、これらの中間的なものなど、産地の異なる複数の安山岩があるようである。また、瑪瑙としたものは、ほとんどが白濁した半透明～不透明ないわゆる白瑪瑙(玉髓)^(13,37)である。赤色を呈するものもあるがあまり多くない。

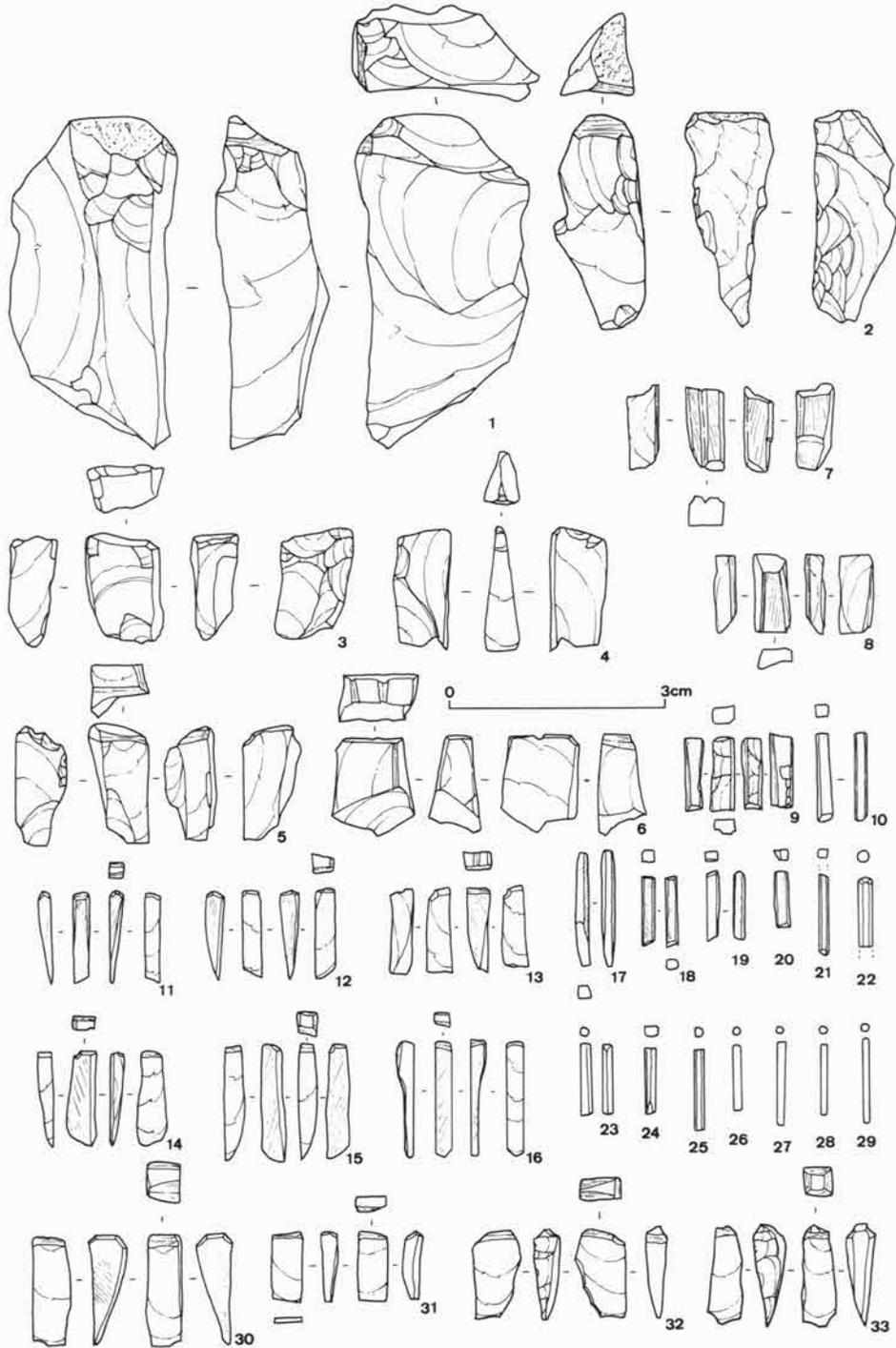
以下、石針に関する主な資料を取り上げ、製作技法を検討することにした。

ア. ガラス質安山岩製石針関連資料(第35図1～29)

1・2は、素材となる剝片の一端に擦切施溝して分割したものである。それぞれ上端に一条の擦切施溝分割痕がみられる。擦切施溝分割による分割を繰り返して、3～6のような薄い板状剝片を作る。

板状剝片は長さ1～2cm前後・幅1cm前後の長方形を呈し、厚さは2～5mm前後である。4～6の上端部には、器体に直交する擦切施溝痕が認められる。これらは、11～16にみられるような角柱体状の剝片の石核として位置づけられるものであろう。瑪瑙でも同様の例が認められる(第37図10・13～15)。

角柱体は、頭頂部に擦切施溝分割痕が認められる(11～16)。頭頂部が方形で下端が薄い



第35図 ガラス質安山岩製石針関連遺物実測図

楔状を呈するものが多く、同形同大のものが数多く認められた。頭頂部には擦切施溝分割痕を有している。頭頂部の分割痕には、一辺のみ施しているもの、平行して2条施しているもの(11・16)、隣り合う二辺に施しているもの(12・14)、「コ」の字形に三辺に施すもの、四辺に施すもの(15)などがある。3～6のような板状石核の頭頂部に対して擦切施溝分割を繰り返し、連続して剥取されたものと考えられる。角柱体のなかには対向する面に分割に先立つ研磨痕をもつものがあり(11・13・16)、ていねいに研磨調整された板状剥片の存在が推定される。

一方、30～33のような幅広で短い楔状の角柱体も多数みられる。これらは石針に関するものかどうかはわからないが、3～6と形態を同じくするやや厚みをもった板状石核から剥取されたと考えられるので、関連資料として図示しておく。

角柱体は、その後、研磨調整され正四角柱となり(10・17～21)、多角柱となり(22～25)、円柱体へと仕上げられていく(26～29)。

以上の板状剥片を縦位に分割して石針を成形していく手法であるが、これ以外に管玉同様の手法をとるものがある(7～9)。7は板状剥片をていねいに研磨し、剥片長軸に平行して擦切施溝分割している。8はこれによって得られた角柱体である。以上は管玉の第2工程に該当する。9は角柱体を押圧剥離した後に研磨調整したもので、第3工程に該当する。

イ. 瑪瑙製石針関係資料(第35・36図1～32)

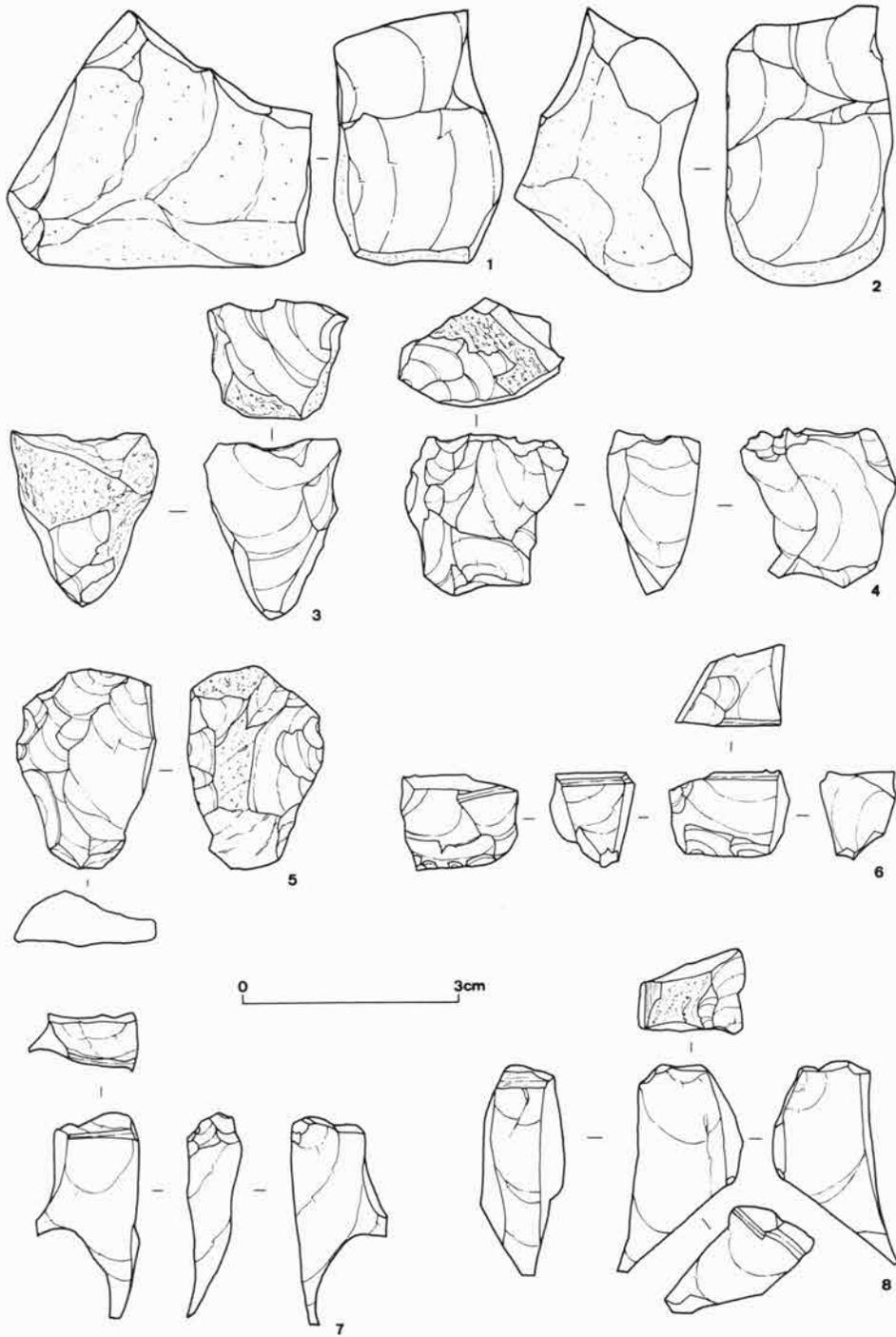
瑪瑙製石針はガラス質安山岩製石針と同じように、板状剥片を縦位に擦切施溝分割して角柱体を作るという手法がとられている。ガラス質安山岩製石針の場合には、これ以外に、碧玉・緑色凝灰岩製管玉の第2・第3工程と同一手法を用いて製作された例が認められたが、瑪瑙製のものにはこの種の技法は認められない。

1・2は、風化礫面を有する転礫である。打割によって剥片を剥取した痕跡があり、石核とみられる。これらは、集落内に搬入された瑪瑙原石の形状をよく示している。

3は、打割し調整された石核である。4・5は、いわゆる楔形石器であるが、瑪瑙製石針の場合、擦切施溝分割によるもの以外に、13のような両極打法によって調整された楔形石器状の調整剥片を石核として用いる例がみられ、これらもこのような石核作出工程の一段階を示すものと考えた。

6・7・8は、擦切施溝分割痕を有する瑪瑙剥片である。7・8は、板状剥片であり、今後、石針石核として利用される予定であったのだろう。

瑪瑙製石針の石核として利用されたと考えられる板状剥片には小形のものが多く(10・13～16)。いずれも主軸に直交する擦切施溝分割痕をとどめている。13は楔形石器状の調整剥片を石核としたものである。20のような剥離痕を有する不定形な角柱体が散見するが、

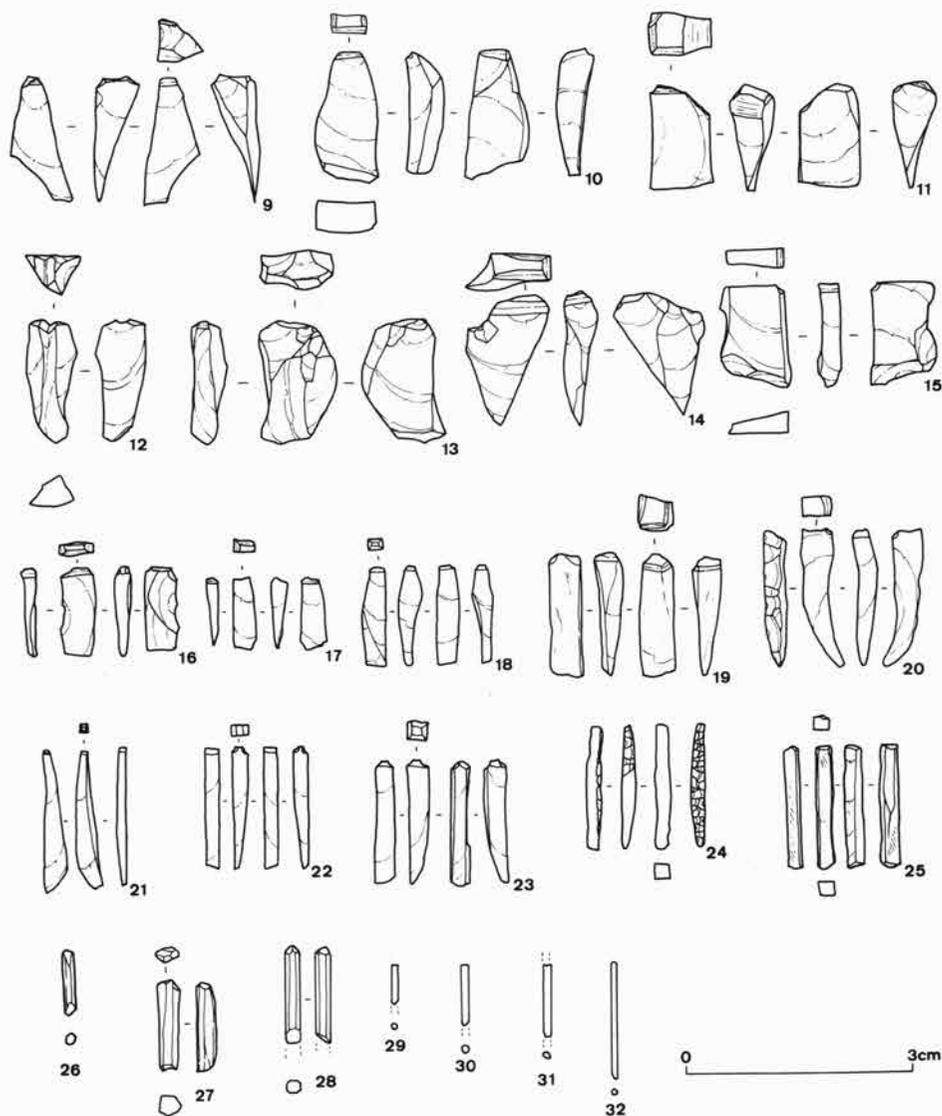


第36図 瑪瑙製石針関連遺物実測図(1)

このような石核から剥取されたものと考えられる。

角柱体は、頭頂部が1mm前後のもの(21)から3mm前後のもの(23)までさまざまであるが、これらは板状剥片の厚さに関係している。角柱体の頭頂部はいずれも方形であり、擦切施溝分割が認められる。頭頂部の分割痕には、一辺のみ施しているもの(20)、平行して2条施しているもの(16・22)、隣り合う二辺に施しているもの(17)、「コ」の字形に三辺に施すもの(19)、四辺に施すもの(15・23)などがある。

角柱体は、押圧剥離あるいは研磨により調整され、四角柱体となり(24・25)、多角柱体



第37図 瑪瑙製石針関連遺物実測図(2)

(26~28)、円柱体(29~32)へと整えられていく。23は唯一完存する例であるが、22~25の未製品とはほぼ同長であり、角柱体が円柱体へと効率よく整えられていったことがわかる。

(b)石鋸(第38図1~19)

碧玉製管玉や石針製作にみられる擦切施溝分割に用いられる石製工具である。板状の剝片の側縁を研磨調整して器体を整える。原則として、器表は研磨で調整されるが、調整されずに剝離面をとどめるものも多い。

紅簾片岩と絹雲母石英片岩製のものがある。前者が大半を占め、後者はごくわずかである。成品以外にスレート状の素材剝片や削片、碎片が多数みられた(S H03・S H14・S H15・S H23等)。当遺跡内で石鋸の製作が行われていたことがわかる。

成品は住居跡をはじめ、溝状の遺構や土坑、包含層などから多数の出土をみたが、大部分は折損しており、完存するものはわずかである。

成品の形態は、加工度の低い不定形なもの(1・2・16)、横長で狭長なもの(8・11・15)、三角形ないし台形状のもの(14)など多様である。長辺あるいは短辺の一端に刃部を設けている点に共通性がみられる。

1は、短辺の一端に刃部を設ける例である。小形で不定形である。

2は、下端に使用痕がある。刃部を明瞭につくらず、剝片の端部そのまま刃部として利用する例である。

3は、方形板状に調整された紅簾片岩で、表裏とすべての側縁に研磨痕あるいは擦痕が認められる。刃部はない。砥石として用いられたのかもしれない。

4~7は、素材となる剝片である。4は、厚さ5cmを測る板状剝片、6は、3~4cmの薄い剝片である。6は、3片に割れた状態で出土したものを接合したものである。5・7も接合資料である。節理面に沿って接合しており、素材剝片の分割方法を示すものとして注目される資料である。

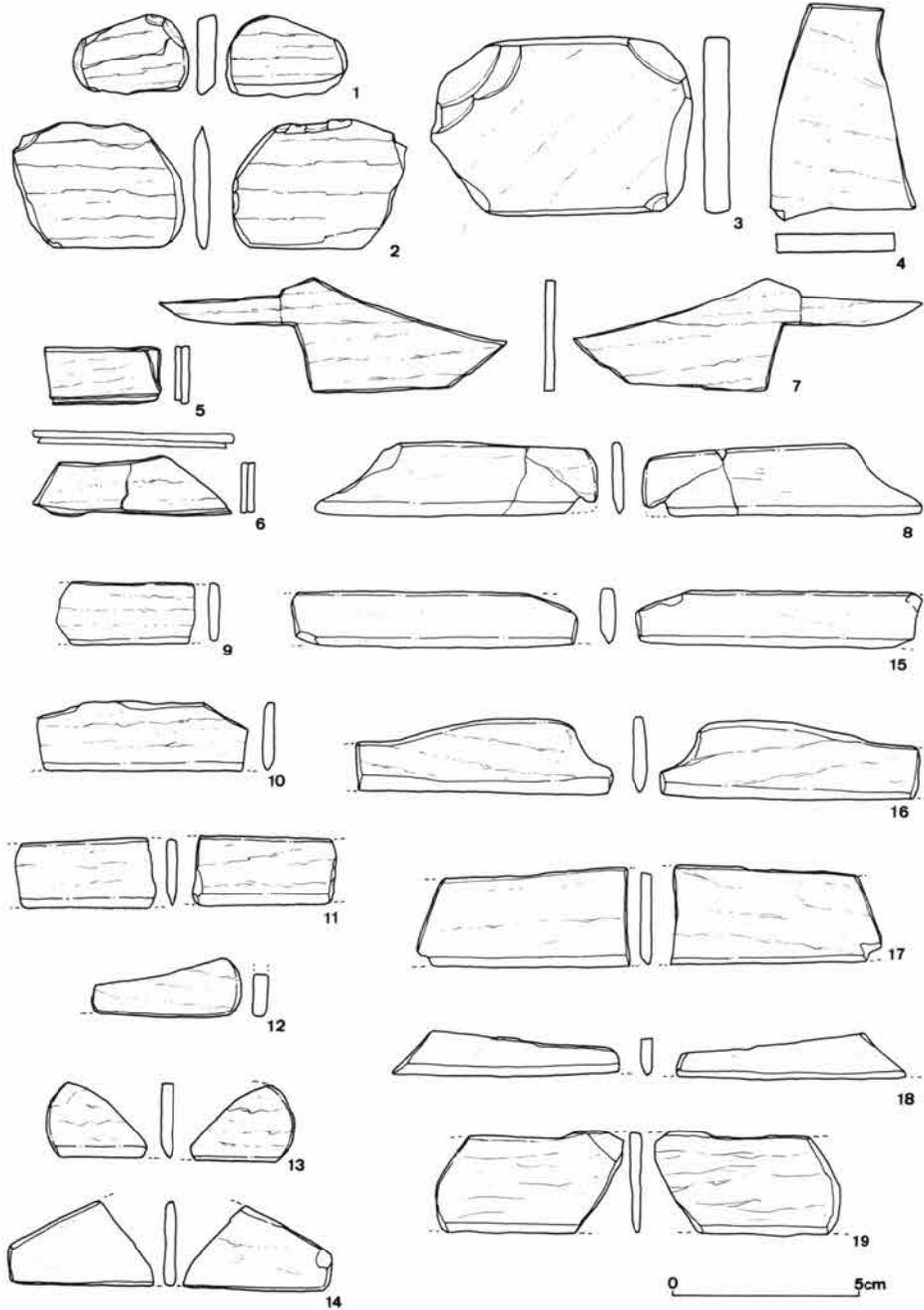
8~11・15・17は、横長で狭長な形態を有するもので、出土資料はこのタイプのものが最も多い。8・9・11・15は、背部を刃部と同じように研磨して作出している。刃部ほどの鋭さはないものの、刃部先端に類似する擦痕が認められることから、刃部として補助的に用いられたものであったと思われる。10・18は、背部欠損。

12・13は、側縁と下端の一部が残存したもの。側縁は丸く調整されている。

14は、三角形あるいは台形を呈するものである。

(c)砥石(第39~41図、図版第29・30)

砥石には、石皿状のもの、板状ないし角柱状の大型のもの、板状の小形のものなど各種の形態があり、砥面の粗いもの(粗砥)、滑らかなもの(中砥)、緻密なもの(仕上げ砥)等が



第38図 石鋸・石鋸未製品実測図

ある。石材は、花崗岩、アプライト、粘板岩があり、おおむね粗砥、中砥、仕上げ砥に対応する。砥石は、平砥石と筋砥石とに大別できるが、筋砥石は大半が平砥石と兼用されている。

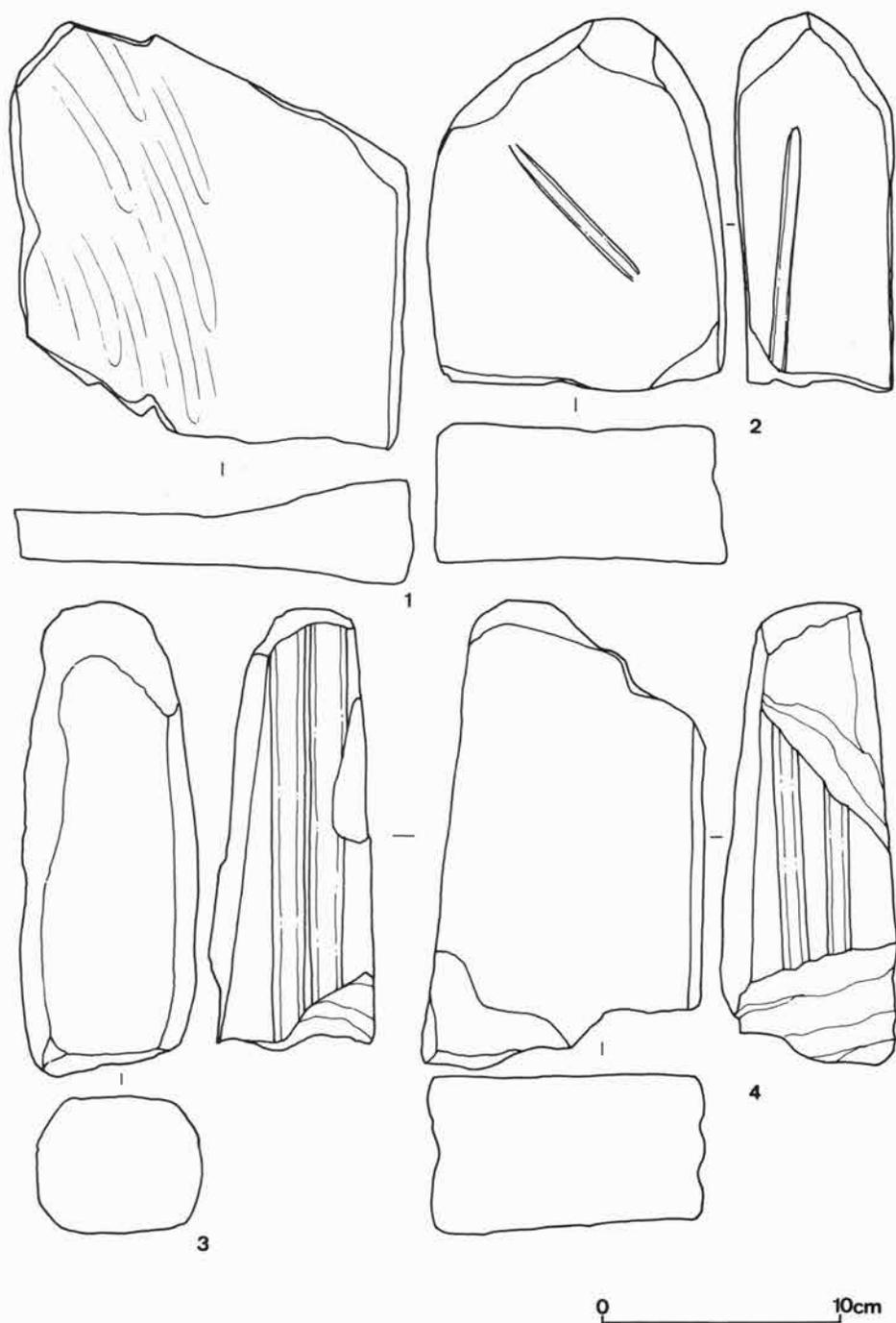
平砥石(1・3・7・14) 1は、石皿状を呈する。砥面は表裏にあり、表には幅5mm～1cmの浅いくぼみが放射状に認められる。凹は面をなしている。6は、方柱状で表裏と右側面に使用痕がある。7・14は、板状で小形の砥石である。14は表裏、両側面が砥石として用いられている。

筋砥石(2・4～6・8～13・15～17) 2は、表裏と右側縁に溝が1条ある。溝は末端で浅くなって終わる。表裏、両側の4面が砥石として利用されている。下端は折損している。4は、上・下端が折損している。砥面は表裏、両側縁の4面で、両側にはそれぞれ2条の溝がある。溝幅は、右側面が6mm前後、左側面が1cm前後であり、使い分けされたものと思われる。5・8・12・15は、薄い板状の砥石である。5は、表面に1条、8・15は、3条、12は、表面と右側縁に各1条の溝がある。いずれも各面に砥面がみられる。溝幅は、5が4mm前後で、12・15が8mm前後である。6は折損して破片となった資料である。3面に計5条の溝があり、溝幅は、4mm前後、6mm前後、1.2cm前後の3種がある。折損面は再利用されており、いずれの面も砥面として用いられている。9は、6条の溝がある。溝幅は、7mm前後で最も深い部分で1.5cmを測る。表裏、両側縁を砥面として利用している。下端は折損している。10は、側縁に溝が1条あり、その後、この溝に直交して幅6mm前後溝が施されている。この砥石の表裏には幅2mm・深さ3mm、断面「V」字形の狭く鋭い溝(筋砥石の溝とは異なる)が施されており、この溝に沿って分割された痕跡がある。砥石の分割に際して、管玉生産にみられる施溝分割の手法が用いられた数少ない事例として注目される。12は、下端部が折損している。溝1条がみられる。16は、断面三角形の不定形な小形の砥石である。幅3mm前後と8mm前後の2種の溝が4本施されている。上・下端折損。17は、小形、板状の砥石である。表面には、幅6mm前後の溝が3条、それに直交する溝が2条みられる。表面及び裏面上縁、左側縁には、幅2～3mmのたいへん細い溝がある。これは、石針などを磨く用具として用いられたのであろう。

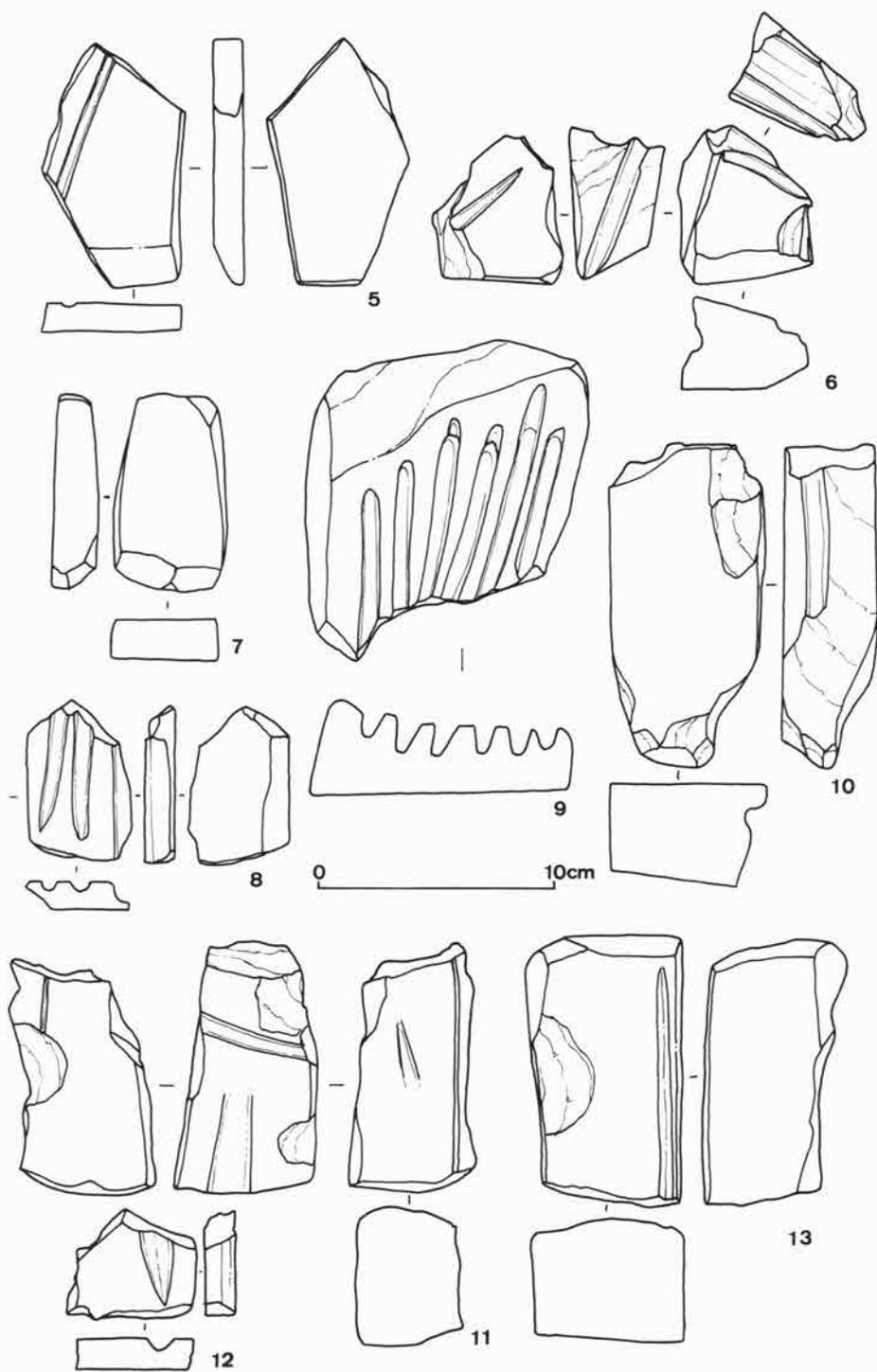
(d)棒状不明磨製石製品(第42図)

上端が断面円形、下端が断面方形を呈する棒状の磨製石製品である。上端はやや太く、器体半ばから下端にかけて細く作られている。器体全面に成形に伴うとみられる研磨痕がある。SH15のみで出土し、計5点を確認している。いずれもガラス質安山岩製である。

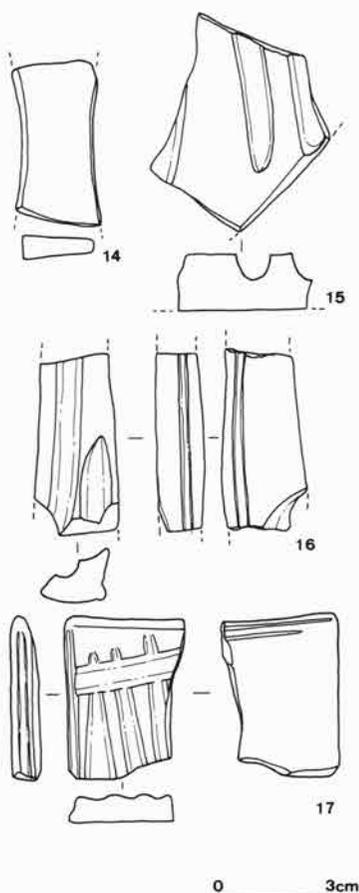
1は、器体に広い面をとどめ方柱状を呈している。頭部側に回転研磨痕があり、穴に押し込むようにして断面円形の頭部を作出したようすがうかがえる。



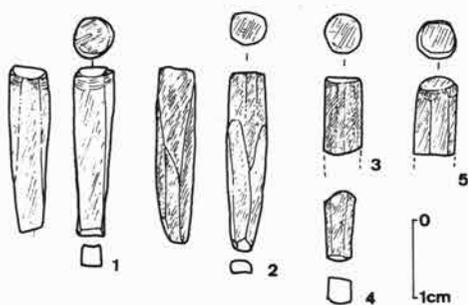
第39図 砥石実測図(1)



第40図 砥石実測図(2)



第41図 砥石実測図(3)



第42図 安山岩製棒状不明磨製石製品

上・下両端を錐部に作る例である。四角柱体を素材としており、1～3は同じような手法で作られたものとみてよい。

6・9・10は、不定形な縦長剥片を素材とする。10は、側縁に連続する調整剥離を行い

2は、ある程度円柱状に仕上げた後、器体の中～下半を研磨して減じ、下端を方形に作出する。3～5も2と同様である。2・5は円柱部分に面を残しているが、3はていねいな研磨調整によって、面・稜が取り除かれている。

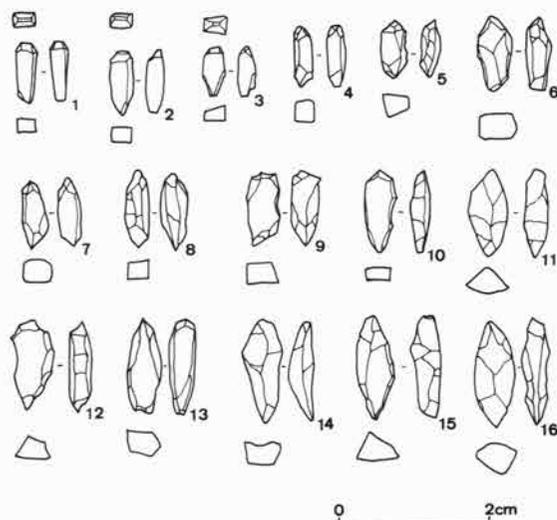
これらの資料は成品であるのか、製作途上のものであるのか明らかでなく、用途は不明である。類似する資料は、新潟県下谷地遺跡^(註38)、福井県加戸下屋敷遺跡^(註39)に出土例がある。下谷地遺跡では石針の未製品、下屋敷遺跡では下端がノミ状に研磨される例があることから、これを楔形の石器として位置づけている^(註40)。しかし、下屋敷遺跡の一つには下端側に明瞭な回転研磨痕の認められるものがあり、回転貫孔具としての利用も考えられる。

(e)小形錐状石器(第43図)

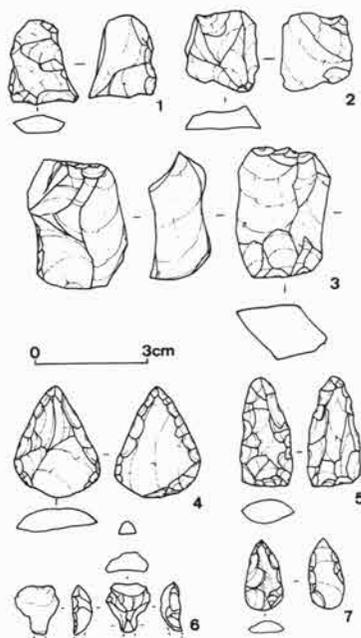
方柱状あるいは不定形な剥片を素材とし、主に、その一端あるいは両端を調整して錐部を作出した打製石器である。

瑪瑙製(白瑪瑙)と碧玉ないし鉄石英(その不純なもの)製とがある。

1～10は、瑪瑙製である。1～3は、頭頂部に擦切施溝分割痕をとどめており、下端部を調整剥離して錐状としたものである。断面は方形を呈しており、瑪瑙製石針製作工程で生じる四角柱と同様の素材を用いたものと思われる。4・5・7・8は



第43図 小形錐状石器



第44図 楔形石器・石鋸・石錘

器体を整えている。

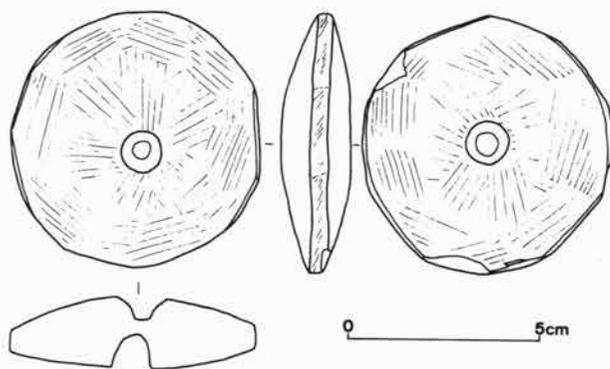
11~16は、碧玉ないし鉄石英で、いずれも茶褐色系の不純物の多い石材である。不定形な縦長の剥片を素材とし、上下端側縁部を中心に調整剝離して器体を整えている。断面三角形を呈するものが多い。これらと類似する資料は岡山県溝手遺跡・大阪府守口市八雲遺跡^(F41)で検出されている。

八雲遺跡では多量に出土しており、ドリルと考えられている。

碧玉ないし鉄石英製の茶褐色系の製品は、SH21中央土坑付近に集中する。同一素材の剥片や、楔形石器状を呈する石核とみられるものも数多く検出している。

(f)有孔円盤状石製品(第45図)

中膨らみの円盤状の石製品。周縁には4~5mmの面が作られている。器長全面に粗い研磨調整痕がみられる。器体中央には表裏ともそれぞれ1個のくぼみがある。くぼみは貫通



第45図 有孔円盤状磨製石製品

せず半ばほどで止っている。上面側のくぼみは2段あり、断面は台形、下面側のくぼみはやや大きく、断面「U」字形を呈する。径6.7cm前後・厚さ1.8cm・重さ80.6gを測る。アプライト製である。有孔円盤状石製品のうち当例のように貫通しない例は、玉作り遺跡では石川県吉崎・次場遺跡、福井県加戸下屋敷遺跡に類例がある。

(g)石錐(第44図6)

涙滴形の石錐である。縦長の小剝片を用い、主に主剝離面側から調整を施して成形している。錐部端は欠損。水晶製である。

(h)楔形石器(第44図1～3)

両極打法によって整形された方形～長方形の剝片石器である。図示した3点にはいずれも一辺に断面が認められる。1はガラス質安山岩製、2は瑪瑙製、3は水晶製である。

両極打法はここに図示した定形的な楔形石器ばかりではなく、ガラス質安山岩、瑪瑙、水晶、鉄石英などの分割手法として多用されており、側片に発達した階段状剝片痕を有する各種剝片が多数みられる。また、楔形石器は、石針や小形錐状の石器の石核として用いられている例が多く認められ、これら石核との区別は明確でない。

(田代 弘)

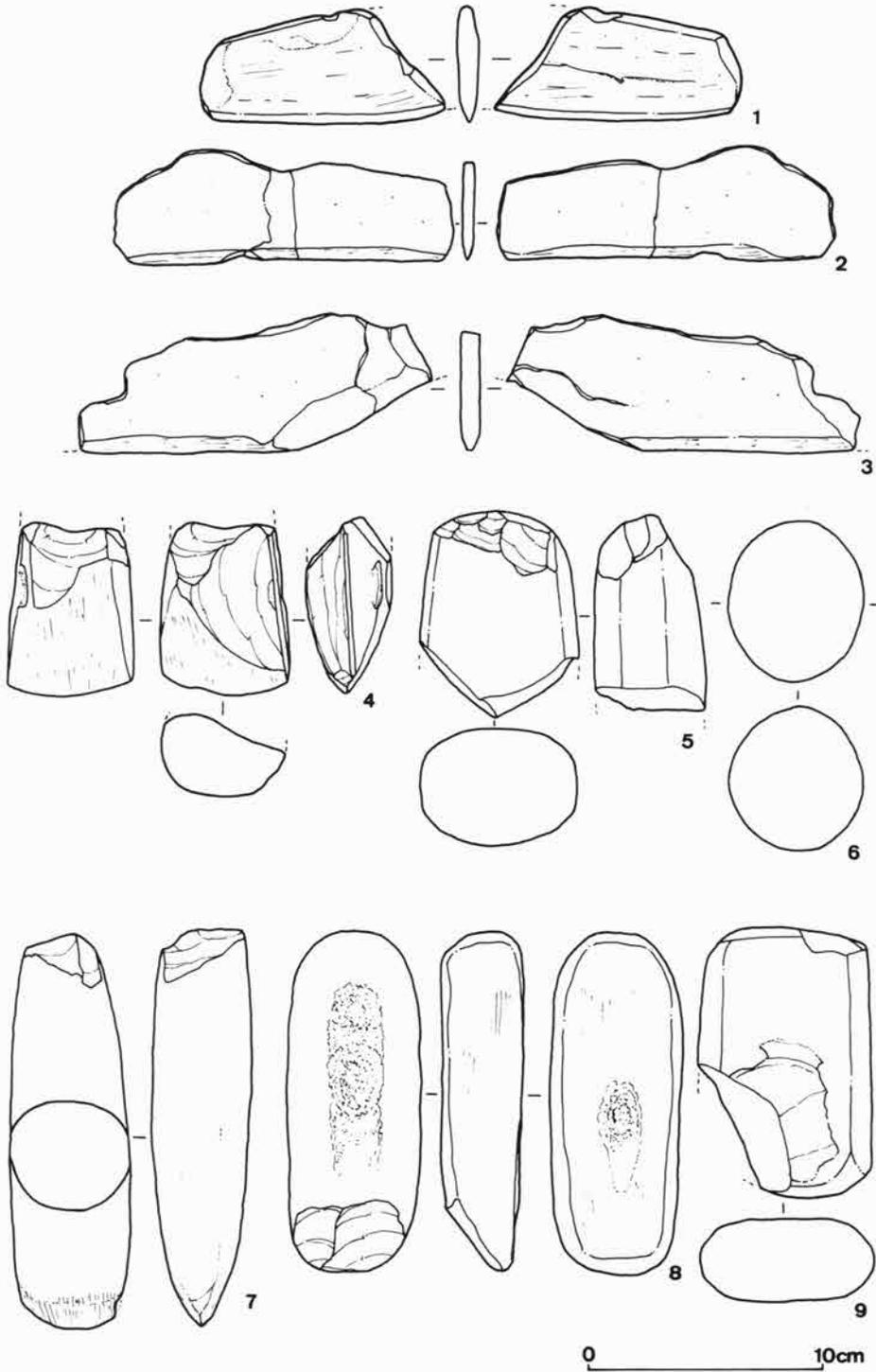
③その他の石器(第46図)

ア. 石庖丁状の磨製石製品(1～3) アプライトの剝片を研磨して両刃の刃器としたもので、石庖丁状の形態を呈する。紐孔はない。器面調整は粗く製作時の剝離痕を残すが、刃部は完成されており、使用に伴うとみられる擦痕がある。石庖丁の未製品との見方もあるが玉作り工房跡で同様の石器の出土例があり、新潟県下谷地遺跡ではこれを石鋸同様の擦切具と位置づけている。

イ. 磨製石斧及びその転用石器(4・5・7・9) 4・7は、太形蛤刃石斧である。7は完存、4は側縁に擦切施溝及び打割痕が認められる。石斧に擦切施溝分割手法が用いられた珍しい例である。5は、石斧の頭部である。敲打によって生じた剝離痕・潰れ痕があり、折損後あるいはハンマーとして転用されたものだろう。9も磨製石斧の転用石器である。下端に潰れ痕がある。

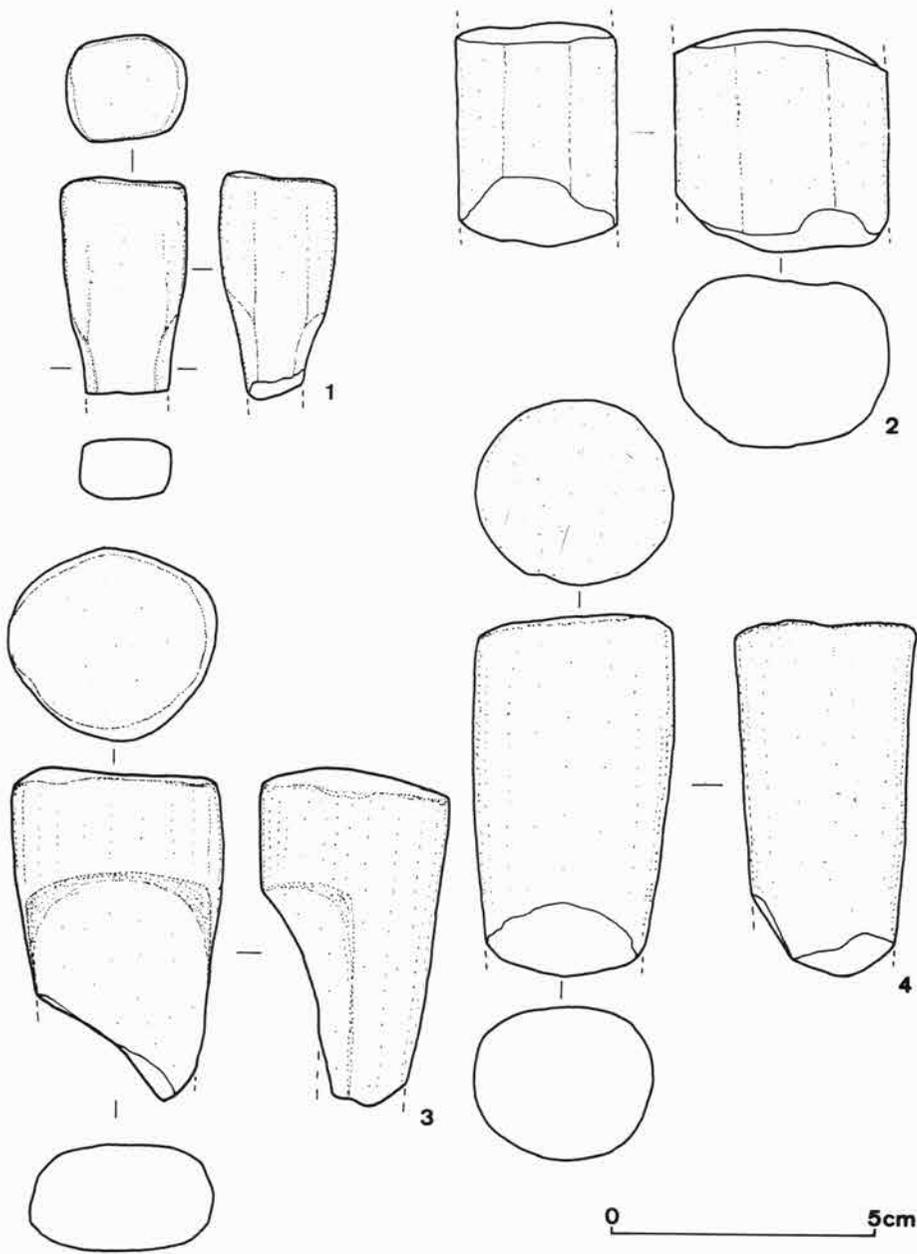
ウ. 球石(6) SH16の周壁溝から出土した花崗岩の円礫である。部分的に擦痕があり、擦石あるいはハンマーとして用いられたものだろうか。

エ. 凹み石(8) 扁平な転礫の両面にあばた状の加工痕がある。上面には粗い研磨痕が認められ、下端部には使用に伴うとみられる剝離痕がある。



第46図 その他の石器

1~3. 石庖丁状の磨製石製品 4・7. 磨製石斧 5・9. 磨製石斧転用石器 6. 球石 8. 凹み石



第47図 花崗岩製不明磨製石製品

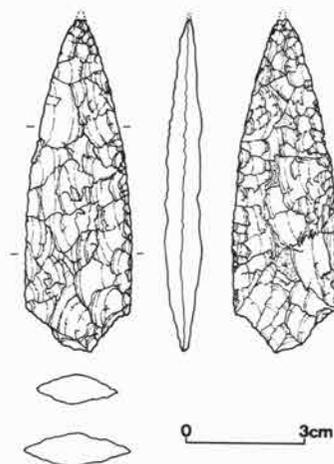
オ. 花崗岩製磨製石製品(第47図)

棒状を呈する花崗岩製の磨製石製品である。完存する例はない。1は、頭頂部が楕円形に作られ、次第に細くなって断面形が隅丸方形になる。2は、断面楕円形である。3は、円柱を抉るようにして器体を成形するものである。4は円柱状で、下方に向かうにした

がって細くなる。いずれも器表面には、ていねいな研磨痕があり、曲面を研磨する際の砥石の一種とも考えられる。

コ. 石鏃(第44図4・5・7)

4は凸基無茎(円茎)式、5は平基式の石鏃である。4は両面に大剝離面が残り、加工度が低い。5は、断面レンズ状を呈し、周縁から調整剝離を施している。いずれもガラス質安山岩製である。7は、水晶製円基式の石鏃である。調整に先立ち研磨調整がみられる。



第48図 有舌尖頭器実測図

サ. 有舌尖頭器(第48図)

S H03とS H05のほぼ中間の丘陵斜面(標高約37m)から出土した。表土除去後に崩落した地山を掘削中に単独で出土したものであって、ほかに同時期の遺物は出土していない。

この有舌尖頭器は、現存の長さ8.3cm・最大幅2.6cmほどであるが、先端部を少し欠損しており、完全な形にすればおそらく全長8.5cmほどになるものであろう。最大厚は約0.9cmを測る。器表面は全体に風化が進んでおり、剝離面の明確でない部分も多い。器体は全体にまるみを帯びた作りで、両側縁はゆるやかな弧を描く。逆刺はそれほど明確でないがしっかりと作られ、ゆるやかに舌部へと移行する。舌部は薄く、鋭い作りである。両面ともていねいな押圧剝離による剝離痕が全面を覆う。側縁は鋭く作られている。石材はサヌカイトである。縄文時代草創期のものである。

丹後地方での有舌尖頭器は、これまでに、久美浜町内で1点(出土地の詳細は不明)、峰山町途中ケ丘遺跡^(E43)で2点、舞鶴市小橋川河床^(E44)で1点と、3遺跡で計4点が出土している。当該資料をあわせると4遺跡5点となった。

(田代 弘)

4. 調査の成果と問題点

上述したように、今回の調査では弥生時代中期中頃の遺構群と奈良時代の鍛冶炉、それに伴う建物跡を検出した。前者には数多くの玉作り関連遺物が伴うことから、工房群と位置づけられる。

以下、主に、弥生時代の遺構・遺物について問題点を指摘し、まとめにかえたい。

①弥生時代の遺構・遺物

遺構について 奈具岡遺跡(第4次)は、奈具遺跡と奈具谷遺跡に隣接する北向きの丘陵斜面及び谷部に立地している。奈具遺跡は標高20m前後の丘陵に立地しているが、この丘陵と奈具岡遺跡との間には標高16~18mの狭長な沖積地があって、この沖積地上に奈具谷遺跡がある。奈具遺跡は、弥生時代中期中頃から後期(第Ⅲ~第Ⅴ様式)にかけて継続した集落遺跡⁽¹⁴⁵⁾であり、奈具谷遺跡は、中期中頃から後半(第Ⅲ~第Ⅳ様式)頃の水田経営に伴う水利施設と考えられる板列を伴う規模の大きな流路が確認されている(1992年度調査・1993年度概要報告刊行予定)。奈具岡遺跡はこの2遺跡を見下ろす位置にあり、距離的に極めて近い位置関係にある。また、後述するように奈具岡遺跡(第4次)は、弥生時代についてみれば中期中頃(第Ⅲ様式新相)に中心を置く継続期間の短い集落遺跡であって、奈具遺跡・奈具谷遺跡と存続期間を一部共有している。この三者は、相互に密接な関連をもって、成立し展開を遂げたものと推測される。

今回の調査では、弥生時代に属する遺構として竪穴式住居跡・住居跡と考えられるテラス状の遺構を合計22基、土坑3基等を検出した。先に記したように、これらの遺構の大半から玉作りに関する資料が数多く出土していることから、専門的な玉作り集団の居住地である可能性が考えられる。出土数はあまり多くないが、土器は第Ⅲ様式新相の時期を示しており、存続時期は限定されている。帰属時期・出土遺物の内容・遺跡の立地状況などからみて、奈具岡遺跡(第4次)は、奈具遺跡・奈具谷遺跡から派生した専門的集落とみなすことができよう。

奈具岡遺跡(第4次)では集落全体を調査し、遺跡のほぼ全容が明らかとなり、弥生時代集落における遺構の配置状況を把握することができた。この集落の場合、3本の尾根と2つの谷地形を利用して遺構が造られており、西側に位置する谷部に主要遺構が集まっている。この谷部では丘陵を大きく削って安定した平坦面を造り、ここに中心的な竪穴式住居跡(SH14・15・16)を配置する。そして、これを取り巻くように丘陵斜面を削ってテラス状の遺構を各所に配置し集落を形成している。

奈具岡遺跡では遺構が高所に位置しており、尾根と谷部の急斜面を削り出して造られているので、遺構を掘り込んだ高位側だけが残り低位側は流出しているものが多い。規模・

性格は異なるが、岡山県山陽町用木山遺跡^(注65)で検出された住居群の立地に類似している。このようなありかたを示す弥生時代の集落遺跡は、丹後地域では初見である。高所に立地する集落遺跡の例としては扇谷遺跡^(注47)(峰山町・第Ⅱ様式)が知られているが、尾根を取り巻く大規模な環濠が確認されたものの集落の実態は明らかでない。尾根稜上を中心に住居跡の探索が行われたが、結果は思わしくなかった。扇谷遺跡の環濠の内側には居住地としては不適と思われる急峻な斜面が認められるが、あるいはこの部分に今回確認したような遺構が潜在しているのかもしれない。

丹後地域では弥生時代集落全体が調査対象となった例は数少なく、今回検出された遺構は、当該地域での集落研究の上で貴重な事例となった。

土器について 検出遺構からは出土量の多少はあるが、ほとんどの遺構に弥生時代中期に属すると考えられる土器破片が伴っている。破片となったものばかりで、時期を明確に示し得る資料は少ないが、共通する特徴として第26図2～5に示すような口縁部が大きく外反する広口壺、13のようなやや内湾して立ち上がる甕の存在が挙げられる。広口壺の口縁部内面には2のような竹管文、頸部にはハケ原体木口による圧痕文凸帯、数条の断面三角形貼付凸帯を伴うものが散見する。断面三角形貼付凸帯はやや幅が広く、凸帯間を強くナデるものが多い。広口壺の口縁端部は面をなし、無文のものが多いが3のような刻み目文、竹管文もみられる。外面調整は、壺・甕ともにハケ目を基本とし、最終的にナデ調整するものが多い。内面調整は、ハケ目及びナデが主であり、下半の一部にヘラ削りを施すものもみられる。凹線文を伴う土器は包含層から1点出土したのみであり、遺構に伴うものには凹線文はみられない。図示し得る資料はわずかであるが、破片資料を検討した結果では、上述のように第Ⅲ様式に属する資料が主体をなしている。断面三角形貼付凸帯の形状や凸帯間の発達したナデ調整の存在などから、その後半に位置づけられると考えている。いずれにしても凹線文盛行期に先立つ資料であることは疑いない。

(田代 弘)

②水晶製玉作りについて

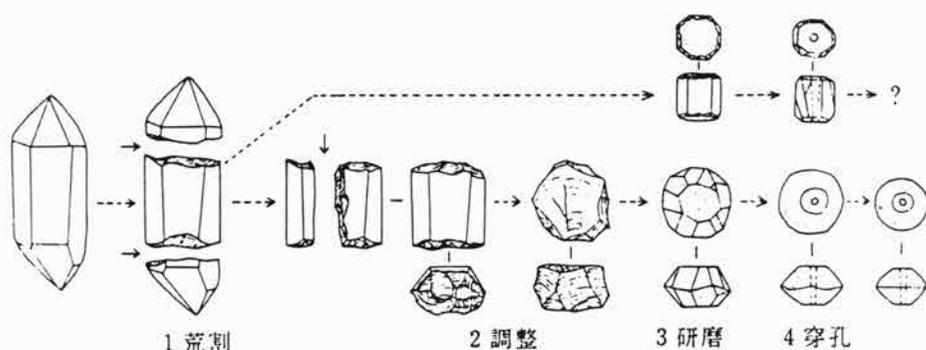
今回の調査では、碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産に関する資料群に伴って水晶製玉作り関連の資料が多数出土した。SH02・06で原石が出土したほか、SH01・02・04などで管玉状の未製品、SH14・15・23などから製作に伴って生じたとみられる水晶剝片が多数出土している。水晶製成品は完成品がないので仕上がりの形状は明らかでないが、貫孔直前の未製品(第28図1)からは太身の管玉が推測される。中期初頭に位置づけられている福岡県鞍手町高木遺跡D-7土坑出土^(注49)土玉(同形同大のものが2点出土している)と近似する法量を

有している。弥生時代の水晶製玉類は小玉・棗玉・有稜棗玉・算盤玉などの出土例が知られているが、本例のような管玉は初出である。

弥生時代の水晶製玉は、高木遺跡を最古例として20遺跡ほどで出土が確認されているが、ほとんどが墳墓から出土した成品である。確実な水晶製玉作り工場の例となると、鳥根県松江市矢田町平所遺跡^(JE50)・鳥取県大栄町西高江遺跡^(JE51)の2遺跡で確認されているだけで、奈良県岡遺跡が3例目になる。西高江遺跡は中期末から後期前葉、平所遺跡は後期末葉に位置づけられている。奈良岡遺跡は凹線文盛行以前の土器が出土しているので、工房としては最古例ということになる。他に工房の可能性のある遺跡としては、富山県上市町江上A遺跡^(JE52)(後期)がある。ここでは穿孔途中の角玉状未製品が出土している。

西高江遺跡・平所遺跡では水晶製玉生産と同時に碧玉製管玉生産を行っているが、どちらも水晶製玉生産を主体的に行い、碧玉製管玉生産はその一部を占めるという生産様式をとる点で共通する。奈良岡遺跡では主に碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産のかたわらで水晶玉生産が行われており、対照的なありかたを示している。いま仮に、前者を水晶製玉生産様式A型(專業型)、後者をB型(非專業型)と呼ぼう。両者の差異を時期差とみれば、中期中葉頃成立していたB型の発展系として中期末葉頃にA型が成立する過程を想定することになり、生産形態差とみれば、奈良岡遺跡の時期にもA型工房の存在を仮定することになる。水晶玉作り工房として確実視される遺構の検出例が3遺跡と極めて限られている現段階ではいずれともみなしがたい。

弥生時代の水晶製玉の出土例をみることにしよう。水晶製玉は中期初頭頃には出現している(高木遺跡)が、中期に属するものはこのほかに、長野県岡谷市天王垣遺跡^(JE53)(中期後半・小形算盤玉10)、京都府弥栄町奈良岡遺跡(中期中葉)、鳥取県大栄町西高江遺跡(中期末～後期初頭)を挙げ得る程度で、非常に少ない。前期にさかのぼる例は確認されていないようだ。ほかはいずれも後期に属するものである。後期の例には、長崎県対馬町塔ノ首2号石棺墓^(JE54)(後期・有稜棗玉1)、長崎県峰町木坂遺跡5号石棺墓^(JE55)(後期末・切子玉1)、長崎県石田町原の辻遺跡3次調査1号石棺墓^(JE56)(後期末・算盤玉1)、福岡県福岡市吉武樋渡遺跡1号木棺墓^(JE57)(後期・有稜棗玉2)、福岡県福岡市白佐原遺跡E15号石蓋土壙墓^(JE58)(後期末・棗玉8・算盤玉11・丸玉2)、福岡県若宮町汐井掛遺跡D115号土壙墓^(JE59)(後期・有稜棗玉10)、愛媛県今治市唐子台遺跡群14丘土壙墓^(JE60)(後期末・小玉2)、岡山県鴨方町和田遺跡B区1号土壙墓^(JE61)(後期末・有稜棗玉3)、岡山県倉敷市辻山田遺跡土壙墓10^(JE62)(後期～後期末・有稜棗玉3)、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡土坑出土資料^(JE63)(後期初頭・有稜棗玉1)、京都府大宮町三坂神社遺跡3号墓第10主体部^(JE64)(後期初頭・有稜棗玉16)、長野県塩尻市棧敷遺跡^(JE65)(後期・小玉15)、千葉県君津市大井戸八木遺跡土壙墓^(JE66)(後期・算盤玉1)などがある。後期の



第49図 水晶製玉製作工程図(「平所遺跡」より)

水晶製玉には有稜棗玉が多い。算盤玉は後期末に多くみられる。水晶製玉類の分布をみると、中心は北部九州にあり、愛媛県や岡山など瀬戸内西部地域・山陰・近畿にかけて散在する。中部地域・南関東にも一部及んでいる。

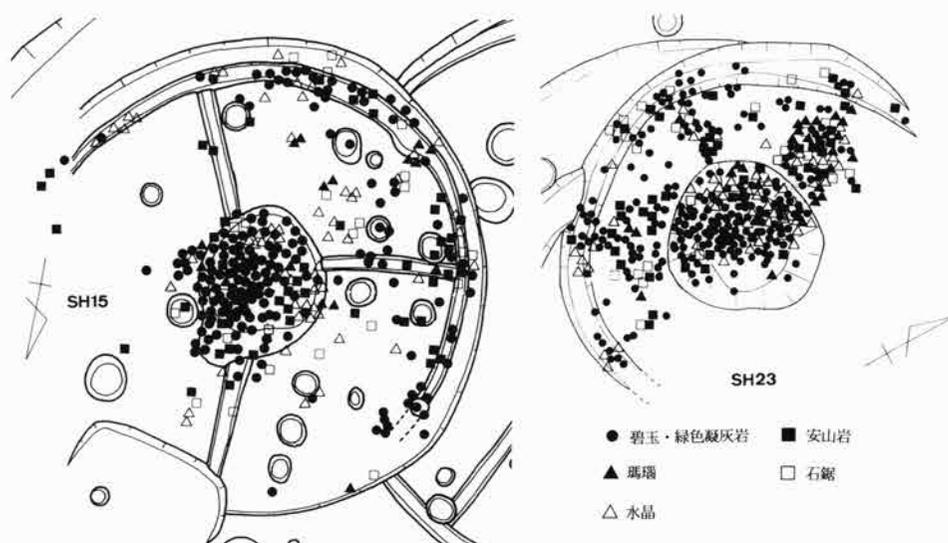
さて、水晶製玉の製作技術についてであるが、西高江遺跡・平所遺跡で良好な資料が出土している。西高江遺跡では成品・完成品に近い未製品の出土がなく、どのような水晶玉を製作していたのか明らかでないが、原石・未製品・剝片類・鉄製工具類など製作技法を示す多数の遺物が出土している。平所遺跡では主に算盤玉が作られていて、完成品に至る製作工程を示す資料が揃って出土している。この両遺跡での水晶加工は清水真一氏が指摘するように、初期段階においては同一の技法で行われている⁽¹¹⁶⁷⁾。まず、水晶原石を入手し、その菱面体と基部を打割・除去して六角柱とし、その後、六角柱の柱面を除去して結晶面をすべて取り除く。そして、目的とする玉の形状に応じて、打割整形するというものである(第49図)。奈良岡遺跡の水晶玉もこれと同じ手法で作られており、上述した水晶加工技術が中期後半までに成立していたことがわかる。

(田代 弘)

③碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産について

当遺跡では、長さ1cm以下・径3mm前後の管玉を主に製作しており、大形品は未製品も含めて2点だけである。管玉の製作工程は6工程に分けられるが、第2工程で軟質素材(緑色凝灰岩)と硬質素材(碧玉)とで差異が認められる。製作工程と関連資料は遺物の項で記したとおりであるが、簡単にまとめると以下のようなものである(第51図)。

第1工程で原石から石核を作る。第2工程では石核を分割して目的とする角柱体を作る。軟質素材(緑色凝灰岩)と硬質素材(碧玉)ではこの工程で内容を異にしている。手法Iは軟質素材(緑色凝灰岩)を対象とするもので、石核を擦切施溝分割して板状剝片を剝取し、研



第50図 SH15・23玉作り関連遺物分布図

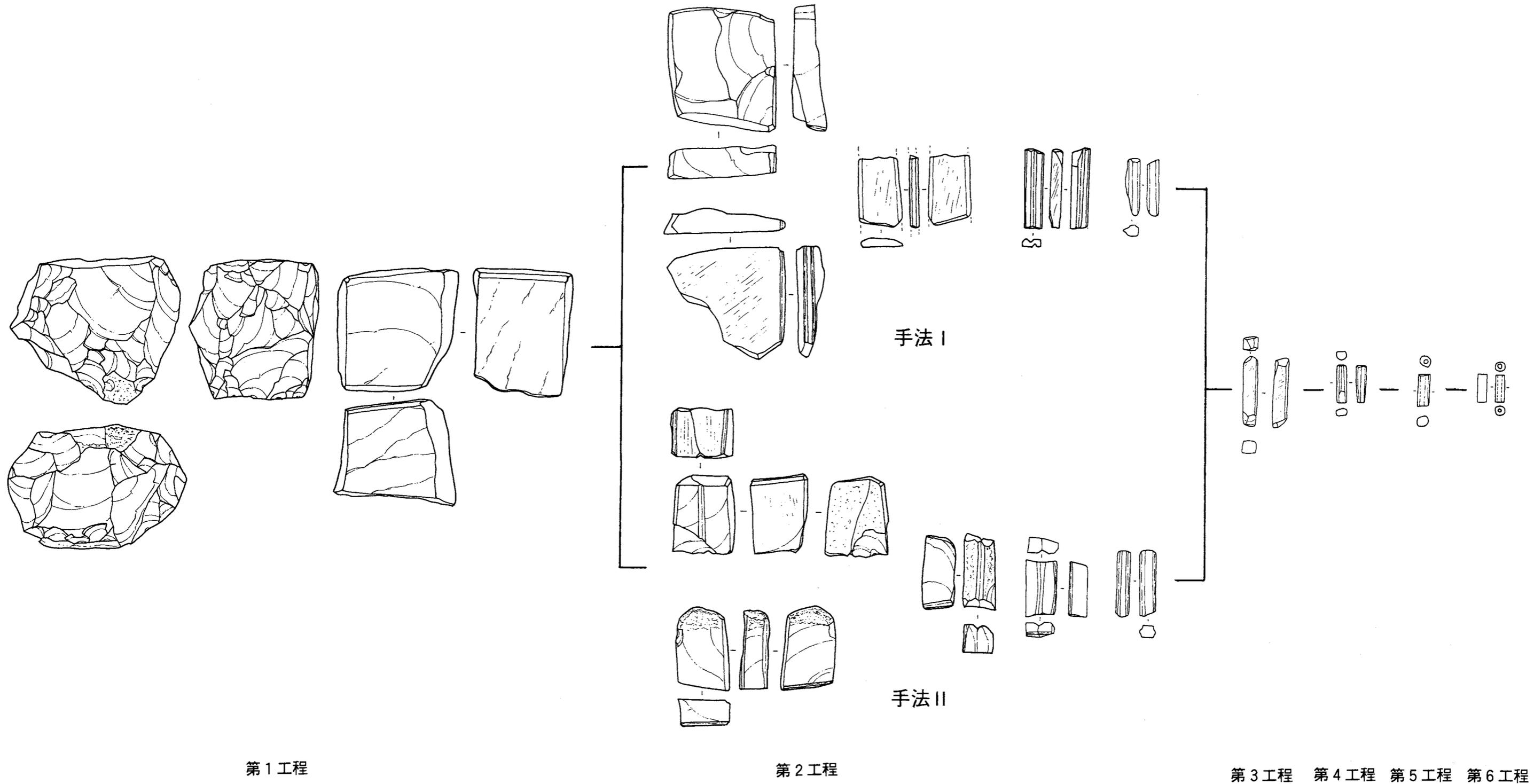
磨調整・分割を繰り返して目的とする厚さ(管玉直径)に近づけ、擦切施溝分割により連続して角柱体を取る。同一剥片から規格品を量産するのに適した手法である。手法Ⅱは硬質素材(碧玉)を対象とする手法で、擦切施溝分割によって二分の一、四分の一と分割して直方体を作成する手法である。手法Ⅰにみるような薄い板状剥片の薄片を介しないのが特徴である。分割に先立って研磨を行うが、研磨によって手法Ⅰのように素材を大きく変形することはない。第3工程は、前工程で得られた角柱体を矯正して正四角柱体に整える。第4工程で多角柱体とし、第5工程で貫孔する。第6工程で器面を整え完成品とする。

以上の製作工程は、素材に対し擦切施溝分割と研磨を繰り返して四角柱状の未製品を得ることを基本としている。押圧剥離は硬質素材のものに一部みられるが、調整技法として部分的に行われる程度で、器体整形の上での主要な技法とはなっていない。当遺跡における碧玉・緑色凝灰岩製管玉製作技法は、いわゆる大中の湖技法(1198)に属すると考えられる。

手法Ⅰ・Ⅱによる未製品は同一遺構に共存しており、時期差は認められない。素材の硬度に応じた手法であろう。

奈具岡遺跡の発見により、丹後地域における碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産に関する遺物が確認された遺跡は表に示すとおり、11遺跡目となる。

(田代 弘)



第51図 碧玉・綠色凝灰岩製管玉製作工程図

付表3 丹後地方玉作り関係遺物出土遺跡一覧表

遺跡名称	所在地	出土状況	時期	備考	文献
1 函石浜遺跡	久美浜町葛野箱石	表採		緑色凝灰岩製管玉未製品・原石・瑪瑙剝片	1~3 17
2 奈具遺跡	弥栄町黒部奈具	包含層・表採	Ⅲ新~Ⅳ	緑色凝灰岩原石・剝片等	4・17
3 奈具岡遺跡	弥栄町溝谷	住居跡	Ⅲ新	碧玉・緑色凝灰岩製管玉・未製品・角柱体・原石・水晶管玉未製品・剝片・原石・石鋸・砥石など	本報告 所載
4 奈具谷遺跡	弥栄町溝谷	溝	Ⅲ新~Ⅳ	碧玉・緑色凝灰岩製管玉・未製品・石鋸など	整理中
5 途中ヶ丘遺跡	峰山町長岡・新治	包含層	I~V	碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品・砥石・石鋸	5~7 17
6 扇谷遺跡	峰山町字杉谷・丹波・荒山	溝	I新~Ⅱ	碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品・砥石・石鋸	8~10 17
7 寺岡遺跡	野田川町字石川小字寺岡	包含層		緑色凝灰岩原石・剝片・砥石	11
8 谷内遺跡	大宮町谷内	土坑	V末	緑色凝灰岩製管玉未製品	12
9 須代遺跡	加悦町字明石小字池田	住居跡壁溝	Ⅳ	緑色凝灰岩原石・剝片	13
10 志高遺跡	舞鶴市志高	土坑・包含層 住居跡・溝	Ⅲ新~Ⅳ	碧玉・緑色凝灰岩原石・未製品・石鋸	14~16
11 桑飼上遺跡	舞鶴市桑飼上	包含層	Ⅳか?	碧玉・緑色凝灰岩原石・剝片・角柱体・石鋸	整理中
12 宮村遺跡	宮津市宮村	包含層	か?	碧玉製未製品(角柱体) 緑色凝灰岩原石	18

丹後地域弥生時代玉作り関係遺跡文献

- 1 梅原末治「湊村函石濱石器時代ノ遺蹟」(『京都府史蹟勝地調査會報告』2 京都府) 1922
- 2 梅原末治「湊村函石濱石器時代遺蹟(補遺)」(『京都府史蹟勝地調査會報告』3 京都府) 1924
- 3 松本 勇・直良信夫「丹後函石浜遺跡の査報」(『考古学雑誌』第19卷11号 日本考古学会) 1929
- 4 『奈具遺跡発掘調査報告書』弥栄町教育委員会 1972
- 5 『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1977
- 6 『京都府峰山町新治地区圃場整備に伴う途中ヶ丘遺跡発掘調査概報』峰山町教育委員会 1978
- 7 『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』峰山町教育委員会 1981
- 8 『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1975
- 9 『扇谷遺跡発掘調査概報』峰山町教育委員会 1983
- 10 『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1988
- 11 『寺岡遺跡』野田川町教育委員会 1988
- 12 細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 13 『須代遺跡Ⅰ』加悦町教育委員会 1988
- 14 『志高遺跡-昭和56年度花ノ木・スドロ菰下地区および久田美地区の調査概要』舞鶴市教育委員会 1982
- 15 『志高遺跡-昭和57年度カキ安地区の調査-』舞鶴市教育委員会 1983
- 16 『志高遺跡Ⅱ-弥生土器の概要-』舞鶴市教育委員会 1986
- 17 釋 龍雄「丹後地方玉造りの消長」(『歴史公論』第9卷3号) 1983
- 18 『宮村遺跡発掘調査概要』宮津市教育委員会 1988

④石針について

石針は整った円柱形の磨製石製品で、径1～2mm前後の細いものが多く、安山岩製、玉髓・瑪瑙製のものがみられる。端部の一端あるいは両端に使用痕とみられる磨耗痕跡を有する資料がみられることから、錐としての機能が推定されている。石針は、佐渡の弥生時代玉作り遺跡から玉の未製品や工具類とともに多数検出され、玉生産にかかわる工具の一つと推定された。これ以降、新潟県・石川県・福井県などの玉作り遺跡で確認されるようになり、近年では滋賀県・京都府・兵庫県など近畿圏でも検出されるようになった。

石針の分布と時期 佐渡の玉作りは竹の花式(櫛描き文の佐渡島への波及期・中期中頃)に始まり(平田遺跡)、石針もこの時期以降にみられる。後期の遺跡では新穂遺跡が著名であり、小谷地遺跡・桂林遺跡などでも盛んに玉が作られ、これに石針が伴出している。新潟では柏崎市下谷地遺跡で下谷地Ⅰ・Ⅱ式(中期中頃)の土器に伴って石針及び未製品が多数出土している。下谷地Ⅰ・Ⅱ式は、千曲川流域の栗林式Ⅰ・Ⅱ式に対応することが土器の供伴関係の上で確かめられており、おおむね畿内第Ⅲ様式新段階並行土器群と位置づけられている。石川県下安原海岸遺跡では中期中頃から後期にかけての包含層から碧玉製管玉未製品などとともに石針が検出され、野本遺跡では石針未製品とみられる角柱体が戸水B式土器(畿内第Ⅳ様式並行期)・石鋸・碧玉製管玉未製品などとともに出土している。福井県三国町加戸下屋敷遺跡では畿内第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階に並行するとみられる時期の玉作り工房が確認されており、石針及び未製品が多数検出された。福井県敦賀市吉河遺跡は第Ⅱ様式～Ⅳ様式の包含層から石針とその未製品が出土している。滋賀県野洲町市三宅東遺跡の玉作り工房でも石針とその未製品が確認されている。この工房は畿内第Ⅱ様式に属する。兵庫県豊岡市女代神社南遺跡では第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式頃の土坑から碧玉製管玉未製品・石鋸などに伴って石針と未製品が出土している。奈良県橿原市三宅東遺跡は前述したように第Ⅲ様式新段階頃に位置づけられるものである。

石針は、管見によるかぎり、琵琶湖南岸に位置する滋賀県野洲町市三宅東遺跡を例外として、新潟県佐渡島・柏崎市下谷地遺跡あたりを北限とし兵庫県豊岡市女代神社南遺跡を南限とした日本海沿岸部の玉作り遺跡において検出されている。時期は、滋賀県野洲町市三宅東遺跡出土石針が第Ⅱ様式に属し、福井県三国町加戸下屋敷遺跡が第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古相に属することが確実視される。石針の本場である佐渡島・新潟などは中期中頃以降に出現してその後盛行するようであり、現在のところ、石針は滋賀・福井県などが一時期早く出現した可能性を指摘することができる。なお、岡山県総社市南溝手遺跡(前期前半)や鳥取県長瀬高浜遺跡(前期中頃)でブレイド状の剝片の一端を加工して錐としたものが確認されているが、これらは打製の剝片石器であり、いわゆる石針とは違う。

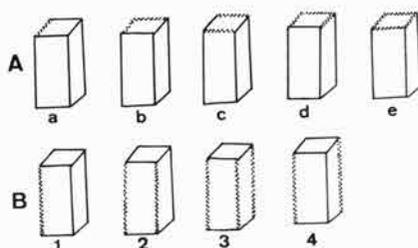
石針の製作技法 次に、当遺跡の石針の製作技法について、豊富な出土資料に基づいた製作工程復原がなされている新潟県下谷地遺跡と比較してみよう。下谷地遺跡の石針関連資料は、畿内第Ⅲ様式新段階に並行する可能性が指摘される土器群に伴うものであり、奈良岡遺跡に近い時期の資料群といえる。

この遺跡の碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産はいわゆる新穂技法によるものであるが、板状剥片を擦切施溝分割して角柱体を作成する方法として二つの手法が確認されている。一つは縦長に剥離するタイプ(A)、もう一つは横長に剥離するタイプ(B)である。Aは板状剥片を縦長に置き、剥片上端を主軸に直交して擦切施溝分割するものである。Bは主剥離面である広い面を上にして擦切施溝分割するものである。B系が主体を占めるが、A系も定量的に存在することが指摘されている。A・Bいずれかの手法によって得られた角柱体はその後、押圧剥離工程を経て研磨され、成品として仕上げられる。

一方、石針角柱体をみると、「すべての頭部に擦切溝を残し、側辺部に残すものはわずかで、しかもみな縦長に剥離されて」おり、すべてA系の手法によるものであることが確認されている。A手法は石針角柱体作出において固有のものであることがわかる。

奈良岡遺跡の石針角柱体は、B系がわずかにあるものの、大半がA系に属しており、下谷地遺跡と同じありかたを示している。奈良岡遺跡の管玉生産に伴う板状剥片分割手法はB系に限られているから、両者の角柱体作出法は際立った違いをみせている。

ところで、石針角柱体のその後の調整についてであるが、下谷地遺跡では押圧剥離工程を経て研磨工程に進んでおり、管玉と同じく新穂技法に包括される工程で仕上げられている。当遺跡でも基本的に押圧剥離工程へ進むと考えられるが、下谷地遺跡にみるような全面を剥離する資料は数少なく、対向する二辺を剥離調整するものが多い見受けられる。剥離は限定的であり、剥離によって角柱体を大きく変形するものは稀である点で両者に違い

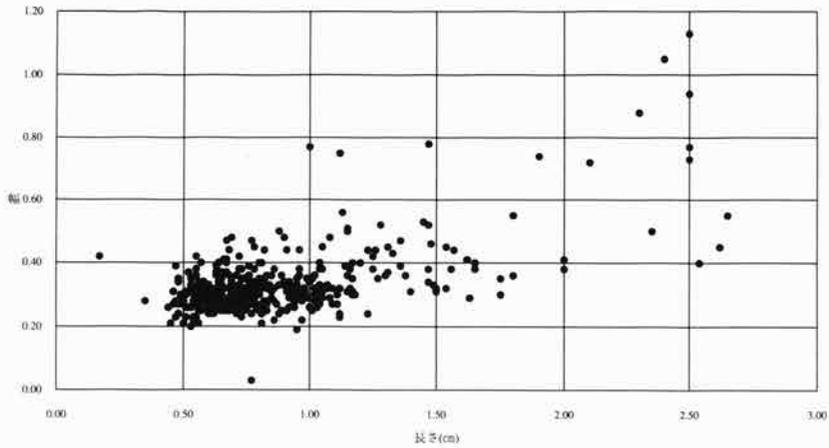


第52図 角柱体施溝部位模式図
破線は、擦切部位
「下谷地遺跡」による。

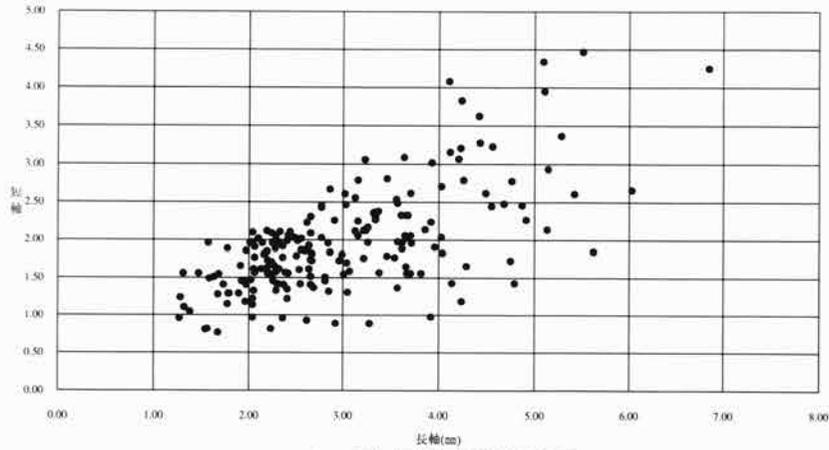
付表4 SH23出土石針角柱体及び碧玉・緑色凝灰岩擦切施溝部位別計測表

		安山岩	瑪瑙	碧玉・ 緑色凝灰岩
A	a	82	42	0
	b	29	36	0
	c	47	15	0
	d	26	39	0
	e	8	20	0
B	1	2	0	101
	2	4	0	51
	3	1	0	14
	4	0	0	9
総数		199	152	175

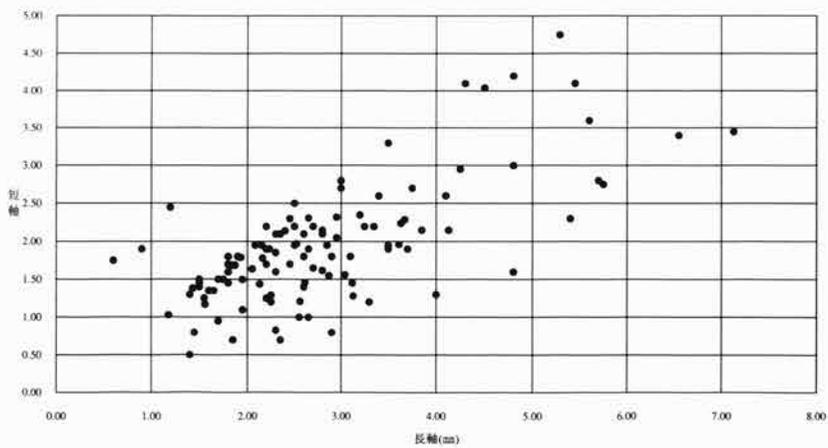
付表5 各種玉類法量表



奈良岡遺跡出土碧玉・綠色凝灰岩角柱体法量表



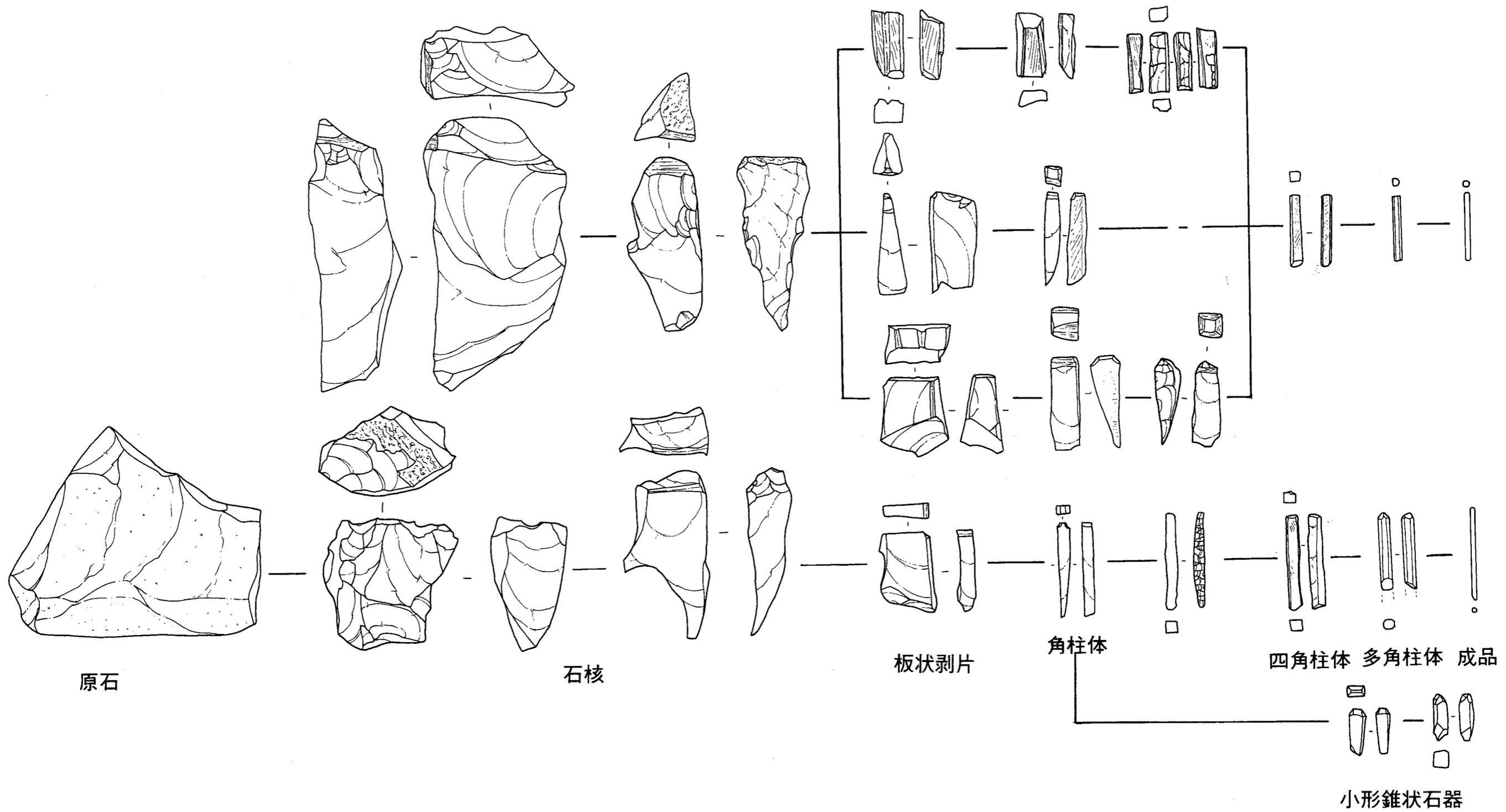
ガラス質安山岩製石針頭頂部法量表



瑪瑙製石針頭頂部法量表

安山岩製

瑪瑙製



第53圖 石針製作工程圖

が認められる。この違いは、作出した角柱体、つまり板状剥片の形状の違いに起因するものらしい。当遺跡の角柱体には頭部が2mm前後の正四角柱を呈するものがみられ、長辺が3~4mmのものでも短辺は2mm前後と扁平につくられた角柱体の存在が目立っている。瑪瑙製の資料中には一辺が1mm以下の正四角柱もある。これらの石核とみられる2mm前後の板状剥片もいくつか出土している。板状剥片を薄く作ることによって石針直径により近い角柱体を得る工夫がなされている。これは押圧剥離工程を必要最小限にとどめる配慮ともうけとれる。下谷地遺跡の角柱体は当遺跡出土資料に比べて大形のもが目立つようだが、押圧剥離を前提とした結果であろう。

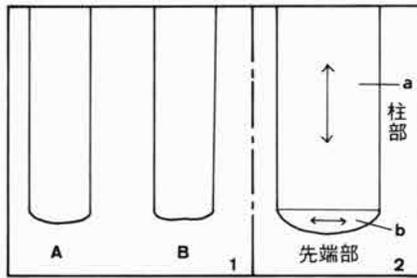
下谷地遺跡と奈具岡遺跡は、新穂技法と大中の湖技法という異なる管玉生産様式の分布圏下にあるが、上でみたように石針に関してはほぼ同一の手法によって製作されていることが確認⁽¹⁸⁵⁾できる。

石針は基本的に押圧剥離工程を介在しており、新穂技法に包括される技法とみなしてよい。したがって、管玉生産技法と密接な関係が認められる下谷地遺跡においては、石針はその技術的延長上に位置するものであり、生産様式の一部をなすものと理解できる。これに対して、押圧剥離工程をもたない大中の湖技法を主とする奈具岡遺跡では石針と管玉製作との間の技術的隔たりは明らかであり、生産の場において系統を異にする2つの技術が共存していたことになる。

石針の機能については異論があり現状では決着をみないが、使用痕の観察や石針径と管玉孔径の検討などから、玉の貫孔に関わる重要な工具のひとつであるとの認識では一致している。石針は先に例をあげたような玉作り遺跡から出土するが、微細なこともあって検出事例はあまり多くない。石針の分布や出現時期・地域性など明らかでないことが多く、資料の蓄積が期待される。

石針の先端部にみる使用痕 出土石針先端部には、使用に伴って生じたと思われる磨耗痕が観察できるものがあり、2つの形態が認められる(第54図1)。ひとつは、球面状をなすタイプ(1-A)、もうひとつはAの中央部が凹むタイプ(1-B)である。安山岩製石針ではA・B両タイプがあり、瑪瑙製はAタイプのみである。

実体顕微鏡を用いて細部を観察してみると、石針の柱部には主軸に直交あるいは斜行する擦痕、先端部には回転する擦痕が認められ(第54図2・図版第36-3~6)、回転する擦痕が柱部に及ぶ例は確認できない。柱部の擦痕は上端まで及んでおり、未製品(多角柱体)にみる製作時の研磨痕(図版第36-1・2)と同様の形状を示している。先端部の回転擦痕はこれに直交するものであり、明らかに性格を異にするものである。柱部の擦痕は製作時の研磨痕、先端部の回転擦痕は使用痕ということになろう。



第54図 石針先端部模式図

1. 先端部の形態
2. 擦痕模式図

この観察が正しいとすれば、当遺跡出土石針は、対象物に対して先端部のみが接触・磨耗するような使われ方をした石製品ということになる。

新潟県下谷地遺跡、福井県加戸下屋敷遺跡の報告では、顕微鏡による石針先端部の使用痕観察の結果、先端部に回転研磨痕が認められることや磨耗状況・管玉径と石針径が一致することなどから、石針が錐として主体的役割を担っていた可能性を考えている。加戸下

屋敷遺跡ではこれを石針としてではなく玉錐と呼んでいる。一方、この意見に対して、慎重な意見がある。

寺村光晴氏は、管玉の穿孔においては鉄錐が主な役割を果たしていたと推定しておられる^(註86)。石針については、完成品の先端付近の柱面に、製作時のものとみられる縦あるいは斜めの研磨痕を残すものが多く、使用痕とみられる回転研磨痕が柱面に及ばず先端面のみ限定されていることが多いこと、製作実験の結果などから、予備穿孔具あるいは穿孔後の孔の補正など穿孔に関わる補助的工具としての可能性を指摘しつつも、玉錐と名付けるほどの役割はなかったのではないかとされている。貫孔に際しては錐プレを考慮する必要があり、柱部にも先端部同様の主軸に直交する顕著な擦痕が生じる可能性が高いからである。また、石針先端部のみの推進力での貫孔は困難であるという^(註87)。

奈具岡遺跡出土石針の観察結果は寺村光晴氏の意見に沿うところが多く、石針という学史的名称を尊重したい。

なお、兵庫県女代神社南遺跡出土石針では、先端部がこけし状に磨耗し、柱部にも顕著な回転研磨痕を持つ例が確認されている^(註88)。石針を玉錐として位置づけるためにはこのような資料の蓄積を待つ必要があろう。

(田代 弘)

⑤鍛冶炉について

S B01のはば中央で製鉄炉を1基検出している。出土鉄滓の分析結果から、鍛冶炉であるとの結論を得ている(大澤正己氏のご教示による)。周辺から8世紀初頭頃の須恵器が出土しており操業時期もこの頃と考えられる。奈具谷遺跡からは精練滓がまとまって出土しており、付近に製鉄炉の存在が推定される。奈具岡遺跡のこの鍛冶炉は奈具谷遺跡の製鉄

炉と関連するものであろう。資料の分析結果及び位置づけ等については奈良谷遺跡の調査概要報告で詳述したい。

(田代 弘)

⑥遺跡周辺の水晶・玉髓・緑色凝灰岩の産状について

当遺跡では、先に報告したように弥生時代中期中～後半期(第Ⅲ～Ⅳ様式)の玉生産工房群を確認した。玉には碧玉・緑色凝灰岩製と水晶製管玉があり、玉類の未製品・剝片のほか各種の石製工具類も数多く出土している。石製工具類には施溝分割に用いる石鋸・研磨具として用いられた砥石・貫孔具とみられる石針・敲打具とみられる礫などがある。工具には各種の石材がみられるが、目的に応じて石材が選択されている。玉鋸は紅簾片岩あるいは絹雲母片岩など結晶片岩系石材であり、石針はガラス質安山岩・玉髓の二種、砥石は花崗岩・アプライト・砂岩・粘板岩等が各工程によって使い分けられている。このように機能・形態と石材に強い結びつきが認められる。

これらの石材は、紅簾片岩・結晶片岩など徳島県・岐阜県などといった遠隔地に産出地を求めなければならないものや、ガラス質安山岩や碧玉のように科学分析をまって産出地を確定する必要のあるものなどがあるが、水晶や緑色凝灰岩、玉髓、花崗岩、アプライトなど丹後半島内、それも遺跡の付近に分布することが知られているものもある。

石器用材は、地元で産出するものを利用する場合と、地元で産出しないので交易などによって遠隔地に求める場合、地元で産出するにもかかわらず優れた素材を遠隔地に求める場合などさまざまである。特に、玉生産という専門性の高い生産においては複雑である。地元で出土品と類似する石材があるからといってそれをを用いたと断言することはできない。すべて搬入石材である可能性があるからである。断定するためには地質学的検討や蛍光X線を用いた自然科学的分析など緻密な作業が要求される。

しかし、遺跡で用いられている石材と同質あるいは類似する石材が、その遺跡周辺に産するものであるかないか、産する場合、その産状がどのようなものであるか確認しておくことは必要なことである。分析データとの比較資料となり得るし、比較することによって考察を深めることにもなる。それに、産地推定を目的とする科学分析では、ガラス質安山岩や碧玉の一部を対象とするには効果的だが、水晶や玉髓のような純度の高い珪酸鋁物体や緑色凝灰岩のような堆積岩には不向きであるという^(注80)。

各種石材のうち玉の原材料である緑色凝灰岩・水晶、石針の材料となる玉髓、安山岩について、産地及び産状を確認する機会があったので、報告する。

ア. 緑色凝灰岩(グリーン・タフ)

緑色凝灰岩は第三紀に噴出した安山岩質の火山灰が堆積・凝固し緑色化作用をうけたものである。丹後半島は北海道南部から山口県西部におよぶグリーン・タフ地域の一角を占めており、この地域でも日本海沿岸部を中心に緑色凝灰岩の分布がみられる。丹後町から久美浜町にかけての海岸には発達した海食崖がみられ、このなかに緑色凝灰岩の露頭が広範にみられる。多くは軟質でもろいが、漂石となったものには緻密で硬いものがある。

良質な緑色凝灰岩を産出する露頭は網野町小浜で確認できた。奈具岡遺跡から北西に10kmほど行くと網野町の八丁浜の北東端に出る。ここが小浜である。波打ち際に沿って北東に進むと緑色凝灰岩の露頭のひとつが観察できる。軟質の凝灰岩のなかにところどころ溶結した部分があり、硬質で緻密な緑色凝灰岩が得られる。さらに進むと、離湖から流れ出る水路があり、これを越えると砂浜が終わって、「犬もどし」と呼ばれる急峻な海食崖にでる。潮が引くのをまって回りこむと小さな砂浜があり、ここに硬質の緑色凝灰岩を産する露頭がある。露頭は崖面ではなく、足元にあり、そのほとんどは海中に没している。崖面は暗灰色の凝灰岩であり、良質の部分はこの下になっている。引き潮のころにゆけばあちこちに美しい緑色の岩塊が水中から顔をのぞかせているのを見ることができ、露頭から剝落したものや漂石となった緑色凝灰岩が採取できる。ここから琴引浜にかけての海岸部に緑色凝灰岩の露頭が点在しており、良質な石材を得ることができる。このなかには溶結して碧玉質となったものもみられる。この緑色凝灰岩と奈具岡遺跡出土緑色凝灰岩資料を比較してみると、密度は後者が勝っているが、硬度・色調では前者が優れている。肉眼でみるかぎり、両者の間に違いが認められ、ここから奈具岡遺跡に搬入されたとは言いがたいが、良質なものであり、玉材産出地のひとつの候補地として指摘しておきたい。

奈具岡遺跡の近辺でも、弥栄町等楽寺や吉沢などで緑色凝灰岩が転石として分布している。これらは軟質で色調も悪く玉材としては適さないが、付近に露頭が潜在する可能性を示すものとして注意される。

イ. 水晶

水晶は珪酸鋁物である石英の結晶体で、錐状の面(菱面体)と六角柱状を呈する直立の面(柱面)からなり、火成岩にともなうペグマタイトに数多く認められる。

丹後地域では、峰山町大路・長岡・大滝、大宮町河辺・口大野・谷内・森本・三重、岩滝町男山など、数多くのペグマタイトが知られている。これらのペグマタイトは花崗岩中に生成しており、各種の鋁物をふくんでいる。大宮町河辺のペグマタイトを例に挙げると黒雲母・曹長石・石英・白雲母・絹雲母・ザクロ石・黄鉄鋼・変種ジルコン・チェフキン石・モナズ石・チタン鉄鋼・電気石・河辺石などの鋁物が得られている。⁽¹¹⁹⁰⁾水晶はこうした

鉱物とともに多数産出し、比較的大形の結晶が得られている。煙水晶は茶～暗褐色を呈するもので、モナズ石など放射性物質を含む鉱物の影響で黒色化したものである。

これ以外では久美浜町甲山が水晶産出地として知られており、無色透明のものをはじめ煙水晶・草入り水晶などが採取されている。加悦町の野田川左岸山中にも水晶産地が知られている。奈具岡遺跡周辺では、弥栄町井辺・小田・船木でもかつては水晶が採取されたという。以上のように、水晶は丹後地域では比較的入手しやすい鉱物のひとつである。

発掘調査で検出した水晶には、無色透明なもの、薄茶色～褐色を呈する煙水晶とがあるが、峰山町大路・大宮町河辺・久美浜町甲山では両者が同一地点に共存することが確かめられている。^(註91)

峰山町大路・大宮町口大野のベグマタイトは露頭となっており、現在でも容易に観察でき、水晶の採取も可能である。大路のベグマタイトについて紹介しておこう。

大路のベグマタイト露頭は、峰山町鱒留大路地区に所在する。峰山町の市街地の南東約10km、竹野川の支流である鱒留川右岸にあり、この地域の最高峰磯砂山(標高661m)西麓にあたる。鱒留川に沿って久美浜町方面へ向かい、峰山町と久美浜町の境界となっている比治山峠の約1km手前で左折して鱒留川源流域へとさかのぼる。約1.5kmで大路の集落へ至り、これを過ぎると天の羽衣伝説で知られる乙姫神社があって、ここから500mほど上流へ行った左手の崖面に露頭がある。露頭は尾根を挟んで2か所認められる。ひとつは、平家落人を追討中の源氏の騎馬が山道のあまりの険しさに引き返したという『馬返し伝説』の案内板のある地点、もう一つはここから約200m上流地点である。この2つの露頭は尾根を挟んで相対する位置にあることから、同一のものと思われる。前者は幅2～3mと小規模で気をつけないと見落とすが、後者は幅5m前後・高さ約20mを測る規模の大きなものであり、採掘坑が残されているのですぐに確認できる。このベグマタイトは、花崗岩体の中に明確なレンズ状の構造をなして生成しており、石英が中核をなしている。石英の周囲には絹雲母・黒雲母・長石がとりまいており、石英の表面には大小の不規則な水晶が雲母に埋まるように存在する。石英は、白濁した不透明なものから透明なものまでさまざまであるが、概して良質であり、剥片を調整して良質な部分を取り出せば、水晶となんらかわるところがなく利用できるものも少なくない。遺跡出土資料中にも菱面体・柱面体をもたない不定形剥片が多くみられるが、こうした石英塊を利用したことも考えられよう。

なお、このベグマタイトからは煙水晶が産出する。見学時には良好なものは得られなかったが、微細な煙水晶と黒変した石英塊を得ている。

奈具岡遺跡で出土した水晶原石は、このようなベグマタイトから直接採取したものではないだろうか。

ウ. 玉髓

石針の素材として用いられている。玉髓は、石英の顕微鏡的結晶が集合して塊状になっているもので、玉髓のなかでも紅色のものや縞文様がある美しいものは瑪瑙と呼ばれる⁽¹⁹²⁾。火成岩中やその周辺層に見られ、熱水脈中の珪酸分が沈殿して生成されるものは縞状を呈している。久美浜町日光寺峠産のものは算盤球石と称する産状を呈するので名高い⁽¹⁹³⁾。

玉髓は、白濁した色調のものが多く、遺跡の報告書では紅色のものと対比して白瑪瑙と呼ぶことが多い。奈良岡遺跡では紅色のものが少量で、ほとんどは白濁した色調の玉髓である。両者の区別は主観的なものであるから、本概要報告では瑪瑙として一括した。

遺跡から出土している玉髓は、石核や剝片の礫面の状態からみて、亜角礫ないし亜円礫であり、転石を採取したものらしい。長さは5 cm以下の小さな礫が多いようだ。

遺跡周辺に玉髓があるかどうか、竹野川・溝谷川・宇川やその河口、丹後町・網野町の海岸などを探してみた。その結果、これらの河床に転石となって分布しており、海岸にも漂石として点在していることが確認できた。花崗岩地帯を流れる竹野川・溝谷川では長石や石英の砂に覆われてみつけにくい、宇川流域や網野町小浜などでは容易に採取できる。溝谷川上流の等楽寺付近や宇川流域は、安山岩地帯であり、河床をはじめ岩体のなかにも玉髓を数多く見いだすことができる。出土品にみるような亜角～亜円礫は宇川河口域や小浜でみられ、なかには紅色があったものもある。少し離れるが、兵庫県香住町の海岸にも岩体から遊離した良質な玉髓を産することが確認されている。

エ. ガラス質安山岩

丹後半島は白亜期に形成された花崗岩体が基盤となっており、金剛童子山、依遅尾山、太鼓山などの火山はこれを貫いた安山岩からなる。安山岩の噴出は第三紀初期に始まり、半島部を中心に発達し、広く分布している。丹後町徳光の安山岩露頭はこの一角をなすものであり、良質のガラス質安山岩を産することが報告されている⁽¹⁹⁴⁾。この露頭を訪れたが現地を確認することができなかった。しかし、芋野では輝石安山岩に属する安山岩露頭があり、漆黒色で緻密な安山岩を産することを知った。石針に用いられている安産岩には奈良県二上山産、香川県金山産とみられるもののほか、やや石質を異にするものがある。このような地元産安山岩も利用されているのではないだろうか(当センター中川調査員教示)。

遺跡出土石材について産地推定を目的とした分析はまだ行っていない。整理が一段落した時点で行う予定である。上記の成果と合わせて検討を深めていきたい。

(田代 弘)

5. むすび

今回の調査では、弥生時代中期中頃の玉作り工房群と奈良時代の掘立柱建物跡・鍛冶炉を確認した。いずれも専門的生産活動に伴う遺構であり、この場所が特殊な技術を持つ生産者集団の居住地であることが明らかになった。特に前者からは、数多くの未製品・工具類が出土しており、この時代の玉作り技法・系統を検討する上で重要な資料を提供した。

なお、今回の調査地点は、奈具岡遺跡と同一丘陵にあることから一連の遺跡と考えられ、第4次調査として調査が開始された。しかし、調査結果は第1～3次調査地点との関連は薄く、奈具岡遺跡第4次調査地点は眼下の奈具谷遺跡、対岸の奈具遺跡との結びつきが密接であったことが明らかとなった。

(田代 弘)

付表6 奈具岡遺跡弥生時代住居跡法量表

遺構名称	形態	規模 (m)			遺構名称	形態	規模 (m)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
S H01-1	テラス状	11.28	3.58	0.43	S H11	テラス状	13.00	1.78	0.61
S H01-2	テラス状	7.84	2.24	0.76	S H12	楕円形	3.20	2.50	
S H02	テラス状	16.70 以上	2.90	0.72	S H13	テラス状	7.54	2.46	0.44
S H03	テラス状	14.70	2.68	0.76	S H14	円形	5.86	4.24 以上	0.37
S H04	楕円形	6.94	6.04	0.52	S H15	円形	4.96	4.74	0.27
S H05	テラス状	12.10	2.90		S H16	方形	6.30	5.38	0.30
S H06	円形の テラス状	8.70	10.46	0.59	S H17	テラス状	13.30	2.78	0.55
S H07	テラス状	5.35	1.15		S H19	テラス状	7.70	2.90	
S H08	自然地形				S H20	テラス状	5.88	2.72	0.22
S H09	自然地形				S H21	円形	3.78	2.92 以上	0.55
S H10	テラス状	8.90	1.95		S H22	円形	6.24	3.96	0.20
					S H23	円形	3.96	2.90	0.16

付表7 奈具岡遺跡土坑法量表

遺構名称	形態	規模 (m)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
S K01	楕円形	3.5	3.0	0.4	弥生土器細片・碧玉角柱体・石鋸・水晶製ドリル・黒曜石剝片・安山岩製石針及び未製品・瑪瑙剝片	玉作り関連遺構
S K02	長楕円形	3.0	1.5	0.3	弥生土器細片・石鋸・黒曜石剝片・安山岩製石針及び未製品・瑪瑙剝片	玉作り関連遺構
S K03	楕円形	2.5	2.5	0.2	弥生土器細片・黒曜石剝片	
S K04	円形	1.7	1.7	0.4	炭・灰・焼土	円形の炭窯

付表8 奈具岡遺跡掘立柱建物跡一覧表

遺構名称	規模	梁間(1間; m)	桁行(1間; m)	備考
S B01	2間×4間	2間(2.1m)	4間(1.4m)	柱穴は円形
S B02	2間×3間	2間(2.4m)	3間(2.0m)	柱穴は隅丸方形

付表9 奈良岡遺跡水晶製玉作り関連遺物法量表

図番号	出土遺構	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
第28図 1	SH02	管玉状 未製品	水晶	2.2	1.6	1.6	11.54	円筒形。全面に研磨痕あり。 暗茶褐色。
2	SH04	未製品	水晶	1.6	1.1	0.9	3.48	方柱状。全面に研磨痕あり。
3	SH01	未製品	水晶	2.0	1.4	1.5	6.41	水晶結晶体を一部打割。結晶面 を残す。
4	SH06	未製品	水晶	1.7	1.3	1.3	5.60	水晶結晶体の基部・頂部を打割。 六角柱。
5	SH23	剝片	水晶	2.2	1.5	1.8	6.43	水晶結晶体の頂部。打割によ って剝取。
6	SH23	剝片	水晶	2.4	1.8	0.6	4.11	結晶面をとどめる。研磨痕あり。
7	SH23	剝片	水晶	3.0	2.8	0.5	4.81	結晶面をとどめる。
8	SH23	剝片	水晶	4.6	2.7	0.6	7.97	結晶面をとどめる。
9	SH04	剝片	水晶	2.8	2.3	0.5	3.05	結晶面をとどめる。
10	SH23	剝片	水晶	4.0	2.0	0.9	5.61	
11	SH06	水晶原石	水晶	2.2	1.6	1.5	5.90	基部を打割。
12	SH02	水晶原石	水晶	4.5	1.9	1.2	14.59	基部を打割。
13	SH02	水晶原石	水晶	4.0	2.6	2.2	22.61	基部を打割。暗茶褐色。
14	SH23	水晶原石	水晶	2.8	1.3	0.7	6.50	基部を打割。
15	SH03	剝片	水晶	3.2	1.9	0.8	12.50	結晶面をとどめる。
16	SH01	剝片	水晶	2.2	2.9	3.0	17.12	結晶の基部・上・下面に打割痕 あり。結晶面をとどめる。
17	SH17	剝片	水晶	2.4	3.8	2.6	23.40	結晶頂部。打割によって剝取。
18	SH02	水晶原石	水晶	6.0	5.5	4.8	170.70	基部を打割。暗茶褐色。

付表10 碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物法量表

図番号	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石材	重量 (g)	備考
第29図 1	S H23	2.5	3.5	1.8	硬	17.00	残核
2	S H19	2.7	2.6	2.3	硬	14.22	残核
3	S H06	3.7	2.4	1.7	硬	16.12	残核
4	S H15	6.5	4.4	1.7	硬	53.78	剝片
5	S H15	3.5	4.7	2.5	軟	52.90	残核
6	S H15	5.8	3.6	2.1	硬	56.28	剝片
7	S H16	5.2	5.9	4.4	硬	161.79	石核
第30図 8	S H23	3.5	3.7	2.5	軟	53.57	石核
9	S H01	4.3	4.3	3.4	軟	93.17	石核
第31図 10	S H07	3.5	2.5	1.1	軟	9.92	施溝痕あり
11	S H15	3.8	4.2	1.0	軟	26.00	板状剝片
12	S H23	4.8	4.3	2.2	軟	36.08	板状剝片
13	S H02	6.1	3.0	0.5	軟	12.03	板状剝片
14	S H23	5.9	2.9	0.8	軟	10.84	板状剝片
15	S H06	4.0	4.1	1.5	軟	29.09	板状剝片
16	S H23	2.7	2.2	0.6	軟	2.72	板状剝片
17	S H23	3.9	2.7	0.4	軟	2.77	板状剝片

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

18	S H23	4.0	4.1	0.9	軟	8.65	板状剝片
19	S H23	2.5	1.4	0.3	軟	1.06	板状剝片
20	S H23	1.0	1.1	0.3	軟	0.37	板状剝片
21	S H23	1.5	0.8	0.4	軟	0.33	板状剝片
22	S H10	2.8	2.2	0.4	軟	2.38	板状剝片
23	S H23	2.1	2.0	0.3	軟	1.16	板状剝片
24	S H23	2.4	2.1	0.3	軟	1.30	板状剝片
25	S H23	2.2	2.0	0.4	軟	1.31	板状剝片
第32図26	S H01	2.8	2.1	1.7	硬	17.32	接合資料
27	S H15	3.0	2.7	1.4	硬	12.47	接合資料
28	S H23	2.3	1.5	1.9	硬	6.40	板状剝片
29	S H23	2.6	2.4	1.7	硬	14.67	接合資料
30	S H01	2.9	1.8	0.9	硬	7.91	板状剝片
31	S H23	2.6	1.1	1.0	硬	5.63	接合資料
32	S H15	2.2	1.2	0.7	硬	2.93	角柱体
33	S H23	2.2	0.8	0.6	硬	1.45	角柱体
34	S H23	2.3	0.8	0.9	硬	3.45	角柱体
35	S H02	1.9	1.7	1.7	硬	4.02	角柱体
36	S H01	3.4	1.3	1.2	硬	9.06	角柱体
37	S H01	2.1	0.5	0.4	硬	0.71	角柱体
38	S H01	2.2	0.5	0.3	硬	0.65	角柱体
39	S H01	2.5	0.8	0.5	硬	1.61	角柱体
40	S H01	2.5	0.4	0.3	硬	0.72	角柱体
41	S H23	2.8	0.6	0.4	軟	0.52	分割途中の資料
第33図42	S H23(中)	0.6	0.6	0.4	硬	0.24	分割途中の資料
43	S H23	1.5	0.8	0.4	硬	0.75	接合資料
44	S H23	1.6	0.6	0.4	硬	0.70	接合資料
45	S H23	2.1	0.6	0.5	硬	0.98	接合資料
46	S H23	1.5	0.3	0.3	軟	0.12	角柱体
47	S H23(中)	1.7	0.4	0.3	硬	0.16	角柱体
48	S H23	1.6	0.4	0.3	硬	0.20	角柱体
49	S H23	1.3	0.3	0.4	硬	0.18	角柱体
50	S H23(中)	1.7	0.3	0.3	硬	0.19	角柱体
51	S H23(中)	1.6	0.3	0.3	硬	0.20	角柱体
52	S H23(中)	1.5	0.4	0.3	硬	0.26	角柱体
53	S H23(中)	1.4	0.6	0.4	硬	0.21	角柱体
54	S H23	1.4	0.6	0.3	硬	0.36	角柱体
55	S H23(中)	1.0	0.4	0.3	硬	0.15	角柱体
56	S H23(中)	0.8	0.4	0.3	硬	0.23	角柱体
57	S H23(中)	0.9	0.4	0.3	硬	0.18	角柱体
58	S H23(中)	1.3	0.5	0.2	硬	0.31	角柱体
59	S H23(中)	1.3	0.4	0.3	硬	0.30	角柱体
60	S H23(中)	1.0	0.3	0.2	硬	0.12	側辺に調整剝離あり
61	S H23(中)	0.8	0.4	0.4	硬	0.21	側辺に調整剝離あり
62	S H23(中)	0.9	0.4	0.3	硬	0.20	側辺に調整剝離あり
63	S H23(中)	1.2	0.4	0.3	硬	0.35	側辺に調整剝離あり
64	S H23(中)	1.2	0.4	0.3	硬	0.35	側辺に調整剝離あり

65	S H15	2.3	0.6	0.5	硬	1.04	側辺に調整剝離あり
66	S H15(中)	1.3	0.3	0.3	硬	0.44	四角柱体
67	S H23	2.6	1.2	1.0	硬	6.11	四角柱体
68	S H23	1.5	0.7	0.8	軟	0.80	太身の管玉
69	S H23	0.8	0.7	0.5	軟	0.26	角柱
第34図70	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.07	多角柱体
71	S H23	0.7	0.4	0.4	軟	0.11	多角柱体
72	S H23	1.1	0.3	0.3	軟	0.10	多角柱体
73	S H23(中)	0.9	0.3	0.3	軟	0.07	多角柱体
74	S H23(中)	1.1	0.3	0.3	軟	0.08	多角柱体
75	S H23	0.6	0.3	0.4	軟	0.06	多角柱体
76	S H23(中)	0.8	0.3	0.2	軟	0.05	多角柱体
77	S H23	0.8	0.3	0.3	軟	0.10	多角柱体
78	S H23	1.0	0.4	0.3	軟	0.10	多角柱体
79	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	軟	0.06	多角柱体
80	S H23(中)	0.8	0.3	0.4	軟	0.06	多角柱体
81	S H23(中)	1.0	0.3	0.2	軟	0.05	多角柱体
82	S H23	0.7	0.3	0.2	軟	0.06	多角柱体
83	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.06	多角柱体
84	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.06	多角柱体
85	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	軟	0.07	多角柱体
86	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.06	多角柱体
87	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	軟	0.06	多角柱体
88	S H23(中)	0.9	0.3	0.3	軟	0.08	多角柱体
89	S H23(中)	0.8	0.4	0.3	軟	0.06	多角柱体
90	S H23(中)	0.7	0.4	0.3	軟	0.07	多角柱体
91	S H23(中)	0.8	0.4	0.3	軟	0.08	多角柱体
92	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	軟	0.08	多角柱体
93	S H23(中)	1.1	0.3	0.3	軟	0.07	多角柱体
94	S H23	0.8	0.3	0.3	軟	0.09	多角柱体
95	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.07	多角柱体
96	S H23	1.0	0.3	0.3	硬	0.06	多角柱体
97	S H23	1.1	0.3	0.3	硬	0.06	多角柱体
98	S H15	1.0	0.3	0.2	硬	0.14	多角柱体
99	S H23	1.1	0.3	0.3	硬	0.14	多角柱体
100	S H23	0.8	0.3	0.3	硬	0.06	多角柱体
101	S H15	0.9	0.3	0.2	硬	0.08	多角柱体
102	S H23(中)	0.8	0.2	0.2	軟	0.05	多角柱体
103	S H23(中)	0.7	0.3	0.2	硬	0.06	円柱状
104	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	軟	0.09	円柱状
105	S H23(中)	0.5	0.2	0.2	軟	0.03	穿孔途中
106	S H23(中)	0.6	0.3	0.3	軟	0.04	穿孔途中
107	S H23	0.7	0.3	0.2	軟	0.06	穿孔途中
108	S H23	0.7	0.3	0.3	軟	0.05	穿孔途中
109	S H23(中)	0.8	0.3	0.3	硬	0.06	穿孔途中
110	S H23	0.5	0.3	0.2	軟	0.02	穿孔途中
111	S H23(中)	0.7	0.3	0.2	硬	0.04	穿孔途中

112	S H23(中)	0.7	0.3	0.3	軟	0.06	穿孔途中
113	S H23	0.6	0.3	0.3	軟	0.05	穿孔途中
114	S H23	0.6	0.3	0.2	硬	0.06	成品
115	S H23	0.7	0.2	0.2	硬	0.07	成品

付表11 奈具岡遺跡ガラス質安山岩製石針関連遺物法量表

図番号	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石材	重量 (g)	備考
第35図 1	S H23	4.70	2.20	1.20	ガラス質安山岩	17.10	石核。施溝分割痕あり。
2	S H23	2.90	1.10	0.90	〃	3.60	石核。施溝分割痕あり。
3	S H23中央土坑	1.50	1.00	0.70	〃	1.20	楔形石器状の板状剥片。
4	S H23	1.70	0.40	0.60	〃	0.60	板状石核。
5	S H23	1.60	0.60	0.70	〃	1.00	〃
6	S H23	1.40	1.00	0.70	〃	1.20	〃
7	S H23中央土坑	1.20	0.50	0.40	〃	0.40	施溝分割途中の剥片。
8	S H23中央土坑	1.10	0.50	0.40	〃	0.20	施溝分割された角柱体。
9	S H23	1.10	0.30	0.30	〃	0.15	四角柱。押圧剝離の研磨。
10	S H23	1.20	0.20	0.20	〃	0.07	四角柱。研磨あり。
11	S H23中央土坑	1.30	0.20	0.20	〃	0.06	四角柱。研磨後施溝分割。
12	S H23中央土坑	1.30	0.30	0.30	〃	0.10	〃 〃
13	S H23	1.20	0.30	0.30	〃	0.16	〃 〃
14	S H23	1.30	0.30	0.20	〃	0.14	〃 〃
15	S H23	1.60	0.30	0.30	〃	0.21	〃 〃
16	S H23中央土坑	1.60	0.25	0.25	〃	0.08	〃 〃
17	S H23	1.60	0.20	0.15	〃	0.08	四角柱。研磨あり。
18	S H23	1.00	0.18	0.20	〃	0.05	〃 〃
19	S H23	1.00	0.18	0.15	〃	0.05	〃 〃
20	S H15	0.80	0.20	0.20	〃	0.04	〃 〃
21	S H15	1.10	0.10	0.10	〃	0.03	〃 〃
22	S H15	0.90	0.20	0.20	〃	0.03	八角柱。 〃
23	S H23	1.00	0.15	0.15	〃	0.04	六角柱。 〃
24	S H15	0.90	0.20	0.20	〃	0.03	六角柱。 〃
25	S H15	1.10	0.11	0.11	〃	0.04	六角柱。 〃
26	S H23	0.90	0.10	0.10	〃	0.02	円柱状。 〃
27	S H15	1.20	0.10	0.10	〃	0.02	〃 〃
28	S H23	0.95	0.10	0.10	〃	0.02	〃 〃
29	S H23	1.20	0.10	0.10	〃	0.02	〃 〃
30	S H23	1.60	0.50	0.40	〃	0.50	楔形を呈する剥片。
31	S H23	1.00	0.50	0.20	〃	0.15	長方形板状の剥片。
32	S H23	1.30	0.60	0.30	〃	0.31	楔形を呈する剥片。
33	S H23	1.40	0.50	0.40	〃	0.25	楔形を呈する剥片。

付表12 奈良岡遺跡瑪瑙製石針関連遺物法量表

図番号	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石材	重量 (g)	備考	
第36図	1	SH03	4.2	3.6	2.3	瑪瑙	40.50	亜円礫。
	2	SH01	4.0	2.5	2.2	〃	26.30	亜円礫。
	3	SH21	2.4	2.1	1.7	〃	8.35	礫面あり。
	4	SH23中央土坑	2.2	2.3	1.3	〃	6.80	楔形石器状。
	5	SH23中央土坑	2.8	1.9	0.8	〃	4.50	楔形石器状。
	6	SH23	1.2	1.6	1.1	〃	2.70	方形。
	7	SH23	2.8	1.2	0.9	〃	1.95	板状。
	8	SH23	2.8	1.5	0.8	〃	5.20	板状。
第37図	9	SH23中央土坑	1.7	0.6	0.6	〃	0.38	楔形を呈する剝片。
	10	SH23	1.8	0.5	0.5	〃	0.80	長方形板状の剝片。
	11	SH23	1.4	0.5	0.6	〃	0.62	楔形を呈する板状剝片。
	12	SH23中央土坑	1.7	6.5	0.5	〃	0.46	
	13	SH23	1.7	0.9	0.4	〃	0.91	楔形石器状の板状石核。
	14	SH23中央土坑	1.7	1.0	0.5	〃	0.53	板状の石核。
	15	SH23	1.4	0.9	0.3	〃	0.50	板状の石核。
	16	SH23	1.1	0.4	0.2	〃	0.10	長方形板状の剝片。
	17	SH23中央土坑	1.0	0.3	0.2	〃	0.05	長方形板状の剝片。
	18	SH23中央土坑	1.3	0.3	0.3	〃	0.12	四角柱。
	19	SH23	1.6	0.5	0.4	〃	0.38	四角柱。
	20	SH23	1.8	2.5	0.3	〃	0.29	側面に押圧剝離。
	21	SH23中央土坑	1.4	0.2	0.3	〃	0.06	四角柱。
	22	SH23	1.6	0.2	0.2	〃	0.07	四角柱。
	23	SH23	1.6	0.3	0.3	〃	0.16	四角柱。
	24	SH23中央土坑	1.6	0.2	0.2	〃	0.09	側面に押圧剝離。
	25	SH23中央土坑	1.6	0.2	0.2	〃	0.13	四角柱。研磨あり。
	26	SH23	0.9	1.4	1.4	〃	0.04	六角柱。研磨あり。
	27	SH23	1.2	0.3	0.3	〃	0.14	六角柱。研磨あり。
	28	SH23中央土坑	1.3	0.2	0.2	〃	0.09	八角柱。研磨あり。
	29	SH23	0.8	0.1	0.1	〃	0.01	円柱状。研磨あり。
	30	SH23	0.8	0.1	0.1	〃	0.01	円柱状。研磨あり。
	31	SH23	1.0	0.1	0.1	〃	0.01	円柱状。研磨あり。
	32	SH23	1.6	0.9	0.9	〃	0.02	円柱状。研磨あり。

付表13 奈良岡遺跡石鋸法量表

図番号	出土地点	石材	横長(cm)	縦長(cm)	厚さ(cm)	備考	
第38図	1	SH21	紅簾片岩	3.1	2.1	0.5	側縁のみ研磨。
2	SH15	〃	4.4	3.3	0.4	原石。器表面風化。礫状。	
3	SH06	〃	6.9	4.8	0.7	器面及び側縁に研磨痕。	
4	SH23	〃	3.9	5.6	0.5	原石剝片。断面新鮮。	
5	SH03	〃	3.1	1.6	0.4	接合資料。原石剝片。	
6	SH03	〃	5.4	1.7	0.4	接合資料。原石剝片。	
7	SH03	〃	9.4	3.1	0.3	接合資料。原石剝片。	
8	SH15	〃	7.6	1.9	0.3	ほぼ完存。	
9	SH06	〃	3.7	1.7	0.3	折損。	

10	S H06	紅簾片岩	5.6	1.9	0.3	折損。
11	S H15	〃	3.7	1.9	0.3	折損。
12	S H06	〃	4.0	1.6	0.4	折損。
13	S H21	〃	2.7	2.0	0.3	折損。
14	S H15	〃	3.9	2.3	0.3	折損。
15	S H23	〃	7.8	1.5	0.4	折損。
16	S H23	〃	6.9	2.0	0.4	折損。
17	S H23	〃	5.7	2.7	0.3	折損。
18	S H15	〃	6.1	1.2	0.3	折損。
19	S H19	〃	5.0	2.8	0.3	折損。

付表14 奈具岡遺跡砥石法量表

図番号	出土地点	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石材	備考		
第39図	1	S H11	16.7	16.4	2.2	花崗岩	石皿状	
	2	S H11	15.4	11.8	5.6	花崗岩	筋砥石	
	3	S H06	19.2	6.8	5.8	花崗岩	完存	
	4	S H01	19.2	11.4	6.4	花崗岩	側面に2条の筋あり。	
第40図	5	S H15	10.4	5.8	1.2	アブライト	筋砥石	
	6	S H19	6.6	5.4	3.4	頁岩ないし粘板岩	筋砥石	
	7	S H10	8.2	4.6	1.8	花崗岩		
	8	S H21	6.6	4.4	1.2	アブライト	筋砥石	
	9	S H17	13.4	11.0	4.0	花崗岩	筋砥石	
	10	S H19	14.0	6.6	4.2	頁岩ないし粘板岩	側面に1条の筋あり。	
	11	S H23	10.8	6.0	6.0	アブライト	擦切施溝分割痕あり。	
	12	S H06	4.2	5.0	1.4	アブライト	筋砥石	
	13	S H11	11.2	6.4	5.0	花崗岩	筋砥石	
	第41図	14	S H06	4.4	3.8	0.7	アブライト	
		15	S H03	5.8	3.6	1.5	アブライト	筋砥石
		16	S H02	5.2	2.2	1.4	アブライト	筋砥石
		17	S H01	4.0	2.8	0.4	頁岩ないし粘板岩	筋砥石

付表15 奈具岡遺跡小形錐状石器法量表

図番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石材	重量 (g)	備考	
第43図	1	0.75	0.30	0.20	瑪瑙	0.09	頂部に擦切施溝分割痕
	2	0.80	0.30	0.20	〃	0.09	〃
	3	0.64	0.30	0.26	〃	0.07	〃
	4	0.80	0.26	0.27	〃	0.07	上・下端に錐部あり
	5	0.76	0.33	0.28	〃	0.09	〃
	6	0.99	0.46	0.32	〃	0.18	〃
	7	0.92	0.36	0.29	〃	0.11	〃
	8	1.09	0.32	0.30	〃	0.16	〃
	9	1.00	0.45	0.40	〃	0.20	〃
	10	1.10	0.30	0.20	碧玉～鉄石英	0.13	〃
	11	1.20	0.55	0.38	〃	0.18	〃
	12	1.20	0.46	0.30	〃	0.20	〃
	13	1.25	0.46	0.37	〃	0.26	〃

14	1.36	0.53	0.33	碧玉～鉄石英	0.24	上・下端に錐部あり
15	1.40	0.55	0.32	〃	0.22	〃
16	1.40	0.52	0.38	〃	0.27	〃

付表16 奈良岡遺跡棒状不明磨製石製品法量表

図番号	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	備考
第42図1	S H15埋土	ガラス質安山岩	2.1	0.5	完存。頭部断面円形。下端部断面方形。
2	S H15埋土	ガラス質安山岩	2.2	0.5	完存。
3	S H23埋土	ガラス質安山岩	1.0	0.5	頭部のみ残存。
4	S H23埋土	ガラス質安山岩	0.9	0.4	下端部のみ残存。
5	S H23埋土	ガラス質安山岩	1.0	0.5	頭部のみ残存。

付表17 奈良岡遺跡楔形石器・石鏃・石錐法量表

図番号	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
第44図1	S K01	2.2	1.9	0.5	ガラス質安山岩	楔形石器
2	S H06	2.0	1.9	0.5	瑪瑙	〃
3	S H16	3.4	2.6	1.5	水晶	〃
4	S H23	2.9	2.2	0.5	ガラス質安山岩	石鏃
5	S H11	2.9	1.4	0.6	ガラス質安山岩	〃
6	S K01	1.4	1.2	0.5	水晶	石錐
7	S H04	1.8	1.0	0.4	水晶	石鏃か

付表18 奈良岡遺跡その他の石器法量表

図番号	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
第46図1	石庖丁状磨製石製品	S H21	10.5	4.9	0.7	
2	石庖丁状磨製石製品	S H06	14.4	4.7	0.5	不定形な剝片を利用。粗製。完存。
3	石庖丁状磨製石製品	包含層	15.3	6.2	0.7	大形の不定形な剝片を利用。粗製。
4	大型蛤刃石斧	S H17	7.4	5.3	3.7	先端部のみ残存。側縁に擦切施溝痕あり。
5	敲石	S H11	7.8	6.8	4.8	磨製石斧頭頂部を敲石として転用。潰れ痕あり。
6	磨石	S H16	6.8	5.7	5.9	球形の円礫。
7	大型蛤刃石斧	包含層	16.0	5.1	4.2	完存。
8	凹み石	S H19	14.6	5.4	3.3	両面にあばた状の潰れ痕あり。
9	敲石	S H06	12.0	6.3	3.4	石斧転用石器。上・下端に潰れ痕・擦痕あり。

付表19 奈良岡遺跡花崗岩製磨製石製品法量表

図番号	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
第47図1	S H04	花崗岩	4.2	1.8	1.2	頭頂部楕円形。下方に向かって細くなり、断面も方形となる。下端部欠損。
2	S H19	花崗岩	4.2	4.0	3.2	断面楕円形。円筒状。
3	SH15隣接地点	花崗岩	6.2	4.1	4.0	円柱状。下端部欠損。
4	SH15隣接地点	花崗岩	6.9	3.6	3.6	断面円形。円筒状。下方に向かってやや細くなる。下端部欠損。

(2) 里ヶ谷横穴群

1. 位置と環境

里ヶ谷横穴群は、京都府中郡大宮町字周枳小字里ヶ谷に所在する。里ヶ谷横穴群の分布する丘陵は、丹後半島最大の河川である竹野川の形成した沖積平野に対し、東から西へ延びる。この丘陵は先端付近でいくつかの支尾根に分岐し、西端では2つの支尾根となる。



第55図 調査地位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図(1/25,000)

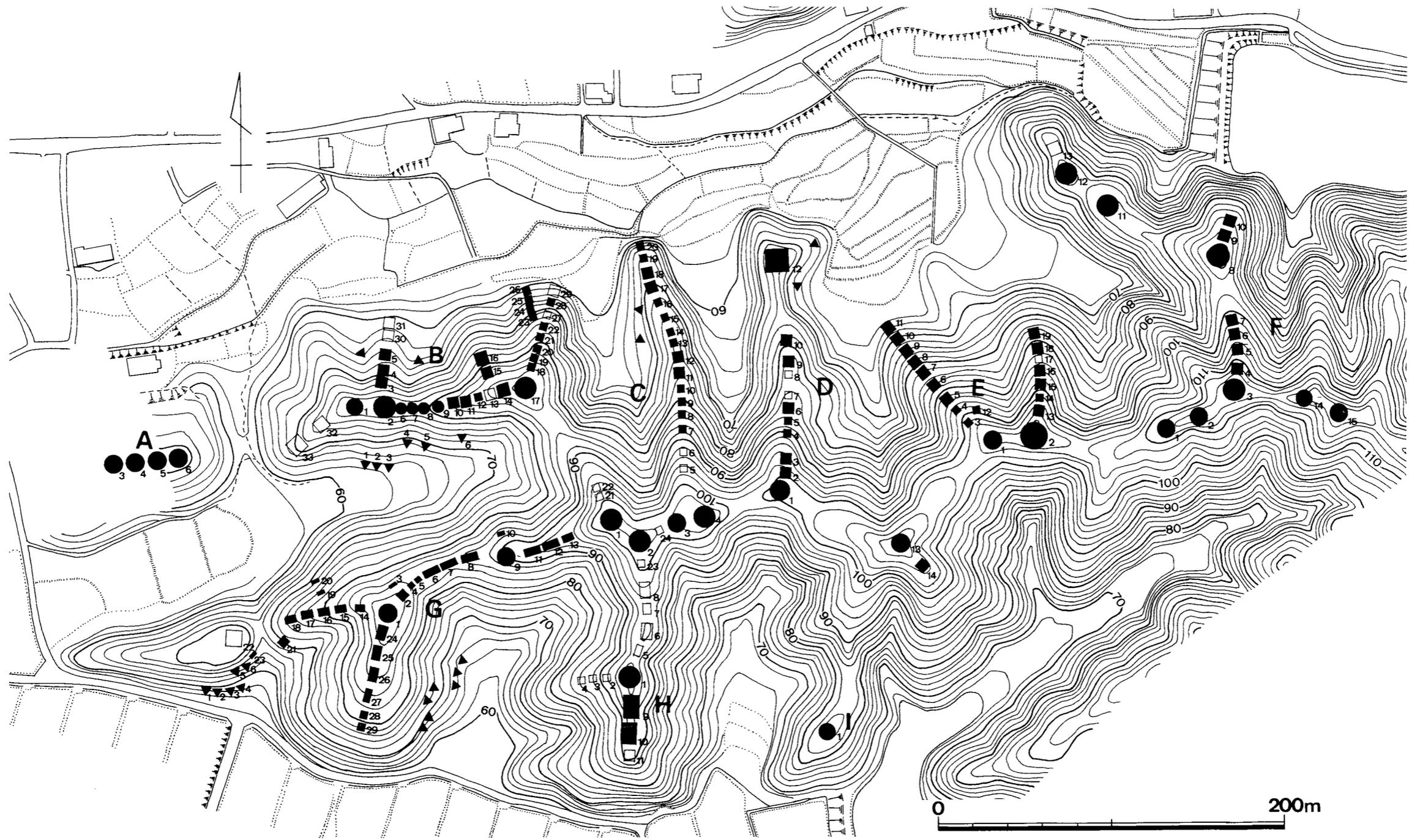
- | | | |
|---------------------|-----------------|--------------|
| 1. 里ヶ谷横穴群・左坂古墳群・横穴群 | 2. 帯城古墳群・大田鼻横穴群 | 3. 有明古墳群・横穴群 |
| 4. 大谷古墳 | 5. 小池古墳群 | 6. 十二社山古墳群 |
| 7. 通り古墳群 | 8. 新戸1号墳 | |
| A. 大宮売神社遺跡 | B. 谷内遺跡 | C. 菅外遺跡 |
| | | D. 裏陰遺跡 |

里ヶ谷横穴群はこの2つの支尾根に挟まれた谷部分、北側丘陵の南斜面に分布している。また、丘陵稜線上には、総数110余基を数える左坂古墳群、左坂墳墓群など、弥生後期から古墳時代後期にかけての、墳墓群、古墳群が分布している。また、南丘陵の南斜面には10数基からなる左坂横穴群が分布する。

里ヶ谷横穴群を中心に竹野川流域の古墳時代の主要遺跡について概観する。竹野川河口部では全長190mを測る大型前方後円墳である丹後町神明山古墳や堅穴式石槨を内部主体とし、石製腕飾類を出土した大型円墳、峰山町カジヤ古墳などが前期末葉を前後して築造される。大宮町域では前期にさかのぼる首長墓として、直径30mの中型円墳である通り1号墳が構築されるが、副葬品などは極めて貧弱である。前期の小古墳では銅鏃が出土した三坂神社裏古墳群が調査されている。大宮町域には畿内の要素を備えた前期大型墳は確認されていない。

中期は丹後半島全体で大型古墳が築造されなくなる時期である。この時期の首長墓としては、竹野川中流域の峰山町涌田山1号墳を最後の100m級の前方後円墳とし、大宮町大谷古墳、弥栄町ニゴレ古墳、丹後町産土山古墳などの中規模円・方墳を首長墓と考えることができる。これら、単独で立地する首長墓とは別に、尾根稜線上に明瞭な墳丘をもたず、連珠状に分布する群小古墳が数多く築造される。大宮町内では有明古墳群、左坂古墳群、帯城古墳群、小池古墳群などを例示することができる。これら、群小古墳では造墓時期も前期から後期前半にいたる各時期の古墳が確認されている。後期後半になると、横穴式石室が導入される。6世紀中葉頃の石室には、堅穴系横口式石室の影響を受けたと思われる石室が認められるが、大宮町域では、現在のところ6世紀中葉にさかのぼる石室は未確認である。里ヶ谷横穴群周辺では、こうしょ古墳群、小林古墳群など数基単位で横穴式石室を内部主体とする古墳群が造られる。そのほか、奥大野に所在する新戸1号墳は、巨石横穴式石室を内部主体とする丹後半島最後の前方後円墳として注目される。後期の埋葬施設として、丹後半島では横穴式石室以外に横穴が数多く築造されている。埋没しているためその実体の把握は困難ではあるが、32群・130余基が確認されている。現状では竹野川上・中流域に分布の中心をもつ。大田鼻横穴群、有明横穴群、左坂横穴群そして、今回調査の里ヶ谷横穴群もこの地域に含まれる。これら横穴群は10～数十基で群を構成し、6世紀末～7世紀初頭頃に造墓を開始し、7世紀に最盛期を迎え8世紀まで造墓を続ける。

これら墳墓がある程度把握可能な状況にあるのに対し、集落の実体は定かではない。古墳時代の集落として、大宮町では正垣遺跡、谷内遺跡、菅外遺跡などが確認されている。里ヶ谷横穴群周辺では大宮壳神社遺跡周辺をあげることができる。



第56図 里ヶ谷横穴群・左坂古墳群・横穴群分布図(1/3,000)

2. 調査経過

今回の調査は周知団地造成工事に先立ち実施した。里ヶ谷横穴群についてはその存在は知られておらず、平成3年11月27日～平成3年12月12日にかけて、京都府教育委員会が試掘調査を実施し、初めてその存在が明らかにされた。その調査では3基の横穴の存在が確認された(当報告の3～5号横穴が該当)。

以上のような試掘調査の結果を受け、平成4年度に当調査研究センターが面的な調査を実施することとなった。現地調査は、樹木伐採から開始し、伐採の終了した平成4年8月24日から重機による面的な掘削を開始した。その結果、比較的良好な状態で6基の横穴の存在を確認するに至った。さらに、南尾根の北側斜面にも横穴、あるいはその他の遺構の有無を確認するため、重機により幅4mの試掘トレンチを5か所設定したが、遺構・遺物は確認されず、調査対象地に存在するのは6基の横穴のみと判断した。

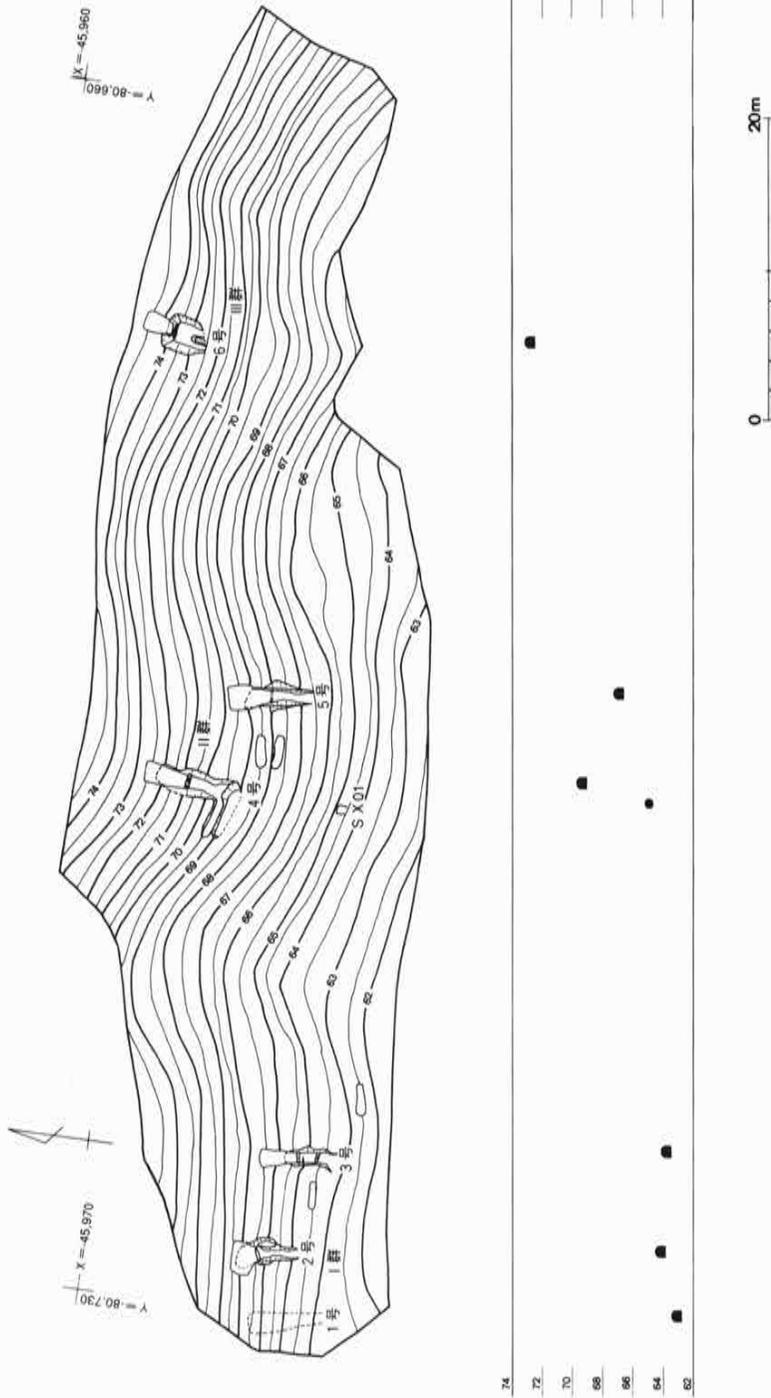
6基の横穴を検出した段階で、西から東に1～6号横穴と横穴番号を付した。このうち、1号横穴については造成範囲から外すことが可能であったため、横穴内部の調査を実施したのは、2～6号の5基についてである。横穴はいずれも未盗掘であり、玄室内・前庭部から、人骨・須恵器・土師器・鉄器など豊富な資料を検出することができた。人骨については11月6日、京都大学理学部自然人類学研究室片山一道教授に現地で出土状況を実見していただき、さまざまご教示を賜った。

遺構の掘削は11月12日に終了し、11月13日には現地説明会を実施し、約100名の参加者を得ることができた。現地説明会終了後も、写真撮影・遺構実測などを継続的に行い、翌平成5年1月8日にすべての現地調査を終了した。なお、調査面積は試掘調査分と合わせて、約2,000㎡となった。

3. 里ヶ谷横穴群分布状況

里ヶ谷横穴群で今回検出した横穴は6基である。トレンチは東西約85m・南北約10～22m、垂直距離にして約8～13mの範囲を設定した。トレンチの東側については、試掘トレンチを設定し、横穴の存在しないことを確認している。西側は、掘削はしていないが、調査期間中に実施したピンポールによるボーリング調査の結果では約20mの範囲内には横穴は存在しないものと判断される。したがって、里ヶ谷横穴群は最低この6基から構成され、多くとも10基程度のものと推測される。

調査に当たり、検出した横穴には西から東へ1～6号の番号を付した。この6基の横穴は平面的・垂直的な分布状況から3つの小グループに分けることが可能である。便宜上、1～3号横穴をⅠ群、4・5号横穴をⅡ群、6号横穴をⅢ群とする(第57図)。



第57図 里ヶ谷横穴群地形測量図及び検出遺構配置図(1/500)

I群は、1～3号横穴の3基からなる。調査地内で最も谷の口寄り、標高63m付近に位置する。それぞれの横穴のレベルは2号横穴が1・3号横穴に比べ約0.7m高いが、1・3号横穴はほぼ同一のレベルに開口する。また、3基の横穴の主軸はほぼ同一である。

II群は、4・5号横穴の2基から構成される。I群の東、水平距離にして約25mの距離をおく。標高は69mとI群に比べ約5m高所に位置する。II群の分布する地点は、小さな支尾根状を呈する。4号横穴と5号横穴は、4号横穴が標高69m付近に開口するのに対し、5号横穴は標高66.4mと4号横穴の方が5号横穴に比べ2.6m高い。開口方向も、4号横穴がやや西方向の小さな谷状地形に開口するのに対して、5号横穴は小さな支尾根状地形の先端に開口する。比較的まとまりのあるI群に比べ、それぞれの横穴の独立性が高い。

III群は、6号横穴単独で構成される。里ヶ谷横穴群の分布する谷の最奥部分にあたる。II群の東、水平距離にして約20mの距離をおく。標高は72.5mとII群に比して、約3.5m高所に位置する。III群の分布する地点は、小さな支尾根状を呈している。

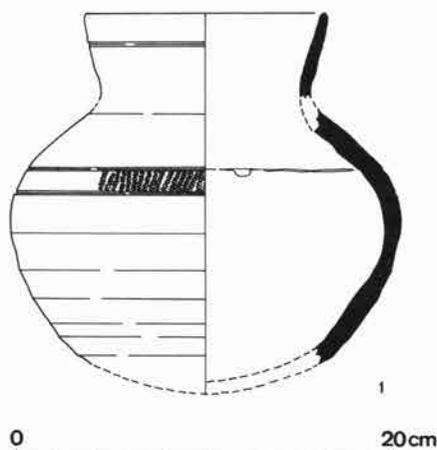
全体をみると、横穴は谷の口から奥へ向かうに従い、標高を上げている。これは谷底が谷奥に向かい標高を上げていることや、横穴を掘削するのに適した安定した花崗岩風化土の岩盤が、岩脈状に谷口から谷奥へレベルを上げていることに起因するものと考えられる。

4. 各横穴の調査概要

①1号横穴

位置と構造 里ヶ谷横穴群中最西端、谷の入口寄りに位置する。標高62.7m付近に開口する。造成範囲外のため、検出面での精査を実施したのみであるが、前庭部から須恵器壺(第58図1)が出土している。須恵器壺は細片化した状況で出土しており、25点を検出した。この壺は、後述する2号横穴前庭部出土の壺片2点と接合関係にある。また、精査時の状況から1号横穴の全長は約5mと推定される。

出土遺物(第58図1) 1は、壺である。丸みを帯びた体部から短く、やや内湾ぎみに立ち上がる頸部に至る。口縁部外面に1条の沈線、肩部に2条の沈線により画された、櫛状工具による刺突文の文様帯により装飾する。体部に立ち上がりをもつ杯身と思われる別個体の口縁部が融着する。



第58図 里ヶ谷1号横穴出土遺物実測図

② 2号横穴

位置と構造(第59図) 2号横穴は1号横穴の東、約4mの距離をおいて隣接する。開口部の標高は約63.8mを測り、1号横穴より1mほど高所に位置する。主軸はN-7°-Wを測り、南に開口する。玄室天井部はほぼ崩落し、崩落天井を除去すると遺物が出土するような状況であった。前庭部部分にはこの崩落天井が認められないことから、前庭部はオープンな状況であったことは明らかである。

横穴の平面プランは、短い羨道をもつ両袖式である。羨道は広く短い、羨道部は残存高0.6mを測る。後述する閉塞用の溝の存在から羨道部にも天井が存在したものと推測される。玄室の平面形は、奥壁幅が玄室長より広いいびつな方形プランを呈する。袖は両袖であり、西袖部が幅1m、東袖部が幅0.3mと西袖部が東袖部に比べかなり広い。床面は奥壁から玄門部に向かいわずかに傾斜する。羨門部床面は墓道床面より6cmほど高い。玄室の断面形は天井がほとんど崩落し詳細は不明であるが、奥壁、ならびに側壁の形態をみるかぎり、カマボコ状になるものと推定される。規模は玄室長1.3m・奥壁幅1.9m・東側壁長0.8m・西側壁長1.3m・玄門部幅1.2m・羨道部長0.3m・羨門部幅1.0mを測り、高さは奥壁で残存高0.8mを測る。

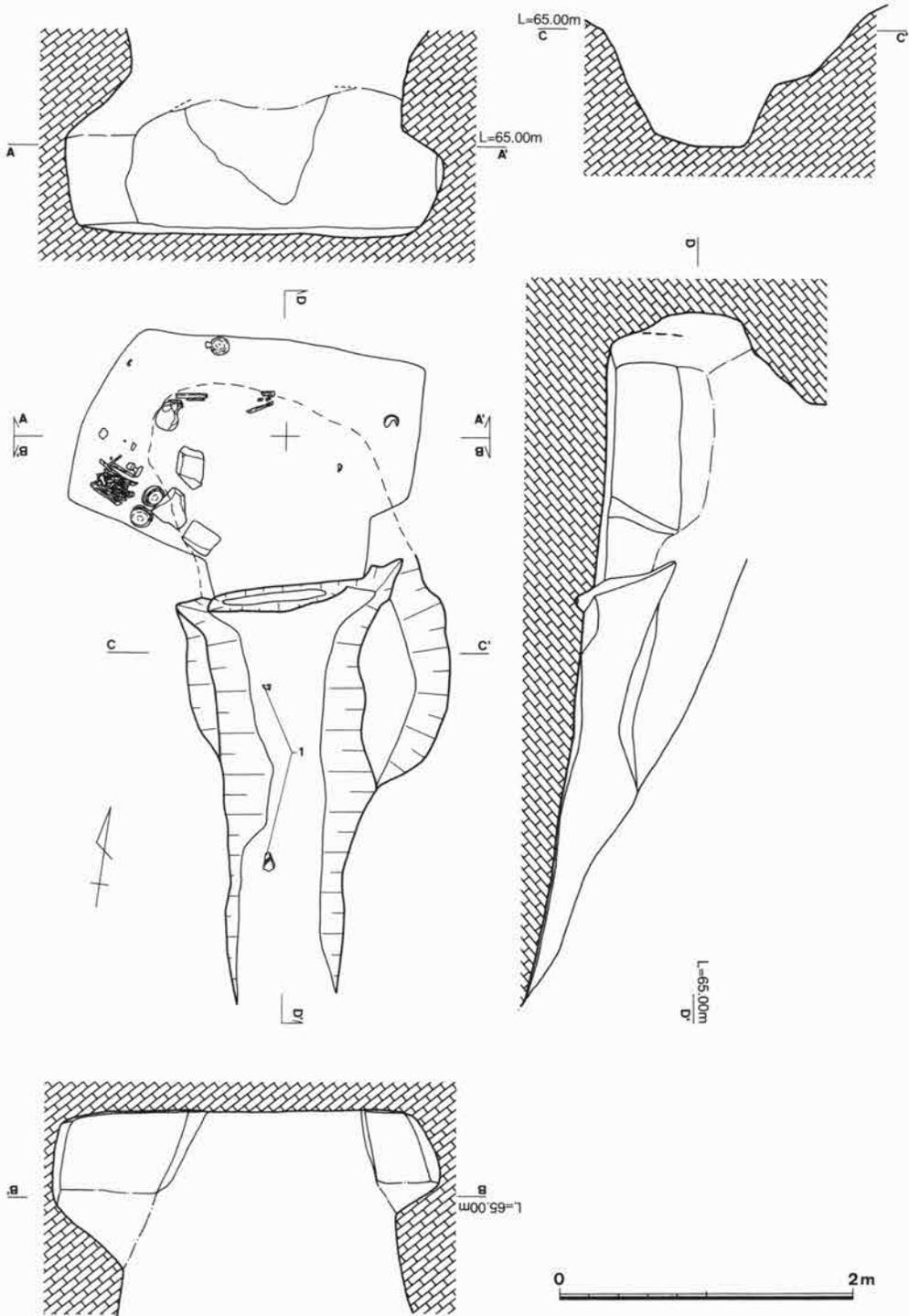
前庭部は狭く、断面台形の墓道状になる。東側に幅0.6mを測るテラス状の平坦面がつくられる。残存長2.7m、底部での幅0.4~1.2m、深さ1mを測る。

玄室の閉塞は、玄門部と前庭部の境に設けられた溝に、板戸をはめ込む構造であったと考える。溝は、幅15cm・長さ1m・深さ13cmを測る。また、溝付近の前庭部は東西に拡張され、板戸が羨門部を完全に覆っていたものと推測される。

遺物出土状況(第60図) 2号横穴からは、須恵器・人骨が出土している。前庭部からは、須恵器壺片2点(第58図1)・甕片1点(第61図10)が出土した。いずれも床面より10cmほど遊離した状況であった。1号横穴の項で述べたとおり、この壺片は1号横穴出土須恵器壺と接合関係にある。なんらかの人為的な行為により、1号横穴で破碎された壺の一部が持ち込まれたものと判断される。

玄室内からは須恵器杯3点・杯蓋3点・甕1点・提瓶1点・人骨4体分以上が出土した。

人骨は、解剖学的な原位置を保つもの1体、かたづけにより移動を受けているもの2体分がある。1号人骨は奥壁平行に伸展葬で検出された。頭位は東である。2号人骨は頭蓋骨のみが遺存していた。1号人骨の脛骨の上に頭蓋骨が乗っていることから、1号人骨より後で追葬されたものと考えられる。A・B号人骨は西袖付近に1つにかためられていた。長管骨を中心に2体分の人骨が井桁状に積み上げられていた。このA・B号人骨はまとめてかたづけられたものと考えられ、片山氏の観察によると、2体分の人骨が混在しているとの



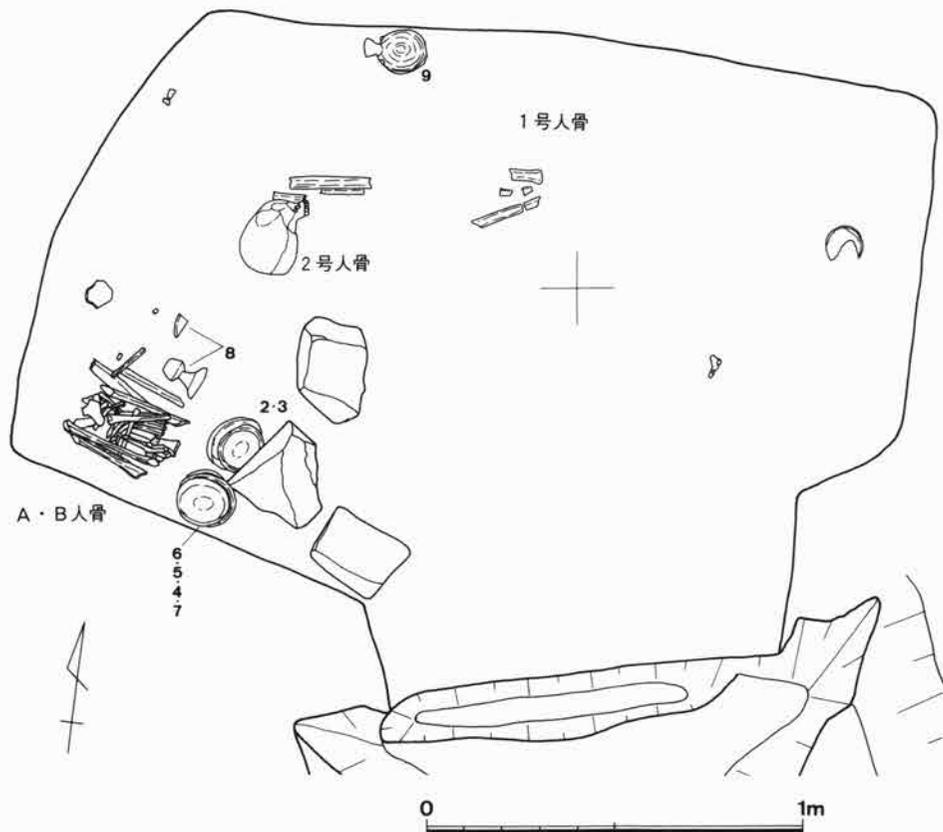
第59図 里ヶ谷2号横穴実測図(1/50)

ことであった。また、A人骨と2号人骨は同一個体である可能性が高いとされた。このほか、玄室西側壁付近に人骨細片が検出されたが、B人骨に伴う可能性が考えられる。

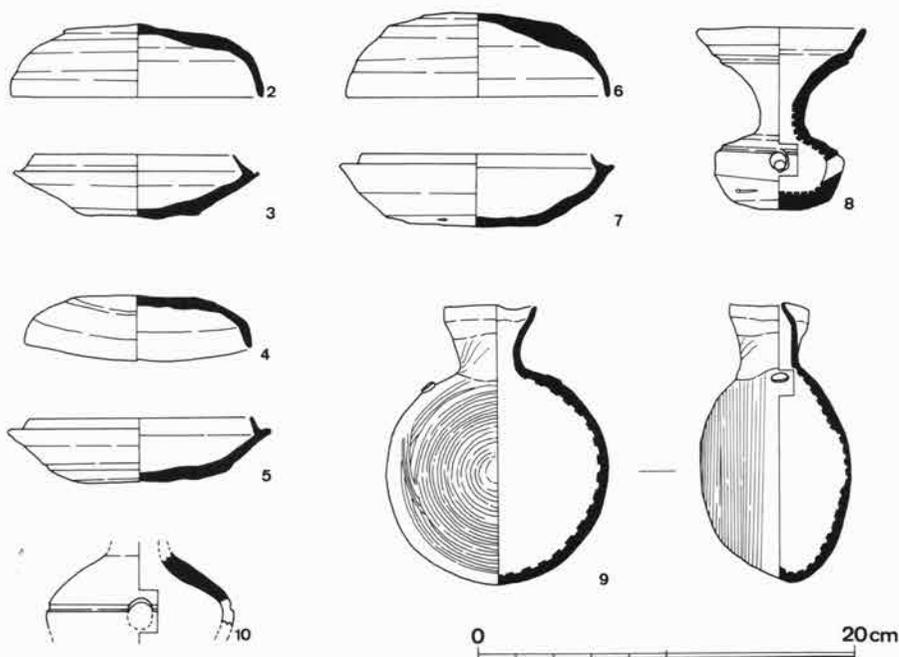
玄門部付近には、3石の花崗岩角礫が置かれていた。この石材の用途については不明である。ただし、その形態から見て棺台として使用されたとは考えがたい。須恵器杯・杯蓋はこの石材周辺から出土した。杯蓋2、杯身3は石材の下敷きになった状態で検出された。杯蓋2は逆位で、杯身3は正位で重ねられた状況であった。杯蓋4・6、杯身5・7は石材の上から検出された。杯蓋は逆位で、杯身は正位で、下から7・4・5・6の順番で重ねられていた。甕はA・B号人骨に近接して床面上から出土し、提瓶は奥壁西隅からやや遊離した状態で検出された。

出土遺物(第61図) 2号横穴出土遺物には玄室内出土の須恵器杯3点、杯蓋3点、甕1点、提瓶1点、前庭部出土の壺片、甕片1点がある。

2～7は、玄室内出土の杯蓋・杯身である。焼成・法量などから6・7がセットになると考えられるが、そのほかのものはセット関係にならない。杯身は立ち上がりを持つもの



第60図 里ヶ谷2号横穴遺物出土状況図(1/50)



第61図 里ヶ谷2号横穴出土遺物実測図

のみであり、立ち上がりを持たないものは含まない。底部・天井部の調整は極めて粗雑であり、ていねいなヘラケズリを施す個体は存在しない。

8は、玄室内出土の甕である。その法量からミニチュア製品と考える。甕によく観察される円孔部周辺の破損は認められない。内面に穿孔時の粘土塊が融着している。

9は、玄室内出土の提瓶である。球形の体部にボタン状の貼り付けをもつ。その法量からミニチュアと考える。

10は、前庭部出土の甕である。細片のため全容はつかめない。

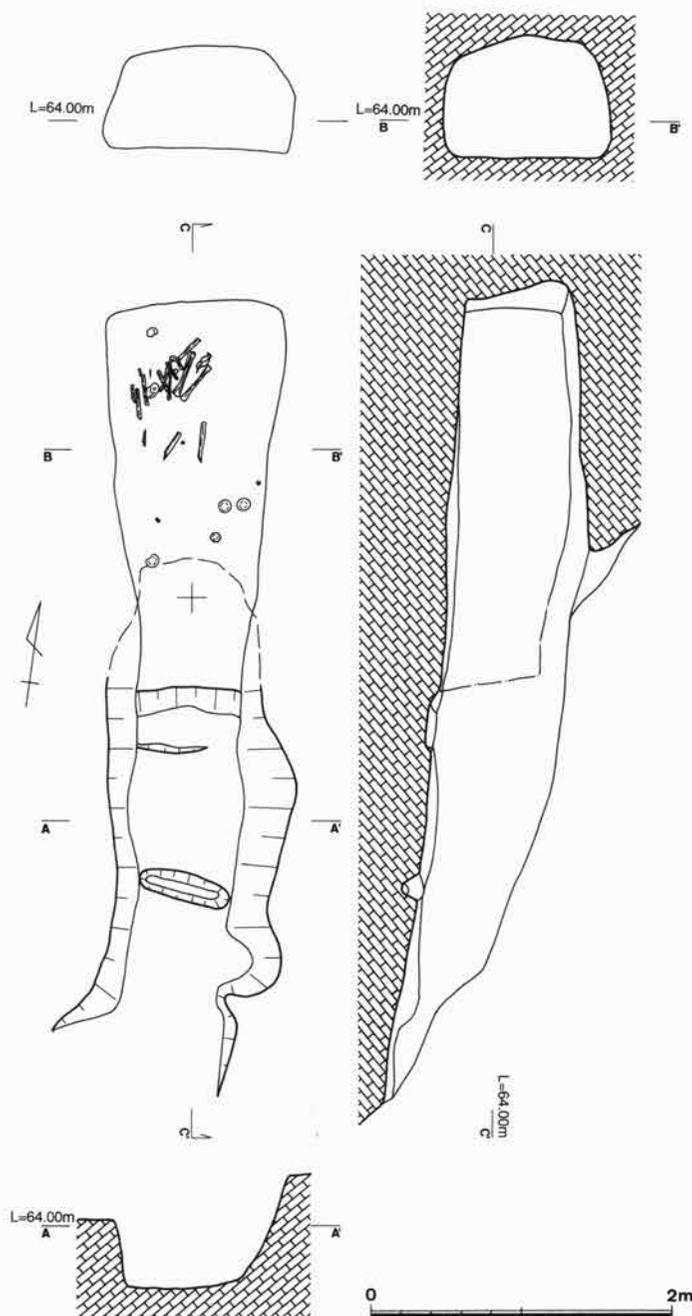
③3号横穴

位置と構造(第62図) 3号横穴は2号横穴の東、約6mの距離をおいて隣接する。開口部の標高は約63.3mを測り、2号横穴より1mほど低所に位置する。主軸はN-7°-Wを測り、南に開口する。玄室天井部の残存状況は良好であったが、玄室内は流入土が充満した状況であった。玄室埋土は大きく3層に分かれ、遺物・人骨の大部分は最下層の上面で検出された。前庭部部分には崩落天井が認められないことから、2号横穴同様、前庭部はオープンな状況であったことは明らかである。

3号横穴は、前庭部と玄室により構成される。玄室平面は無袖長方形プランを呈し、玄

門部幅0.7m・奥壁幅1.2mと奥壁に向かい若干広がる。玄室床面は玄門部に向かい緩やかに傾斜する。玄室横断面はカマボコ状を呈する。規模は玄室長2.6m・玄室高0.7m。

前庭部は断面台形の墓道状になる。前庭部先端部分は西方向に向かい、若干のテラス状



第62図 里ヶ谷3号横穴実測図(1/50)

となる。また、先端から1.5m付近に閉塞用の溝に類似した溝が設けられている。この溝については、閉塞に使用されたとは考えがたく、その用途については不明である。規模は、残存長2.3m、底部で幅0.6~0.8m、深さ0.6mを測る。

閉塞は、玄室部と前庭部の境に設けられた溝に、板戸をはめ込むことにより行われたと考えられる。溝は幅0.44m・深さ7cm程度の浅いものである。

遺物出土状況(第63図) 3号横穴からは人骨2体分、須恵器、土師器、鉄器、金環が出土した。

前庭部からは細片化した須恵器壺(?)片1点、土師器片1点が出土した。

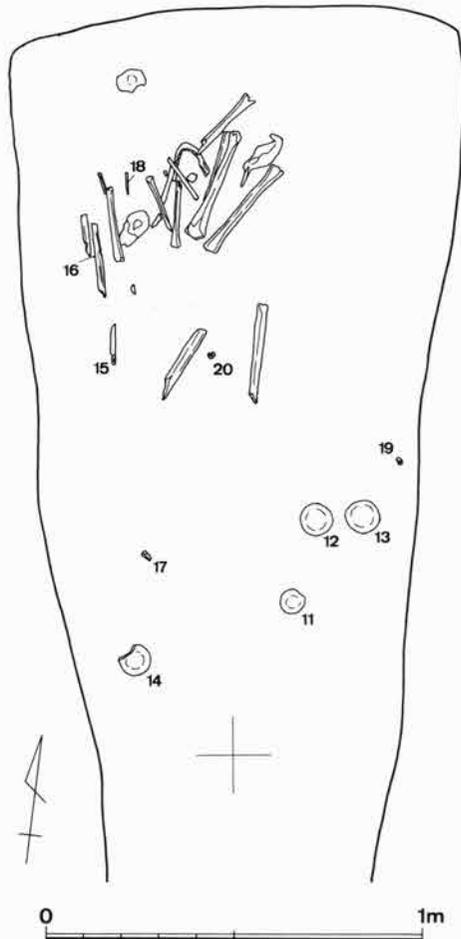
玄室内からは人骨2体分、須恵器杯3点、土師器杯1点、刀子3点、針状鉄製品1点、金環2点が出土した。

人骨は、長管骨を中心に玄室主軸方向に平行する形で2体分が出土した。いずれも解剖学的な原位置を保っておらず、2次的な移動を受けたものと考えられる。いずれも床面より若干遊離している。人骨は玄室内西側に寄せられたような状況であった。須恵器杯11～13は、玄室中央東側からいずれも正位で出土した。杯12・13は、床面から若干遊離していた。土師器杯14は、玄室中央西側から正位で出土している。金環は、19が玄室東側壁寄りから、20は玄室中央、人骨に接して出土している。19・20とも床面より遊離していた刀子16は玄室西側の人骨の下から、刀子15は玄室西側壁付近から切っ先を北に向け、若干遊離して出土している。刀子17は細片であり、玄室中央西側で出土した。針状鉄製品18は奥壁側の人骨と人骨のあいだから検出された。

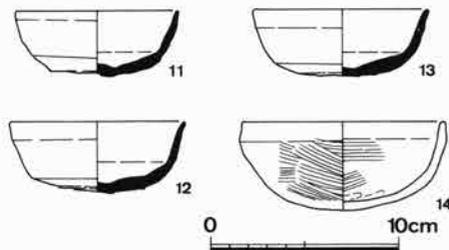
出土遺物 3号横穴出土遺物には須恵器3点、土師器1点、鉄製品4点、金環2点がある。

a. 須恵器(第64図) 11から13は、立ち上がりをもたない杯身である。口径8.6～9.2cm・器高3.5～3.8cmを測る。形態・法量・技法・胎土・焼成が共通することから同一生産地のものと考えられる。

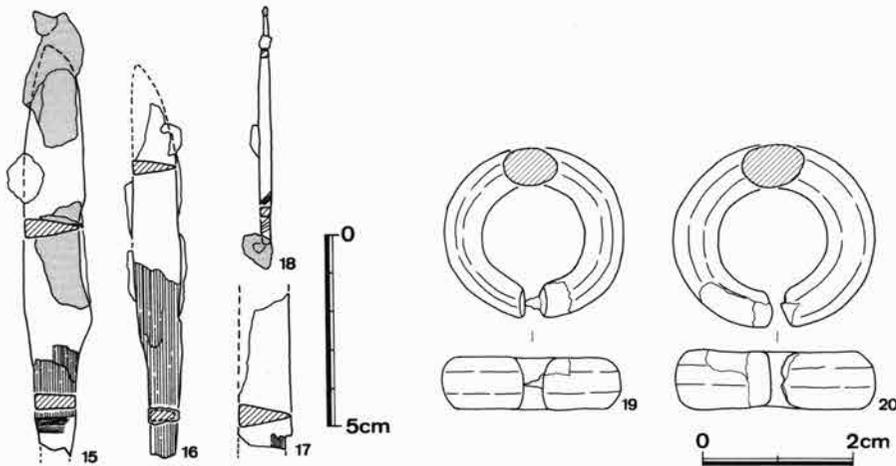
b. 土師器(第64図) 14は、杯である。丸い体部をもち、口縁部はナデにより上方つまみ上げる。内外面に粗いハケが認められる。



第63図 里ヶ谷3号横穴玄室内遺物出土状況



第64図 里ヶ谷3号横穴出土遺物実測図(1)



第65図 里ヶ谷3号横穴出土遺物実測図(2)

c. 鉄製品(第65図) 刀子3点、針状鉄製品1点がある。

15~17は、刀子である。15は全長11cm、16は残存長9.2cmを測る。

18は、針状鉄製品である。全長7cm・厚さ0.3cmの断面方形のものである。下方には、斜め方向にはしる繊維状のものが観察される。現状では穴は確認できない。部分的に革かと思われるものが付着する。

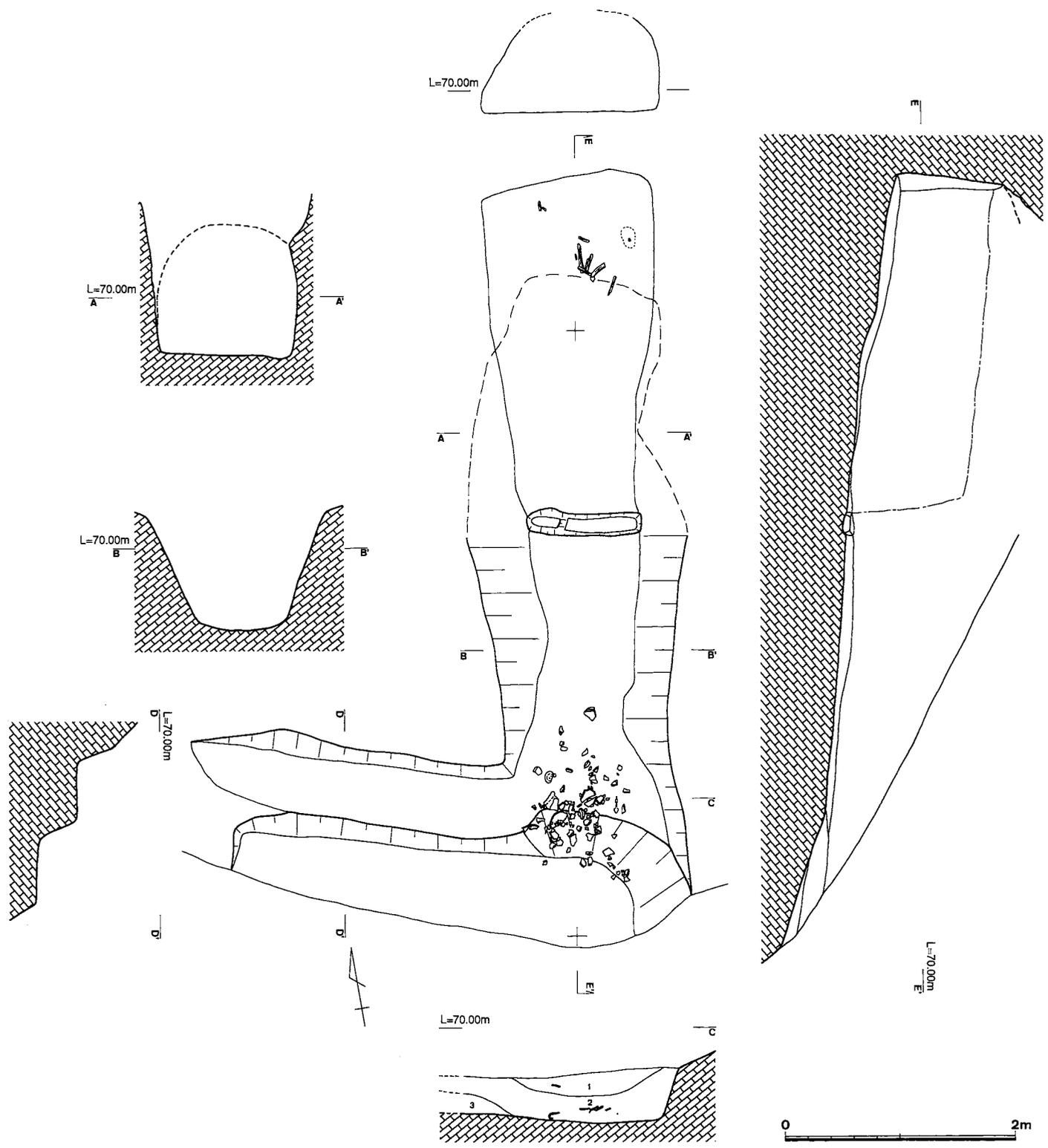
d. 装身具(第65図) 19・20は、金環である。19・20とも中実の銅芯に金を施したものであり、19は金が良好に遺存する。19は左右2.4cm、上下2.4cm、銅芯幅0.5cm、厚さ0.7cm、重量12.06g。20は、19よりやや大きく、左右2.7cm、上下2.4cm、銅芯幅0.6cm、厚さ0.8cm、重量16.16gを測る。

④4号横穴

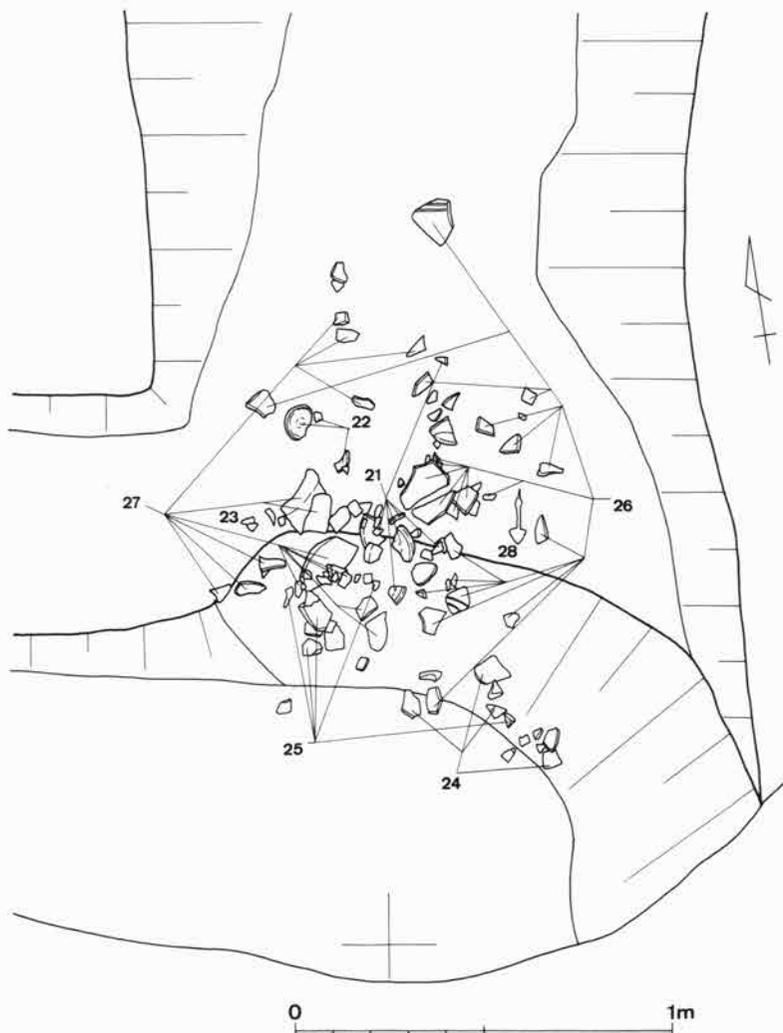
位置と構造(第66図) 4号横穴は3号横穴の東、約20mの距離をおいて位置する。開口部の標高は約69.1mを測り、3号横穴より6mほど高所に位置する。主軸はN-9°-Eを測り、南に開口する。玄室天井部はほぼ崩落し、玄室壁面の遺存状況も良好ではない。玄室内出土の遺物、人骨は崩落天井直下で検出された。前庭部部分には崩落天井が認められないことから、2号横穴同様、前庭部はオープンな状況であったことは明らかである。

4号横穴は、玄室と前庭部、閉塞施設から構成され、その規模は里ヶ谷横穴群中で最大である。玄室平面は無袖長方形プランを呈し、玄門部幅1.0m・奥壁幅1.5mと奥壁に向かい若干広がる。玄室床面は玄門部に向かい緩やかに傾斜する。玄室横断面はカマボコ状を呈する。規模は玄室長3.0m・玄室高0.9mを測る。

前庭部は、断面台形状の墓道状を呈する。規模は残存長3.9m・深さ1.5m。また、前庭



第66図 里ヶ谷4号横穴実測図(1/50)

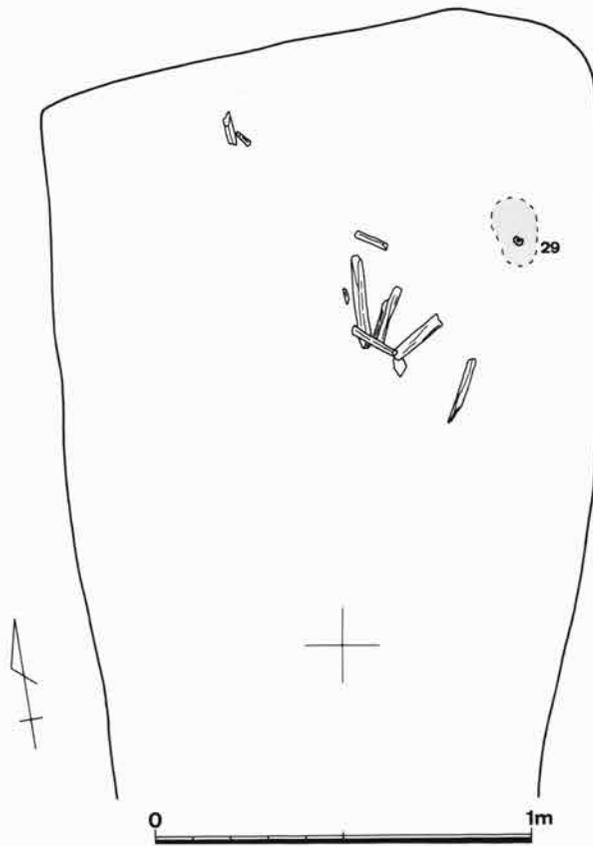


第67図 里ヶ谷4号横穴前庭部遺物出土状況

部先端には、西側に延びる墓道状の遺構が取り付く。この墓道状遺構は、2段の階段状に造られる。規模は上段が幅0.5m、下段が幅0.8mを測る。埋土の状況からみると、横穴前庭部に先行してこの墓道状遺構が埋没していったものと判断される。しかし、この墓道状遺構と同レベルに前底部が開口すること、前底部先端のレベルが下段墓道状遺構に一致することから、この墓道状遺構は4号横穴に付随する施設であるものと考ええる。

閉塞は、玄門部に設けられた溝に板戸をはめ込み行ったものと考えられる。溝は幅0.2m・長さ1m・深さ4cmを測るが、残存状況は良好ではない。

遺物出土状況(第67・68図) 4号横穴では玄室内より人骨1体分、金環1点、前庭部から細片化した状況で須恵器杯身・椀・甕・台付壺・提瓶、土師器杯、鉄鏃等が出土した。



第68図 里ヶ谷4号横穴玄室内遺物出土状況

玄室内出土の人骨は残存状況がよくなく、腐食化が著しく進行した状況であった。現地での観察では、1体分の人骨が長管骨を玄室主軸に対し平行に置かれていた。解剖学的な原位置を留めておらず、2次的な移動を受けているものと判断される。金環29は玄室東側壁付近で出土した。付近には人体の腐食を示す黒変化した土が認められた。

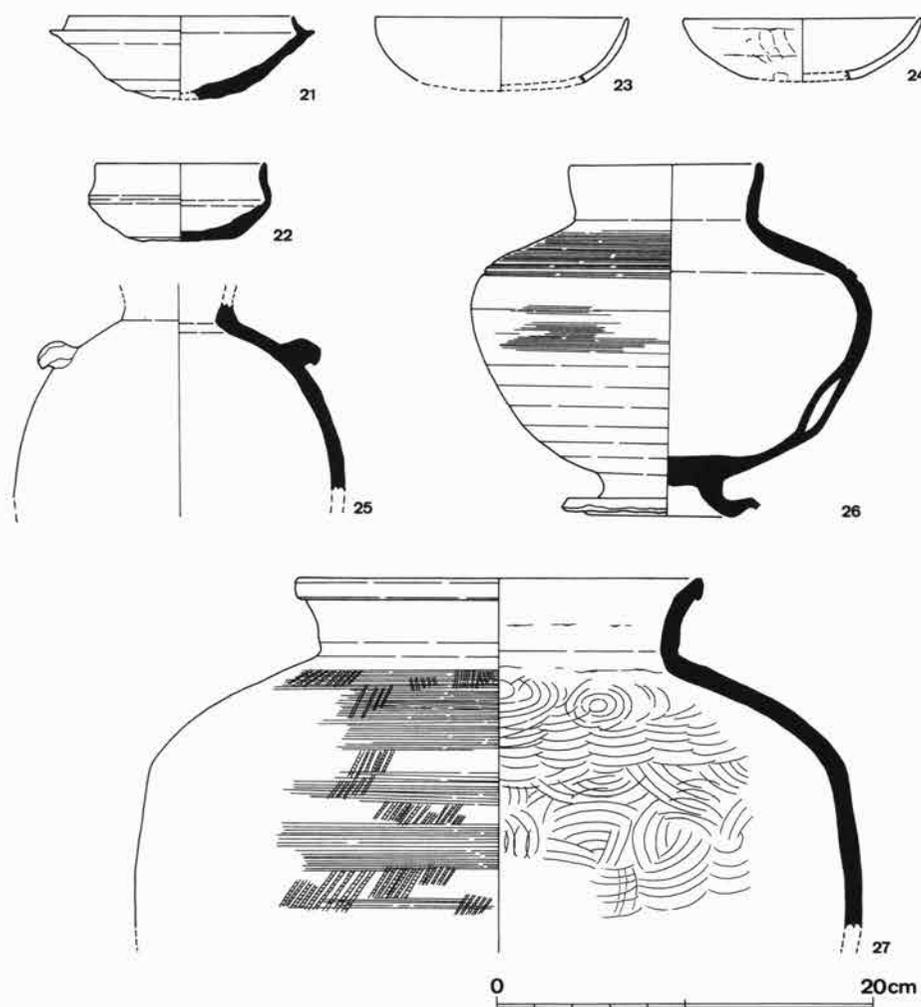
前庭部からは細片化した形で、7個体分の須恵器・土師器が出土している。これら細片化した遺物の接合状況を試みると、甕・台付き壺・提瓶の大形品は細

片化し、破片も広範囲にわたり散乱していることがうかがわれる。なかでも、甕・提瓶は破片の大部分を失っていた。このような状況からみて、甕27・提瓶25・台付壺26などの大形品は前庭部で破碎されたものと推測される。破片の接合状況から、台付壺は前庭部東側、甕は前庭部西側、提瓶は前庭部先端西側で破碎された可能性が高い。一方、椀・杯身などの小形品は完形個体に復原でき、破片も大破片であった。なかでも椀は口縁の一部が欠損していたくらいで破碎されたとは考えがたい。土師器は細片化した状況であったが比較的まとまりをもって出土した。鉄鏃28は東側から鏃身部を南に向け出土した。出土時には茎部に木質の遺存が認められ、元来は矢柄が装着されていたものである。

出土遺物 4号横穴出土遺物には玄室内出土の金環1点、前庭部出土の須恵器5点、土師器2点、鉄鏃1点がある。

a. 須恵器(第69図) 杯1点・椀1点・台付壺1点、提瓶1点・甕1点がある。のうち台付壺・提瓶・甕は破碎されたような状況であり、関係個体には復原できなかった。

21は、立ち上がりをもつ杯身である。深手のプローションであり、立ち上がりはシャ



第69図 里ヶ谷4号横穴出土遺物実測図(1)

ープである。焼け歪みが著しく、底部には火膨れが認められる。

22は、碗である。平らな底部から、内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。

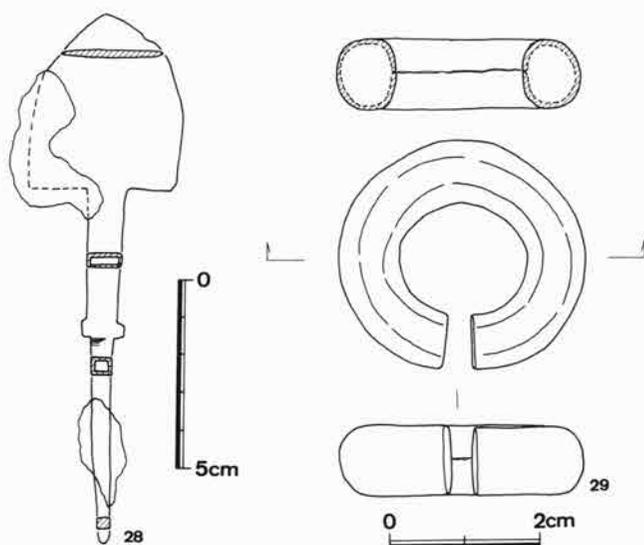
25は、提瓶である。細片であり、詳細については不明。鈎手状の把手をもつ。

26は、台付壺である。やや肩の張る体部に短く直立ぎみに立ち上がる頸部が付く。脚は短いものであり、端部を欠損している。肩部に2条の沈線を施す。

27は、甕である。肩の張る体部に玉縁状の口縁をもつ頸部が付く。口径21.6cm・体部最大径39cmを測る。頸部内面には接合痕が認められる。

b. 土師器(第69図) 土師器には杯2点がある。

23は、小片であり、磨耗も著しく詳細は不明。外面には丹の痕跡が残る。24は、同一個体と思われる底部から、平底ぎみの杯と考えられる。内外面丹塗りであり、外面には接合



第70図 里ヶ谷4号横穴出土遺物実測図(2)

痕が認められる。

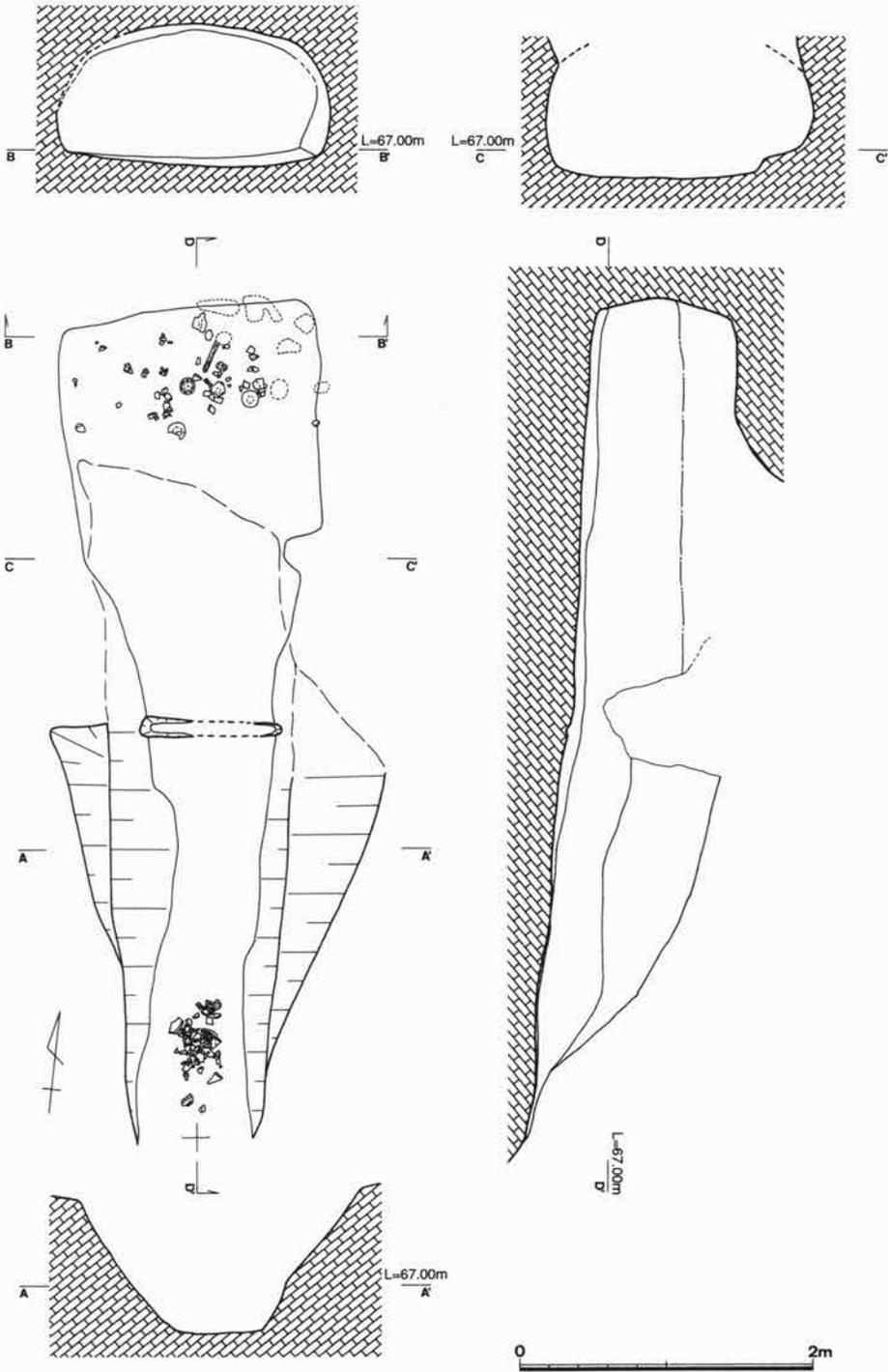
c. 鉄製品(第70図) 28は、前庭部から出土した鉄鏃である。刺状篋被をもつ長頸鏃であり、鏃身形態は五角形式である。鏃身の造りは平造りであって、頸部は断面長方形、茎部は断面方形である。また、篋被と茎部の境に横方向の繊維のようなものが観

察される。全長14.0cm、鏃身部幅4cm、長さ4.6cm、頸部長さ4.0cm、幅1cm、厚さ0.4cm、篋被部の幅1.2cm、茎部長5.4cm、幅0.5cmを測る。

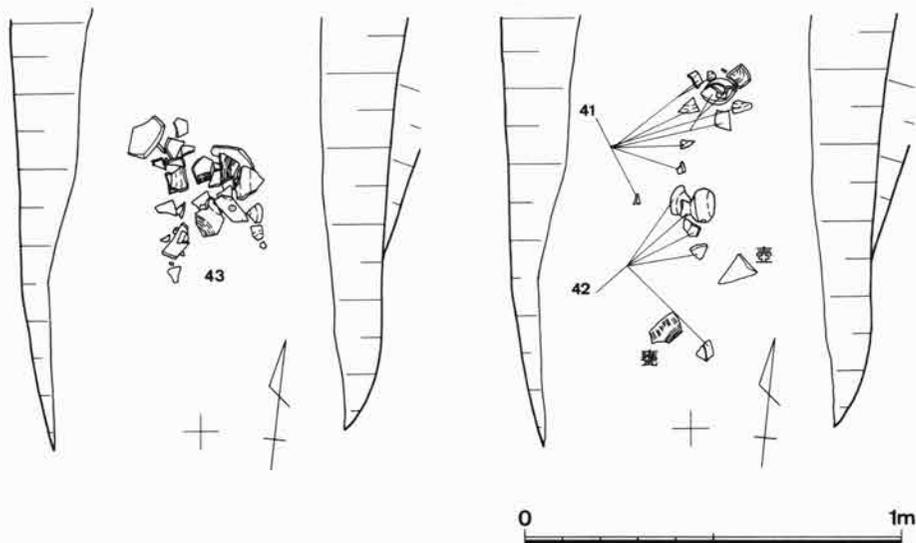
d. 装身具(第70図) 29は、玄室内から出土した金環である。左右3.3cm・上下3.1cmを測る大形品である。大形品の割には重量が8.10gと極めて軽量であり、中空耳環であることは間違いない。幅8.5mm・厚さ9.0mmを測る芯棒に銅板を巻き付け成形しており、内面には銅板の接合痕が明瞭に観察される。芯の素材については観察することが不可能である。金の残りは極めて悪く先端付近にわずかに確認できるくらいである。

⑤ 5号横穴

位置と構造(第71図) 5号横穴は4号横穴の東、約9mの距離をおいて位置する。開口部の標高は約69.4mを測り、4号横穴より2.7mほど低所に位置する。主軸はN-6°-Wを測り、南に開口する。玄室天井部は、ほぼ崩落し、玄室壁面の遺存状況も良好ではない。玄室内出土の遺物・人骨は、崩落天井直下で検出された。玄室内の埋土は大きく3層に分けることができる。上から崩落天井である花崗岩ブロックを多量に含む橙褐色土、暗灰褐色砂質土、暗灰白色砂質土の順に堆積しており、遺物・人骨は暗灰白色砂質土上面、及び埋葬当初の床面である、地山直上及び暗灰白色砂質土中から検出された。このような、埋土の差や遺物の出土状況からみて、初葬時の床面と、最終追葬時の床面に分離して考えることができる。前庭部部分には崩落天井が認められないことから、前庭部はオープンな状況



第71図 里ヶ谷5号横穴実測図(1/50)



第72図 里ヶ谷5号横穴前庭部遺物出土状況(左：上層、右：下層)

であったことは明らかである。

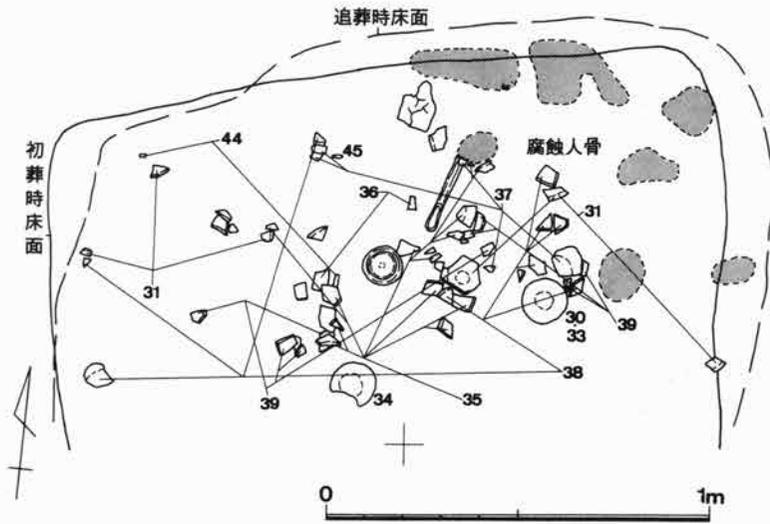
5号横穴は、玄室と前庭部、閉塞施設から構成される。玄室平面は無袖長方形プランを呈し、玄門部幅0.9m・奥壁幅1.7mと奥壁に向かい若干広がる。東側壁の基底部分是不整形であり、掘削時の削り残しのため生じたものであろう。玄室床面は玄門部に向かい緩やかに傾斜する。玄室横断面はカマボコ状を呈する。規模は玄室長2.8m・玄室高1.0mを測る。

前庭部は、断面台形状の墓道状を呈する。前庭部埋土は上層の暗黒灰色土と、下層の暗橙灰色砂質土に分離することが可能である。残存長2.8m・深さ1.0mを測る。

閉塞は、玄門部に設けられた溝に板戸をはめ込み行ったものと考えられる。溝は幅0.12m・長さ0.94m・深さ6cmを測るが、残存状況は良好ではない。

遺物出土状況(第72・73図) 5号横穴では、玄室内より人骨1体分以上、須恵器4点、土師器6点、刀子2点が、前庭部からは須恵器6点、土師器細片1点が出土した。

前底部から須恵器6点が出土した。先述のとおり、前庭部埋土は上層と下層に分離することが可能であり、それぞれの層から遺物が出土した。上層からは提瓶43が破碎されたような状況で検出された。下層から杯身細片1点、甕1点、提瓶1点、甕片、壺片が出土した。このうち、提瓶・甕は割れていたが、出土状況は各個体でのまとまりが認められること、ほぼ完形に復原できることなどから、土圧等の影響で自然に壊れたと思われる。それに対し、甕・壺・杯身は細片化しており、そのほとんどの破片が失われた状況である。このことから、甕・壺・杯身は破碎された可能性が高いものとする。



第73図 里ヶ谷5号横穴玄室内遺物出土状況

玄室内出土遺物は先述のように、初葬時床面出土遺物と、最終追葬時床面出土遺物に分離して考えることが可能である。初葬時床面では、土師器杯1点が逆位で、玄室のほぼ中央におかれていた。初葬時床面直上で検出された遺物は、この杯1点のみである。

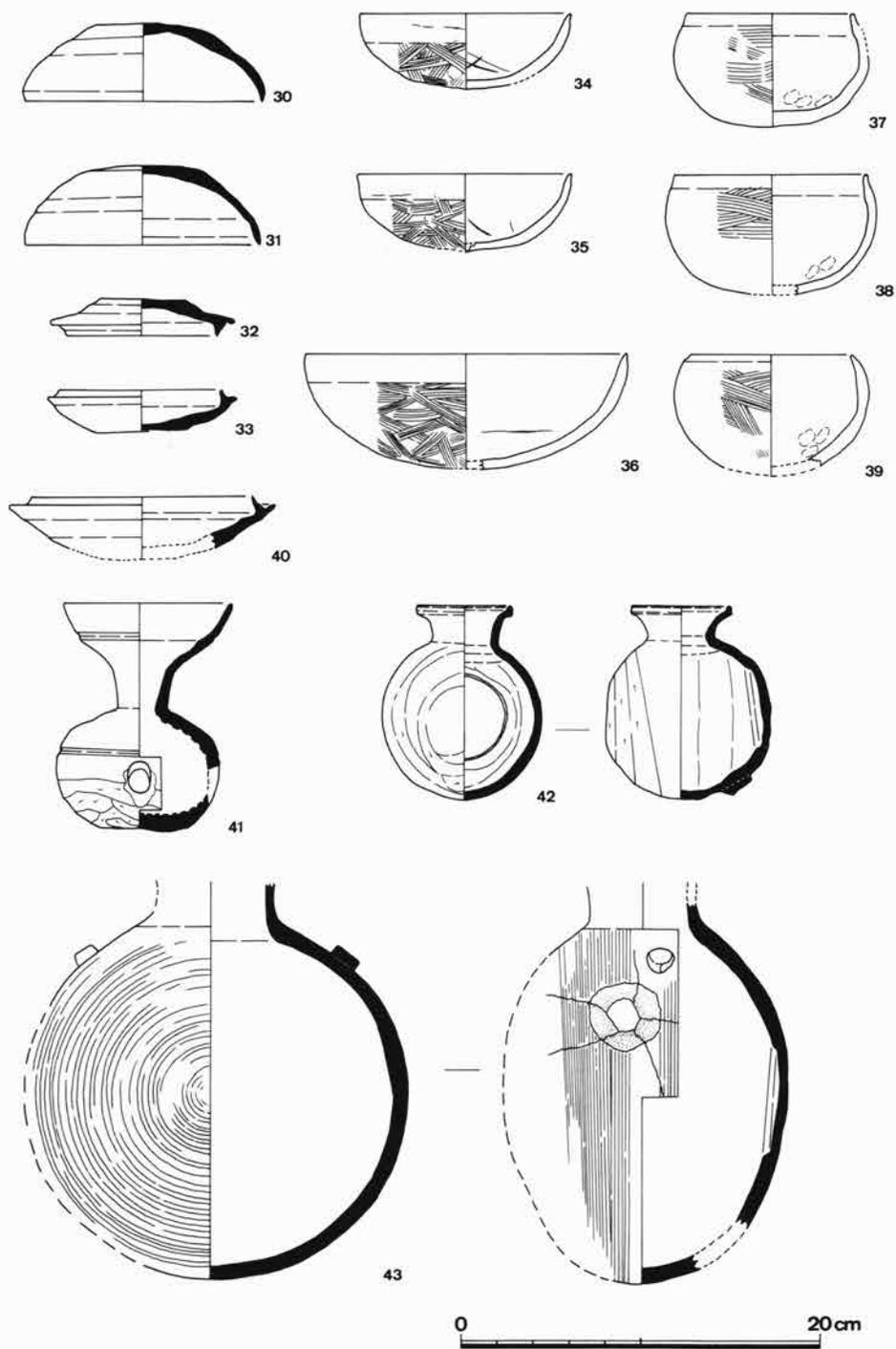
最終追葬時床面からは、須恵器杯蓋2点・蓋1点・杯身1点、土師器杯2点、刀子片、人骨1体分以上が出土した。これらのうち、完形個体で検出されたのは、須恵器杯蓋・蓋・杯身であり、土師器は、いずれも細片化し床面上に散乱した状態であった。このような状態から考えると、これら最終追葬面上で検出された土器群は必ずしも、最終の追葬に伴うものではなく、初葬時のものを攪乱している可能性が高いと考える。また、下層の暗灰白色砂質土中より破片の出土した個体は、31・34・35・37・39・45であり、これらは初葬に伴うものとする。

完形個体の須恵器蓋30は正位で、杯身33を覆うようにして、床面上から検出された。このことから、この杯蓋と杯身は最終追葬時に片づけられたものと判断される。

人骨は、すべて最終追葬時床面上で検出された。腐食が著しく残存状況は良好でない。また、すでに土に帰ってしまったものが大部分で、玄室内北東隅部分を中心に黒変化した人骨の痕跡を確認した。残存している人骨の出土状況からみて、いずれも解剖学的な原位置を留めておらず、2次的な移動を受けているものと判断される。

出土遺物

a. 須恵器(第74図) 玄室内出土の杯蓋・蓋・杯身、前庭部出土の杯身・甕・提瓶2点・甕・壺片がある。このうち、図示できたのは壺・甕片を除く8点である。



第74図 里ヶ谷5号横穴出土遺物実測図(1)

杯蓋1・2は、口径13cm前後・器高4.5cm前後を測る。口径に比して天井の高いプロポーションを呈する。口縁部の形態は、31のほうにやや古い要素を認めることができる。

蓋は、口径8.4cmを測り、小口径の杯身を反転させたような作りである。天井部は平らな面に押しつけることにより、平坦に成形する。

杯身33は、口径8.8cmを測る。口径の矮小化したものと考えられる。胎土は、他の須恵器に比して極めて精良である。底部に焼成時に生じた亀裂が観察される。

杯身40は、細片ではあるが、復原口径12.3cmを測り、杯身33に比べ大形であり、しっかりした立ち上がりをもつ。復原口径12.3cmを測り、杯身33に比べ大形であり、しっかりした立ち上がりをもつ。

甕は、ラッパ状に開口縁部をもつ。頸部は比較的短い。底部は手持ちヘラケズリにより調整される。円孔部の周囲には欠損が認められる。

42は、提瓶として分類したが、胴部は樽形に近い。技法的には提瓶と同様の造りである。

43は、提瓶である。大形品であり、把手はボタン状を呈する。また、胴部側面には、何らかの打撃を受けたことにより生じたと思われる欠損部分があり、この部分を中心に放射状に亀裂が走っている。このことから、この提瓶は、何らかの道具により、故意に破砕されたものと考えられる。

b. 土師器(第74図) 玄室内出土の杯3点・碗3点がある。

34・35は、内外面とも丹塗りの杯である。34は、初葬時の床面直上から出土している。35は、最終追葬時の床面から細片化した状態で検出された。口径11.7cm前後・器高4.3cmであり、外面は下半部ハケ、口縁部はナデにより調整される。また、口縁部には粘土紐の接合痕、内面底部には工具の当て具痕らしきものが認められる。法量・器形・技法・胎土などが共通し、同一産地地であると考えられる。

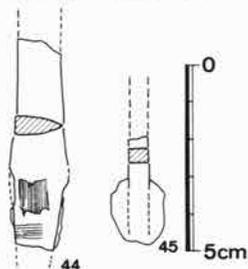
36は、最終追葬時床面から細片化した状態で検出された。杯34・35を大形化したものである。内外面とも丹塗りである。技法上の特色、胎土・色調・焼成は杯34・35と共通する。おそらくは、杯34・35と同一産地地である。

37～39は、内外面丹塗りの碗である。いずれも追葬時床面から細片化して出土した。口径9～10cm・器高6.6cm前後を測る。全体に丸いプロポーションであり、端部を強いナデによりつまみあげる。外面はハケ調整、底部内面には指頭圧痕が観察される。胎土・色調・焼成は杯34～36と共通する。同一産地と推定される。

c. 鉄製品(第75図) 刀子1点、鉄鏃1点がある。

44は、刀子である。茎部から刃部の一部が残る。

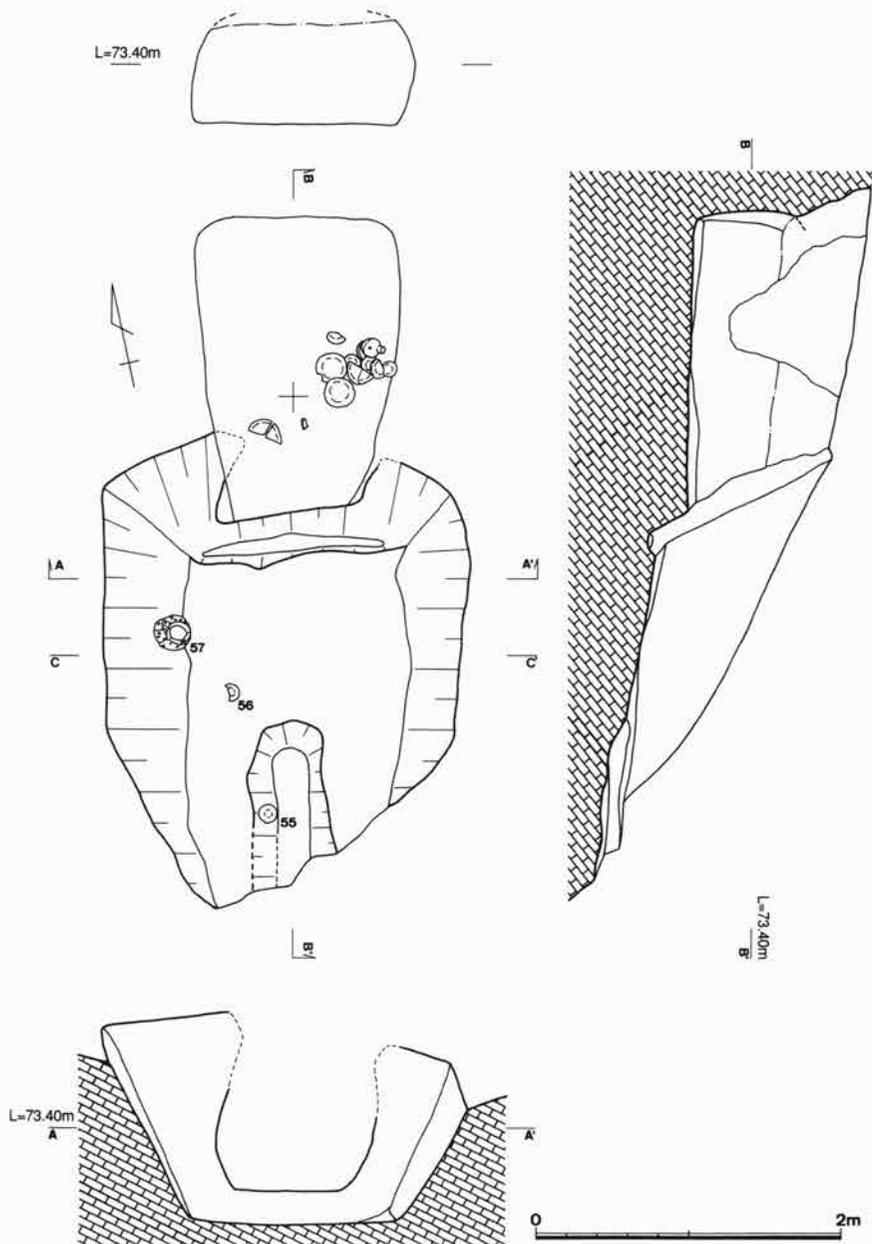
45は、鉄鏃の茎部と思われる。断面方形で、幅0.5cmを測る。



第75図 里ヶ谷5号横穴
出土遺物実測図(2)

⑥ 6号横穴

位置と構造(第76図) 里ヶ谷横穴群の最東端、標高72.5m付近に開口する。5号横穴とは約24mの距離をおく。6号横穴の立地する地点は、小さな支尾根状になっており、6号横穴はその先端に開口する。主軸はN-14°-Eを測り、南に開口する。玄室天井部は、ほぼ

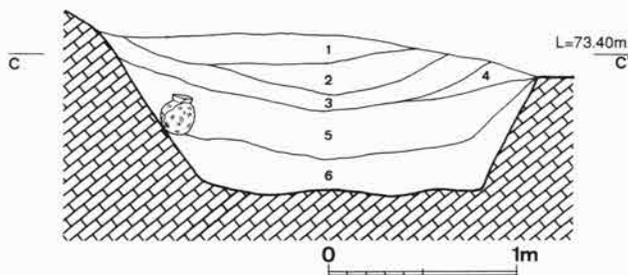


第76図 里ヶ谷6号横穴実測図(1/50)

崩落し、玄室壁面の遺存状況も良好ではない。玄室内出土の遺物はこの崩落天井直下で検出された。

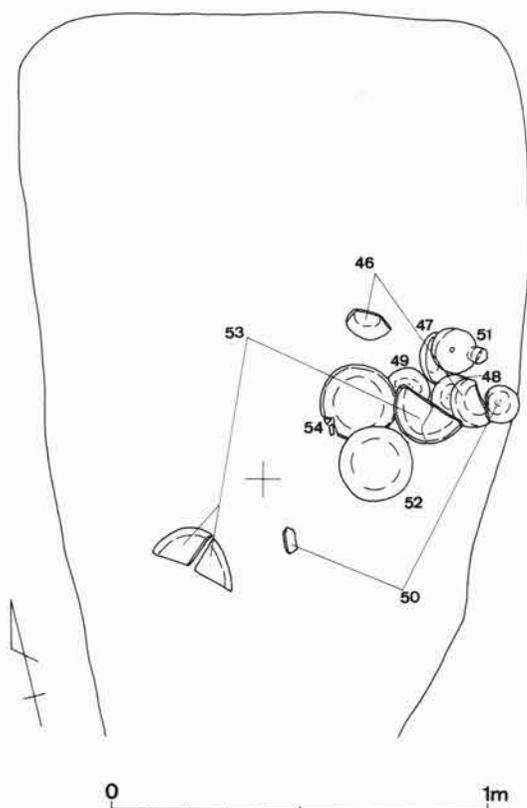
6号横穴は、玄室・閉塞部・前庭部から構成される。玄室は無袖長方形プランを呈するが、3～5号横穴に比べ、玄室長が1.9mと著しく短い。また、玄門部は幅0.75m、奥壁は幅1.3mと、奥壁に向かい若干広がる。玄室床面は奥壁から玄門部に向かい、やや傾斜する。玄室の断面形については天井がすべて崩落しているため詳細は不明である。ただし、現存する奥壁の形状を見るかぎり、カマボコ状を呈していたものと考えられる。なお前庭部床面と玄室床面は22cmの比高で、玄室床面の方が高い。

前庭部は「コ」字状に広がる広い空間を有する。規模は残存長2.2m・幅1.4m・深さ1.0mを測る。また、前庭部先端部分には幅0.5m・残存長1.0mを測る断面「U」字形の排水溝と考えられる溝が設けられる。前庭部埋土は大きく3層に分かれる(第77図)。すなわち、初期流入土である第6層、第2次流入土である第5層、その後の流入土である第1～4層に分離できる。第6層は排水溝埋土



第77図 里ヶ谷6号横穴前庭部土層断面図

1. 淡褐色砂質土 2. 淡黄褐色砂質土 3. 暗灰褐色砂質土
4. 暗灰色砂質土 5. 淡橙灰色砂質土 6. 暗橙褐色砂質土



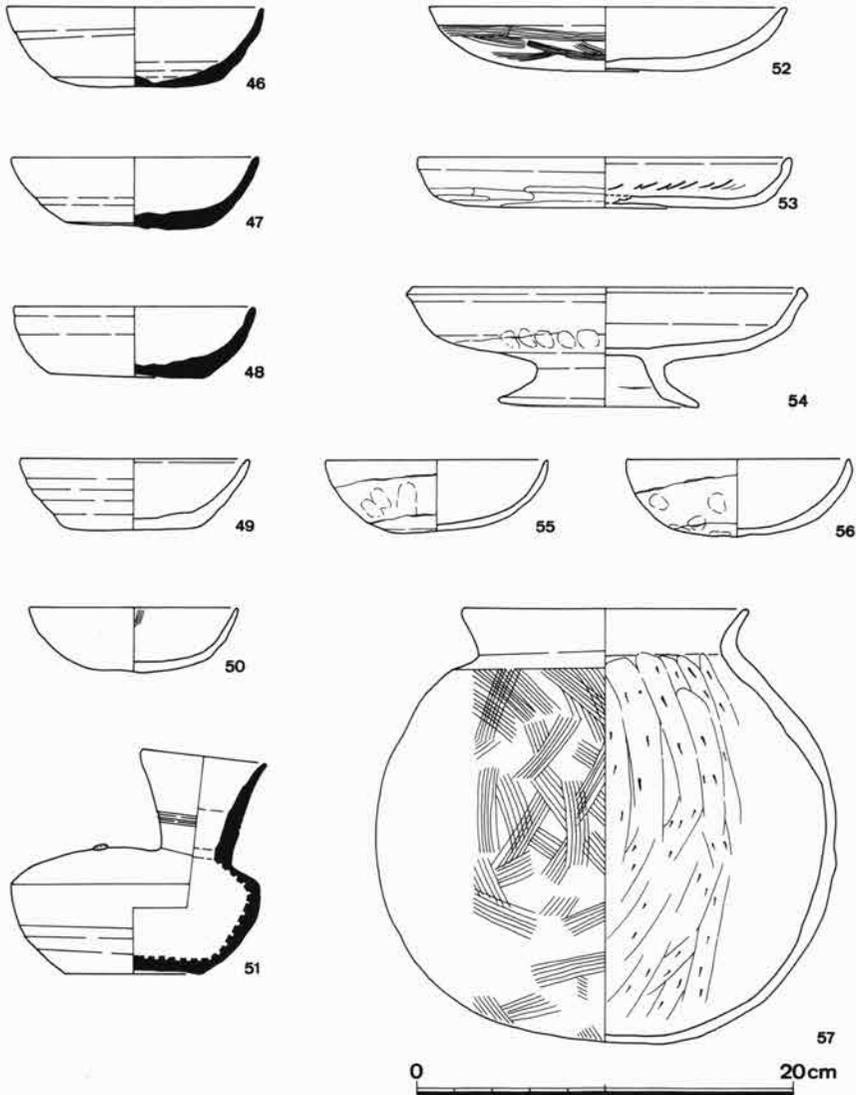
第78図 里ヶ谷6号横穴玄室内遺物出土状況

でもある。前庭部の遺物はこの第6層上面で検出された。

玄室の閉塞は、玄門部と前庭部の境に設けられた溝に板戸をはめ込む構造と考えられる。溝は幅0.2m・長さ1.2m・深さ5cmを測る。また、この溝の幅が玄門部より広いことから、板戸は玄門部を完全に覆っていたと推測される。

遺物出土状況(第78図) 6号横穴からは、須恵器4点、土師器8点の計12点の土器が出土した。人骨については、すべて腐食したためかその痕跡すらも確認できなかった。

前庭部からは、先述のように初期流入土である第6層上面から、土師器3点が検出され



第79図 里ヶ谷6号横穴出土遺物実測図

た。甕は前庭部西壁に正位置で据え置かれ、杯55は排水溝上面で正位、そのさらに北側で杯56が逆位で検出された。この杯56の約50%は細片化し、その破片は第5層中から検出されている。これら前庭部出土土器は、前庭部が一定程度埋没後に置かれたものである。

玄室内からは、須恵器4点・土師器5点が出土した。これらの土器は玄門寄りの東側壁付近に積み上げて、片付けられたような状況で検出された。このうち土師器杯50・皿53、須恵器杯48は割れた状況であった。

出土遺物 6号横穴出土遺物には須恵器4点、土師器8点がある。

a. 須恵器(第79図) 須恵器には杯3点、平瓶1点がある。

46～48は、杯である。立ち上がりを持つ杯の蓋を反転したような形態であるが、48のように平底を意図したものが存在する。胎土・焼成・色調・技法が共通しており、同一生産地であると考ええる。

51は、平瓶である。ボタン状の把手の表現を行う。胎土は精良で、焼成は極めてよい。46～48とは産地が異なる可能性が高い。

b. 土師器(第79図) 土師器には杯4点、皿2点、台付皿1点、甕1点がある。このうち、49・50・52～54は、玄室内出土であり、55～57は、前庭部第6層上面で検出された。

49は、杯である。暗橙褐色の胎土を有する。成形は回転台を利用して行われたものと考えられる。その形態から、須恵器杯を模倣した製品であると考ええる。

50は、杯である。精良な暗橙褐色の胎土を有する。形態は底の丸い椀状のプロポーシオンである。磨耗が著しく調整については不明であるが、内面にわずかに縦方向のハケメが認められる。

52は、内外面丹塗りの皿である。端部はわずかに外上方につまみ出す。胎土は先の2点とは異なり、淡灰白色の胎土である。外面はハケ調整。内面は磨耗著しく調整不明。

53は、皿である。49・50と同じ精良な暗橙褐色の胎土である。平底で、体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端面に面を持つ。内面には1段の稚拙な放射状暗文と、螺旋状暗文を施すが、螺旋状暗文は磨耗が著しく、部分的にしか観察できない。外面下半部はヘラミガキその他はナデにより調整する。

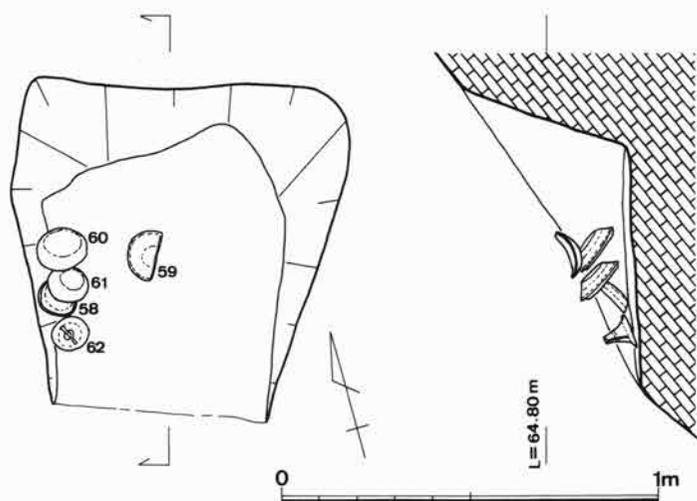
54は、台付き皿である。49・50と同じ精良な暗橙褐色の胎土である。外面に接合痕が観察され、指押さえの痕跡も見受けられる。

55・56は、前庭部出土の杯である。口径11.8cm・器高4cm前後の同形同大のものである。1枚の粘土板を螺旋状に巻き上げることにより成形しており、粘土板の接合痕が明瞭に観察される。外面は丹塗りである。

57は、甕である。球形の体部に短く外反ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。体部最大径は

体部のほぼ中位にある。外面は粗いハケ、内面は縦方向のヘラケズリにより仕上げられる。

6号横穴出土の土師器のうち49・50・53・54は、暗橙褐色の特徴的な胎土であり、同一生産地である可能性が高い。同種の暗橙褐色の胎土



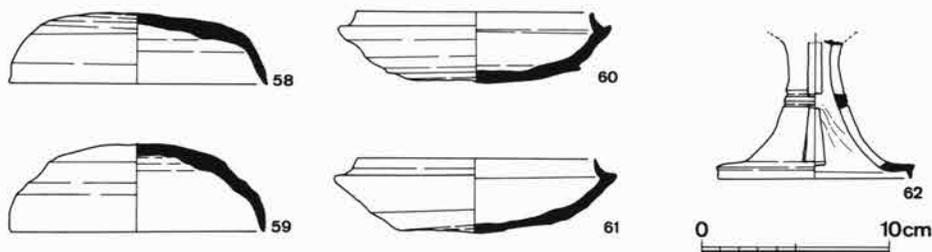
第80図 SX01実測図

を使用する一群の土器は大田鼻横穴群などでも出土している。

⑦SX01

位置と構造(第80図) 4号横穴の下方、標高64.5m付近に位置する土坑である。土坑内の埋土は淡黄褐色砂質土の単層であった。平面プランは隅丸長方形であったと考えられるが、南側は流出してしまっており、本来の形態・規模は不明である。現存する規模は、南北0.9m・東西0.9m・深さ0.4mを測る。

遺物出土状況 SX01からは須恵器杯蓋2点、杯身2点、高杯1点が出土した。杯蓋59は検出面上で、逆位で検出された。その他の須恵器は土坑内西側で検出された。杯蓋58は逆位で、杯身60・61は杯蓋58に被さるような状況で逆位で検出された。高杯62は蓋杯類の南に正位で座った状況であった。この高杯は杯部を欠くが、検出面ですでに一部が露出しており、元来、杯部を欠いたものか、完形であったかは判断できない。



第81図 SX01出土遺物実測図

出土遺物(第81図) SX01出土遺物には須恵器5点がある。

58・59は、杯蓋である。58は天井の平らなプロポーシオンを呈し、天井部は広い範囲でヘラケズリを施す。59は天井の高いプロポーシオンである。焼成不良のためやや軟質である。天井部の調整は磨耗のため、明確に確認できない。

60・61は、杯身である。口径12.5cm・器高3.9cmを測る。底部はヘラケズリにより調整される。法量・胎土・焼成・技法などが共通することから同一産地と考える。

62は、長脚2段透しの高杯脚部である。脚端部は下方へ折り曲げる。脚部中位に2条の沈線を施す。

5. まとめ

今回、調査を実施した里ヶ谷横穴群について若干の整理と、そこから派生する問題を提起しまとめとしたい。

各横穴の築造年代と前後関係 今回検出された、6基の横穴の築造年代を決定するのは検出された須恵器・土師器の形式的前後関係である。特に、蓋杯類の型式差が注視される場所である。

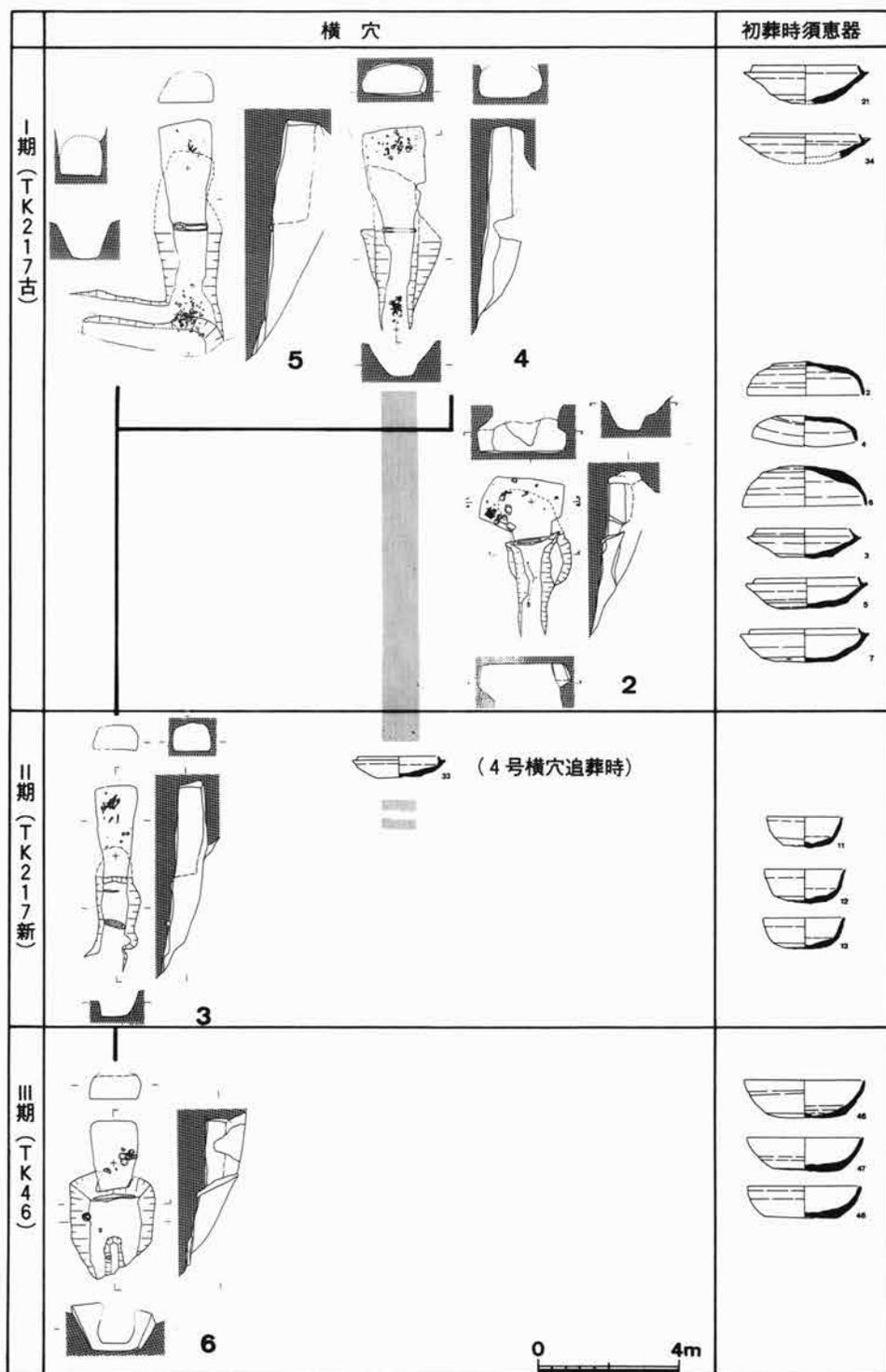
今回の調査検出された須恵器中、もっとも古い型式を示すのはSX01出土須恵器である。SX01出土の蓋杯は、法量も大きく、調整もヘラケズリを施しており比較的ていねいに成形される。これに対して、横穴から出土した立ち上がりをもつ蓋杯では、4号横穴出土の21、5号横穴出土の40などが法量も大きく、成形も粗雑であり、SX01出土蓋杯より後出するものとする。2号横穴の蓋杯は、法量はやや小さく、調整も、ヘラ切り未調整ないしはヘラ切り後粗いナデによる調整を施すなど、より一層簡略化の進んだものと考えられるが、4・5号横穴出土須恵器と大きな型式差はない。

立ち上がりをもつ蓋杯のなかで最も新しい様相を示すのは5号横穴出土の33である。法量は極めて小形であり、追葬に伴うものと考えられる。この杯とセットで出土した蓋30は法量も大きく、形式的には古いタイプに属するものである。したがって、直ちにこの蓋を最も新しいものとするのは危険であり、今後の検討課題としておきたい。

立ち上がりのない蓋杯は、3号横穴出土の11～13が6号横穴出土の46～48に先行する型式を示すものとする。

さて、これら須恵器の検討から得られた結果をもとに横穴の築造順を考えてみたい。

その築造順序は第82図に示すとおり、(SX01)→4・5号横穴→2号横穴→3号横穴→6号横穴の順になるものとする。1号横穴についてはその前後関係を示す資料はないが、2号横穴に破砕された壺片が、ある程度2号横穴の前庭部が埋没した後に持ち込まれてい



第82図 里ヶ谷横穴群変遷図(遺構は1/200 土器は1/8)

ることを考えると、2号横穴に後出する可能性を考えることができる。須恵器の型式をあえて畿内須恵器編年に対応させるならば、口径が大きく、成形のていねいなSX01出土須恵器はTK209型式並行段階に、それに次ぐ4・5・2号横穴出土須恵器は成形が粗雑であり、山田邦和氏の指摘どおりTK209型式にはさかのほらないものと考えられる。^(註117)したがってTK217古段階並行とするのが妥当であろう。3号横穴ならびに4号横穴追葬面出土須恵器はTK217新段階に並行するものと考えられる。6号横穴出土須恵器はこれらに後続する型式(TK46並行期)と考えたい。

横穴形態の変遷 丹後地方では数多くの横穴が6世紀末前後に導入され、変容しつつ8世紀初頭頃まで造墓されている。これらの横穴の形態の変化を考えてみたい。

里ヶ谷横穴群では、最古の横穴として4・5・2号横穴の3基をあげることができる。2号横穴を除き、いずれも、無袖長方形プランの玄室・溝による閉塞施設・墓道状の前庭部など、同形態をとる。大田鼻横穴群・有明横穴群でも最古の横穴は長方形プランの玄室・溝による閉塞施設・墓道状の前庭部をもつ。この点からも、丹後地方における導入期の横穴は無袖長方形プランで墓道状の前庭部を有するものとする。

里ヶ谷2号横穴は極めて特殊な玄室平面形をとる。奥壁平行型の遺体配置をとる点などは、大田鼻横穴群でB形態として分類されたフラスコ状玄室平面の横穴との繋がりを考えることができるかもしれない。^(註118)

ついで築造される3号横穴は前段階同様、無袖長方形プランの玄室・溝による閉塞施設・墓道状の前庭部をもつ。ただ、玄室規模は縮小されている点が注目される。

里ヶ谷横穴群中最後に造られる6号横穴は、玄室長を減じてはいるが、側壁平行の棺配置と考えられる。無袖長方形プランに分類される玄室平面形をもつ。前庭部は拡大化された広い空間性をもつ。玄室平面形こそ異なるものの、大田鼻横穴群でも「コ」字形の前庭部をもつ横穴が7世紀後半代を中心に造営されるようである。

このように見てくると、丹後地方の横穴は導入期には、無袖長方形プランの玄室、墓道状の狭長な前庭部をもつものと、両袖のプランをもつ玄室、墓道状の狭長な前庭部をもつものの2タイプが存在し、次の段階で、大田鼻のようにフラスコ形が主流を占めるもの、里ヶ谷のように無袖長方形を原則とするものと各横穴群ごとの独自性を示すものとなっている。しかし、最終的には玄室長の縮小化、「コ」字形前庭部への変化など、丹後地方で共通する方向性を見いだすことが可能である。今後、周辺地域と比較し、丹後における横穴の伝播経路・被葬者像などについて考察する必要がある。^(註119)

(石崎善久)

付表20 里ヶ谷横穴群出土須恵器観察表

遺構名	器形	法量	調整技法	備考	残存率	図
1号 横穴	壺	口径12.9 体部径21	外面-上半 ナデ 下半 ヘラケズリ 内面-ナデ	内面に接合痕 ロクロ時計回り	40%	1
2号 横穴	杯蓋	口径13.4 器高4.0	天井部外面 粗雑なヘラケズリ 内面 不定方向ナデ		100%	2
	杯蓋	口径12.0 器高3.6	天井部外面 ヘラ切り後ナデ 内面 不定方向ナデ	焼け歪み著しい	100%	4
	杯蓋	口径13.9 器高4.6	天井部内面 不定方向ナデ 外面 ヘラ切り未調整?	焼成不良・磨耗著しい 7とセット	100%	6
	杯身	口径10.8 受け部径13.2 器高3.4	底部内面 不定方向ナデ 外面 ヘラ切り未調整		100%	3
	杯身	口径10.9 受け部径14.2 器高3.5	底部内面 不定方向ナデ 外面 ヘラ切り後ナデ	ロクロ時計回り	100%	5
	杯身	口径10.9 受け部径14.2 器高3.5	底部内面 不定方向ナデ 外面 ヘラ切り未調整+粗い ヘラケズリ	焼成不良 磨耗著しい 6とセット	100%	7
	甕	口径8.7 器高9.8 体部径6.9 孔径1.0	外面-頸部~体部上半 ナデ 体部下半 ヘラケズリ 内面-ナデ	口縁焼け歪み 口頸部に1条、肩部に1条 の沈線 ロクロ時計回り	90%	8
	提瓶	口径4.9 器高14.9 体部径11.8	外面-頸部 ナデ 体部 カキメ 内面-ナデ	口縁部焼け歪み 把手はボタン状 頸部にしぼり痕	100%	9
	甕		外面-ナデ 内面-ナデ	肩部に1条の沈線	細片	10
3号 横穴	杯身	口径8.6 器高3.5	底部外面 ヘラ切り未調整+ヘラ ケズリ 内面 ナデ	11~13は同一生産地 ロクロ時計回り	100%	11
	杯身	口径9.2 器高3.8	11と同工品		100%	12
	杯身	口径9.0 器高3.6	11と同工品		100%	13
4号 横穴	杯身	口径12.0 受け部径14.2 器高4.5	底部外面 粗雑なヘラケズリ 内面	ロクロ反時計回り	100%	21
	椀	口径9.0 最大径10.1 器高4.1	底部外面 ヘラ切り未調整+ヘラ ケズリ 内面 ナデ	最大径部分に浅い沈線	98%	22
	提瓶		外面-ヘラケズリ+カキメ 内面-ナデ	把手は鈎手状	細片	25
	台付 壺	口径10.1 器高18.0 体部径21.6	外面-体部上半 カキメ 体部下半 ヘラケズリ+カ キメ 内面-ナデ	肩部に2条の沈線 ロクロ時計回り	80%	26

	甕		体部外面 タタキ後カキメ 内面 タタキ		20%	27
5号 横穴	杯蓋	口径13.4 器高4.5	天井部外面 ヘラ切り未調整 内面 ナデ	ロクロ時計回り	100%	30
	杯蓋	口径13.2 器高4.4	天井部外面 ヘラ切り後ナデ 内面 不定方向ナデ	ロクロ時計回り	70%	31
	蓋	口径8.4 最大径10.4 器高2.1	天井部外面 ヘラ切り後押しつけ +ナデ 内面 ナデ		100%	32
	杯身	口径8.8 受け部径10.6 器高2.5	底部外面 ヘラ切り未調整 内面 不定方向ナデ		100%	33
	杯身	口径12.3 受け部径14.8	外面-ナデ 内面-ナデ		細片	40
	甕	口径9.4 器高12.7 体部径9.1 孔径1.1	外面-ナデ 体部下半 手持ちヘラケズリ 内面-ナデ	穿孔部周辺欠損 口縁部外面及び肩部に各1 条の沈線	90%	41
	提瓶	口径5.4 器高10.8 体部径9.0 体部厚9.2		ロクロ時計回り	95%	42
	提瓶		外面-ヘラケズリ+カキメ 内面-ナデ	肩部に打撃痕 把手はボタン状	細片	43
6号 横穴	杯身	口径13.4 器高4.2	底部外面 ヘラ切り後ナデ 内面 ナデ		100%	46
	杯身	口径13.1 器高4.0	底部外面 ヘラ切り後ナデ 内面 ナデ		100%	47
	杯身	口径12.8 器高3.8	底部外面 ヘラ切り後ナデ 内面 ナデ		100%	48
	平瓶	口径6.6 器高12.1 体部径13.4 体部高6.8	外面-ナデ 体部下半 ヘラケズリ 内面-ナデ	把手はボタン状 頸部に2条の沈線	100%	51
S X 01	杯蓋	口径13.8 器高3.9	天井部外面 ヘラケズリ 内面 不定方向ナデ	ロクロ反時計回り	100%	58
	杯蓋	口径13.5 器高4.8	天井部外面 ヘラケズリ? 内面 不定方向ナデ	焼成不良 磨耗著しい	100%	59
	杯身	口径12.8 受け部径14.8 器高3.9	底部外面 ヘラケズリ 内面 不定方向ナデ		100%	60
	杯身	口径12.8 受け部径15.2 器高3.9	底部外面 ヘラケズリ 内面 不定方向ナデ		100%	61

付表21 里ヶ谷横穴群出土土師器観察表

遺構名	器形	法量(cm)	調整技法	備考	残存率	図
3号横穴	杯	口径10.4 器高4.9	外面-ハケ 口縁部 ナデ 内面-ハケ 底部 指押さえ		80%	14
	杯	口径13.4	磨耗著しく不明	丹塗り?	10%	23
4号横穴	杯	口径12.8 器高4.3	磨耗著しく不明	内外面丹塗り	20%	24
	杯	口径11.7 器高4.3	外面-指押さえ後ハケ 口縁部 ナデ 内面-ナデ	内外面丹塗り 底部内面に工具痕	80%	34
5号横穴	杯	口径11.8 器高4.3	34と同工品		80%	35
	杯	口径17.8 器高6.8	外面-指押さえ後ハケ 口縁部 ナデ 内面-ナデ	内外面丹塗り	60%	36
	碗	口径9.2 体部径10.9 器高6.6	36と同工品		80%	37
	碗	口径10.4 体部径11.9 器高6.7	36と同工品		60%	38
	碗	口径9.0 体部径11.0	34と同技法	内外面丹塗り	20%	39
	6号横穴	杯	口径12.2 器高3.9	外面-回転ナデ 内面-回転ナデ	回転台土師器 49・50・53・54は同じ胎土	100%
杯		口径11.2 器高3.5	磨耗著しく不明 内面に僅かに縦方向のハケ		100%	50
皿		口径19.1 器高3.3	外面-ハケ 内面-磨耗著しく不明	内外面丹塗り	100%	52
皿		口径19.7 器高2.7	外面-ナデ 下半部 ヘラミガキ 内面-ナデ 放射状暗文1段 +螺旋状暗文	底部に工具痕?	100%	53
台付 皿		口径21.0 器高6.4 底径10.8 杯部高10.8	外面-指押さえ後ナデ 内面-磨耗著しく不明	全体に磨耗 外面に接合痕	100%	54
杯		口径11.8 器高4.0	外面-指押さえ後ナデ 内面-磨耗著しく不明	粘土板巻き上げ 内外面丹塗り	100%	55
杯		口径11.8 器高4.2	外面-指押さえ後ナデ 内面-磨耗著しく不明	55と同工品	100%	56
甕		口径14.9 器高24.3 体部径24.6	外面-ハケ 頸部 ナデ 内面-縦方向ヘラケズリ 頸部 ナデ		100%	57

付 載

里ヶ谷横穴群出土の古人骨

片山 一道(京都大学理学部自然人類学研究室)

<はじめに>

1992年に実施された里ヶ谷横穴群の発掘調査で、第2号、第3号、第4号、第5号の4基の横穴墓から、それぞれ人骨の遺残が発見された。これら人骨の遺存状況は、横穴によって若干の違いはあるものの、概ね悪い。最も保存が良かった第2号横穴墓でも、発見されたすべての骨がひどく壊れており、完形をとどめる骨は、ほとんど皆無といった状況である。また、腐食や風化による骨の損壊も甚だしくて、最小限度の形態観察ができる程度の検査しか叶わず、被葬者の身体的特徴を詳しく解明するまでには至らない。ましてや、第4号および第5号の横穴については、ともかく最悪に近いような保存状態であるため、人骨の存在をかりうじて確認できる程度のことしかできない。

<鑑定目的と方法>

各横穴墓で、複数埋葬の有無を確認し、複数埋葬の場合は埋葬者の数と埋葬順序、埋葬方法、埋葬者の性別と死亡年齢、可能ならば埋葬者の身体特徴などの事項について推測するのが目標である。鑑定は個々の骨の出土状況や個体ごとの骨格の配列を吟味して、それぞれの骨の形態特徴を肉眼観察することによって行った。

<第2号横穴>

この横穴の玄室からは、明らかに複数個体に属する人骨の遺残が出土した。まず玄室に向かって右手(東側)で見つかったのは、頭蓋骨の一部で、左頭頂骨の頭頂結節から鱗縁部を含む断片と、それにつながる側頭骨の断片である。側頭骨は乳様突起から頬骨突起の基部にかけての部分であるが、乳様突起は大きめで、乳突上稜はよく発達し、道上棘も非常に明瞭に認められることから、どちらかと言えば、男性の遺骨である可能性が高い。ここには元来、1個体分の頭蓋骨が存在していて、その頭蓋骨のほとんどの部分が腐食して消失したものであろう。この頭蓋骨遺残の近傍、玄室の入口寄りでは、1本の下顎の大白歯が見つまっているが、これは出土状況から鑑みて、この頭蓋骨からこぼれ出た歯であろう。この第三大白歯には、軽微ではあるが、すでに咬耗が認められることから、すでに萌出し

ていたのは明白で、この歯が頭蓋骨と同一人物のものであれば、頭蓋骨の主は、成人には達した年齢で死亡したことは間違いない。

玄室の奥の中央左寄りと左寄りの位置からは、それぞれ2～3片ずつ、大腿骨の骨体らしき破片と、脛骨の破片のような人骨が見つかった。保存が悪く、左右側の区別はできないが、骨体の軸が東西方向を向いていること、東側の頭蓋骨の破片と似たような残り具合であること、伸展位で横たわっていたと認定できる位置関係で発見されたことから、先の頭蓋骨とこれら長管骨の破片が同一個体(1号人骨)の残存骨で、この個体はそもそも、玄室の奥壁に沿って伸展位の姿勢で横たわっていたのであろうという推測が成り立つ。

脛骨の破片らしきもの手前左寄りでは、奥のほうに顔を向けて、右側が上になって横たわる頭蓋骨が見つかった。これは、明らかに1号人骨とは別個体のもので、ひどく腐食して、殆ど土に帰するほどに脆くなっているが、わずかに観察できる眼窩周縁部や乳様突起や側頭線などの形状から推量するに、男性の遺骨と考えられる。この頭蓋骨(2号人骨)に付随して上顎右の第三大白歯と第二大白歯と中切歯、上顎左の第一大白歯と第一および第二小臼歯と犬歯と側切歯が存在した。このうち第三大白歯は咬耗が弱い、ほかの歯はいずれも強い咬耗を示す。このことから、この第2個体の死亡年齢は、少なくとも熟年程度には達していただろうと考えられる。

玄室の左奥(北西隅)には、ひどく腐食した左側の鼓室部周辺の側頭骨の破片がある。これは2号人骨の一部である可能性が高いが、定かではない。

玄室の左寄りの手前には、ひとかたまりの人骨の集積があり、これらは比較的保存状態の良い群と、それとは明瞭に区別できる保存状態の悪い群とに分けられる。保存状態の良い群には、左右の大腿骨の骨体、左右の脛骨の骨体、左上腕骨の骨体、右鎖骨、左橈骨の骨体、左の5本の中足骨、右の2本の中足骨の骨体、左の距骨、右の踵骨、左の立方骨、数本の肋骨、左の膝蓋骨、さらに指骨や椎骨などの断片や破片が認められる。さらに下顎の左右の側切歯、左の第一大白歯か第二臼歯、中切歯、小臼歯、第二大白歯を釘植する下顎骨の右側の破片なども認められる。

保存の悪いほうの群には、大腿骨の骨体破片、脛骨の骨体破片、上腕骨の骨体の断片、何個かの前腕の長管骨の破片、さらに、数個の同定不能な長管骨の破片が含まれる。この群に属するとおぼしき歯は2本あり、上顎の右の犬歯と下顎の右の第一大白歯である。

保存の良いほうの群にも、悪いほうの群にも、重複する骨や歯は見あたらない。また、同じ群に所属する骨はすべて、同程度の身体サイズの個体のものようである。このために、ここに存在する骨の集積には、保存の良いほうの骨で代表される個体(A人骨)と保存の悪いほうの骨で代表される個体(B人骨)に属するさまざまな骨が混じっている、と考え

るのが妥当である。

A人骨は、上腕骨の三角筋粗面が非常に頑丈であることや、大腿骨の柱状性や湾曲が強いことなどから男性と判別でき、さらに各歯の咬耗がけっこう強いことから熟年あたりで死亡したという推測が可能である。また、四肢の長管骨の骨体部分が短めであることから、頑丈な体つきではあるが、おそらく身長は160cm以下の短躯であったようだ。鎖骨の骨体の遠位寄りの中央部には、生前の骨折の跡を示す骨折痕のようなものが認められる。

B人骨は、いずれの骨もひどく小さい。また、緻密質が大変に薄い。残存する犬歯も第一大白歯も、既に萌出していたのであろうが、咬耗は全くといってよいほど認められない。したがって、これらの歯が萌出する頃の子供の骨で、死亡年齢は、大略10～15歳であったと考えるのが妥当である。しかし性別は不明である。

先の2号人骨は、出土状況や性別や年齢を考慮すれば、このA人骨の頭蓋骨であると見なすことができる。となると、この横穴の玄室の左側には、同時期に片づけられた2体分の遺骨が混在していたものと推論できる。熟年の男性遺体(A人骨あるいは2号人骨)と性別不明の子供の遺体(B人骨)である。保存状態を比較すると、B人骨のほうが遥かに劣るので、こちらのほうが先に埋葬されていた可能性が考えられないでもないが、子供の骨であるから、当然、より早く瓦解していったはずで、両者の間の埋葬の先後関係については断定的な言は慎みたい。いずれにしてもAとBの両人骨は、1号人骨を埋葬する際に、同時に片づけられたはずである。

<第3号横穴>

多くの骨が、玄室の奥、やや左寄りのところで、積み重ねられたような状態で発掘された。これらの骨は、おそらく、何らかの際に片づけられたものであろう。この中には、下顎角や関節突起や筋突起を破損した下顎骨の左側半分、前頭骨の破片、寛骨臼から耳状面にかけての左寛骨の破片、左右の脛骨の骨体の断片、近位部を欠く左腓骨、右腓骨の骨体の破片、大腿骨や上腕骨や前腕骨の骨体破片、左右の踵骨の破片、左膝蓋骨の破片などが同定できる。また歯槽に釘植した下顎の右の第一大白歯、遊離した下顎の左の第一および第二大白歯も残っている。これらの人骨遺残は、すべて同一個体に属する可能性が高い。

寛骨の耳状面や寛骨臼、さらに大坐骨切痕の形状から判断して、この個体は男性であろう。また残された歯の咬耗度や歯根への第二次セメント質の沈着状況から、可能性としては、壮年(20～40歳)あたりで死亡したものと推定できる。

この横穴から見つかった遺骨の中には、明らかに別個体に属する大腿骨の破片、数片の長管骨の破片、上顎の犬歯の歯冠などが混じっている。おそらくは1個体の子供の骨で、

犬歯の歯冠形成は完了しているが、すでに萌出していたか否かは定かではない。おそらくは8～15歳で死亡したのであろう。

<第4号横穴>

基盤の土とかりうじて区別できるほどの骨の塊が数個存在するだけである。腐食した動物骨であることは分かるが、はたして人間の骨かどうか、断定できない。横穴墓であることから人間の骨ではあろうが、そうだとすると、腐食した頭蓋骨や寛骨や長管骨であろう。しかし、それ以外の情報は得られない。

<第5号横穴>

大腿骨の骨体の中央部の断片と、頭蓋骨の頭頂部らしき2枚の破片と、寛骨の微小破片が少々残っている。頭頂骨らしきものの破片は、矢状縫合らしき縫合を介して互いにつながる。この縫合には、内板でも外板でも癒合した形跡は皆無である。もしこれが矢状縫合だとすれば、こうした癒合状態なら、この埋葬者の死亡年齢は若く、せいぜいのところ壮年期ぐらいで死亡したのだらう。

<結び>

1. 第2号横穴では3体分の人骨の遺残が認められる。子供と熟年男性の遺体が先に埋葬され、その後、成人の男性が追葬されたものと考えられる。最後に埋葬された男性は伸展位で埋葬されたようである。先に埋葬された2体の遺骨は、片づけられているために、どのような姿勢で埋葬されたか、分からない。
2. 第3号横穴では2体分の遺骨が認められる。壮年あたりの男性と10歳あたりの子供の骨である。いずれも、明らかに片づけられた状態にあり、埋葬姿勢は分からない。また、なぜ片づけられたのか、その理由を知る手がかりはない。
3. 第4および第5号横穴では、かりうじて人骨の存在を認める程度で、たいした情報は得られず、まとまった所見を述べるにはいたらない。
4. 人骨の遺存状態が最も良かった第2号横穴で得られた埋葬状況に関する知見は、このあたりの地方の同種類の横穴墓での埋葬様式を推量するに、良質なモデルを提供するものであろう。
5. この2号横穴すらも、被葬者の身体特徴を調べるには、保存状態が悪すぎる。わずかに、その中に埋葬された一人の男性について、短軀ではあるが、頑丈なタイプで、年齢の割に歯の咬耗度が強かったことを指摘できる程度である。

(3) 堤谷古墳群

1. はじめに

堤谷古墳群は、熊野郡久美浜町字丸山に所在する古墳群である。現在24基が確認されており、これらは2つの支群に分けることができる。発掘調査は、京都府教育委員会と当センターが分担して行っており、京都府教育委員会が平成元年度から3か年にわたって調査された分はすでに報告されている。ここでは当調査研究センター分について報告する。

2. 位置と環境

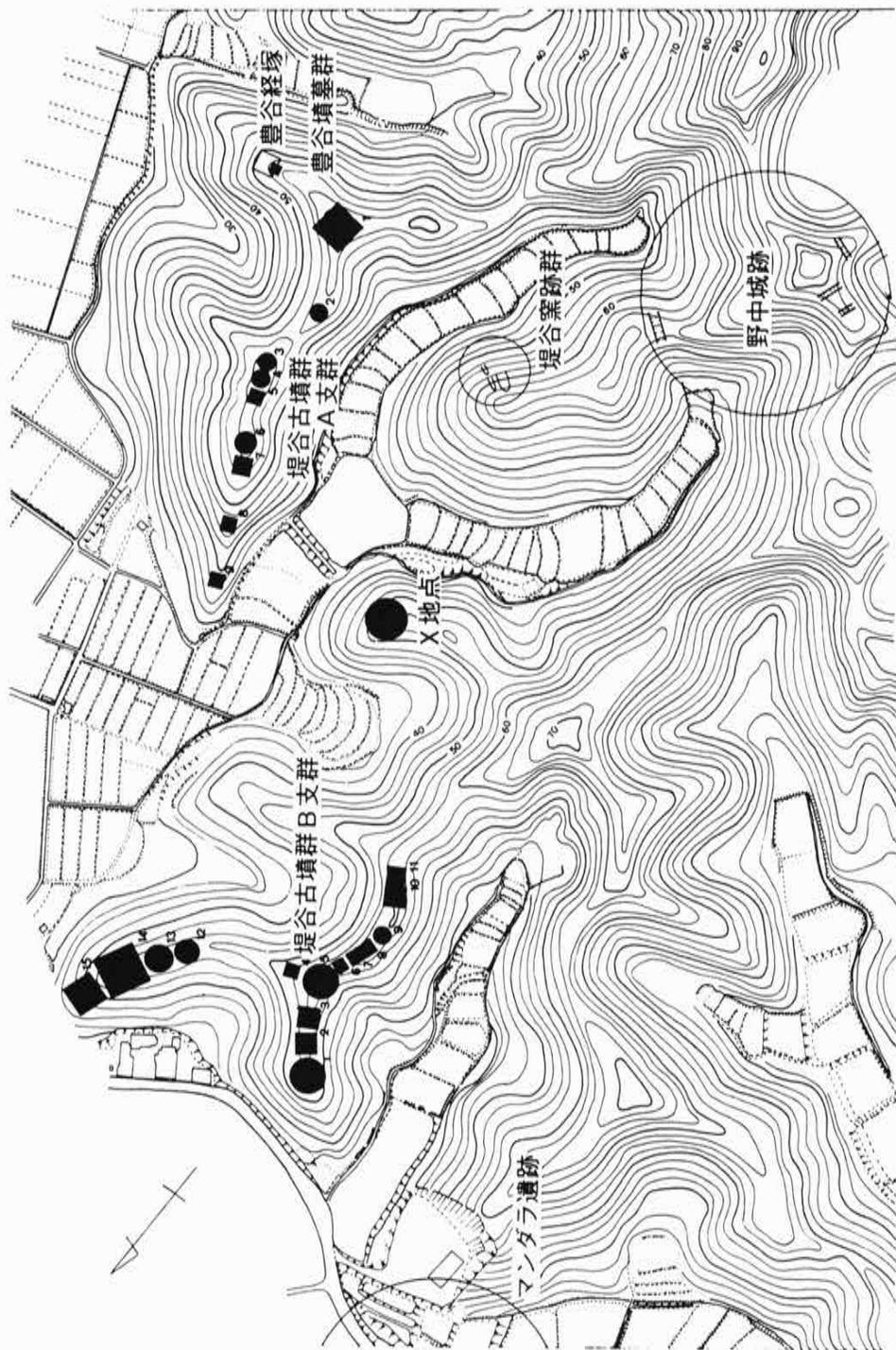
堤谷古墳群が所在する久美浜町は、京都府の西北端に位置しており、西は兵庫県と接している。当古墳群は日本海まで約5kmの地点にあり、これにそそぐ佐濃谷川中流域の左岸の低丘陵上に立地する。

京都府教育委員会が調査したA支群の調査^(注120)では、9基で構成されていたことが判明した。1号墳は、一辺18mの方墳で、A支群最大の規模である。墳丘は丹後地域通有の、地山成形による盛り土をもたない低墳丘である。埋葬施設は、2基検出された。第1主体部は、墳丘中央部に設置された東西(N-74°-W)に主軸をとる二段墓塚である。その規模



第83図 調査地及び周辺の遺跡(1/50,000)

- | | | |
|-------------|------------|------------|
| 1. 調査地 | 2. 女布北遺跡 | 3. 女布遺跡 |
| 4. 竹藤遺跡 | 5. 千鳥ヶ岡遺跡 | 6. 大貝遺跡 |
| 7. 堤谷古墳群B支群 | 8. 北谷古墳群 | 9. 薬師古墳群 |
| 10. 下村岡古墳 | 11. オカガヒ古墳 | 12. 親王の森古墳 |
| 13. 山本古墳 | 14. 蔵谷経塚 | 15. 円頓寺経塚 |
| 16. 元金谷経塚 | 17. 野中城跡 | 18. 女布城跡 |



第84図 国営農地永留6団地平成3年度工区内埋蔵文化財分布状況(1/4,000)

は8.5m×2.6mで、下段は、6.9m×1.4mを測る。検出面から墓壇底面までの深さは、0.9mを測る。墓壇下段に納められた木棺は、全長5.9mを測る長大な組合式木棺である。

出土遺物としては、竪櫛2本、玉類(勾玉1点と白玉49点)、刀子や鉄斧がある。調査担当者によれば、長大な組合式木棺の検出例は丹後では4例あり、築造時期は不明な点が多いが、4世紀末から5世紀中頃とされている。なお、1号墳の下層から弥生時代の墳墓(豊谷1号墓)が確認されている。また、2号墓は直径約10m・高さ約1.5mの規模で5世紀代に営まれた円墳との結果が出されている。

当古墳群の近隣には、下村岡古墳や親王の森古墳などの横穴式石室を内部主体とする単独墳が存在する。また、佐濃谷川を望む低丘陵上には木棺を直葬する多数の古墳群が各尾根に形成されている。今年度調査した女布にある薬師古墳群もそのひとつである。

古代から中世にかけての熊野郡は、経塚が密集する地域でもある。銅筒や土筒などを経筒と考えれば、現在15か所ほど確認されている。特に、円頓寺(山の神)経塚については確認された2基のうち、1号経塚からは嘉応2(1170)年の銘文のある銅製経筒が出土しており、京都府の指定・登録文化財となっている。

3. 調査の概要

1. 第1次調査

堤谷古墳群は、昭和63年度段階ではA支群7基、B支群は1～3、12～15号墳が知られるのみであった。しかし、堤谷古墳群の調査が協議に上がった段階で分布調査を行ったところ、さらに古墳が存在する可能性が考えられた。このため昭和63年度の調査は、まずB支群の調査を行うこととし、この他にB-4号墳から12号墳までの尾根上とA支群の対岸にあるX地点の試掘調査を行うこととした。このうち4号墳と12号墳の中間の尾根は、幅も狭く遺構は確認されなかった。そして4号墳は、5号墳を削り出して築造した際にできた平坦面であることがわかった。また、X地点では十字にトレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

①検出遺構

B-1号墳から3号墳では、調査前の状況では1号墳と2号墳の間の溝が明確でなく、前方後円墳の可能性も考えられたが、調査の結果、円墳1基と方墳1基の古墳群であることがわかった。

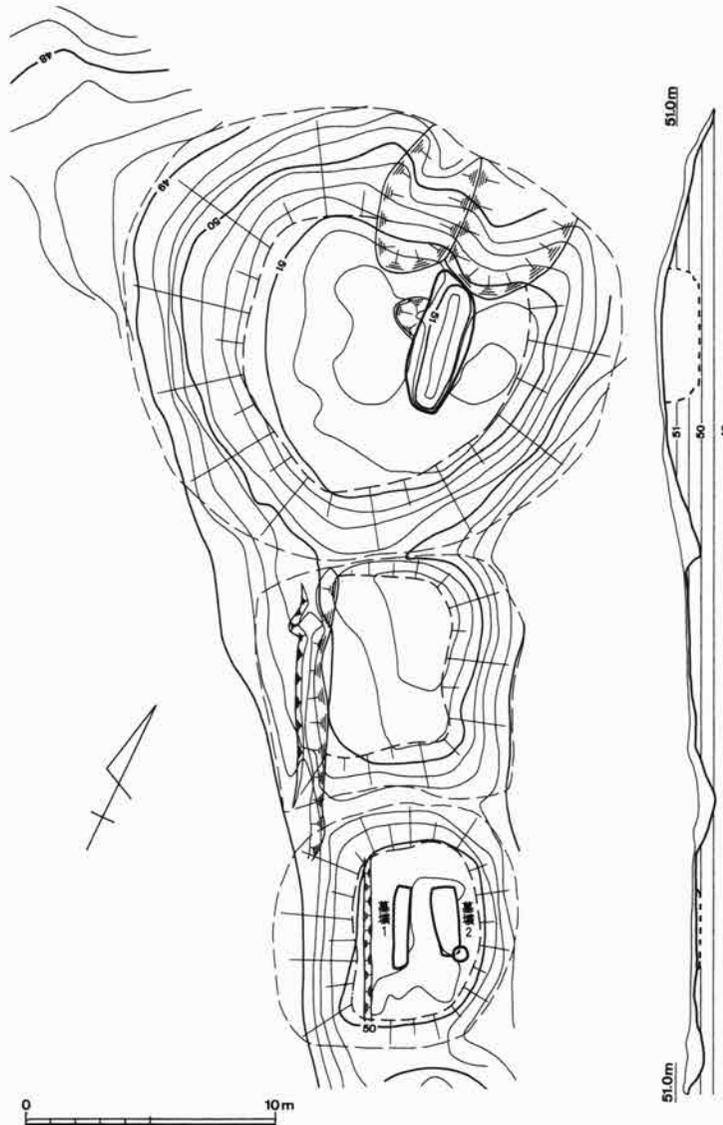
B-1号墳

B-1号墳は、丘陵先端に築造された円墳で、墳頂部の標高は約51.5mである。古墳の北側と東側は明確な傾斜変換点を持たず、丘陵斜面に続くため、墳丘裾を確定することは

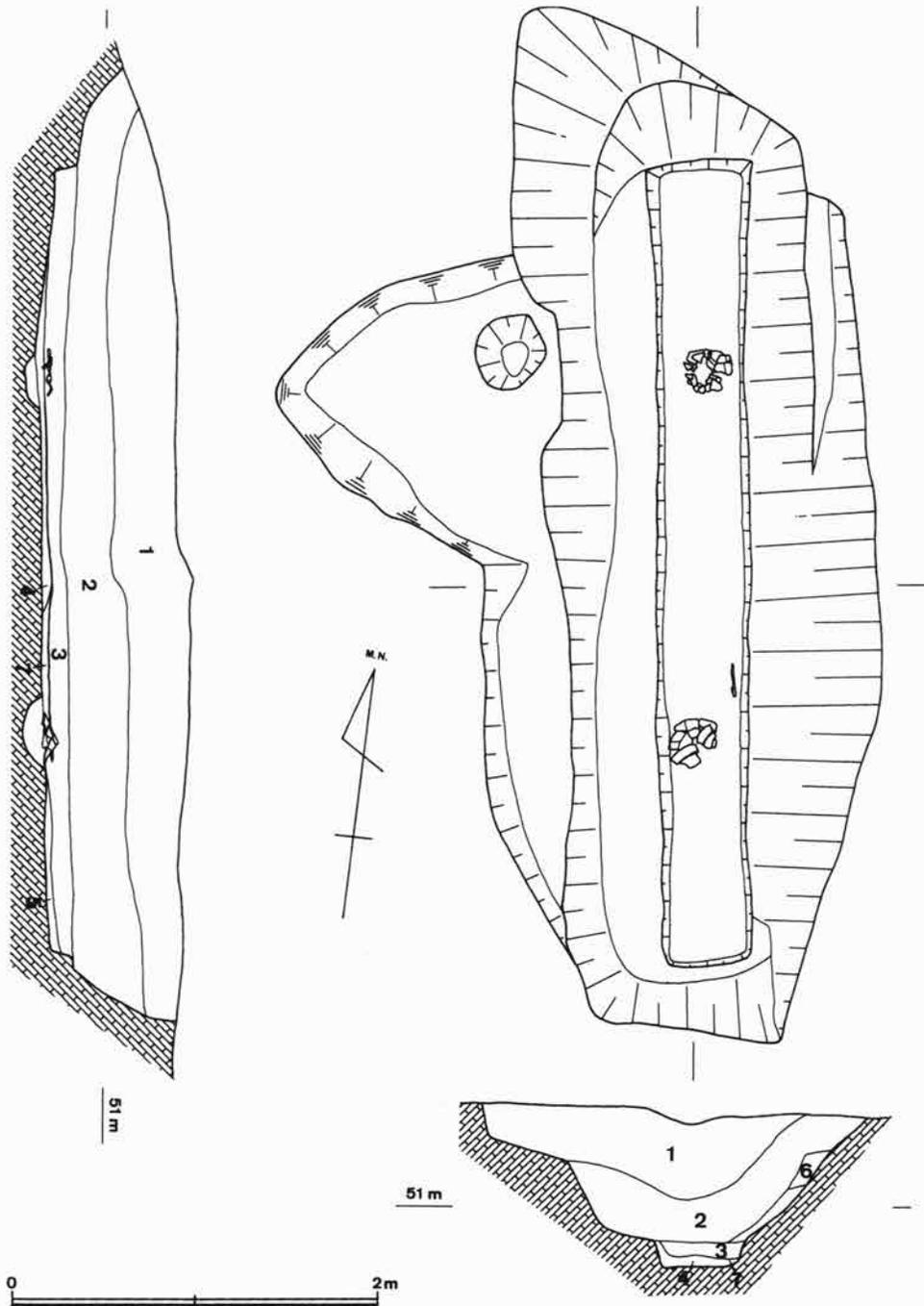
難しいが、直径20m前後と考えられる。古墳の西側にはほぼ方形の平坦面があり、方形区画を持つ可能性もあるが、遺物等は出土していない。この平坦面からの墳丘の高さは、約3mを測る。なお、B-2号墳側の丘陵切断部における墳丘の高さは約1.5mである。

墳丘には、葺石・埴輪等の外部施設は持たない。調査では盛り土も確認されなかったが、B-3号墳の状況から見ると削平を受けている可能性もある。

埋葬施設は墳頂平坦面の中心から東寄りに1基のみ検出した。主軸を南北方向にとり、方位はN-6°-Eを測る。墓壙は北端がテレビケーブルの埋設により攪乱を受けており、正確



第85図 堤谷古墳群B-1～B-3号墳測量図

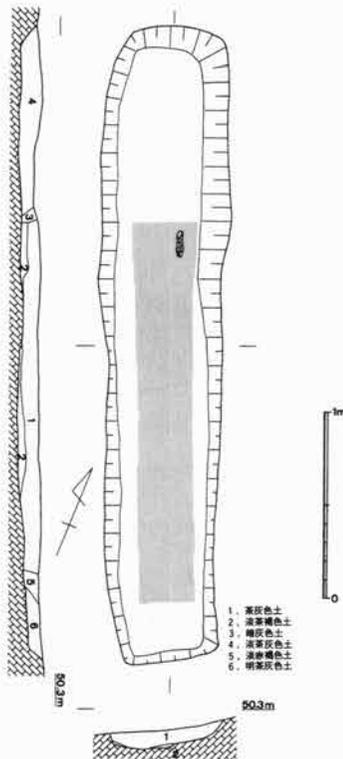


第86図 B-1号墳主体部実測図

- | | | |
|------------|--------------------------|------------|
| 1. 橙茶色土 | 2. 明茶褐色土(橙茶色の粘質土ブロックを含む) | 3. 茶褐色土 |
| 4. 淡茶灰色砂質土 | 5. 淡茶褐色砂質土 | 6. 淡茶灰色砂質土 |
| | | 7. 橙褐色粘質土 |

な規模は知り得ないが、現存長は最大5.7mである。幅はやはり西側に攪乱があるが、墓壙の傾斜から復原すると約1.9m前後となる。墓壙は二段墓壙で、下段の墓壙は長さ約4.4m、幅約0.5mである。深さは検出面から0.8mである。底面の形状は平坦であり、棺は箱形木棺と考えられる。下段底面には2か所の掘り込みがあり、他の古墳の状況から判断すれば木棺小口板を固定する溝と考えられるが、2か所の溝ともその上部で土器が出土しているため、棺台などの別の施設を想定するのが妥当と考える。

棺内からは、土師器の壺2点と刀子1点が出土している。土器は、それぞれ棺の両端から約1.2mの地点で出土しており、北側の壺は口縁を下にして伏せた状態で、南側の壺は口縁部のみを上に向けて置かれていた。土器が出土した高さは、墓壙底面直上もしくはやや浮いた位置で、この土器の高さで棺痕跡と考えられる橙褐色粘質土を検出しているため、枕として使われていた可能性が高い。土器を枕とした場合、2個体出土していることから、2体を交互に埋葬したことが考えられる。これは北側の土器がやや棺の東寄りに、南側の土器が西寄りに出土していること、そして刀子が南側の土器の近くで出土していることもその証左となるかもしれない。しかし現在の資料では確定できず、可能性を指摘するに留めておきたい。



第87図 B-3号墳 墓壙1

B-2号墳

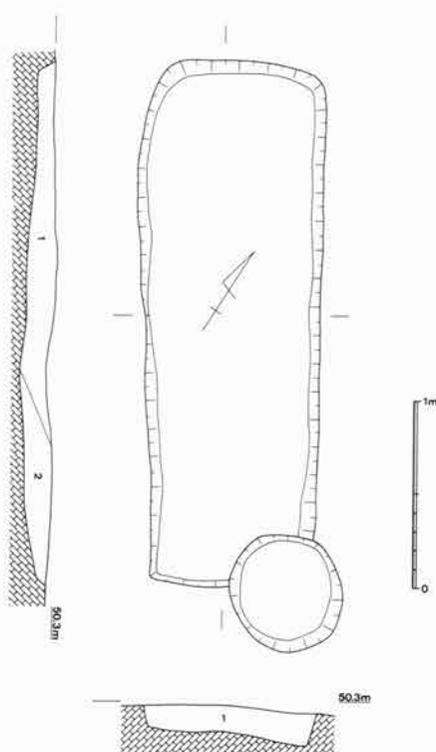
B-2号墳は、B-1号墳の南に隣接し、南北約9.5m・東西約10m・高さ約1.3mを測る。丘陵を切断したのみのもので、盛り土は認められない。また、埋葬施設も検出しなかった。2号墳より現存高の低い3号墳で埋葬施設が確認されていることや、1号墳側の丘陵の切断の状況が、1号墳の整形のみ意識されていることが看取されることから、2号墳は古墳ではなく、1・3号墳の築造の際に削り残されたものと考えられる。

B-3号墳

B-3号墳は、B-2号墳の南にある南北約10m・東西約9.5m・高さ1mの方墳である。これもB-2号墳と同様に丘陵を切断して方形にしたものである。すでに削平を受けており、盛り土の有無は確認できなかった。

埋葬施設は2基検出した。いずれも主軸を南北

方向にとる。墓壙1は、古墳の中心よりやや西で検出したもので、長さ3.35m・幅0.6m、検出面からの深さ0.1mを測る。上部は削平され、棺底のみが残っている状態である。墓壙の底面には、長さ約2m・幅約0.3mにわたってベンガラと考えられる赤色顔料が、墓壙の南寄りに遺存していた。墓壙の断面を観察すると、この赤色顔料の境で縦方向に入る層があるため、赤色顔料の範囲が棺の規模を示すものと思われる。また、墓壙底面の形状から、棺は箱形木棺と考えられる。墓壙内から鉄鏃が1束出土している。出土状態から見て、何らかの容器に入っていたものと思われる。



第88図 B-3号墳 墓壙2

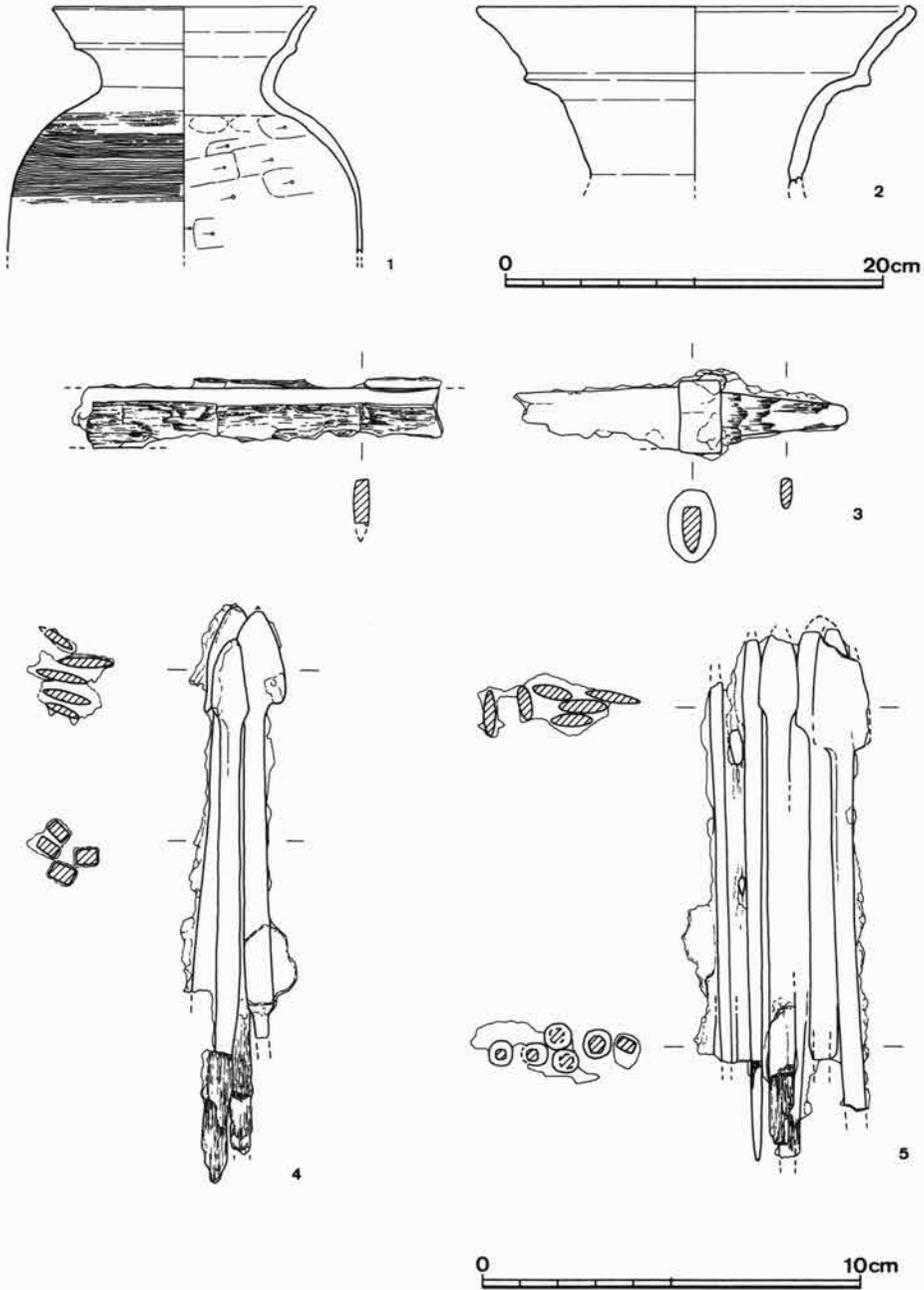
墓壙2は、墓壙1の東にあり、長さ2.5m・幅0.95mを測る。検出面からの深さは0.15mである。墓壙内からは遺物等は出土していない。

②出土遺物

第1次調査において出土した遺物は少なく、1号墳で土器2点、刀子1点、3号墳で鉄鏃1束が出土したのみである。第89図1は、B-1号墳棺内南側から出土した二重口縁の壺の口縁部である。頸部から外反して立ち上がり、屈曲して外傾する口縁につづく。口縁端部はわずかに肥厚する。口縁下部には明確な稜を持つ。調整はヨコナデである。口径は23cmを測る。内外面とも赤色顔料を塗布する。壺の口縁部のみを打ち欠いて、枕に転用したものである。

2は、B-1号墳棺内北側から出土した土器である。卵形の体部を持ち、頸部は外反して上方に開き、わずかに屈曲して口縁につながる。口縁下部は、強いナデを施すことにより、稜を形成している。体部外面は横方向のハケを施し、内面はヘラケズリを施す。頸部内面には指頭圧痕を残す。

3は、B-1号墳棺内で、2のやや北東棺側寄りで出土した刀子である。遺存状況が悪



第89図 出土遺物実測図
 1~3.B-1号墳 4・5.B-3号墳

く全長を復原し得ないが、茎からの全長は20cm以上と考えられる。刀身には木質がよく残っており、鞘に入ったまま副葬されていることがわかる。鍔が残っているため、関の形態は不明である。茎尻は円形である。刀身は中央部付近で幅1.5cm・厚さ5mmを測る。茎は鍔付近で幅1cm・厚さ3mmである。

4・5は、B-3号墳墓場1から出土した鉄鍬である。錆着しているため正確な個体数は不明だが、10点以上と考えられる。矢柄や棺材と思われる木質がよく残る。すべて同じ形態の長頸鍬と考えられ、平根式もしくは尖根式の鍬と考えられる。長さ13.2cm・刃部長2cm・鍬身部長9.2cm・茎長4cmを測る。頸部は断面長方形、茎部は断面円形を呈する。棘は確認できない。

鍬と矢柄との結合には、茎を矢柄に差し込み、その上に樹皮等を巻いて固定させているが、矢柄の木質の下に斜めに走る繊維状のものが観察され、茎を直接差し込むのではなく、何らかの繊維を巻いて固定させている可能性がある。また、鍬を固定させる樹皮の外面が黒色に見える部分があり、漆を塗って固定させているかもしれない。

なお、鍬に付着している棺材と思われる木質には、木目に斜行する幅9mmの木質もしくは繊維質の痕跡が認められる。棺の木質がこの部分だけ断面楕円形に抉れるようになっていたため、棺と鍬の間に置かれていたものと思われる。また、断面形から繊維質のもので鍬が入られていた容器の一部と考えられるが、現状では確定できなかった。

1次調査では出土した遺物には、このほかに奈良時代と考えられる須恵器杯身の底部がある。これは表土中より出土したもので、立ち上がりを打ち欠いて外底面を硯として使用した転用硯である。

③小 結

1次調査では古墳2基を調査した。1号墳から出土した二重口縁壺は、口縁端部を肥厚させた布留式土器の影響を受けたものである。しかし、口縁下部の稜にシャープさを欠き、古墳時代前期の後半に位置づけられるものである。3号墳からは鉄鍬が出土したのみであるため、明確な時期は不明であるが、長頸化した鉄鍬であり、古墳時代中期末もしくは後期初頭の年代が考えられる。

B支群のある丘陵は、基本的には幅の狭い尾根であり、1号墳や5号墳は支丘の派生する尾根の幅の広がった部分を選地して古墳を築造している。5号墳については後で詳述するが、1号墳とはほぼ同時期であり、支群中の最初の古墳の立地はこのようにして決定されたものと思われる。3号墳は、1号墳と5号墳に規制され、その間隙地を利用して築造している。2号墳の場所は当初は古墳を築造するスペースを残し放置されたのであろう。

転用硯については、現在のところ周辺ではこれに関連する時期の遺跡は確認されていな



第90図 B-5～B-11号墳地形測量図

い。しかし、B支群の西側には平安時代の製鉄遺跡と考えられているマンダラ遺跡があり、またA支群の丘陵下の水田では白磁片なども採集されることから、新たな集落遺跡が確認される可能性もある。

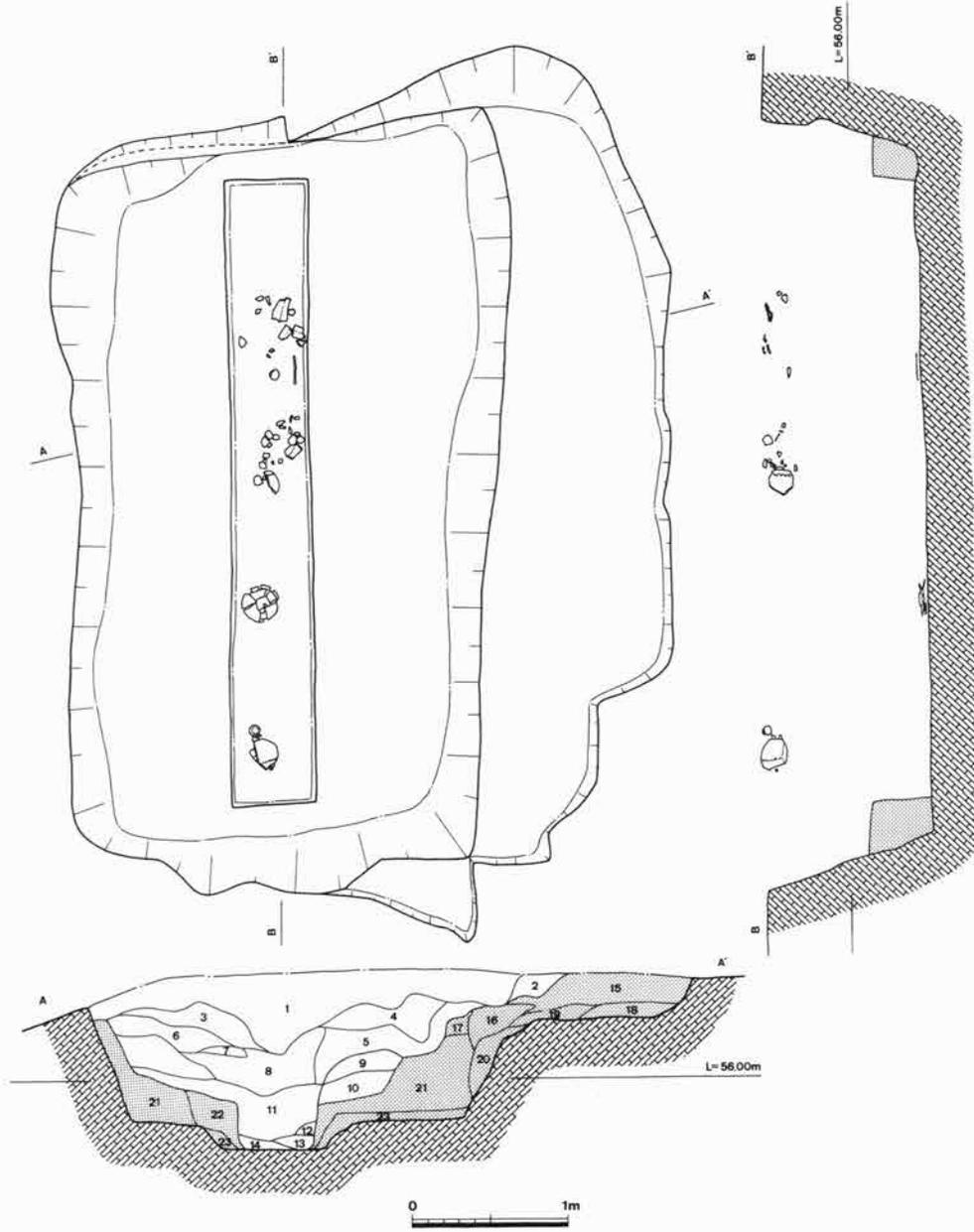
(荒川 史)

II. 第2次調査

第2次調査は、平成3年5月9日～9月13日までの、延べ88日間にわたって実施した。この調査では1次調査で残されていたB-5号墳の調査と、これより以南の丘陵部分の試掘調査を行った。その結果、5号墳では2基の埋葬施設を検出した。また、試掘を行った地点では、溝によって区画された6基の古墳を確認した。試掘地点については、順次トレンチの拡張を行い、5号墳とあわせて計7基の古墳とこれに伴う11基の埋葬施設を検出した。なお、現地説明会は9月10日に行い地元の方々を中心に多数の参加を得た。

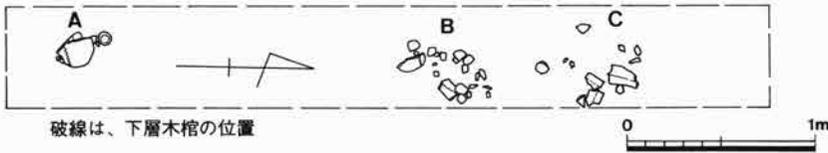
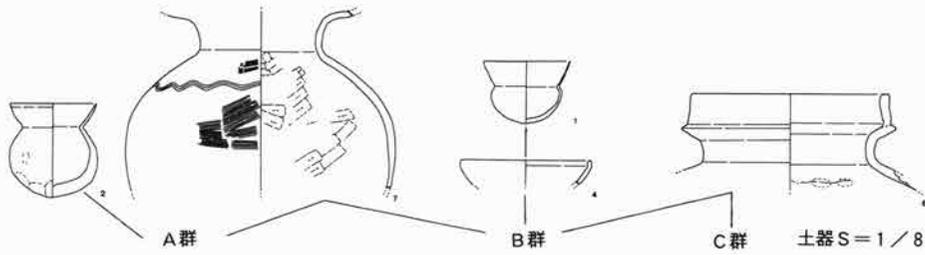
B-5号墳

墳丘 B-3号墳の南に位置する。墳丘平面形は、西側がくぼんだ半月状を呈する。このような不定形な形を示すのは、尾根幅に規制されたものと見られるが、5号



第91図 B-5号墳墓壙1実測図(1/50)

- | | | | |
|----------------------|-------------|---------------------|----------------------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 2. 暗灰褐色砂質土 | 3. 淡褐色砂質土 | 4. 明灰褐色砂質土(地山ブロック含む) |
| 5. 淡灰褐色砂質土(地山ブロック含む) | 6. 暗灰白色砂質土 | 7. 暗橙色粘質土(地山ブロック含む) | |
| 8. 暗灰褐色砂質土 | 9. 淡灰白色砂質土 | 10. 淡赤褐色砂質土 | |
| 11. 明黄褐色砂質土 | 12. 明黄灰色砂質土 | 13. 黄灰褐色砂質土 | |
| 14. 明赤褐色砂質土 | 15. 明褐色砂質土 | 16. 明橙色粘質土 | |
| 17. 暗灰色砂質土 | 18. 明黄灰色砂質土 | 19. 淡黄灰色砂質土 | |
| 20. 黄灰色砂質土 | 21. 淡灰白色砂質土 | 22. 淡乳白色砂質土 | 23. 暗灰白色砂質土 |
- 15~23. 墓壙埋土 1~14. 墓壙埋土



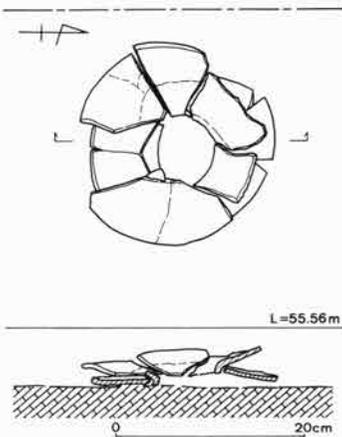
第92図 B-5号墳墓壙1上面遺物出土状況

墳から7号墳にかけて尾根西側が掘り鉢状にずり落ちている点にも原因を求められる。東側の墳丘から直径を復原すると20mの円墳ということになるが、尾根幅から見ると大きすぎ、もともと正円丘に作られたものとは見なしがたい。東方向の眼下にひろがる佐濃谷川流域の平野部からの側面観を強く意識した結果と考えられる。

埋葬施設 中央東寄りで、2基の墓壙を検出した。中央で規模の大きいものを墓壙1、やや南にずれ、小さいほうを墓壙2とする。

墓壙1 (第91図)

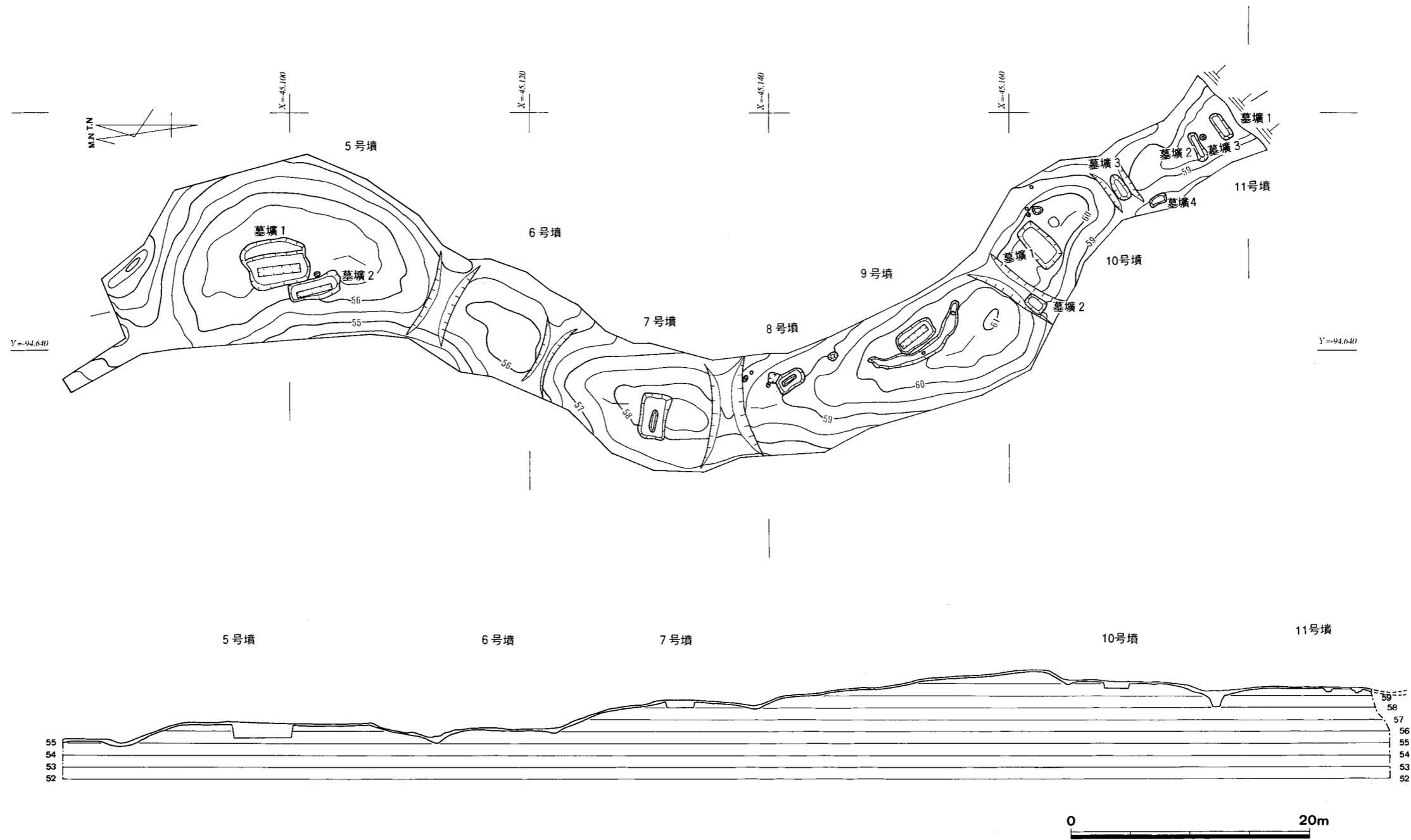
墓壙と木棺 主軸を南北方向にとる平面隅丸長方形の墓壙である。ただし、墓壙東側は深さ30cm程度の掘形がいびつに広がる。これは土層断面から見て、後世の攪乱でなく、墓壙掘削時のものである。この掘り込みを除いて考えると、長軸4.9m・短軸3.0m・深さ1.2mを測る。断面形は長軸方向が1段であるが、短軸方向は中央部を15cm程度掘りくぼめる二段掘りである。



第93図 棺内土器出土状況

木棺は箱形を呈し、長さ4.1m・幅0.5mを測る。後述する転用枕の存在から南頭位の埋葬とみられる。

遺物出土状況 (第92・93図) 遺物は、墓壙上面の土器群と木棺内のものがある。墓壙上の土器群は墓壙埋土第1層中にあり、本来墓壙上面におかれたものが木棺の腐植陥没により、若干落ち込んだ状態である。平面的な位置は木棺のほぼ真上にあたり、3つのプロッ



第94图 B-5~B-11号墳墳丘測量図(1/400)

クに分かれる。器種と個体数は、壺(3個体)・小形丸底壺(1個体)・布留式甕口縁部(1個体)である。小形丸底壺と小形壺(21)は完形であるが、その他は破片として置かれ、完形に復原できない。

棺内遺物としては鉄鉈1点が、棺の北寄りの東側板付近に置かれている。このほか、南寄りには鼓形器台1点が底面に接して置かれている。口縁部の一部を打ち欠いており、転用枕として使用されたものと考えられる。

出土遺物(第104図20~23・25・26、第103図17) 1は、小形丸底壺である。体部は肩が張る扁平なもので、外上方に直線的にのびる口縁部を持つ。口径8.8cm・器高6.4cmを測る。胎土は精良で精製品である。2の小形壺は、胎土・作りともに粗い粗製品である。器壁は分厚く、底部には指による圧痕が残る。4は、口縁端部を内面に肥厚させる布留式甕である。口縁部の一部のみ出土した。6・7は、複合口縁を持つ壺である。6の口縁屈曲部は外方へ鋭く突出させる。やや内傾気味に直立する口縁の端面には、浅い凹線が施される。7の口縁部は、欠損しており不明である。やや肩の張った体部の外面は、ハケ目が残り、肩部には波状文が施される。3の鼓形器台は、底径と口径がほぼ等しく、屈曲部の稜は丸みを帯びる。また、口縁径の約1/3は焼成後に打ち欠かれており、転用枕として遺骸頭部を安定させるための所作とみられる。17の鉈は、2点が鑄着したものと思われるが鑄が著しく明確でない。

墓壇2(第95図)

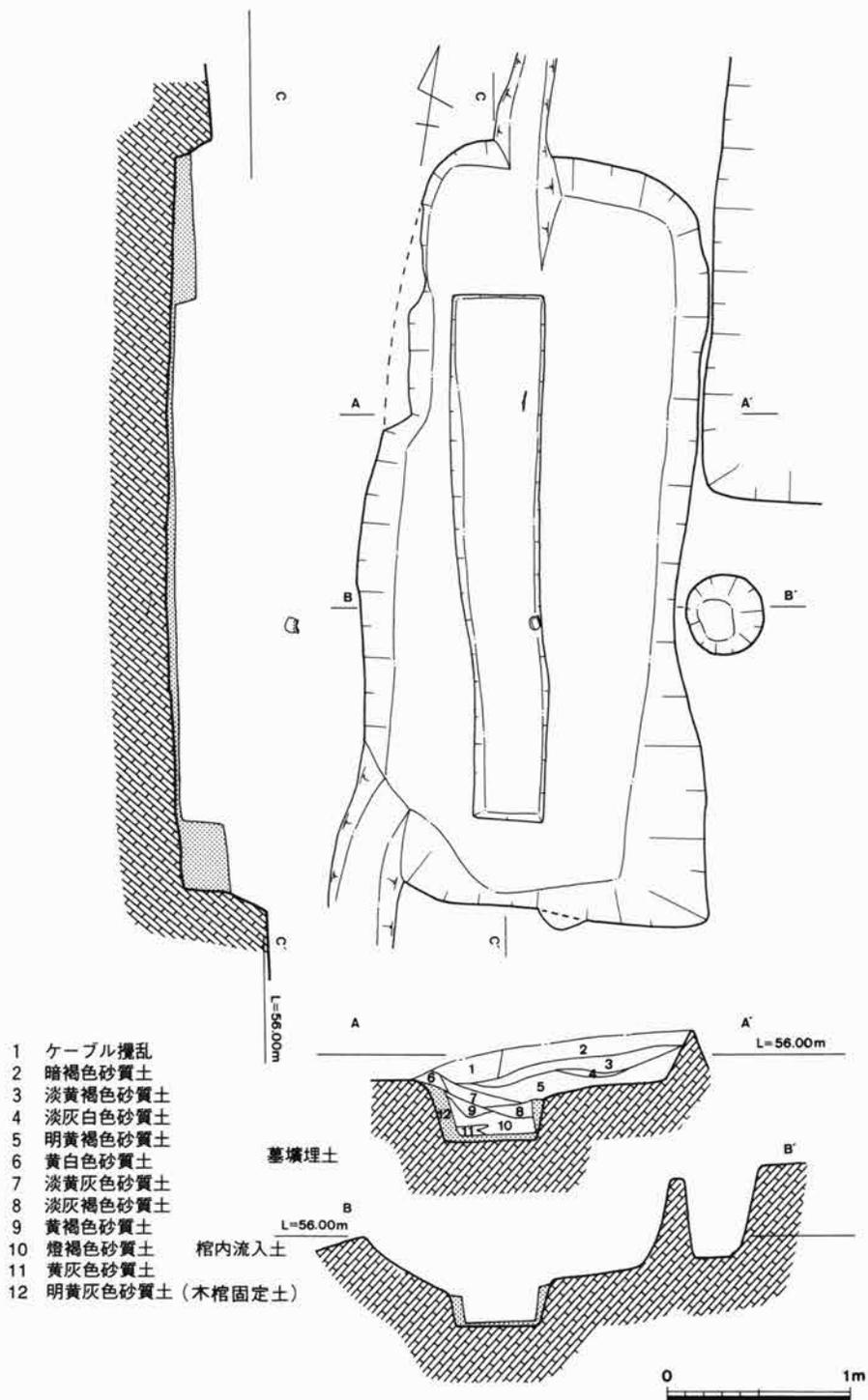
墓壇と木棺 主軸を南北方向にとり、平面隅丸長方形を呈する墓壇である。墓壇掘形の断面形は、短軸方向が木棺埋納部分を二段にくぼめるのに対し、長軸方向は墓壇1と同様に段を設けない。墓壇底面は平らであり、箱形の木棺を想定でき、長さ2.8m・幅0.4mを測る。

また、墓壇2の東側には直径40cm・深さ50cmを測る円形のピットがある。墓壇2の東長辺は、このピットを避けるように西側に凹んでいる。このことから、墓壇2を掘削する段階にはこの部分に木柱等が立てられていた可能性が考えられる。

遺物出土状況 墓壇上面から土師器の小形壺1点が出土した。墓壇埋土の第1層中にあり、墓壇を埋め戻した後に完形のまま置かれたものといえる。木棺内からは底面の北寄りで、鉄鉈1点が出土した。

出土遺物(第103図18、第104図27) 土師器の小形壺である。丸みを帯びた体部に、短く内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。胎土はやや粗く、作りも粗雑な粗製品である。

鉄鉈は、刃部途中で折損している。現存長は9.2cmを測る。



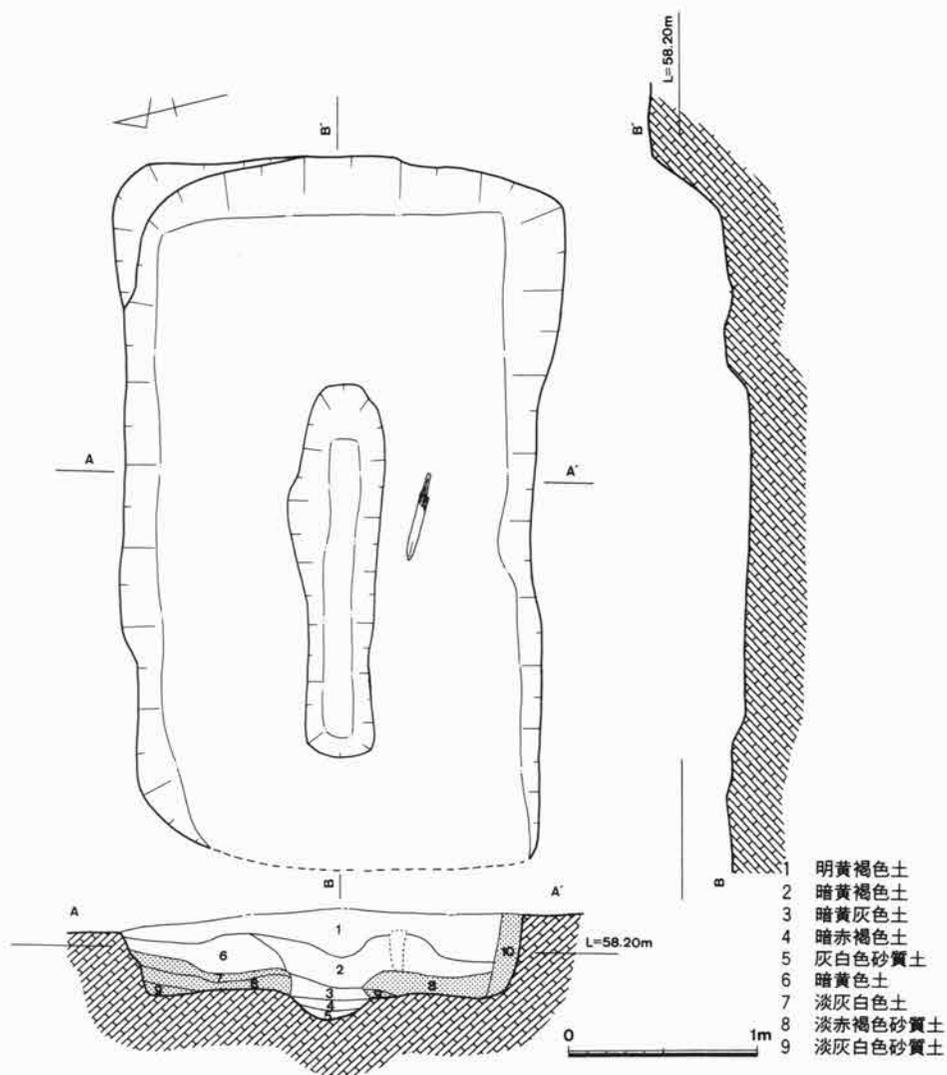
第95図 B-5号墳墓墳2実測図(1/40)

B-6号墳

B-5号墳の南に位置する。埋葬施設は存在しなかったが、墳丘の南側を尾根主軸に直交する溝により区画しているため、古墳として理解する。当初より埋葬施設がなかったものかどうかは判断しがたいが、墳丘の東半部が傾斜面を持ち、ずり落ちている可能性があるため本来は埋葬施設があった可能性もある。

B-7号墳

墳丘 B-6号墳に続く南側に位置する。B-6号墳との比高差は約2.5mである。墳丘の南側は直線溝で区画されており、南北約12m・東西約10mを測る。



第96図 B-7号墳墓塚実測図(1/40)

埋葬施設

墓壙と木棺 墳丘のほぼ中央に、尾根主軸に直交する墓壙を1基検出した。墓壙平面形は、隅丸長方形であるが、西側は墳丘自体が流出しており、墓壙もよく残っていない。現状の規模は、長さ3.8m・幅2.2mを測る。墓壙中央部には、幅50cm・長さ200cmの舟底状を呈するくぼみ(棺床)があり、土層の観察結果からも、底面が丸みを帯びる木棺の存在が想定できる。

遺物出土状況 木棺外の南棺側部から鉄剣1口が出土した。鉄剣は、切っ先を西に向け、木棺主軸にやや斜行しておかれている。木棺を安置した後、棺側部に配置し、木棺を埋め戻す手順が想定できる。前期古墳において、粘土槨の木棺外棺床上に鉄製武器を配置することと共通するものである。

出土遺物(第103図19) 鉄剣1口がある。全長44.6cmを測る。剣身には鞘の木質が遺存している。茎にも木質が確認できるが、端部付近には布の痕跡が遺存している。

B-8号墳

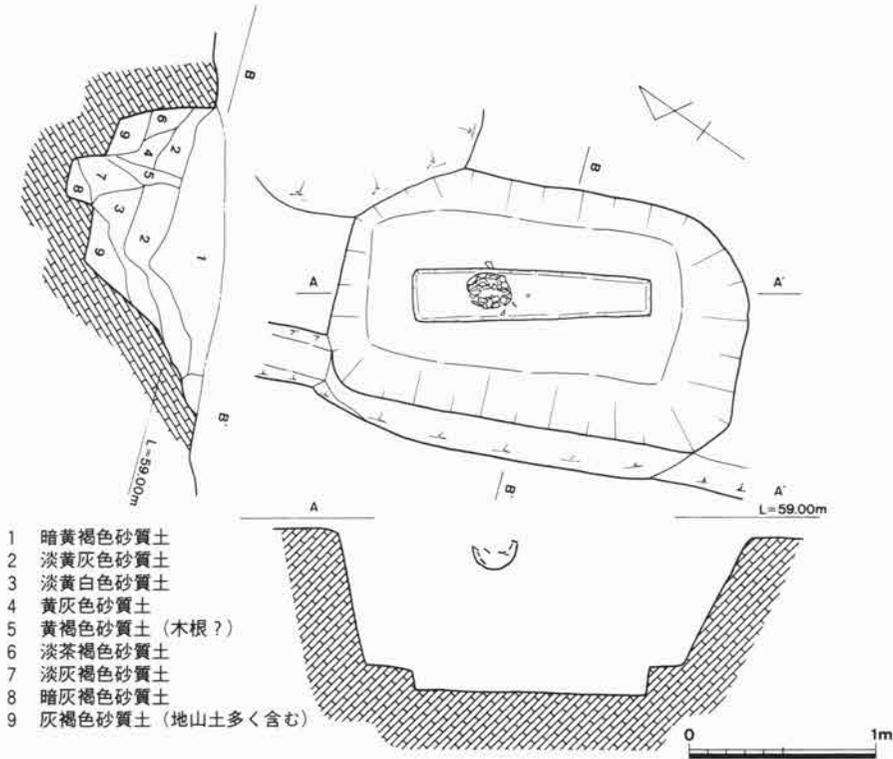
墳丘 B-7号墳の北側に位置するが、溝等による区画がないため、墓域を有する1基の古墳として捕えがたいが、便宜的にB-8号墳として記述する。

埋葬施設

墓壙と木棺 墓壙は平面隅丸長方形で、主軸は尾根に平行する。断面形は、長軸・短軸ともに地山を二段に掘りくぼめる。平面規模は、長さ2.2m・幅1.3mを測る。墓壙底面は平坦で、下段掘形も長方形であるので小形の箱形木棺かと考えられる。ただし、この場合木棺幅が外法で20数cm程度しかないことになり、棺材幅を考慮すると、小児とはいえ埋葬可能か問題であり、側板をもつ木棺を想定するには疑問が残る。あるいは、蓋板材のみが架けられていた可能性もある。

遺物出土状況 墓壙検出面から土師器甕1点・土師器杯片1点・須恵器片2点が出土した。これらは墓壙を埋め戻した後に置かれたものであり、甕は完形正位、他2点は小片であるため本来の状況は不明である。

出土遺物(第104図24・28・30・31) 31は、須恵器有蓋高杯の脚部である。長方形の1段透かしを4方向にもつ短脚の高杯である。30は、須恵器直口壺の口縁部である。口径10.8cmを測る。24は、土師器杯である。口径11.7cmを測り、底部は丸みを帯びる。28は、土師器甕である。口径15.4cmで、到卵形の体部に「く」の字状の単純口縁を持つ。内面は頸部までヘラ削りを行い、外面には粗いハケ調整を行う。体部中位には焼成前と見られる円孔があげられている。



B-9号墳

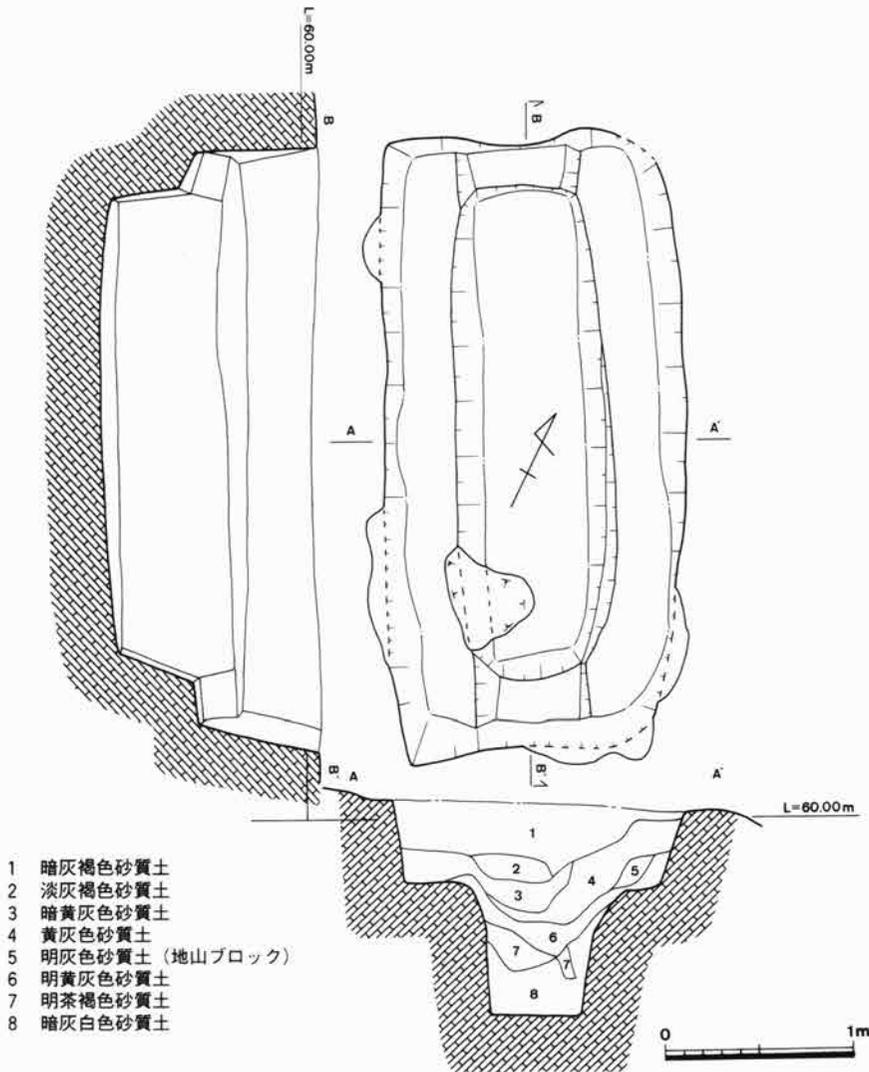
墳丘 B-8号墳の北に位置する。現状の尾根稜線からは東にずれた斜面上に、弧状を描く溝によって区画される。溝は、最大幅1m・深さ15cmを測る。溝中より、土師器壺口縁部の破片が1点出土した(第104図29)。他の古墳とは区画溝の形態が異なるが、後述するようにこれはB-8号墳とセットで捉え、時期差によるものと考えられる。

埋葬施設

墓壇と木棺(第98図) 墓壇主軸は、尾根方向と平行にとり、隅丸長方形の平面形を呈する。規模は、長さ3.2m・幅1.6mを測る。断面形は、二段に掘り込むタイプであるが、下段掘形の両小口側には、1段目壁面に達する浅い掘り込みがある。木棺は、箱形木棺と想定されるが、土層の断面観察では積極的に木棺の存在を裏付ける根拠はない。したがって、木棺を使用していない可能性も残る。墓壇内からの出土遺物はない。

B-10号墳

墳丘 B-9号墳の南に位置している。南側を直線溝で区画しており、南側も稜線上に削り出し、面を持ち、11号墳との共有溝で区画される。南北約12m・東西約9mの長方形を呈する。



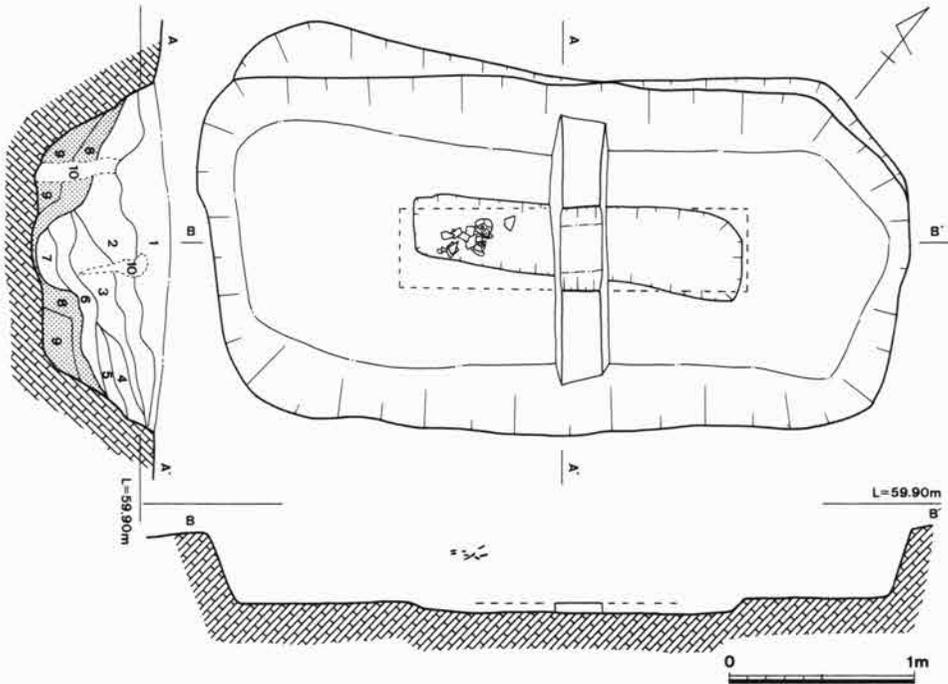
第98図 B-9号墳墓墳実測図(1/40)

埋葬施設

墳丘はほぼ中央部で、主軸を尾根方向に直交させる墓壇を1基設ける。このほか、南北の溝内にそれぞれ1基ずつ土壇墓を設けている。

墓壇1 (第99図)

墓壇と木棺 墓壇平面形は隅丸長方形を呈し、底面中央部にB-7号墳と同様の舟底状のくぼみを持つ。木棺も底面が丸みを持つものが想定できる。墓壇の規模・形態ともにB-7号墳とほぼ同じである。

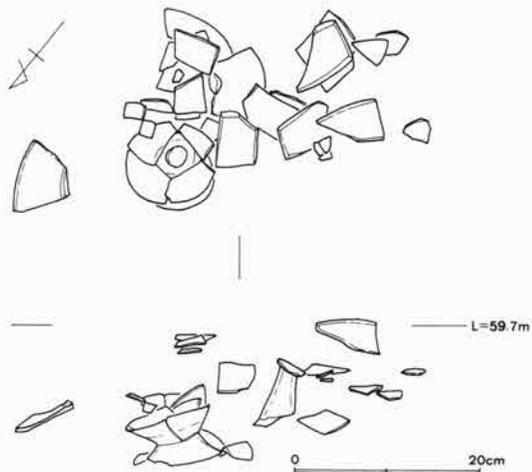


第99図 B-10号墳墓墳1実測図(1/40)

- | | | |
|--------------------|------------|-------------------|
| 1. 暗灰白色砂質土 | 2. 灰褐色砂質土 | 3. 暗黄灰色砂質土 |
| 4. 灰白色砂質土 | 5. 明黄灰色砂質土 | 6. 暗黄褐色砂質土 (墓墳埋土) |
| 7. 暗茶褐色砂質土 (棺内流入土) | 8. 淡灰褐色砂質土 | 9. 灰白色砂質土 |
| 10. 根の攪乱 (棺固定土) | | |

遺物出土状況(第100図) 墓墳
 検出面において土師器3点(高杯・鼓形器台・小形器台)が出土した。小形器台が完形で出土したほかは、割れていたものの破片はまとまっており、本来は3点ともに完形で置かれていたものかと考えられる。

出土遺物(第103図13~15) 15
 の高杯は中空の脚柱部に、やや深い杯部を持つ。杯底部には上方から粘土を充填しており、充填した



第100図 B-10号墳土器出土状況(1/8)

粘土の下端面には、棒状工具の刺突痕が残っている。脚柱中位には、相対する2か所に円形の穿孔が認められる。14の鼓形器台は、口径16.2cm・器高9.3cmで口径が器高を凌駕する。稜は明瞭でなくわずかに丸みを帯びている。13は小形の器台であるが、受け部はやや丸みを帯びている。口径10.1cm・器高6cmを測る。脚部内面がナデで仕上げられる以外は、ていねいなヘラ磨きが施される。

墓墳 2 (第101図)

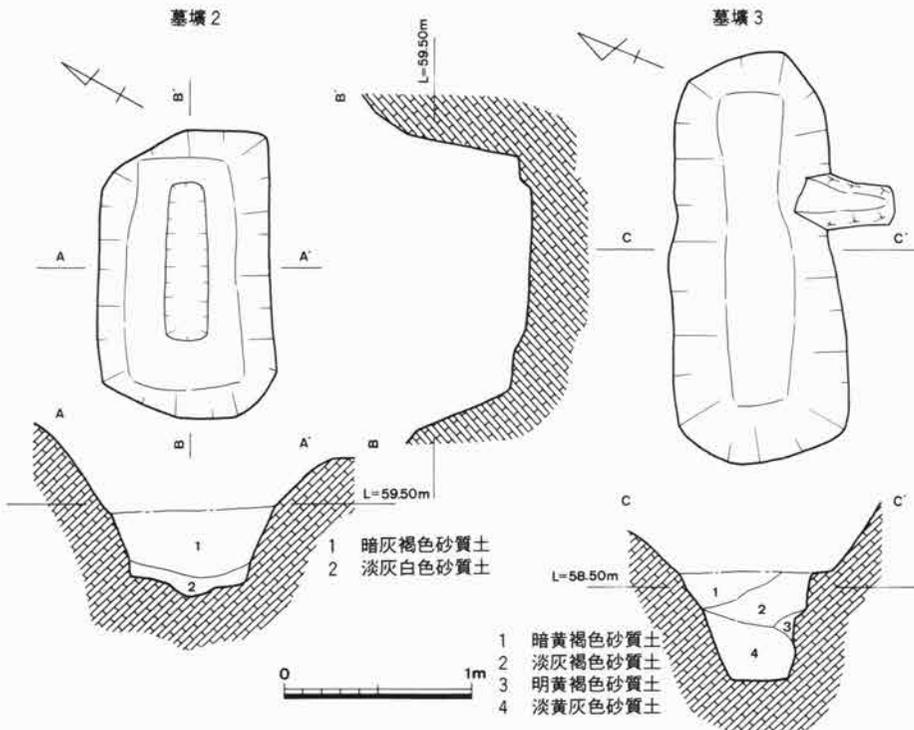
10号墳北側の区画溝内西寄りに位置する。墓墳平面形は隅丸長方形で、墓墳断面形は1段で、底面に舟底状の浅いくぼみを持つ。出土遺物はない。長さ1.5m・幅0.9mを測る。

墓墳 3 (第101図)

10号墳の南側区画溝内の中央に位置する。墓墳平面形は、短辺が丸みを帯びる隅丸長方形である。断面は各辺ともに1段掘りである。出土遺物はない。長さ2.2m・幅0.9mを測る。

B-11号墳

墳丘 10号墳の南にあり、北側は直線溝で区画される。南側はすでに削平を受けていたため、明らかではない。東西4m・南北7m(推定)程度の規模を持ち、長方形を呈する。



第101図 B-11号墳墓墳 2・3 実測図(1/40)

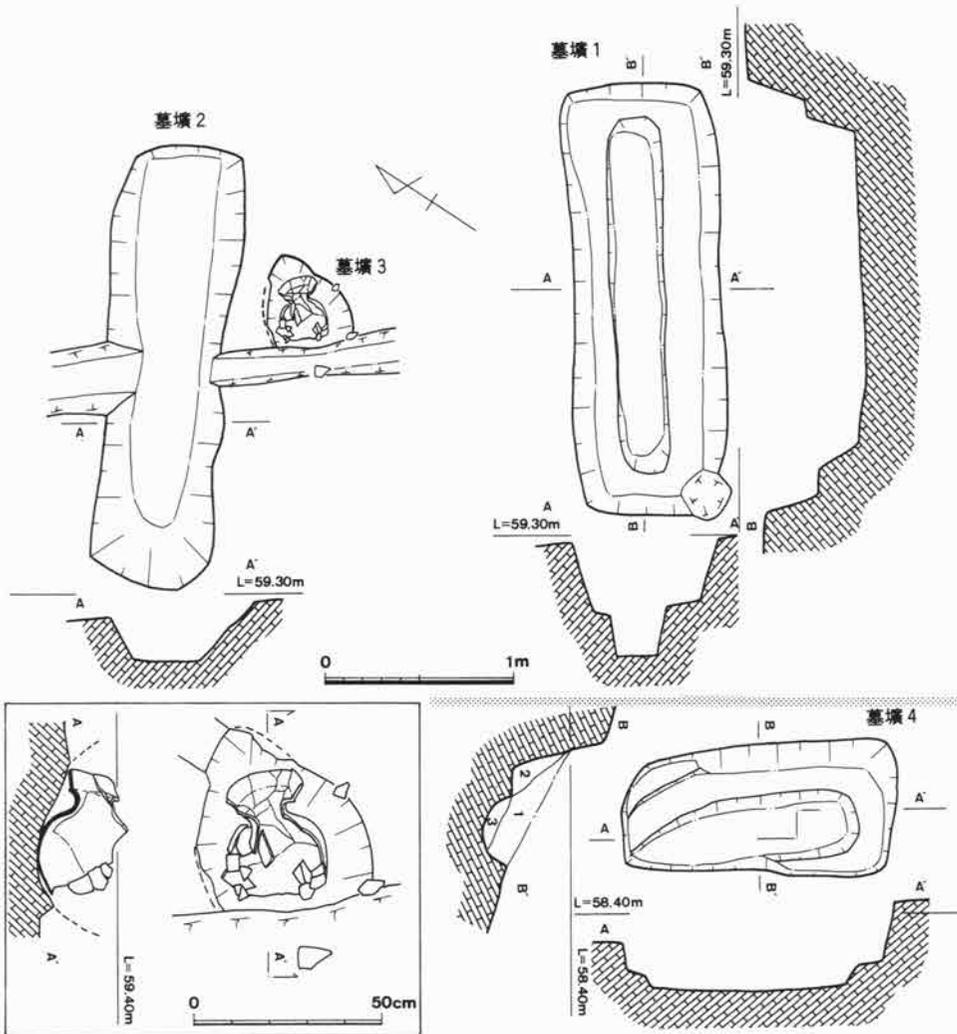
埋葬施設(第102図)

尾根稜線上に2基の土壙墓と土器棺墓1基、西側斜面で1基の土壙墓を検出した。

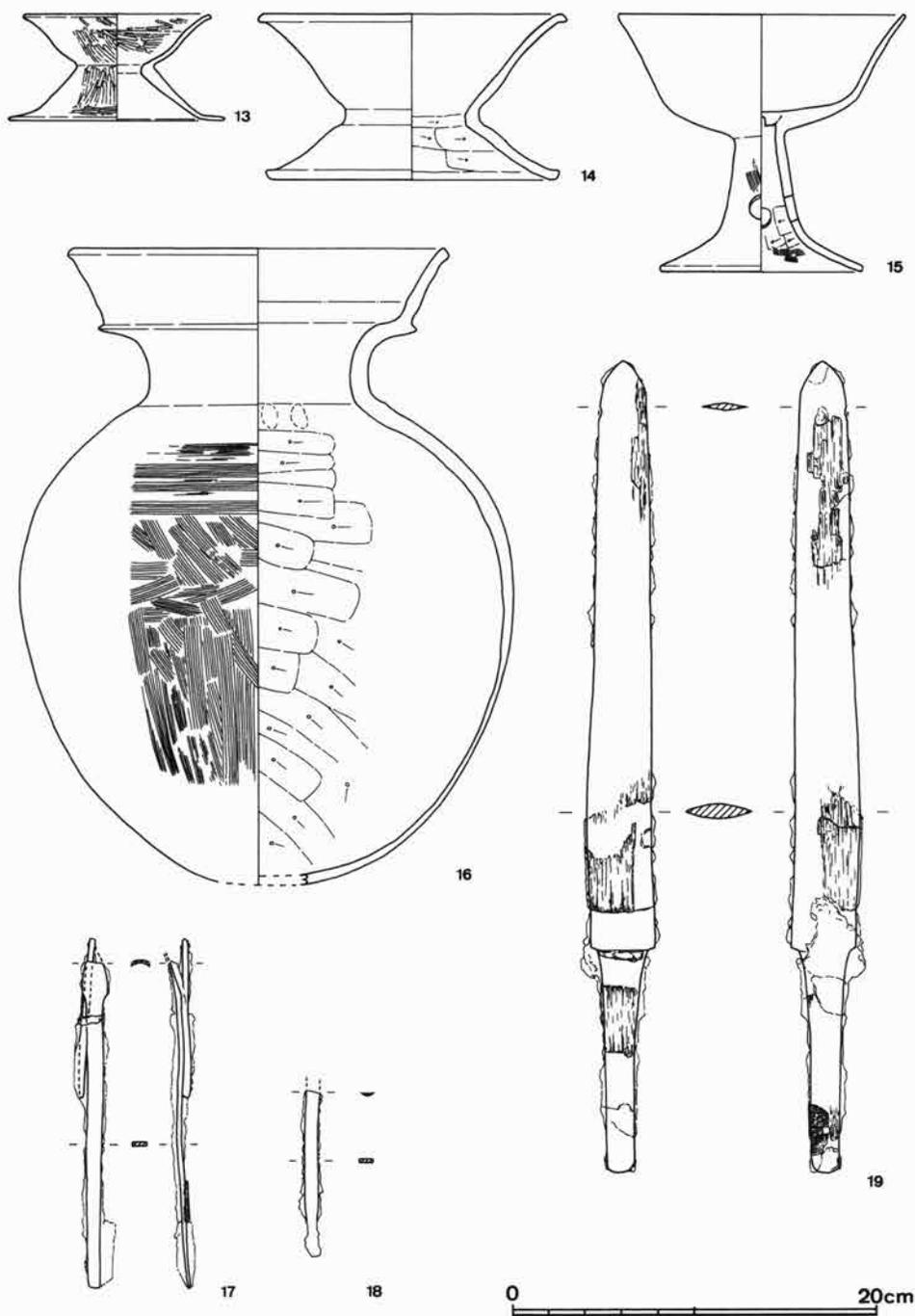
墓壙1 尾根方向に直交する方向に主軸を置く土壙墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は短・長軸ともに二段掘りで、長さ2.3m・幅0.6mを測る。下段掘形の幅は、底面で22cm程度しかなく、側板を持つ木棺が使用されたとは考えがたい。あるいは段の部分に架ける蓋板のみ存在した可能性が考えられる。出土遺物はない。

墓壙2 第1主体の北約1.7mに平行して位置する土壙墓である。墓壙平面形は、隅丸長方形で、断面は素掘りである。出土遺物はない。長さ2.2m・幅0.6mを測る。

墓壙3 第2主体の墓壙南長辺に接する土器棺墓である。掘形の形状は攪乱のため明瞭



第102図 B-11号墳墓壙1・2・3実測図(1/40)



第103図 出土遺物実測図(1)

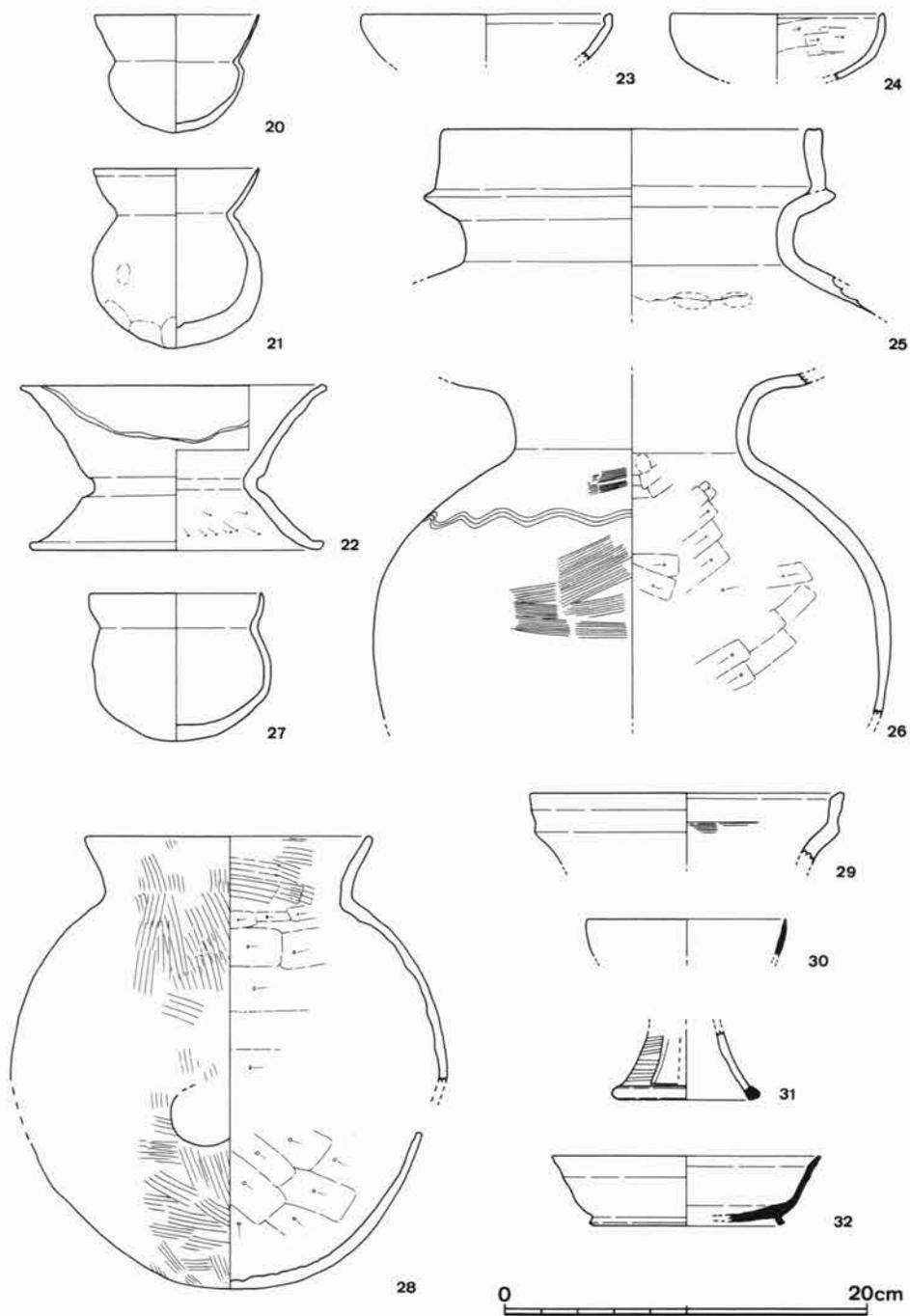
13~15. B-10号墳

16. B-11号墳土器棺蓋

17. B-5号墳第1主体

18. B-5号墳第2主体

19. B-7号墳



第104図 出土遺物実測図

- | | |
|-------------------|----------------|
| 20~26. B-5号墳第1主体部 | 27. B-5号墳第2主体部 |
| 28・30・31. B-8号墳 | 29. B-9号墳 |
| 20~29. 土師器 | 30~32. 須恵器 |

ではないが、東西に長い楕円形を呈するものと見られる。棺として土師器二重口縁壺を使用している。棺蓋は、他の土器片すら出土していないため、当初よりなかったものか、木製の蓋が存在したものかいずれかと考えられる。

墓塚4 西側斜面で10号墳寄りに位置する小形の土塚墓である。主軸は尾根方向と同一にとり、平面形は隅丸長方形である。墓塚の西側はすでに流失しているため明瞭ではないが、二段に掘りくぼめたものと考えられる。出土遺物はない。長さ1.5m・幅0.7mを測る。

出土遺物(第103図16)

第3主体に棺として使用されていた土師器二重口縁壺がある。口径20.2cm・器高34.8cmを測る。到卵形の体部で最大径は上半にある。外面は、上方を横方向の、中位をナナメ方向の、下半部にはタテ方向のハケ調整を行っている。内面はヨコ・ナナメ方向のヘラ削りを行う。頸部は短く直立し、口縁屈曲部は外方へ短く突出させている。口縁端部には外傾する面を持つ。

小結

以上第2次調査では、7基の古墳とこれに伴う12基の埋葬施設を確認した。これら尾根上に連続的に存在する古墳の時期については、概ね2時期に分けて考えることができる。まず、5・7・10・11号墳については古墳時代前期後半から前期末葉頃、8・9号墳については中期末から後期初頭頃に求められる。前者のうち、7号墳では鉄剣1点のみが出土しているが、墓塚の規模・形状、主軸方位等10号墳と近似する要素が多いため、ほぼ同時期と考えられる。

4. まとめ

最後に2次にわたって調査を行ったB支群全体のまとめを行い、幾つかの問題点を指摘しておきたい。

堤谷古墳群B支群は、北へ向かって延びる低丘陵上に、10基の古墳が存在したことが明らかとなった。当初4号墳としたものについては、テラス状の地形を呈し土師器片が出土しているが、テラス幅も狭く、古墳とは認められない。また、2・6号墳については、溝による区画が存在しているが埋葬施設を確認できなかった。先にもふれられているように、埋葬が予定されていたものなのか、後世の削平等の要因で、消失したものかは明らかにしがたい。各古墳の時期については、前述のとおり2時期に分けて考えることができる。古墳時代前期後半から末葉頃のものとしては、1・5・7・10・11号墳があり、中期後半から後期初頭頃のものとしては3・8・9号墳がある。

墳丘について 今回の調査で確認した古墳の墳丘については、1・5号墳が20m程度の規

模を有するほかは、いずれも10mに満たない小規模な古墳である。しかも、墳丘の造成にあたっては、なだらかな丘陵自然地形を利用しつつ、地山整形と区画溝によって埋葬空間を確保するものである。顕著な墳丘盛り土を行うこともない、低墳丘系の古墳といえる。

また、10mに満たない規模のものの中で、9号墳のみ弧状を描く区画溝を設けている。他のものが基本的には、尾根方向に直交する直線溝で区画しているのとは、異なる方式をとっている点に注意される。これは、古墳自体の立地によるものと見ることも可能だが、現時点では時期的な点にその原因を求めたい。先にも述べたように、9号墳の時期を8号墳に近いものと見ると5世紀末から6世紀初頭頃に位置づけられる。このころは、丹後地域の各地で確認されている小規模古墳の墳形が、円丘を強く意識し始める時期にあっている。弥栄町遠所古墳群においては、5世紀末頃から群形成を開始し、20基からなる古墳群の実体が明らかとなったが、その初期の段階から、基本的に墳形は円形である。その他の事例をとってみても概ね直線溝による区画から、円形の墳形に変化するのとは、5世紀末頃から6世紀にかけての時期に求められる。そうした地域内での動向の中で、9号墳についても理解できるものと考えられる。以上のことは、小規模古墳において須恵器使用の埋葬儀礼が波及する現象、あるいは四辺二段掘り墓壙が普及するといった現象と、ほぼ時期を同じく進行するものと考えられる。

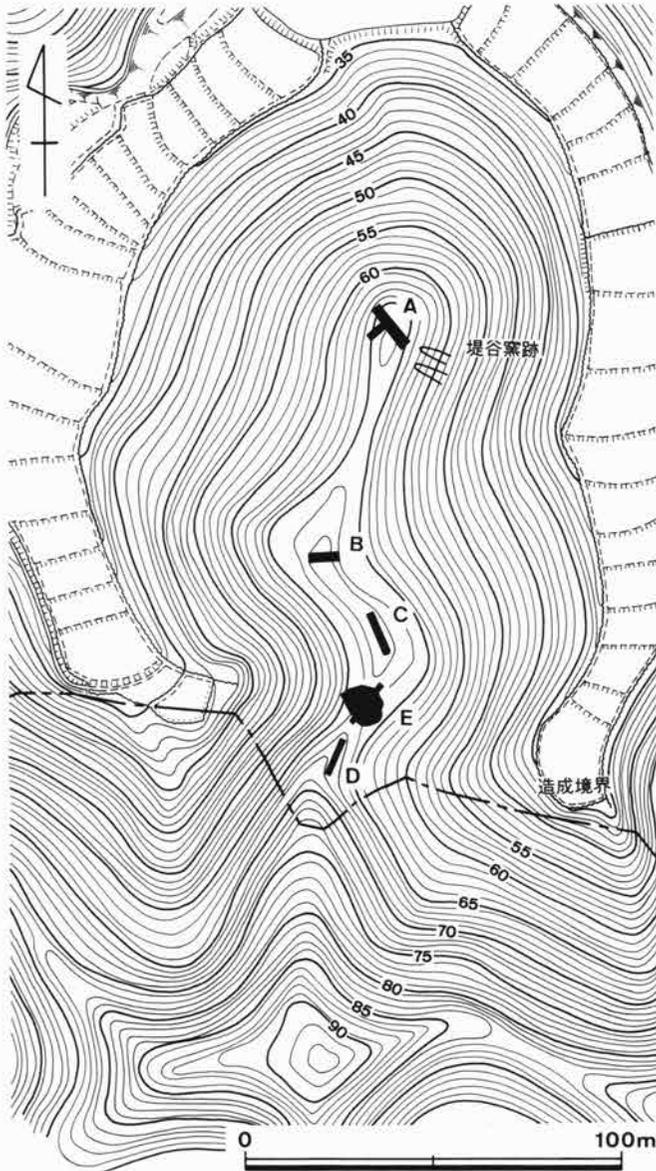
5号墳墳頂部の柱穴について 墓壙2の西長辺が、柱穴を避けるようにひずんでいることから、墓壙2を掘削する時点では、木柱が立てられていた可能性を考えた。この木柱については、1か所のみが存在することもあり、どういった性格なのか明らかでないが、近年指摘されている、依り代的な木柱と見ることもできよう。あるいは、中央に位置する墓壙1の位置を明示する、標柱的な意味合いを持たせることも可能と考えられる。古墳時代前期から中期にかけての木棺直葬墓の墓壙がほとんど切り合わず、しかも墓壙の肩を接するように掘削されている点を指摘できる。これは、墓壙の軸が一古墳の中でそろうことも関連しようが、弥生時代後期の台状墓の墓壙は、先行する墓壙の木棺まで潰すことは稀であって、多くの場合、墓壙どうしは切り合い関係にある。こうしたことから見ても、この時期の古墳には、何か先行する墓壙の位置を明示するものが、墳丘上に存在した可能性が考えられる。このように見ると、今回確認したような木柱跡に、先行する墓壙の標柱的な意味合いをも含めて考えることもできよう。いずれにせよ類例に乏しく、今後検討したい。

(森 正)

(4) 野中城跡

1. はじめに

野中城跡の調査は堤谷古墳群と同じく、久美浜町永留6団地造成に伴い実施した。現地



第105図 調査地位位置図

調査は堤谷古墳群の発掘調査と並行して、平成3年8月28日から9月12日まで行った。

調査を行った地点は、野中城本郭から北に向かって延びる支丘陵の先端部分にあたり、堀切が確認されていた。また、堀切から丘陵先端にかけての部分についても、山城に関連する施設の存在が予想されたため、AからEの計5か所のトレンチを設定した。その結果、AからDトレンチについては、遺構・遺物ともに確認されなかった。また、堀切部分に設定したEトレンチでは、予想以上に深く掘削された堀切を検出することができた。

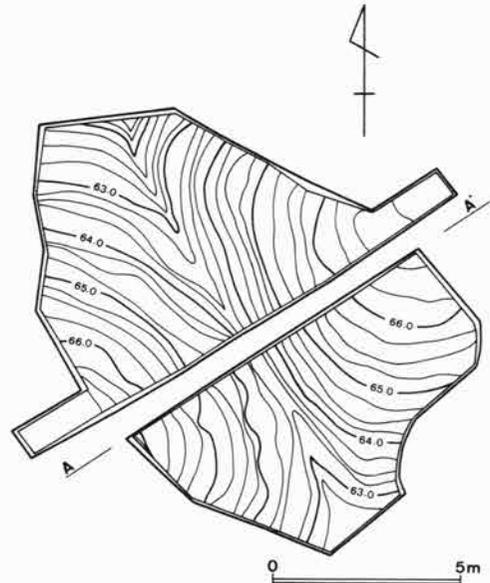
2. 調査の概要

今回確認した堀切は、本郭へ取り付く丘陵を分

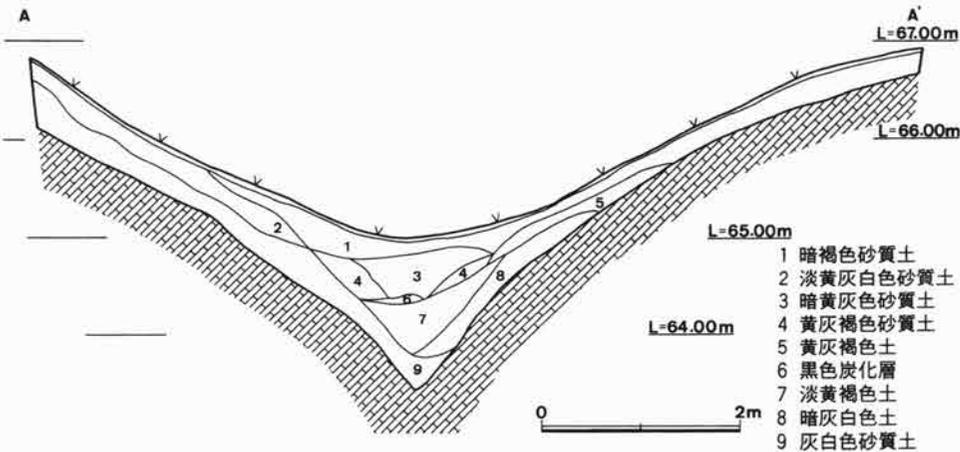
断するものであり、比較的規模の大きなものである。野中城本郭は、標高約90mの丘陵頂部とされ、ここから北方向へ急傾斜の尾根筋が延び、堀切部分を境にして、標高70m程度の比較的平らな地形が、100mほど続く。堀切はちょうどこの丘陵の傾斜変換点に位置することになる。

堀切は、幅10m、最深部での深さは約3mを測る。断面の形態は、上部では傾斜が緩く下方ほど傾斜がきつい「V」字形を呈する。埋土の状況を見ると、7～9層までは地山土である汚れていない花崗岩風化土であり、約半分までは急傾斜であるがゆえに比較的短時間で埋まったものと見られる。これより上部については、腐植土層を含む土層が堆積している。また、埋土中から堀切の時期を示す遺物の出土はなかった。

(森 正)



第106図 Eトレンチ堀切平面図(1/200)

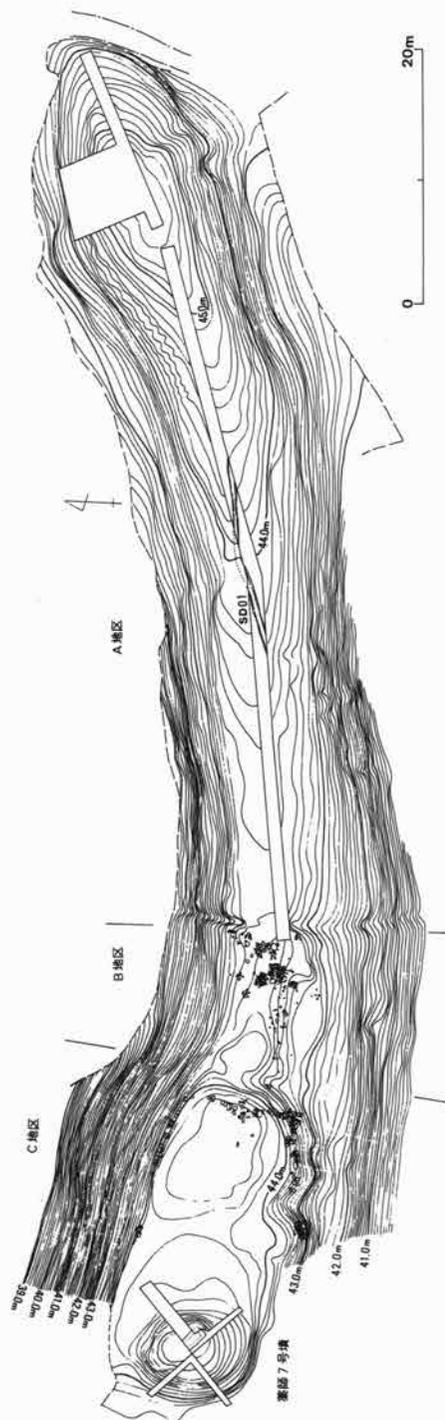


第107図 堀切土層断面図(1/80)

(5) 薬師古墳群

1. はじめに

薬師古墳群は、熊野郡久美浜町字女布に所在する。現在のところ、8基の古墳が確認されており、うち6基は横穴式石室をもつとされている^(注12)。また、薬師古墳群は、大正12年発行の『京都府熊野郡誌』^(注12)に紹介され、古くから知られた古墳である。関連する記述を引用すると、「大字女布の古墳(イ)薬師の古墳 小字薬師北谷の南側丘陵にして、山麓に薬師堂あり、丘陵上の平地に四個の古墳あり、封土高さ五尺周囲約二十間を有し、殆ど、完存せるものにて、三四間ないし五六間の間隔を有し、ほとんど同形のものたり」とある。さらに、今回の調査地付近とみられるが、「小字は前面御前山無量寺ありしといへば、院の向といへるなるべし」と、古墳のみならず無量寺という寺院に関する記述もある。今回の調査地は、薬師古墳群の中でも西側の薬師7・8号墳と、これらより東側の丘陵尾根筋部にあたる。この尾根筋部に寺院跡や、中世遺跡の存在する可能性も予想された。ここでは、中世から近世にかけての遺構・遺物を検出した薬師8号墳周辺の発掘調査と、薬師7号墳の試掘調査について報告する。



第108図 調査地全体地形図

2. 位置と環境

薬師古墳群の立地する台地は、佐濃谷川にむかって張り出している。久美浜町には、大きく3つの河川によってひらけた谷(平野)部が存在している。東から、佐濃谷・川上谷・久美谷である。現在のところ、金銅製の環頭大刀が出土した湯舟坂2号墳をはじめ、川上谷川流域には、著名な遺跡が多い。しかし、この佐濃谷川流域にも多くの遺跡が知られている。薬師古墳の周辺でみると、弥生時代中期の遺跡といわれる女布遺跡が現在の女布の集落を含めた南側に広がる。古墳時代には、先に報告された丸山小字堤谷の堤谷古墳群や、サト・谷垣・北谷・南谷古墳群などが丘陵稜に数多く造られる。これらは、木棺直葬の主体部を持つものが多いようである。さらに、中世にはいると、薬師古墳群から東の、標高の高い山地に女布城や、野中城(丸山)などの山城跡がある。女布城は、城主森脇宗坡の居城で、郭・土塁・切り通しなどの遺構を伴う。『日本城郭大系』にも掲載されている。^(注123)

中世といえば、久美浜町内には経塚が検出された遺跡が多く、現在までのところ十数か所の遺跡から関連する遺構・遺物が出土している。嘉応2(1170)年銘の銅板製経筒(京都府指定・登録文化財)が出土した山の神1号経塚や、朱書き経巻のはいった銅製経筒が出土した栃谷経塚などは特に著名である。今回の調査でも1点、土製経筒と見られる破片が1点出土している。銅製ではなく土師製の経筒をもつ遺跡は、薬師古墳群の丘陵のような「集落との比高差をあまり有さない丘陵地に営まれる傾向がある」という。^(注124)

3. 調査経過

今回の調査地は、薬師古墳群の存在する丘陵部の中間に当り、薬師7号墳及び8号墳をその対象としている。標高は、43～45mを測る(第108図)。

調査はまず、薬師8号墳と考えられる隆起部と、これより東の尾根筋部(試掘地点)に分けてトレンチを設定した。前者のところでは、幅1mの逆L字形トレンチを入れる四分法で掘削を始め、後者は、幅1mの細長いトレンチを約70mにわたって設定して掘り進めた。試掘地点である東の尾根筋部(以下A地区とする)では、表土下約10cmで、淡赤褐色砂礫層の地山面が露出した。この層は非常に固くしまっており、部分的に岩盤のような花崗岩の粗礫が包含されている。トレンチ中間部で畑作のために掘られた溝(SD01)を検出した。溝(SD01)は、堅い地山層にもかかわらず、幅45cm・深さ30cmを測り、底は平坦に近く、ほぼ垂直に立ち上がる。褐色土を埋土とし、中から近・現代の染め付け茶碗の破片が2片出土した。さらに西側に掘り進むと、拳大から人頭大の石が、いくつかのまとまりをもって集積しているのがわかった。ここからは、細長いトレンチ掘りではなく、やや広く表土を剝いでいき、石の集積する範囲とその状況を調べた。その結果、薬師8号墳と考えてい

る隆起部の裾まで、東西約10m・南北約7.5mの範囲で、石仏や五輪石塔の部材を含む5基の集石遺構(SX01~05)と、一部に原位置を保った石仏や、五輪石塔が散乱する中世墓(8基)の存在を確認した(第109・110図)。ここをB地区とした。集石群のいくつかは表面に露出し、苔むした石が無造作に積み重ねられていた。当初は、これらの集石遺構も石仏や五輪塔の破損品を含むことから中世墓と考えた。しかし、各々の集石の下にまったく遺構はなく、遺物や人骨などの出土状況も認められないことから、西側の中世墓群を整理して石材を集積した場と判断した。西側は、褐色有機質土(第1層)の表土下は、約20cmの厚さで灰褐色土(第2層)が堆積し、以下は淡赤褐色砂礫の地山となる。

これらの層位のうち、第2層とした灰褐色土層の下半において、遺骸骨を少量埋葬した小土坑を検出した。小土坑は、適当な間隔をあけて合計8基検出され中世墓群と判断した。これらは、すべて南側の女布の集落側斜面に並んでいた(第109・110図)。

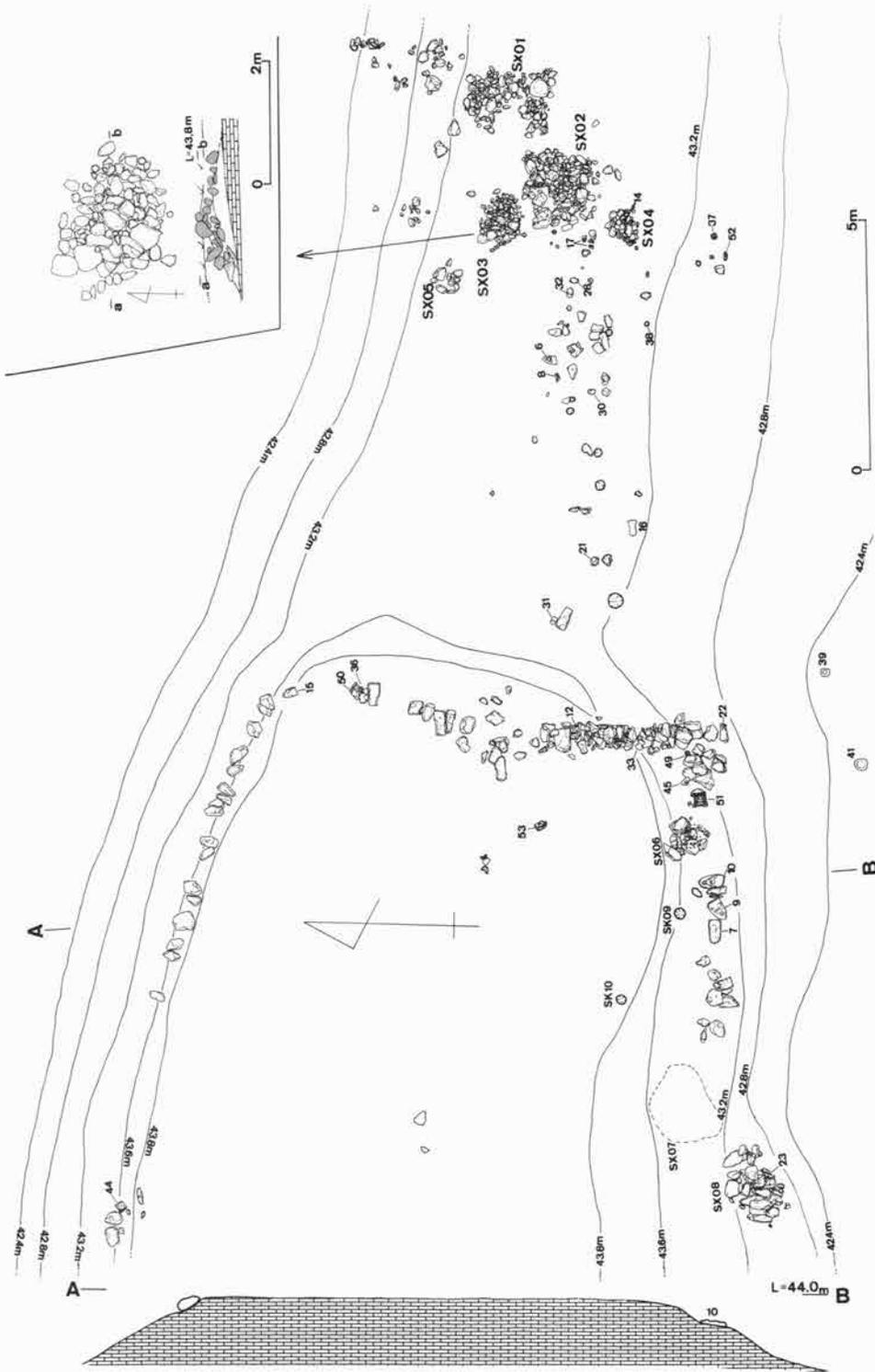
このB地区と並行して、当初薬師8号墳と考えていた隆起部(以下C地区とする)の掘削を進めた結果、C地区は古墳ではなく、中世の石仏・五輪石塔・宝篋印塔の部材を含む石材が一行に並べられ、あたかも寺院の境界を示すように方形に区画された遺構となった。北東及び南東のコーナー部の角度は、南辺と北辺が地形に沿ってのびていくため、やや鈍角になっている(第109・111図)。

さらに今年度は試掘調査となったが、西側の薬師7号墳にも幅1mでトレンチを入れた(第108・109図)。東側は、旧状をあまり留めていないが、西半部は墳丘ラインがきれいに出ており、平板測量図で復原すると約11.5mの円墳となる。墳頂部からは、おそらく木棺直葬の主体部の上に陥ち込んだとみられる暗褐色土の範囲が、東西方向に長く検出された。遺物では、須恵器の短頸壺(第112図5)及び甕の破片が数点出土した。短頸壺の形態は、古墳時代後期(6世紀中葉)のものである。本格的な調査は来年度に実施する予定である。以下に、B地区の中世墓群8基と、C地区全体を区画した石列遺構を報告する。

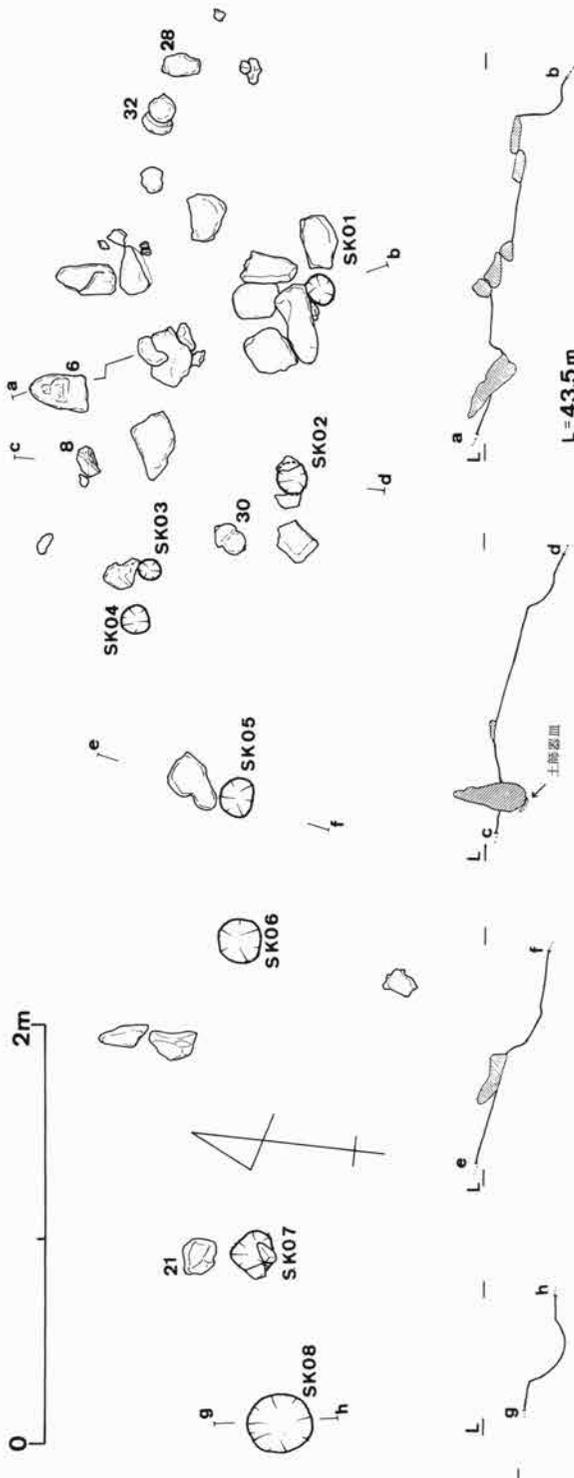
4. 検出遺構

1) A地区(第108図)

A地区は、表土下約10cmで淡赤褐色砂礫面(地山)が露出し、そこに掘り込まれた溝状遺構(SD01)を検出した。これ以外の遺構は検出されなかった。溝状遺構(SD01)は、長さ12.7m分・幅約30cm・深さ約30cmを測る。暗褐色土を埋土とする。掘形は逆台形である。出土遺物は、近・現代の磁器(染め付け茶碗)や植木鉢の破片など少量である。溝状遺構の用途は不明であるが、最近まで畑地として利用されており、畑作に伴うものと考えられる。



第109図 B・C地区遺構検出状況



第110図 B地区(中世墓群)平・断面図

2) B地区(第109・110

図)

B地区ではその東側において、集石遺構5基(SX01~05)を、そしてこれらの西側で8基を数える中世墓を検出した。

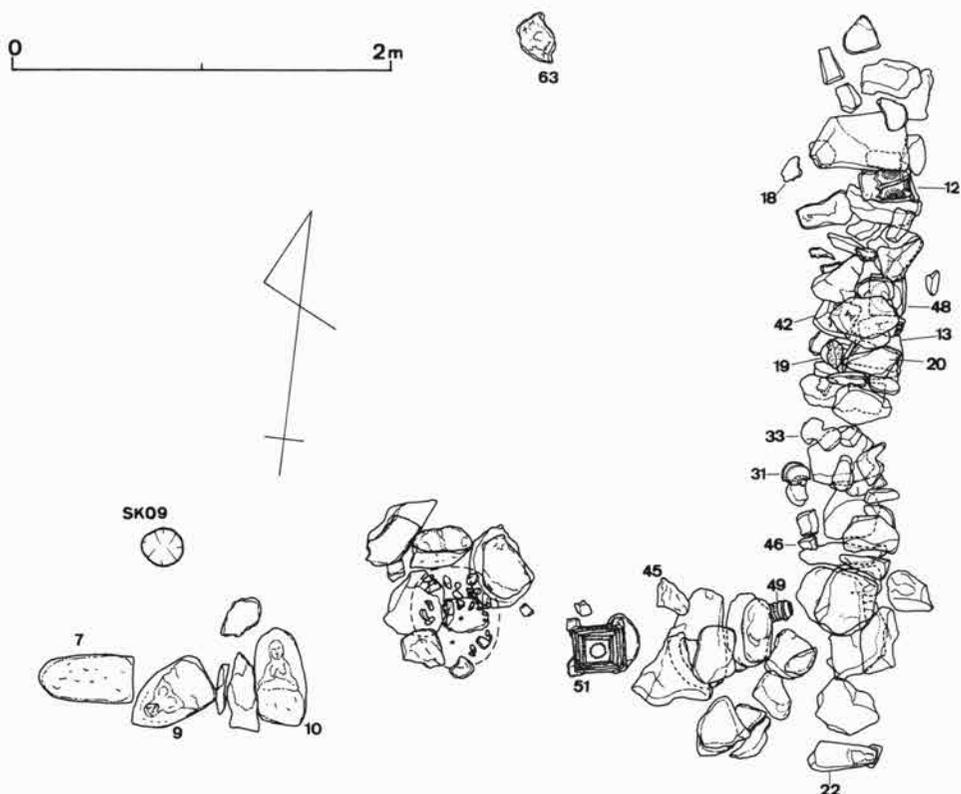
前述したように、集石遺構は各々の集石下に遺構を伴わず、土器や人骨などの出土状況も見られない。したがって、当初は中世墓と考えて調査を進めていたが、結果的に墓ではなく、西に隣接する中世墓を整理(解体)して、ここに石材をまとめて遺棄したものと判断した。集石の中には、石仏と五輪石塔の破損品を含んでいるのが特徴的である。集石遺構(SX01)は、二つの大きなブロックで構成される不整形で2m×1.4mの規模である。集石遺構(SX02)は、ほぼ四角形にまとまり、東西1.8m×南北1.5mの広がりである。石仏・五輪石塔は、ここから最も多く出土している。内訳は石仏2点・五輪石塔の空

風輪1点である。すべて破損品である。集石遺構(SX03)は、不整形で1.3m×1mの規模である。自然石及び加工石材などである。集石遺構(SX04)は、不整形で小さなまとまりである。0.8m×0.7mを測る。石仏片が2点出土した。集石遺構(SX05)は、合計13点の小さなまとまりを持つ。径約0.7mの広さである。2～3点の加工石材を含む。全体にみると集石遺構から、石仏2点・五輪石塔空風輪1点が出土したことになる。すべて大きく破損していた。集石遺構の中で、とくにSX02は他に比べて明瞭な石仏・五輪塔の部材を含んでいる。また、SX04・05は、完全に表土下に埋没しており、他のものより古い時期に遺棄されているといえる。

中世墓群は、尾根の南側の緩斜面に並んで検出された。約75m²(南北7.5m×東西10m)の範囲に石仏・五輪塔の部材が散乱している状態で検出された。石仏・石塔は、現位置を留めるものはほとんどない。ただし、中央付近の2体の石仏(第113図6・8)はほぼ立ったままの状態出土していることから、現位置を保っているものとみられる。2体の石仏のうち1体(第113図8)の下から土師器皿(第112図1)が出土した(第110図)。遺構としては、およそ手のひら一杯かそれ以下のごく少量の遺骸骨(火葬後に選別拾骨されたもの)を埋葬した8基の小土坑(SK08～15)がある。これらの平面形は正円に近く直径10～15cmで、深さは5～10cmと小さい。ただ小土坑(SK08)は、直径20cm・深さ15cmを測り、遺骸骨の量もやや多い。これらは竹筒製や布袋のようなものに元来納められていたと考える。遺物としては、石仏6点・五輪石塔の空風輪2点・宝篋印塔の伏鉢断片1点を数える。石仏と五輪石塔(空風輪)の合計が遺骸骨を埋葬した小土坑8基の数と一致し、おそらく各々の埋葬部の上部構造として、石仏や五輪石塔が立てられていたものと思われる。これらの時期は、石仏・五輪石塔空風輪の形態から、南北朝時代から室町時代後半までの長い時期と考えられる。

3) C地区(第108・109・111図)

ここでは、石仏・五輪石塔・宝篋印塔を含めた多量の石材を、周縁部に並べて方形に区画し、あたかも寺院の境界のようにした石列遺構を検出した。南東及び北東のコーナー一部が検出された。南東隅の角度はほぼ直角で、この付近は他のところと異なりかなり念入りに多くの石材が使われ、2～3段に積まれている。B地区と同様南側を強く意識したものと言える。この南東部以外の石列は、ほとんど1～2石ずつが並んでいるだけである。表土下に淡赤褐色砂土の堆積が20cmあり、この層の中にこれらの石列はほとんど埋没していた。おそらく、近隣で整理した石仏・五輪石塔・宝篋印塔をここに運び、土止めのための石として並べて盛り土をし、この地を基壇状に整形したと考えられる。各石列の長さは東



第111図 C地区(石列遺構南東隅)平面図

辺で約9m、南辺で約10m分、北辺で約12m分である。石仏・五輪石塔・宝篋印塔の並べ方にはまったく秩序はなく、無雑作に並べられているものである。五輪石塔のうち地輪のみ出土しておらず、調査地外のどこかに運ばれていったと思われる。

集石遺構(SX08)は、5枚の扁平な板石(有加工)を中心に石材が集積しており、石仏の未完成品(第115図23)を1点を含み、3か所から遺骸骨のわずかなまとまりを検出した。集石遺構(SX06・07)中からは少量の遺骸骨のまとまりを検出し、また、この場で石材を細かく粉砕したと思われる、剥片が多く出土している。これら3つの集石遺構(SX06~08)は、中世墓を解体した状態をそのまま留めているものといえる。B地区と同じような遺骸骨が出土した小土坑はSX06中の1基のほか、南片に沿って2基(SK09・10)検出された。本来、中世墓群の範囲は、このC地点の方にもものびていたようである。

集石遺構(SX07)は、細かな安山岩・凝灰岩の集積で、少量の遺骸骨を含んでいる。遺物は、石列中のものがほとんどで、石仏12点・五輪石塔の空風輪4点・火輪6点・水輪2点・宝篋印塔1基の部材・土師器皿・須恵器甕の体部断片がある。須恵器甕は、鎌倉時代のものであるが、宝篋印塔の反花・四隅飾部や、五輪石塔(空風輪)の形態からみると、

石製塔婆類は南北朝～室町時代後期と考えられる。そして、中世墓をこのように整理して、無雑作に並べて区画されたような遺構は、おそらく江戸時代後期(17～18世紀)になってからのものであろう。なお、平坦面からは遺構の存在は認められなかった。

5. 出土遺物

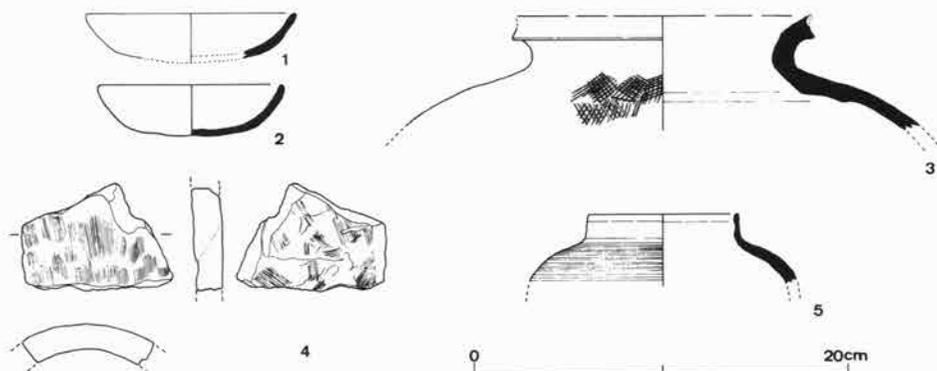
出土遺物としては、土器類(土師器皿・須恵器甕・土師製経筒片)と、石仏及び石塔(五輪石塔・宝篋印塔)の部材・砥石・台石などの石造遺物及び石製品がある。

①土器類(第112図)

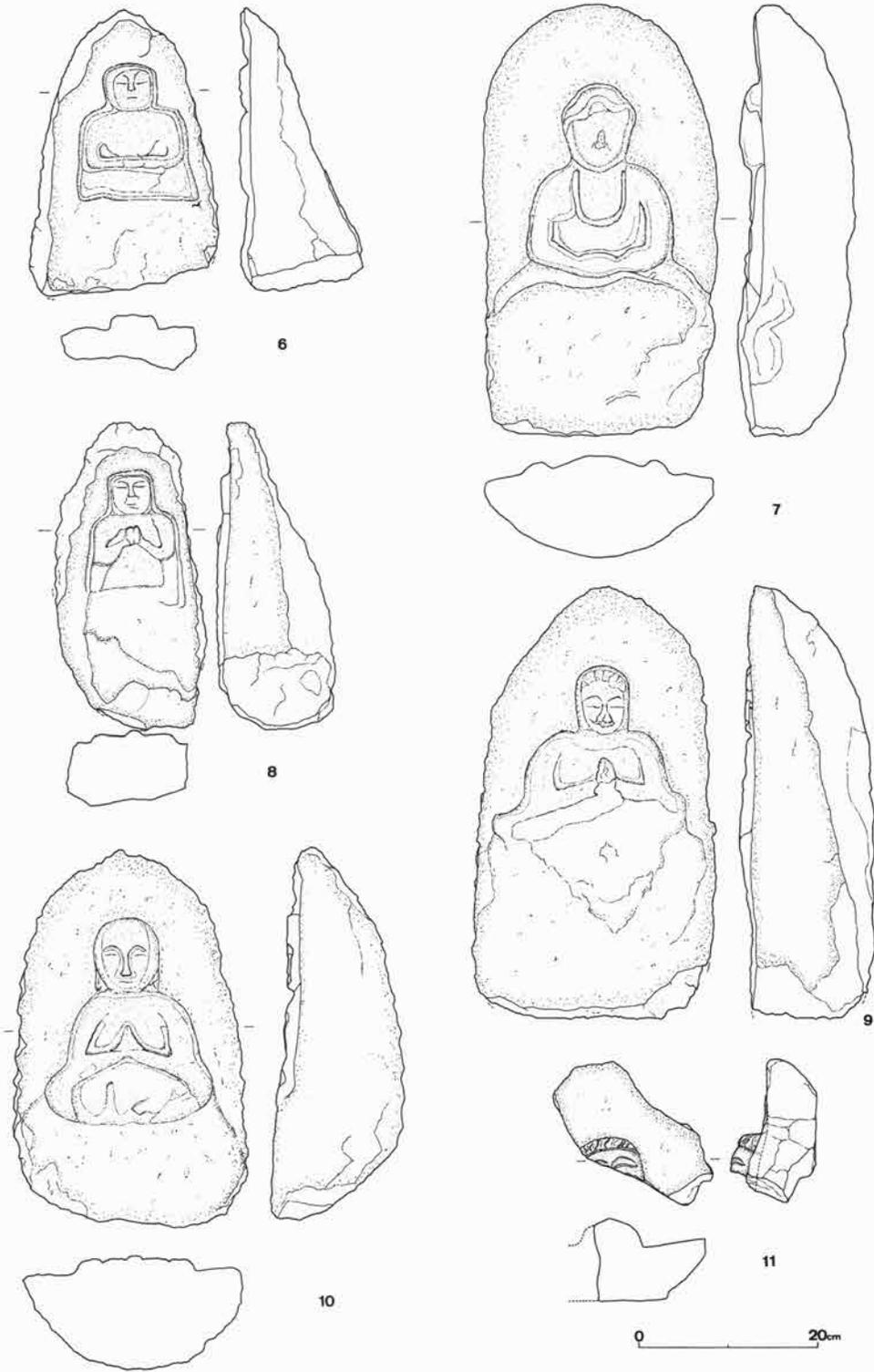
1・2は土師器皿である。1は口径11cm・器高2.6cmを測る。口縁部は丸く収められる。内外面ともナデ整形。B地区より石仏(第113図6)の真下にはさまって出土した。2は、口径9.8cm・器高2.7cmを測る。丸く収められた口縁端部を持ち、内外面ともナデ整形されている。4は須恵器甕である。口径15.5cmを測る胴部に斜格子状についたタタキ目をとどめる。内面はナデ整形である。C地区南西隅の集石遺構(S X17)中から出土している。5は土師製経筒の破片とみられる。厚さは1.4cmを測り、体部の直径を復原すると12.5cmになる。外面は、短くて幅のつまった浅いハケ目痕が断続的につけられ、内面は接合部のナデつけと一部に外面と同様のハケ目痕がわずかにみられる。4と同じく集石遺構(S X17)中から出土している。なお、5は、薬師7号墳の墳頂部盛り土中から出土した須恵器短頸壺(古墳時代後期6世紀中葉)である。口縁部径は8cmを測る。

②石製塔婆・石製品(第113～118図・付表22)

出土石塔・石仏は全点実測し掲載した。石仏は完形・破損品をあわせて24点出土した(第113～115図)。形態は、舟形光背浮彫像を著すものが多く、先端部を丸く整形したものと尖頭形のものがある。完形品の法量平均値は、高さ32cm・幅20.3cm・厚さ11.7cmを測る。中



第112図 出土遺物実測図(1)



第113図 石仏実測図(1)

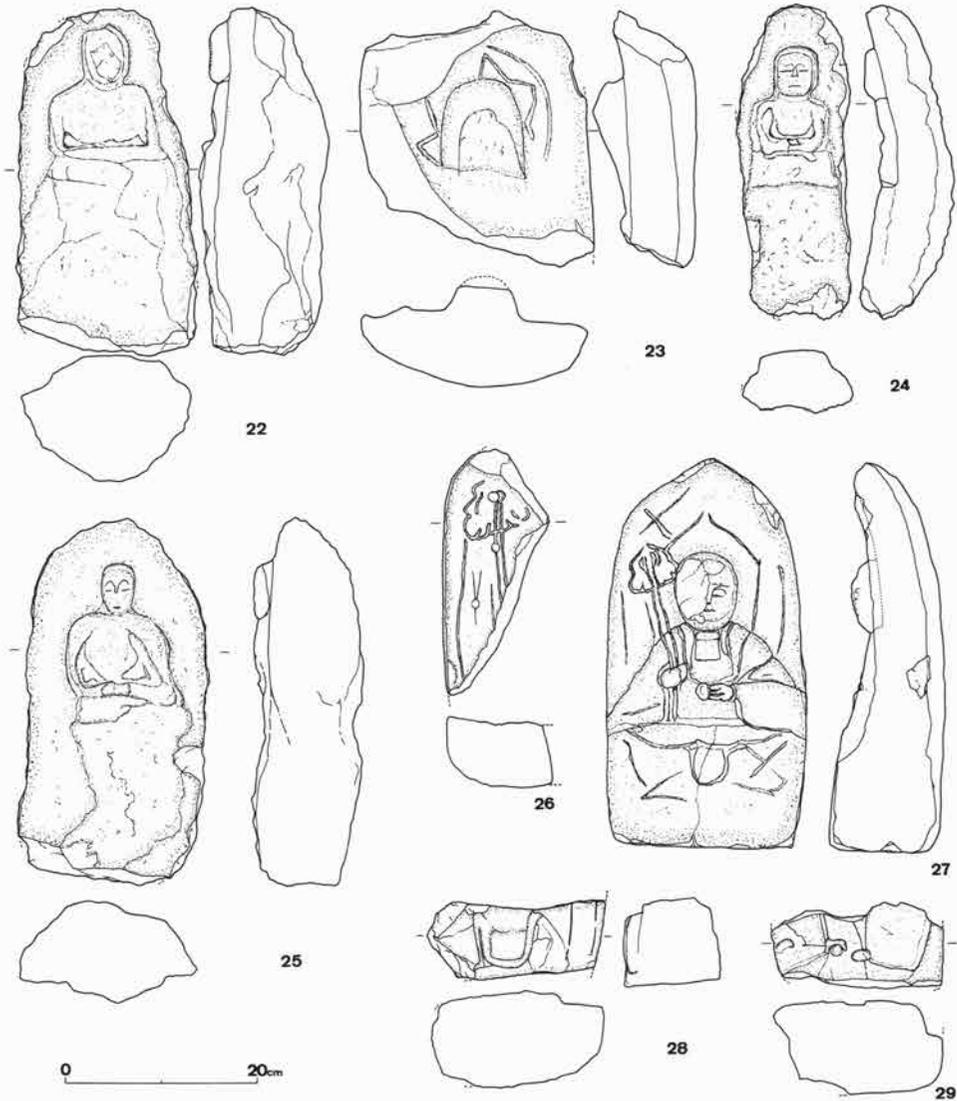


第114図 石仏実測図(2)

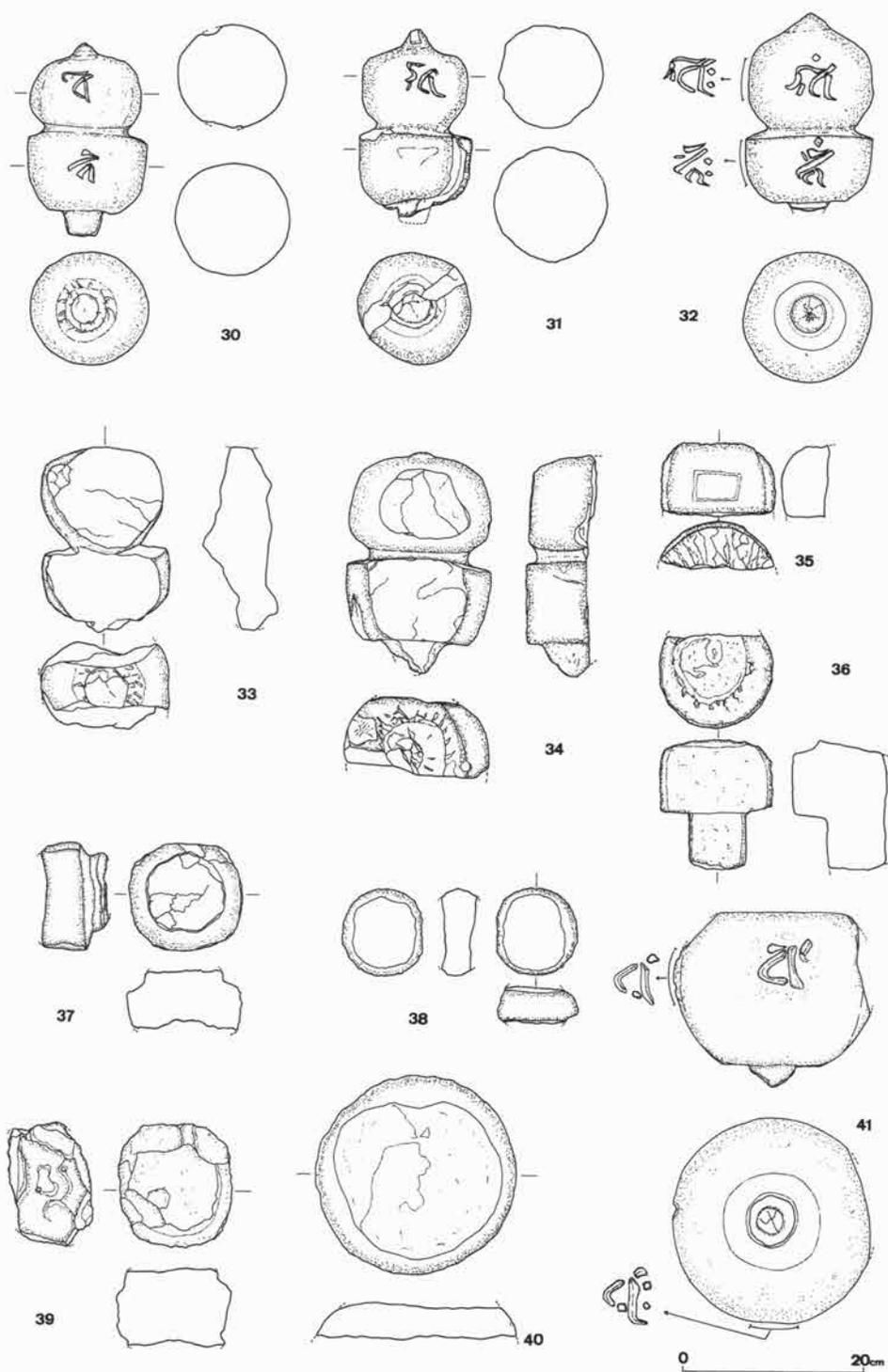
でも高さ40cm以上の大きな石仏は、きめの粗い花崗岩を石材としているのが特色である。

その他、沈刻浮出像を著すものが1点出土している(12)。鋸歯状線刻の上半部に、錫杖をもつ右手と、宝珠らしきものを持つ左手が沈線にて表現され、袈裟衣の袖と首まわりを表現した渦文も沈刻されている。

五輪石塔は、地輪以外の各部が出土した。地輪は今回の調査地からは出土していない。空風輪の形態は、あまり肩の張りださないものもあるが肩の張るものが中心である。また、火輪の反りは、鎌倉時代のものに比べやや強いようで、四隅の軒も斜めラインとなる。これらの点から、南北朝時代から室町時代後半までの長い時期の遺物群と言える。宝篋印塔



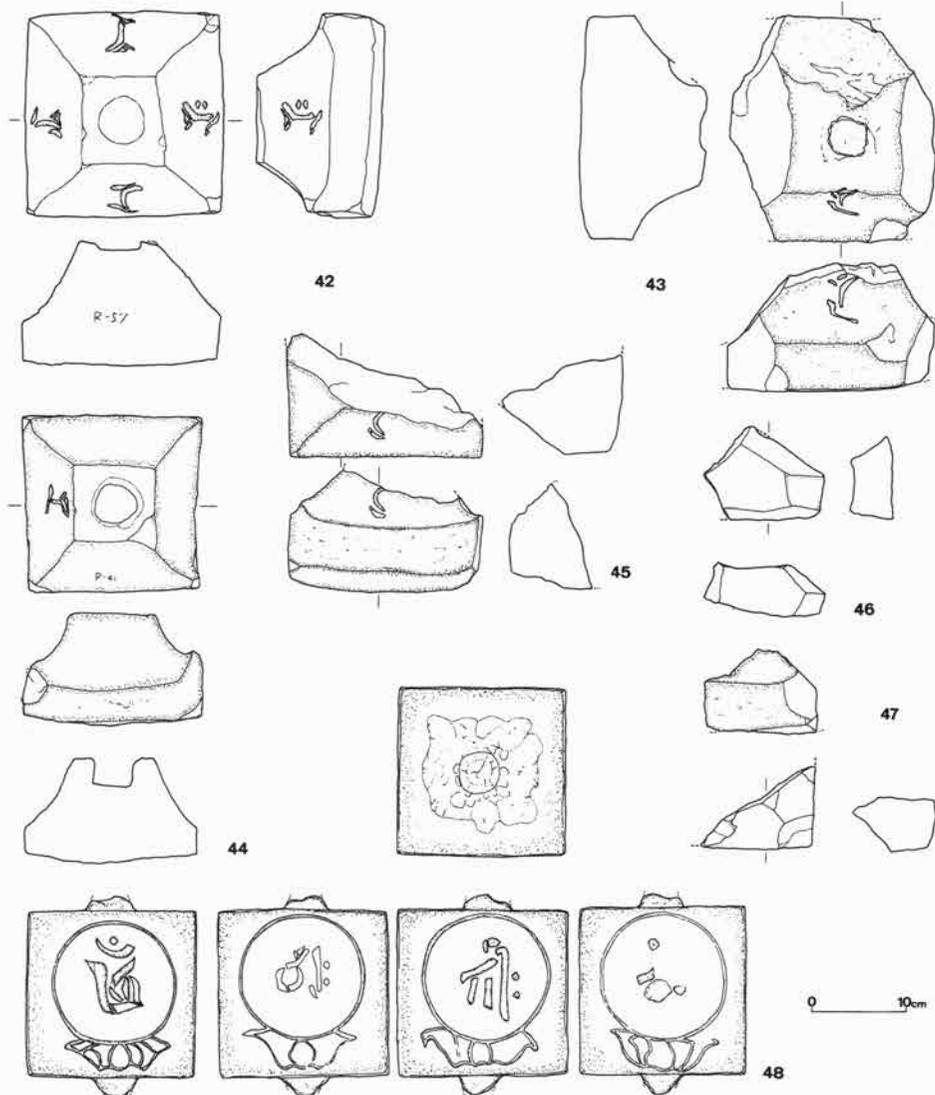
第115図 石仏実測図(3)



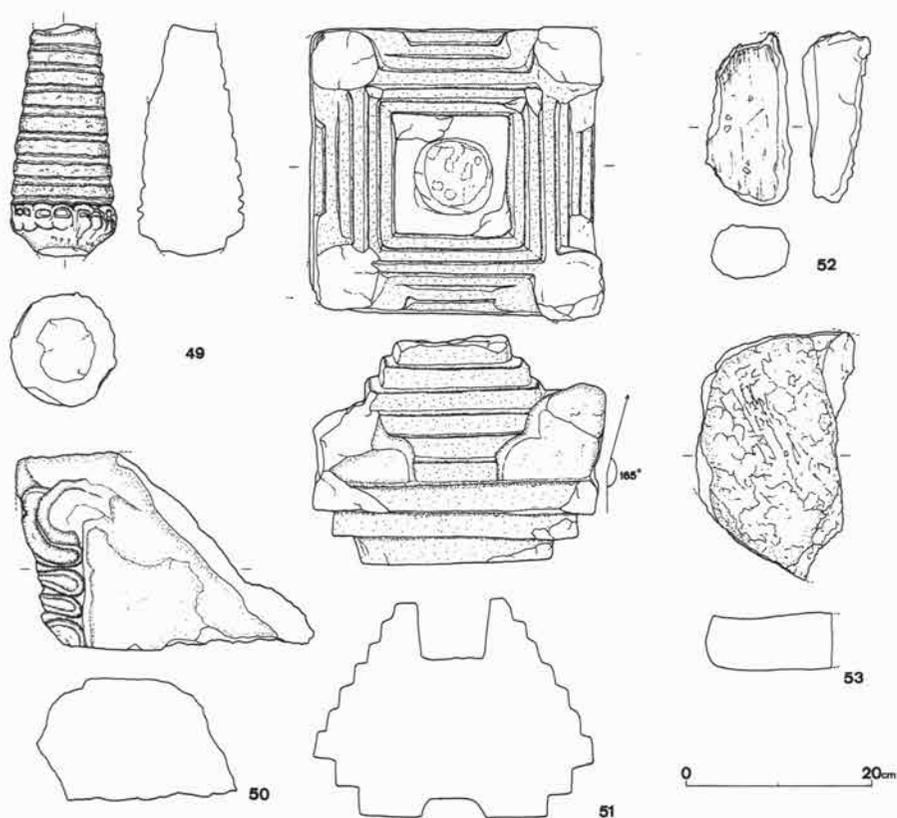
第116図 五輪塔・宝篋印塔実測図(1)

は、C地区のみから出土し、九輪部1点・伏鉢3点(以上相輪部)、笠の四隅飾突起1点・塔身1点・基礎下部の蓮弁部1点を数える。相輪基部の請花の花弁にふくらみが少ないこと、四隅飾付突起がやや外側に反ること、塔身や基礎に彫られた蓮弁にあまり伸びやかさが無いことなど、南北朝時代の特色を示す。風化が進み、石材はやや軟質の凝灰岩製である。

その他の石製遺物として、砥石(52)1点、台石(53)1点がある。砥石は砂岩製で、表面に磨面がみえる。台石は、C地区平坦部から出土し、柱の礎石のようなものかもしれない。激しい打撃痕により片側平面に凹みが生じる。やや青みを帯びた安山岩製である。砥石は、長さ18cm・幅9.2cm・厚さ7.2cm、台石は、長径27cm・残存短径17cm・厚さ6.2cmを測る。



第117図 五輪石塔・宝篋印塔実測図(2)



第118図 宝篋印塔・石製品実測図

6. まとめ

薬師古墳群の丘陵部を約1,000㎡にわたって調査した結果、南側斜面地(B地区)から8基の中世墓を、これら西側の薬師8号墳と考えていたところ(C地区)から寺院跡の区画と思われる石列遺構を検出した。なお、中世墓群の東隣りで、これらの墓を整理(解体)し、五輪石塔や石仏の破片を含む石材を、大きく5つのブロックにまとめて廃棄した痕跡を検出した。これら集石遺構(S X 01~05)については、下層に遺構らしきものを検出していない。中世墓は、火葬後に選ばれた少量の遺骸骨を小さな土坑に埋葬し、上部構造として石仏や五輪塔を立てていた。南向きを強く意識したもので、北側には土坑は検出されなかった。石製塔婆類は、原位置をとどめるものは少なく、わずか2体の石仏(第113図6・8)のみ原位置とみられる。木津惣墓^(注125)・元興寺極楽坊^(注126)では、ほぼ三代を超えて無縁化した塔婆を17世紀半ばから18世紀に入ってから整理している^(注127)。丹後でも舞鶴市松尾寺・天台寺及び登尾の墓地等に、中世墓塔が個人墓地から片付けられている事例はみられるという(小

付表22 石製塔婆類一覽表

器種	部位	高 (残存高)	幅 (残存幅)	厚 (残存厚)	石材	出土 地区	図 No	梵字	備考
石仏	完形	31.7	21.1	13.5	流紋岩	B	6	—	原位置
石仏	完形	48.0	25.8	12.5	花崗岩	C	7	—	南辺
石仏	完形	34.5	16.4	13.2	流紋岩	B	8	—	原位置
石仏	完形	48.7	27.1	15.2	花崗岩	C	9	—	南辺
石仏	完形	43.0	26.1	13.2	花崗岩	C	10	—	南辺
石仏	頭部	(16.3)	(17.0)	(9.3)	流紋岩	B	11	—	S X 02内
石仏	体部	(30.5)	(20.8)	(12.5)	凝灰岩	C	12	—	東辺
石仏	完形	39.7	22.7	10.7	流紋岩	C	13	—	東辺
石仏?	?	(22.0)	(10.9)	(4.7)	凝灰岩	B	14	—	S X 04内
石仏	完形	26.7	19.8	9.7	流紋岩	C	15	—	北東隅
石仏	完形	38.6	19.2	10.5	流紋岩	B	16	—	中世墓
石仏	頭~肩部	(15.6)	(8.3)	(7.8)	流紋岩	B	17	—	
石仏	頭部	(6.0)	(15.3)	(10.0)	流紋岩	C	18	—	東辺
石仏	頭部	(13.5)	(10.0)	(18.8)	流紋岩	C	19	—	南東隅
石仏	完形	27.1	14.6	7.7	流紋岩	C	20	—	東辺
石仏	頭部	(13.9)	(17.8)	(8.5)	流紋岩	B	21	—	中世墓
石仏	完形	36.3	18.9	13.2	流紋岩	C	22	—	南東隅
石仏	頭部	(26.7)	(23.7)	(11.0)	流紋岩	C	23	—	S X 08内
石仏	完形	32.7	11.8	9.4	流紋岩	C	24	—	表採
石仏	完形	38.3	19.5	11.5	流紋岩	C	25	—	表採
石仏	光背・錫杖	(25.3)	(11.0)	(6.8)	凝灰岩	B	26	—	S X 02内
石仏	完形	40.5	20.6	(11.5)	凝灰岩	C	27	—	表採
石仏	基部	(7.6)	(18.5)	(19.8)	凝灰岩	B	28	—	中世墓
石仏	基部	(9.0)	(18.0)	(10.0)	凝灰岩	C	29	—	東辺
五輪石塔	空風輪	21.5	13.2	13.1	流紋岩	B	30	東面	中世墓
五輪石塔	空風輪	(20.7)	12.5	12.4	流紋岩	C	31	東面	転落・東辺
五輪石塔	空風輪	21.9	14.3	14.3	流紋岩	B	32	東・北面	中世墓
五輪石塔	空風輪	(20.5)	(14.6)	(9.3)	流紋岩	C	33	—	東辺
五輪石塔	空風輪	24.6	(15.8)	(6.9)	流紋岩	C	34	—	東辺
宝篋印塔	伏鉢	(8.1)	(12.7)	(5.5)	流紋岩	C	35	—	東辺
宝篋印塔	伏鉢	10.8	(10.6)	(10.4)	凝灰岩	C	36	—	東辺
五輪石塔	空風輪	(12.5)	(12.0)	(7.6)	花崗岩	B	37	—	S X 02内
宝篋印塔	伏鉢	(3.9)	(9.8)	(9.8)	凝灰岩	B	38	—	中世墓
五輪石塔	空風輪	(13.7)	(12.6)	(8.5)	流紋岩	C	39	—	転落・南辺裾
五輪石塔	水輪片	(4.0)	(22.0)	(20.0)	流紋岩	C	40	—	転落・南辺裾
五輪石塔	水輪	19.2	21.9	21.5	流紋岩	C	41	南・北 ・西面	転落・南辺裾
五輪石塔	火輪	13.0	20.0	20.7	流紋岩	C	42	四方面	東辺
五輪石塔	火輪	(13.6)	(22.4)	(24.0)	流紋岩	C	43	?	南東隅
五輪石塔	火輪	(18.0)	(19.0)	(12.0)	流紋岩	C	44	東面	北辺
五輪石塔	火輪	(10.8)	(20.5)	(10.8)	流紋岩	C	45	?	東辺
五輪石塔	火輪	(12.6)	(5.4)	(10.1)	流紋岩	C	46	—	東辺
五輪石塔	火輪	(11.9)	(8.7)	(9.0)	流紋岩	C	47	—	東辺
宝篋印塔	塔身	21.1	17.6	17.4	凝灰岩	C	48	月輪	東辺
宝篋印塔	相輪	25.0	11.5	11.5	凝灰岩	C	49	—	南東隅
宝篋印塔	反花台飾り	(12.2)	(28.6)	(12.7)	凝灰岩	C	50	—	東辺
宝篋印塔	笠	24.1	32.0	31.5	凝灰岩	C	51	—	南辺・四隅突出飾り

西とも子氏教示)。石列遺構は、C地区全体を区画しているもので、石仏・五輪石塔・宝篋印塔の部材を無雑作に並べている。本来は盛り土をし、見えないように処理されていたと思われる。ここでも南側石列及び南東隅部は多くの石材を用い、念入りに築かれていた。地元で女布の地名などに詳しい小国敏之氏によると、文献などは残っていないが、当地には「無量寺」という寺の存在が伝承されているという^(注128)。今回の調査でこの無量寺という寺の創建時期などを含めた実体を考えていく上での資料が得られたと言える。また、宮津市在住の中嶋利雄氏からも、有意な指摘を受けた。中嶋氏によると、調査地東隣りの墓地に近世の三角板碑に移行する過渡期の慶長型板碑があり、この墓地の石垣に舟形光背板碑(石仏)も使われているという。したがって、中世墓域である今回の調査地から出土した舟形光背板碑は、近世の東隣りの墓地からも出土していることから共通項となる。そのため、今回出土した舟形光背石仏に限って言えば、中世から近世に続くところに位置しており、戦国時代末となる可能性を指摘された。年代については、五輪石塔の空風輪の形態からみて中世墓(B地区西半部)は、室町時代後期といえる。また、C地区の石列に用いられた五輪石塔の空風輪・火輪は形態から室町時代後期、宝篋印塔は笠の四隅飾突起の反り具合、基礎の反花の形態から南北朝時代と考えられる。そして、これらを用いた石列の造成は、江戸時代に入ってからのものであろう。なお、C地区の石列は、薬師7号墳の西側にさらに続くと思われる。今後の調査では、薬師7号墳との関係も注意を払う必要がある。

(黒坪一樹)

- 注1 増田孝彦・三好博喜ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
 増田孝彦・森 正・荒川 史ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
 増田孝彦・中川和哉・荒川 史・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
 増田孝彦・石崎善久・岩松 保・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
 増田孝彦・森 正・石崎善久・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
 増田孝彦・岡崎研一・石崎善久ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭

和62・63、平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

昭和63年度～平成4年度

小林浩司・東 高志・上田浩司・山上智功・日生下民夫・杉本 智・原 美代・川岸恵理・増田明美・安川貴代美・石田多美枝・岡所文之・岩田典子・森口 宏・森口トヨ子・中西幸枝・山添圭三・森口敏治・松田秋江・田中照夫・小森トミ枝・田中正省・岡田圭子・秋田義和・中西 博・奥垣幸代・足立正直・野村信夫・中西敦子・片山道雄・山口五郎・岡下保二・小國稲二・前田富美代・辻 至充・岡田正吉・松田つぎ枝・中野あつ子・中原寿子・小森巳次・吉岡喜代子・安田由美子・山崎とも子・小笠原順子・中前幸子・黒田邦夫・峰 陽子・森 友美・上田いずみ・塩見有美・羽生夕紀子・由水ゆう子・佐野章子・福島美保・保坂 亨・若本恭子・林 祐子・土屋奈巳・林田登之・北山貴美子・山本弥生・林 秀子・溝井麗子・鈴木みかる・松尾幸枝・小滝初代・丸谷はま子・吉村 保・吉岡正子・小牧 勲・河崎宏子・山本和之介・木全邦之・佐々木 理・小笠原 彰・土田昌人・鳴海紀彦・成田英人・田口雄一・中島新治・畑 謙治・三黒広史・宮崎 歩・田中文美・二ノ宮優子・金保真由美・河崎祐子・山副宏子・平林京美・谷口勝江・安達久子・高原与作・平林秀夫・河戸久夫・松村 仁・今西茂満・吉岡 茂・藤原義夫・米田武志・上田忠志・山副武志・山城金作・坪倉 仁・東宇虎次・菱川實・行待花子・平林直美・森野美智代・熊谷千代子・藤原ヒサエ・松本智枝子・由良里枝・長野泰子・高橋あかね・鈴木弥生・奥井 愛・田中熊次郎・糸井 晃・糸井文雄・永島俊夫・吉村行雄・山添 均・木成靖夫・鈴木 豊・鷺山犬昌・小西定男・井通敏郎・野川 操・山添喜代子・四方めぐみ・松浦初美

注3 現地調査ならびに本概要報告作成にあたって下記の機関及び方々からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表します(順不同・敬称略)。

大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会・寺村光晴・川村好光・高橋進一・清水真一・十菱俊武・青木豊明・田中義昭・勝部 衛・都出比呂志・杉原和雄・小山雅人・肥後弘幸・佐藤見一・瀬戸谷皓・谷本 進・宮村良雄・大澤由美・細川康晴・大崎哲人・西世津子・今田昇一・白敷真也・下川賢司・東 高志・森下 衛・岡田見治・森 正・齊藤 優・中前幸子・羽生夕紀子・中嶋利雄・小国敏之

注4 坪倉利正・釋 龍雄「京都府奥丹後地方発見の有舌尖頭器」(『古代文化』24-9 (財)古代学協会) 1972

注5 注4に同じ

注6 片岡 肇「舞鶴市小橋川川床発見の有舌尖頭器」(『古代文化』24-9 (財)古代学協会) 1972

注7 釋 龍雄・杉原和雄「奈具遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第1集 弥栄町教育委員会) 1972

注8 杉原和雄・金村充人・田中光浩「いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第3集 弥栄町教育委員会) 1982

注9 藤原敏見・高野陽子「オテジ谷遺跡・オテジ谷古墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第6集 弥栄町教育委員会) 1991

- 注10 杉原和雄・金村充人・田中光浩「坂野」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注11 注9に同じ
- 注12 加悦町教育委員会「蛭子山古墳・作り山古墳」(『加悦町文化財シリーズ』加悦町教育委員会) 1982
- 注13 三浦 到「丹後の古墳と古代の港」(『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ1 同志社大学考古学研究室) 1982
- 注14 小池 寛「府下遺跡紹介7. 神明山古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注15 音村政一「蛭子山古墳、黒部銚子山古墳実測調査報告」(『同志社考古』第9号 同志社大学考古学研究会) 1972
- 注16 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注17 三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡〔4〕ゲンギョウの山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注18 森 正ほか「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡〔2〕普甲古墳群・稲荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注19 増田孝彦ほか「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡〔3〕宮の森古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注20 注8に同じ
- 注21 堤 圭三郎「太田2号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』京都府教育委員会) 1970
- 注22 増田孝彦・岡崎研一「国営農地開発事業(東部地区)関係遺跡〔1〕遠所古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注23 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注24 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査について」(『歴史シンポジウムの記録 丹後と古代製鉄』京都府弥栄町) 1991
- 注25 「いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書」 弥栄町教育委員会 1982
『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』 財団法人古代学協会 1985
『奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書』 弥栄町教育委員会 1986
- 注26 「東高江・西高江遺跡発掘調査報告書」 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1981
- 注27 松本岩雄・三宅博士ほか「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書-II』 鳥根県教育委員会 1977
- 注28 益富寿之助『原色岩石図鑑』 保育社 1955
- 注29 『丹後地質鉱物誌』 丹後地方校長会 1955
- 注30 鳥根県出雲玉作り資料館の勝部 衛氏に案内していただき、現地を見学した。
- 注31 垣田平治郎「辻碧玉鉱床について」(『但馬考古学』第4集 但馬考古学研究会) 1987

- 寺村光晴「玉谷の碧玉産地と多麻良伎神社」(『国分台』I 和洋女子大学博物館学研究室) 1980
豊岡市教育委員会瀬戸谷浩氏・潮崎 誠氏、八鹿町教育委員会谷本 進氏に現地状況を教えていただき、増田とともに現地を見学した。
- 注32 田中光浩「玉作り関連遺材」(『扇谷遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会) 1988
- 注33 『途中ケ岡遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1977
田中光浩「玉作り」(『扇谷遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会) 1988
- 注34 潮崎 誠「玉作りの里—女代神社南遺跡の調査から—」(『歴史講演会参考資料集』 豊岡市教育委員会・豊岡公民館) 1993年2月11日
- 注35 田代 弘「志高遺跡の碧玉製管玉生産について」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 志高遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注36 舞鶴市桑飼上に所在。当センター調査。現在整理中。
- 注37 奈良県二上山産、香川県金山産、それ以外のものである(当センター中川和哉調査員教示)。今後、産地推定分析を行う予定である。
- 注38 『北陸自動車道 埋蔵文化財調査報告書 下谷地遺跡』 新潟県教育委員会 1979
- 注39 『下屋敷遺跡・堀江十楽遺跡』(福井県埋蔵文化財調査報告第14集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1988
- 注40 注39と同じ。第21図に示された遺物。
- 注41 高橋進一「玉作遺跡と玉製品」(近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下巻 山陽新聞社) 1992
高橋進一氏から御教示いただいた。
- 注42 『八雲遺跡発掘調査概要』I 大阪府教育委員会 1987
- 注43 坪倉利正・釋 龍雄「京都府奥丹後地方発見の有舌尖頭器」(『古代文化』24-9 (財)古代学協会) 1972
- 注44 片岡 肇「舞鶴市小橋川床発見の有舌尖頭器」(『古代文化』24-9 (財)古代学協会) 1972
- 注45 梅原末治「深田村字黒部弥生式土器遺跡」(『京都府史蹟勝地調査報告』第1冊 1919)
『京都府弥栄町奈具遺跡発掘調査報告書』 弥栄町教育委員会 1973
- 注46 神原英郎「用木山遺跡」(『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(4) 岡山県教育委員会) 1977
- 注47 『扇谷遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会 1988
- 注48 林 和廣「弥生式土器」(『途中ケ岡遺跡発掘調査報告書』 峰山町教育委員会) 1977
- 注49 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-13- 福岡県鞍手町所在高木遺跡の調査』 福岡県教育委員会 1977
- 注50 松本岩雄・三宅博士ほか「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書-II-』 鳥根県教育委員会 1977
- 注51 『東高江・西高江遺跡発掘調査報告書』 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1981
- 注52 「江上遺跡」(『北陸自動車道遺跡調査報告-上市町土器・石器編-』 上市町教育委員会) 1982
- 注53 桐原 健「信濃における弥生時代の玉のありかたについて」(『信濃』25-4) 1973

- 注54 小田富士雄ほか「上対馬古里・塔の首石棺群調査報告」(『対馬』長崎県教育委員会) 1974
- 注55 坂田邦洋『対馬の考古学』 1976
- 注56 「原の辻遺跡」(『長崎県文化財調査報告』第37集 長崎県教育委員会) 1978
- 注57 下村 智・横山邦継「33.福岡県樋渡遺跡—福岡市西区吉武遺跡群第3次調査—」(『日本考古学年報』36 日本考古学協会) 1983
- 注58 鏡山 猛・渡辺正気「福岡県白佐原の弥生時代墓地」(『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』) 1959
- 注59 「若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査」 福岡県教育委員会 1980
- 注60 「唐子台遺跡群 今治市桜井国分唐子古墳(墳墓)群調査報告」 今治市教育委員会 1974
- 注61 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査2 浅口郡鴨方町 益坂・和田遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第42集 岡山県教育委員会) 1988
- 注62 間壁忠彦・間壁霞子「辻山田遺跡」(『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館) 1974
- 注63 奈良県田原本町教育委員会藤田三郎氏の御教示。
清水真一「弥生期の玉生産・とくに水晶製玉生産について」(『みずほ』第7号 大和弥生文化の会会報) 1993
- 注64 「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群現地説明会資料」 大宮町教育委員会 1992
- 注65 注53と同じ
- 注66 千葉県君津郡市大井戸に所在する。長幅約6mmの算盤玉一点が土壌中より碧玉・鉄石英製管玉、小銅鐸に伴って出土。弥生時代後期末。整理作業中。財団法人君津郡市文化財センター 桐村修司氏の教示による。
- 注67 清水真一「西高江玉作工房跡」『東高江・西高江遺跡発掘調査報告書』 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1981
- 注68 佐藤宗男「大中の湖南遺跡における玉作について」(『古代文化』22-1 (財)古代学協会) 1970
- 注69 新潟県下谷地遺跡、福井県加戸下屋敷遺跡では、顕微鏡による石針先端部の使用痕観察を行っている。
- 注70 寺村光晴「北陸地方玉作の出現と展開」(『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館) 1980
寺村光晴「玉」(『三世紀の考古学』中巻 三世紀の遺跡と遺物 学生社) 1981 P.251
- 注71 計良由松・椎名仙卓「後期弥生式文化の攻玉法—佐渡新穂玉作遺跡の資料を中心として—」(『考古学雑誌』47-1 日本考古学協会) 1961
- 注72 中川成夫・本間嘉晴・椎名仙卓・岡本 勇・加藤晋平「第1節 考古学から見た佐渡」(『佐渡—自然・社会・文化—』九学会連合佐渡調査委員会 平凡社) 1964
- 注73 「北陸自動車道 埋蔵文化財調査報告書 下谷地遺跡」 新潟県教育委員会 1979
- 注74 「下安原海岸遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター 1988
- 注75 整理作業中。石川県立埋蔵文化財センター木立雅朗氏の御教示による。
- 注76 「下屋敷遺跡・堀江十楽遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告第14集 福井県教育庁埋蔵文化財

調査センター 1988

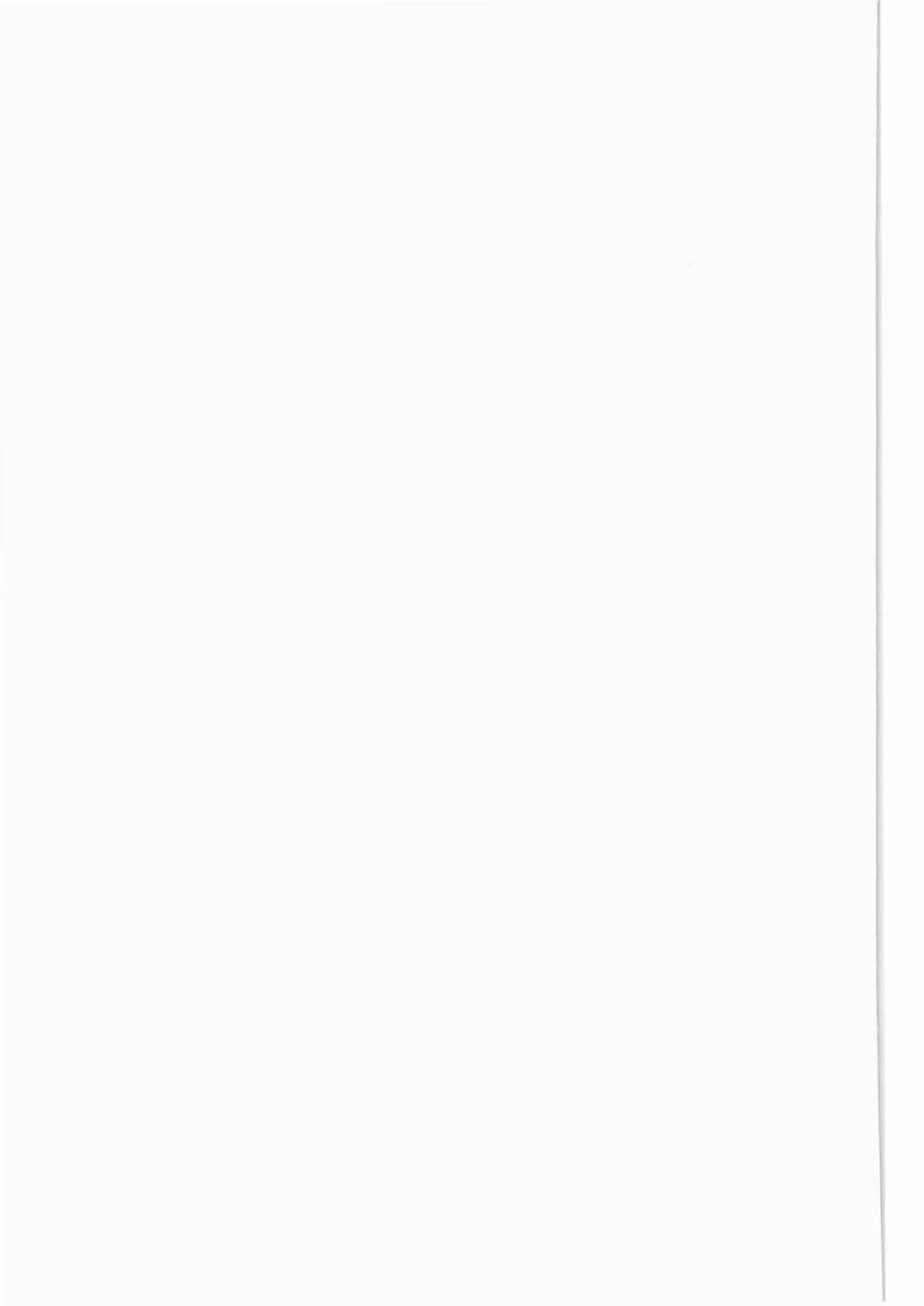
- 注77 『吉河遺跡発掘調査概報』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報2 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986
- 注78 『古代と現代との同居 玉作りの村ー市三宅東遺跡ー』 野洲ロータリークラブ 1983
『古代の玉と玉作りー市三宅東遺跡と近江の玉作りー』 野洲町歴史民俗資料館 1991 野洲町教育委員会古川与志継氏の教示を得た。
- 注79 潮崎 誠「玉作りの里ー女代神社南遺跡の調査からー」(『歴史講演会参考資料集』 豊岡市教育委員会・豊岡公民館) 1993年2月11日
- 注80 整理中に中司照世氏(現在若狭歴史民俗資料館)の案内で遺物を実見させていただいたことがある。最近この資料を見学された深澤芳樹氏(奈良国立文化財センター飛鳥藤原京調査部)によると畿内第Ⅱ様式の新相から第Ⅲ様式の前段階に並行するのではとのご教示を得た。
- 注81 高橋進一「玉作遺跡と玉製品」(近藤義郎編『吉備の考古学的研究』下巻 山陽新聞社) 1992
- 注82 清水真一「鳥取県下の玉作遺跡についてー山陰の弥生時代の玉生産の流れー」(『考古学研究』28-4 考古学研究会) 1982
- 注83 『北陸自動車道 埋蔵文化財調査報告書 下谷地遺跡』 新潟県教育委員会 1979 P.55~64
- 注84 寺村光晴「北陸地方玉作の出現と展開」(『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館) 1980
- 注85 滋賀県野洲町市三宅東遺跡でもこれと同様のあり方を示す。一方、福井県三国町下屋敷遺跡では、碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉と石針はともに新穂技法である。
- 注86 寺村光晴「攻技術の基礎」(『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館) 1980
- 注87 寺村光晴氏が当遺跡を見学されたおり、直接お話をうかがう機会があった。
- 注88 未報告資料。豊岡市教育委員会潮崎 誠氏にみせていただいた。
- 注89 京都大学原子炉研究所薬科哲男氏の御教示。
- 注90 『丹後地質鉱物誌』 丹後地方校長会 1955
- 注91 注90と同じ。
- 注92 堀 秀道『楽しい鉱物図鑑』 草思社 p.68
- 注93 注28と同じ。
- 注94 注90と同じ。
- 注95 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要〔2〕左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』 京都府教育委員会) 1991
- 注96 「左坂横穴群・左坂古墳群G支群(弥生土壙墓群)現地説明会資料」 京都府教育委員会 1992
- 注97 注96と同じ。
- 注98 小沢和義「神明山古墳実測調査報告」(『同志社考古』7 同志社大学考古学研究会) 1969
平良泰久「丹後大山墳墓群」(『丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983に神明山古墳前方部出土土師器が掲載されている。
- 注99 杉原和雄・坪倉利正ほか「カジヤ古墳発掘調査報告書」(『峰山町文化財報告』第1集 峰山町教育委員会) 1972
- 注100 石崎善久「丹後国営農地関係遺跡(丹後東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要 (3)通り古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究セン

ター) 1992

- 注101 「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群現地説明会資料」 大宮町教育委員会
1992
- 注102 奥村清一郎ほか「大谷古墳」(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1987
- 注103 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財調査報告』第5集 弥栄町教育委員会)
1988
- 注104 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第
20・21冊 京都府) 1931
- 注105 増田孝彦「丹後国営農地関係遺跡(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要
(1)有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター) 1987
- 注106 岡田晃治ほか「帯城墳墓群発掘調査概要Ⅰ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』 京都府教
育委員会) 1985
岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕帯城墳墓群Ⅱ」
(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注107 鈴木忠司ほか「京都府中郡大宮町小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教
育委員会) 1984
- 注108 森 正「小林古墳群」(前掲注102に石室実測図を掲載)
- 注109 杉原和雄ほか「裏陰遺跡発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員
会) 1979
- 注110 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔2〕大田鼻横穴群」
(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注111 注105に同じ。
- 注112 竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(1)正垣遺跡」(『京都府遺跡
調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注113 藤原敏晃「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(2)谷内遺跡」(『京都府遺跡
調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概
報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概
報(1988)』 京都府教育委員会) 1988
細川康晴「谷内遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵
文化財調査研究センター) 1988
- 注114 今田昇一「菅外遺跡発掘調査概報Ⅲ」(『大宮町文化財調査報告』第7集 大宮町教育委員
会) 1991
- 注115 梅原末治「大宮賣神社」(『京都府史蹟勝地調査報告』第5冊 京都府) 1931
- 注116 肥後弘幸「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査
概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992

- 注117 山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』40-6 (財)古代学協会) 1988
また、最近では隣接する但馬地域でT K209～T K217併行期の須恵器の位置づけに関して、以下の報告において、立ち上がりをもつ法量の大きな杯で、調整の粗雑な一群をT K217併行期に置く案が示されている。
菱田哲郎ほか『鬼神谷窯跡発掘調査報告』(兵庫県城崎郡竹野町教育委員会) 1990
谷本 進「西家の上古墳群」(『兵庫県八鹿町文化財調査報告書』第10集 八鹿町教育委員会) 1992
- 注118 大田鼻横穴群(前掲注110)では、玄室平面プランにより横穴を3タイプに分類している。すなわち、奥隅の丸い長方形プランのA型・奥隅が丸く台形のB型・いずれにも属さないC型に分類される。里ヶ谷横穴群をこの分類に当てはめれば、2号横穴がC型である以外は、すべてA型に属するものとなる。大田鼻横穴群ではA型からB型への変化がスムーズに考えられるのに対し、里ヶ谷横穴群では7世紀後半まで、A型を採用している点が注目される。丹後地方ではこのほか、有明横穴群でもA型からB型への変化が考えられる。左坂横穴群では、B型に分類される玄室平面を呈する。
- 注119 花田勝広氏は、豊前→出雲→但馬→丹後といった伝播経路を考えている。
花田勝広「近畿横穴墓の諸問題」(『おおいた考古』第4集 大分県考古学会) 1991
- 注120 注116に同じ。
- 注121 『京都府遺跡地図』第1分冊[第2版] 京都府教育委員会 1988
- 注122 『京都府熊野郡誌』京都府郷土誌叢刊第九冊 京都府熊野郡役所 1923
- 注123 竹岡 林・近藤 滋・河原純之他「京都・滋賀・福井」(『日本城郭大系』第11巻 新人物往来社) 1980
- 注124 久保哲正・大槻真澄・岡田晃治他「権現山古墳発掘調査概報」(『京都府久美浜町文化財調査報告』第9集 久美浜町教育委員会) 1984
- 注125 坪井良平「山城木津惣墓標の研究」『考古学』10-6 1939
- 注126 木下密運「元興寺極楽坊板碑群の調査研究—その型式的変遷を中心として—」『元興寺仏教民俗資料研究所年報』1967・1968
- 注127 森 郁夫「Ⅲ日本各地の墳墓・近畿・三、中世以降の墳墓」(石田茂作編『新版仏教考古学講座』第7巻 雄山閣) 1975
- 注128 注122に同じ。

圖 版

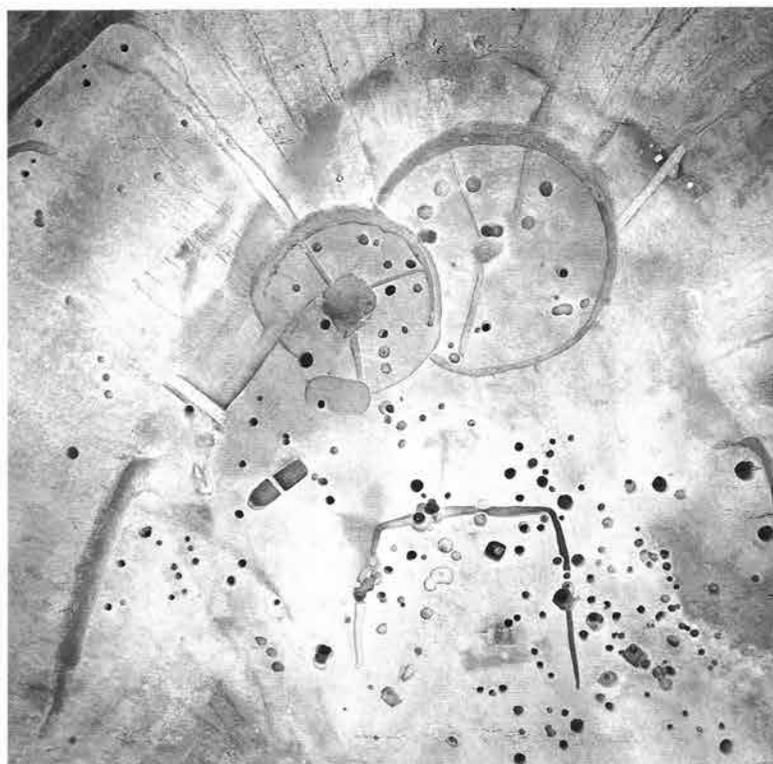




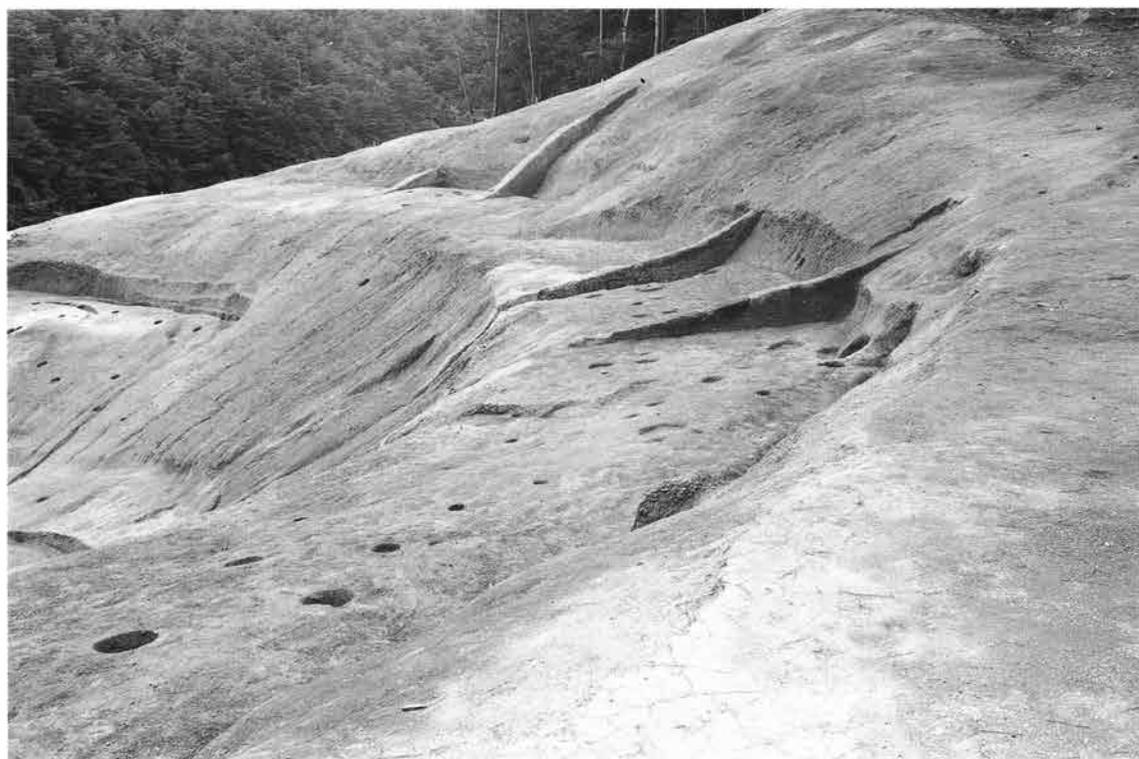
(1) 奈具谷遺跡（谷部）・奈具岡遺跡（丘陵）調査前風景



(2) 奈具岡遺跡調査前風景



(1) SH14・15・24検出状況 (真上から)



(2) SH04・05検出状況



(1) 調査地近景（東からSH01を望む）



(2) 調査地近景（西からSH06を望む）

図版第4 奈具岡遺跡



(1) SH01検出状況（北東から）



(2) SH01検出状況（東から）



(1) SH06検出状況（北から）



(2) SH06検出状況（西から）



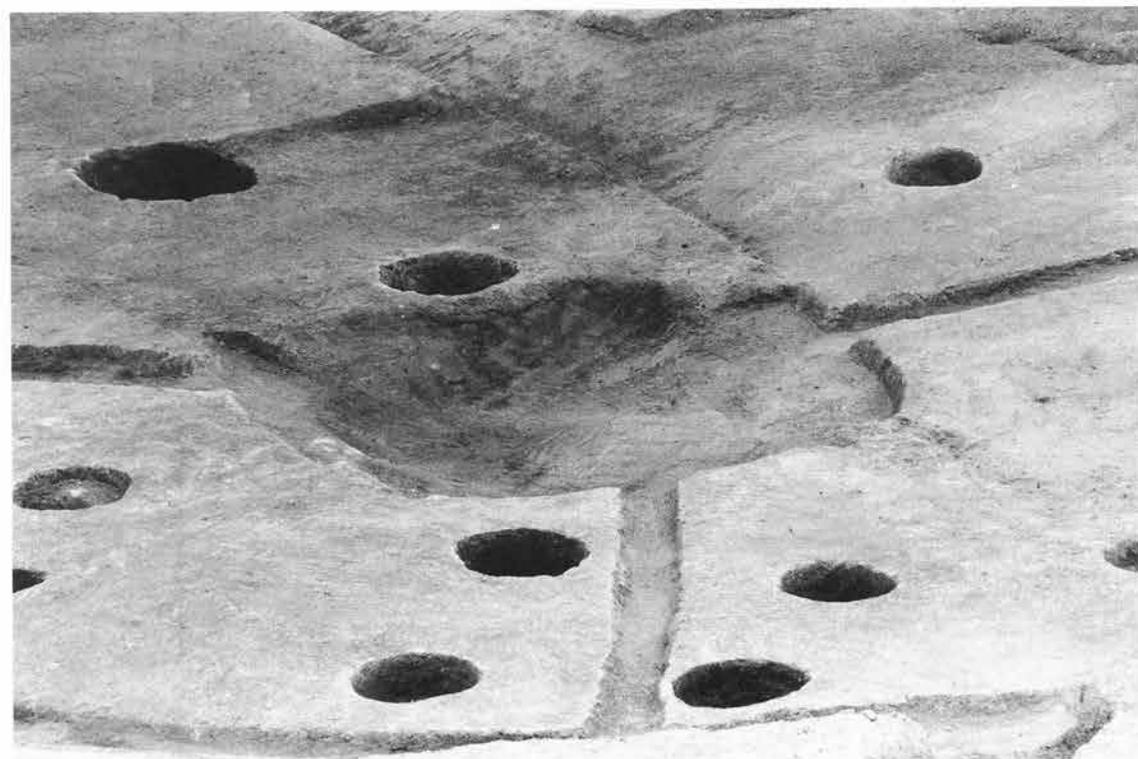
(1) SH14・15検出状況(北東から)



(2) SH14・15検出状況(南西から)



(1) SH15中央土坑断面の状況（西から）



(2) SH15中央土坑完掘状況（北西から）

図版第8 奈具岡遺跡



(1) SH16検出状況（南から）



(2) SH16検出状況（南東から）



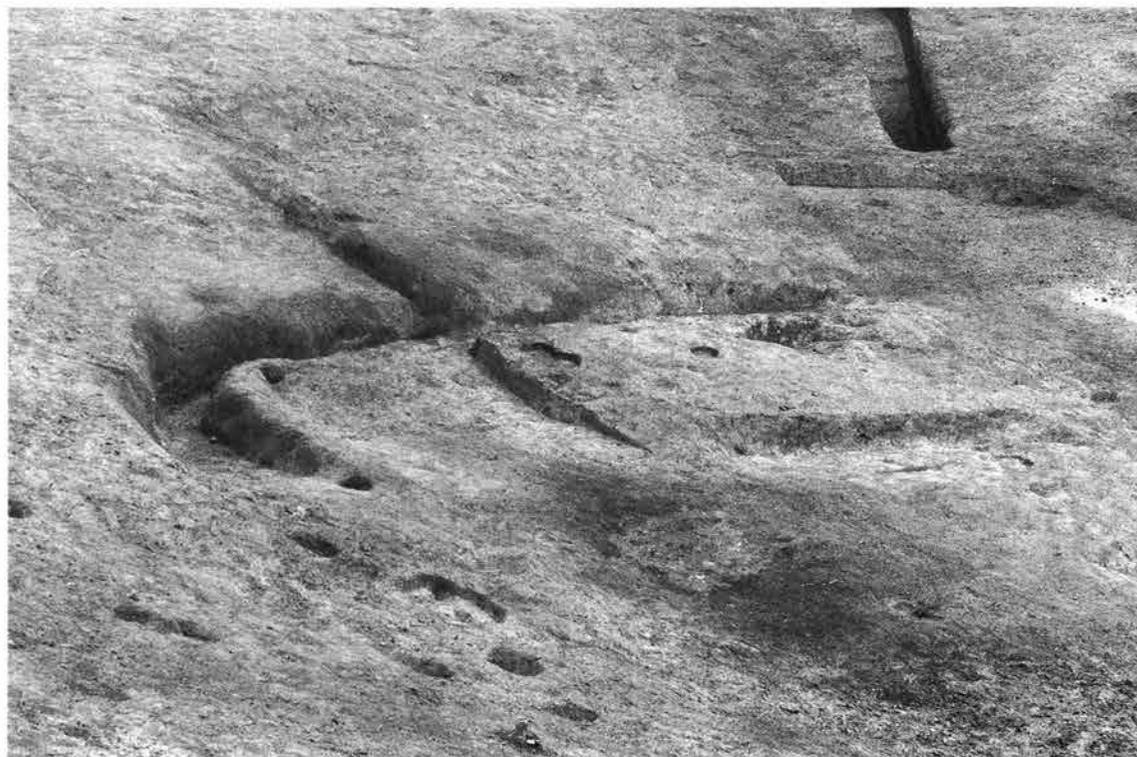
(1) SH17検出状況 (南西から)



(2) SH17検出状況 (東から)



(1) SH11検出状況(西から)



(2) SH20検出状況(北から)



(1) SH21検出状況（南から）



(2) SH21中央土坑（西から）



(1) SH19検出状況 (南から)



(2) SH19検出状況 (西から)



(1) SH22・23検出状況（東から）



(2) SH23検出状況（西から）



(1) SH22検出状況（西から）



(2) 鍛冶炉検出状況



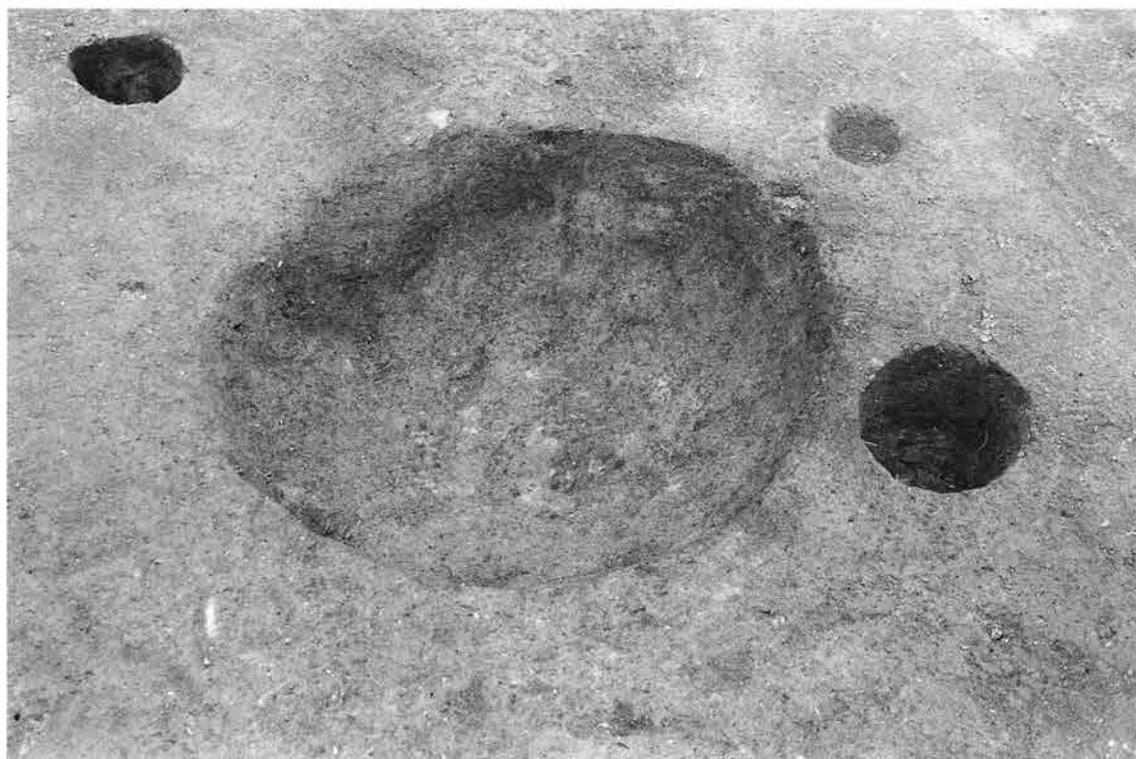
(1) SB01検出状況（東から）



(2) SB01・SH16・SH02検出状況（東から）



(1) 炭窯 (SK04) 検出状況



(2) 炭窯 (SK04) 検出状況



(1) 現地説明会風景



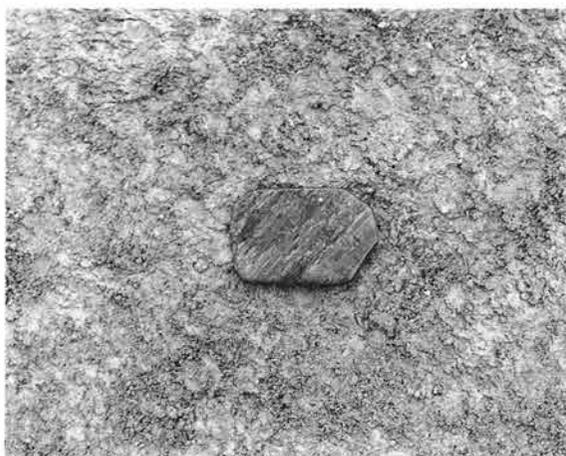
(2) 現地説明会風景



(1) SH06出土碧玉



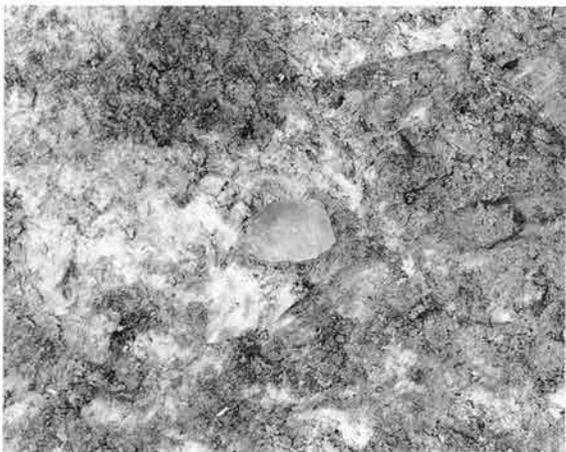
(2) SH01出土碧玉角柱体



(3) SH06出土石鋸



(4) SH03出土紅簾片岩



(5) SH16出土水晶



(6) SH15出土有孔門盤状石製品



(1) SH17出土砥石



(2) SH06出土砥石



(3) SH06出土磨製石器転用石器



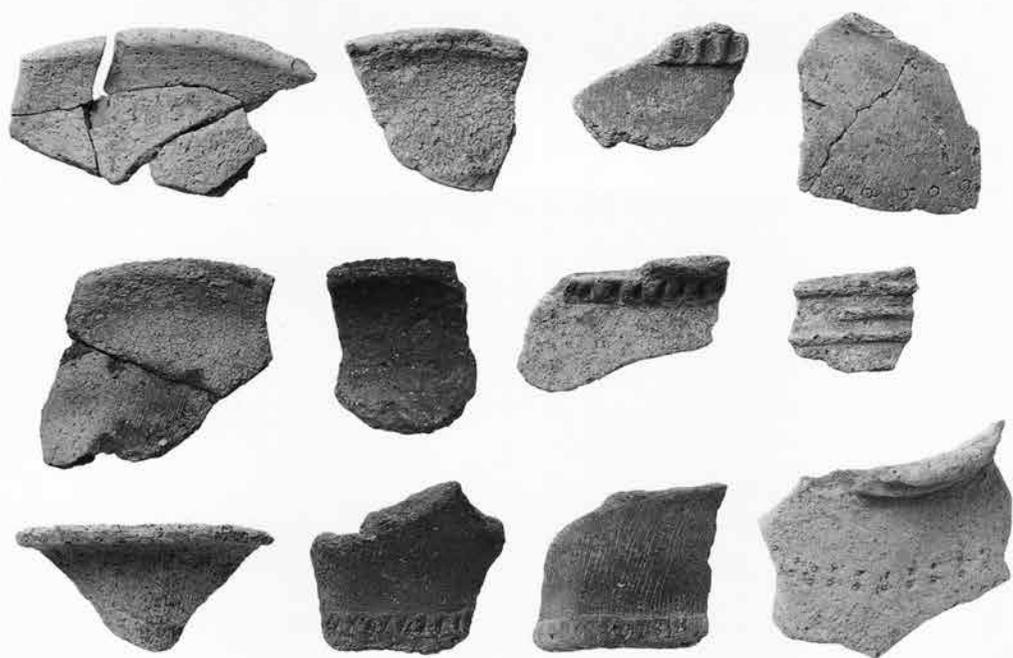
(4) SH17出土土器 (壺)



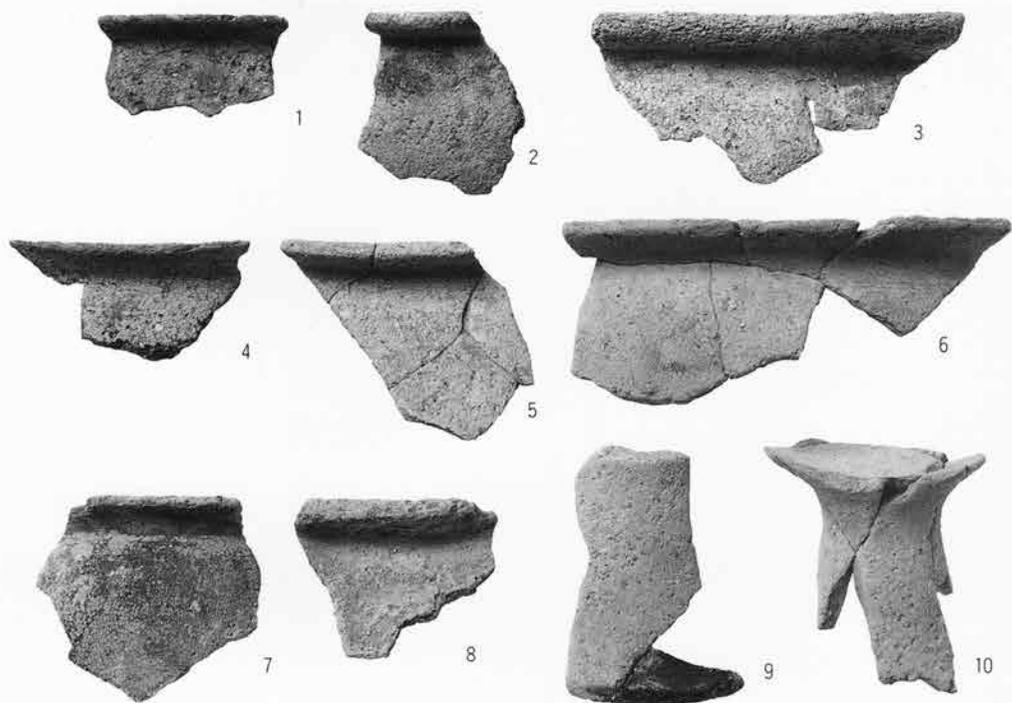
(5) SH02出土土器 (壺)



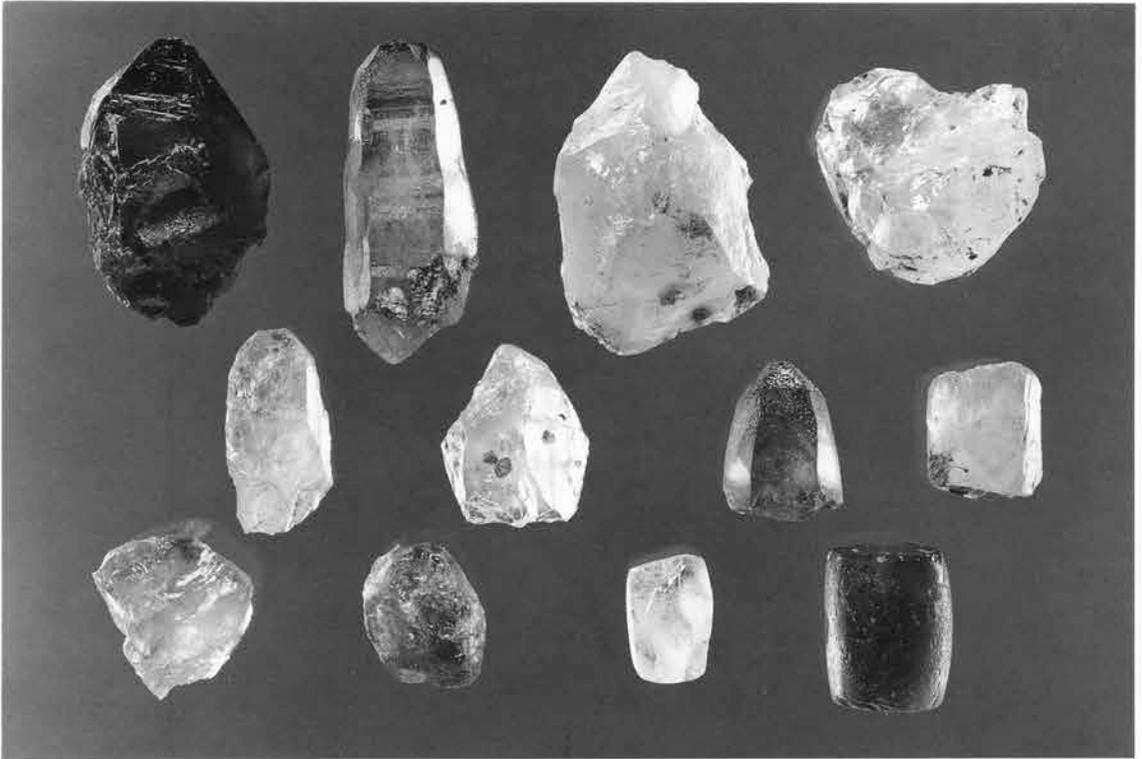
(6) SH23出土土器 (壺)



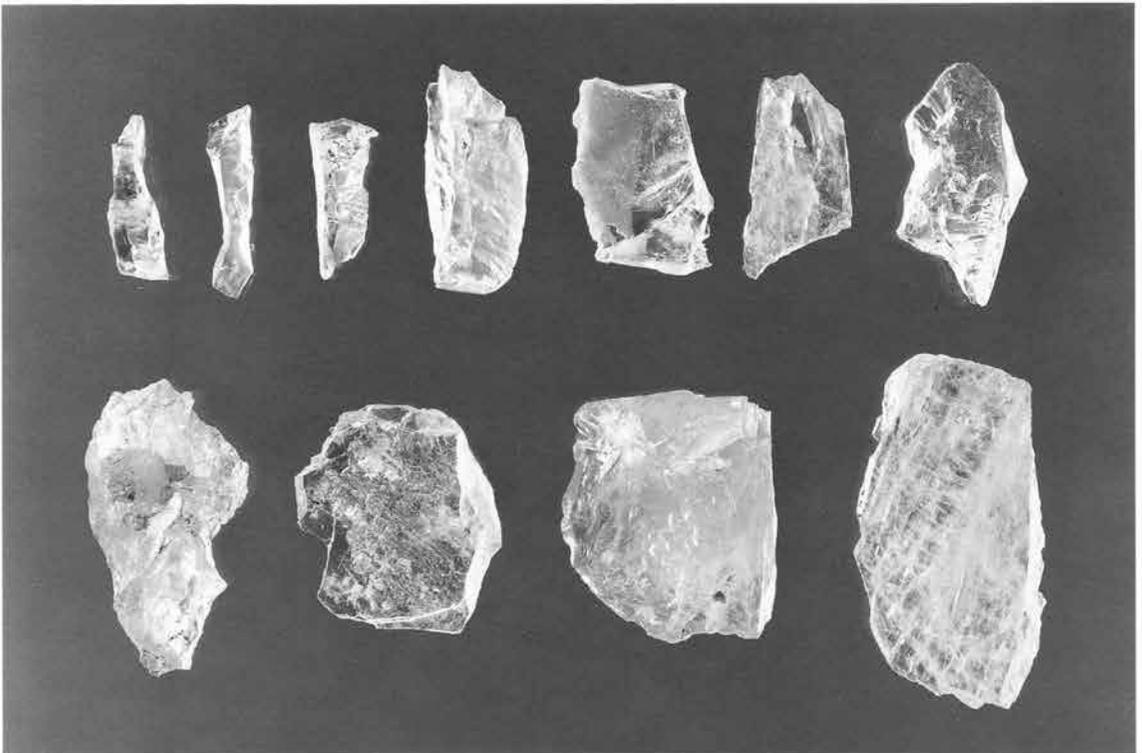
(1) 各遺構出土弥生土器（壺）



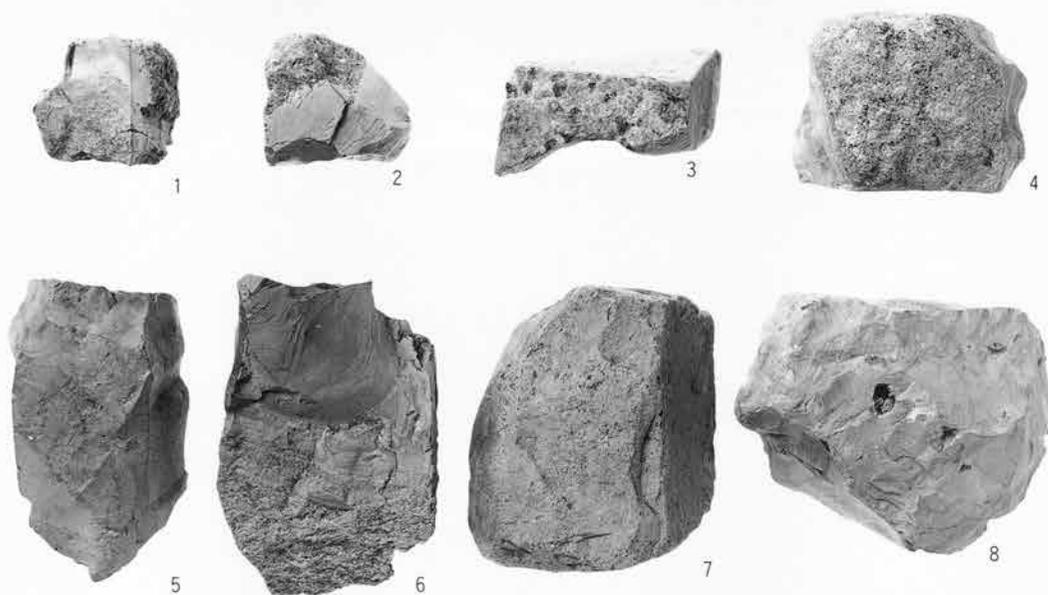
(2) 各遺構出土弥生土器（甕：1～8、高杯：9・10）



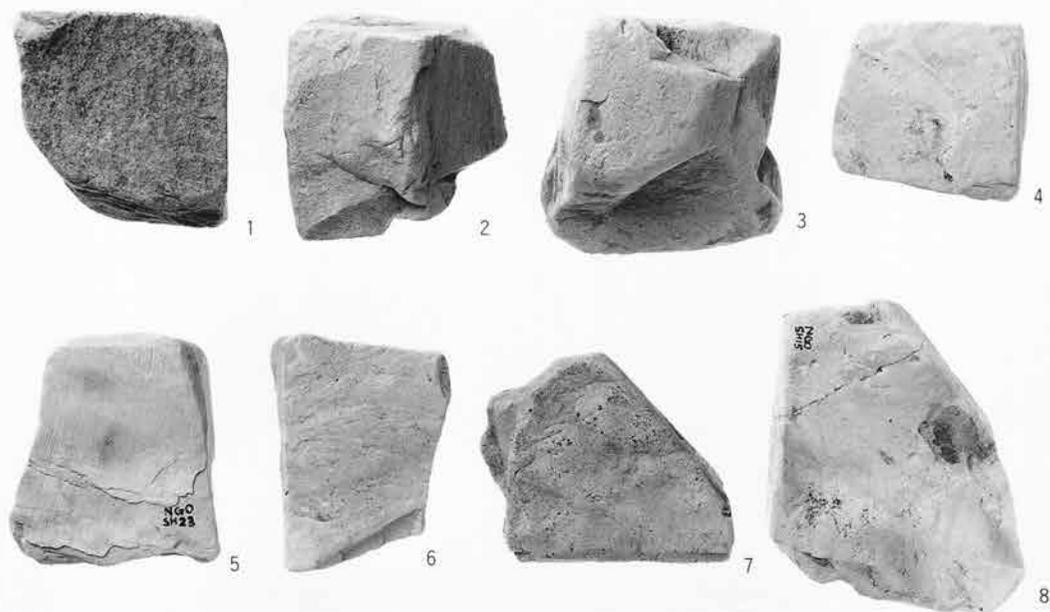
(1) 水晶原石と水晶製玉未製品



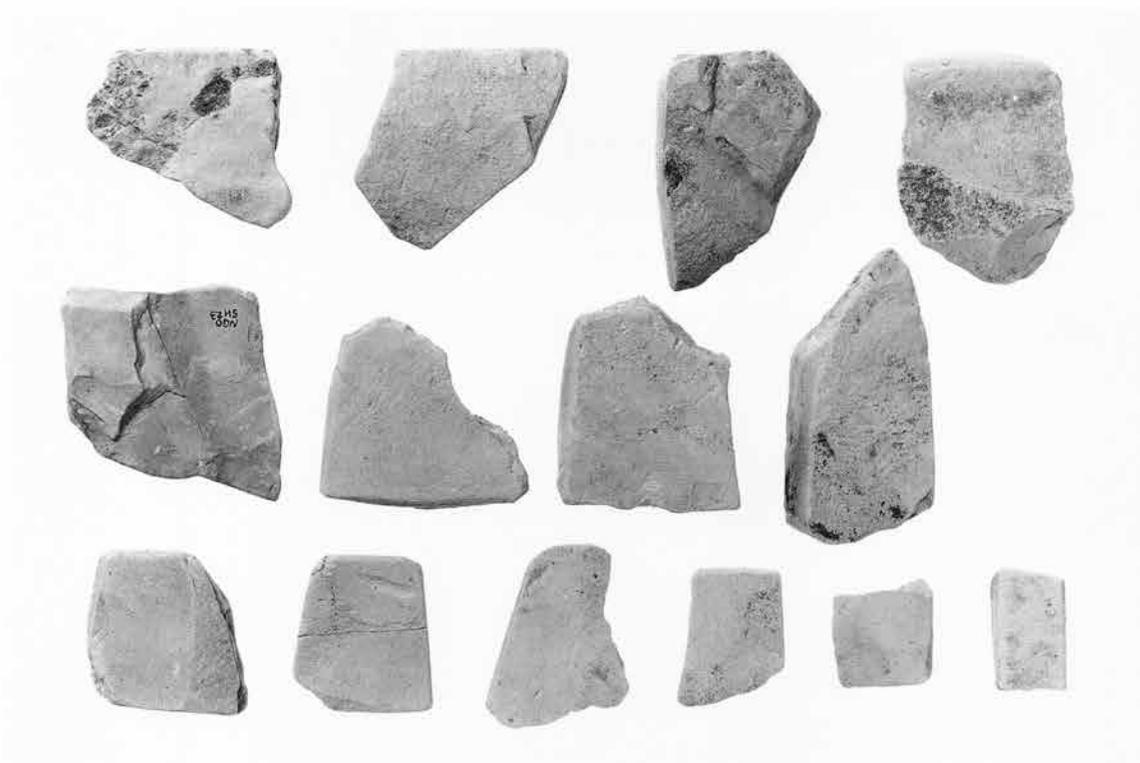
(2) 水晶剥片類



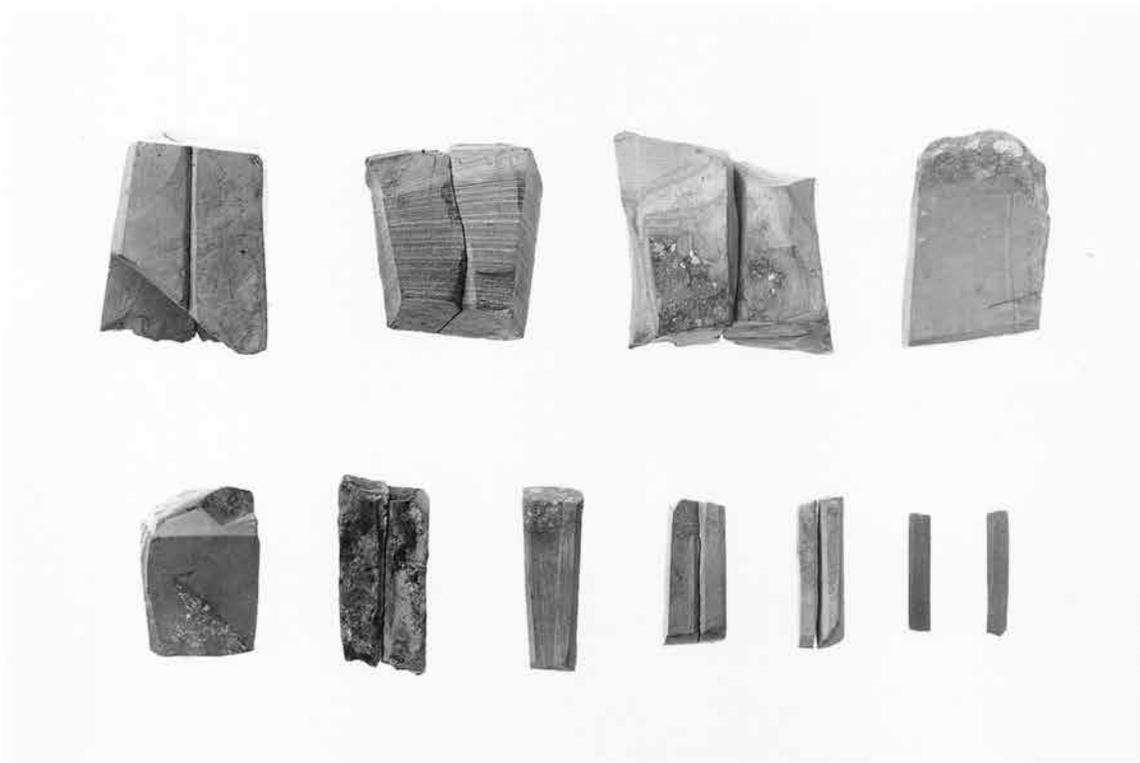
(1) 石核 (7・8)・残核 (1～4)・剥片 (5・6)
5・6は碧玉、ほかは緑色凝灰岩



(2) 方形の石核 (1～3)と板状剥片 (4～8)
いずれも緑色凝灰岩

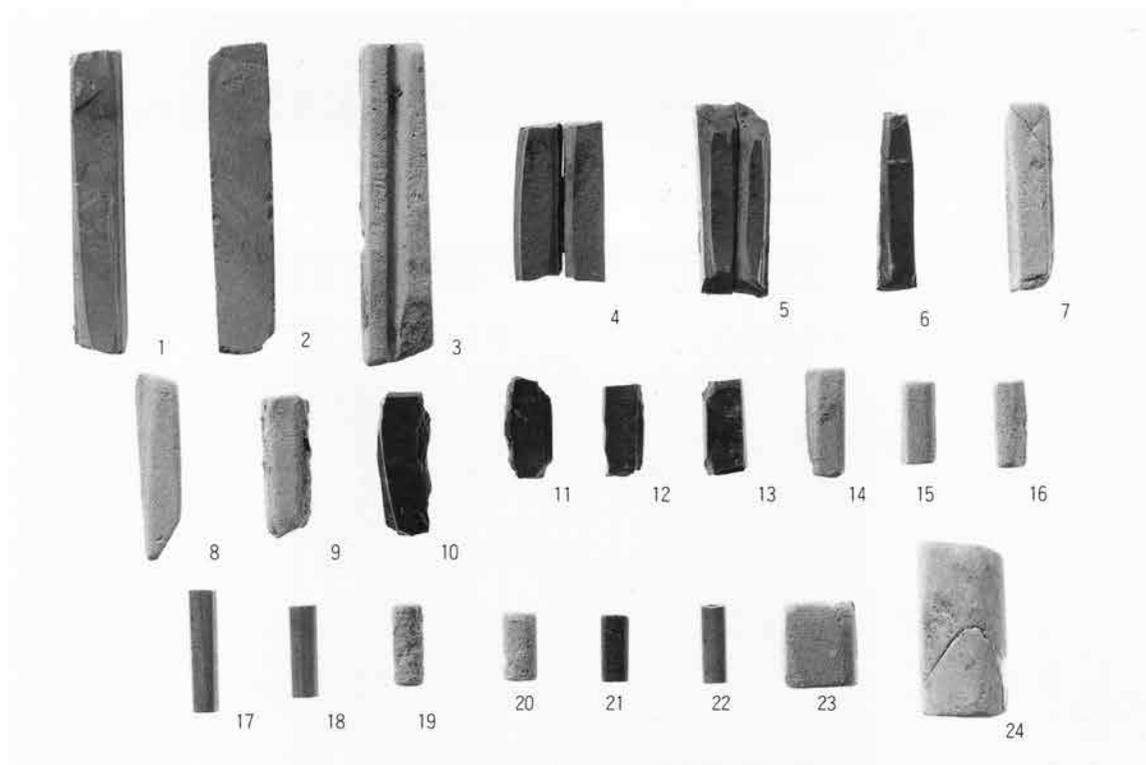


(1) 板状剥片 (いずれも緑色凝灰岩製)

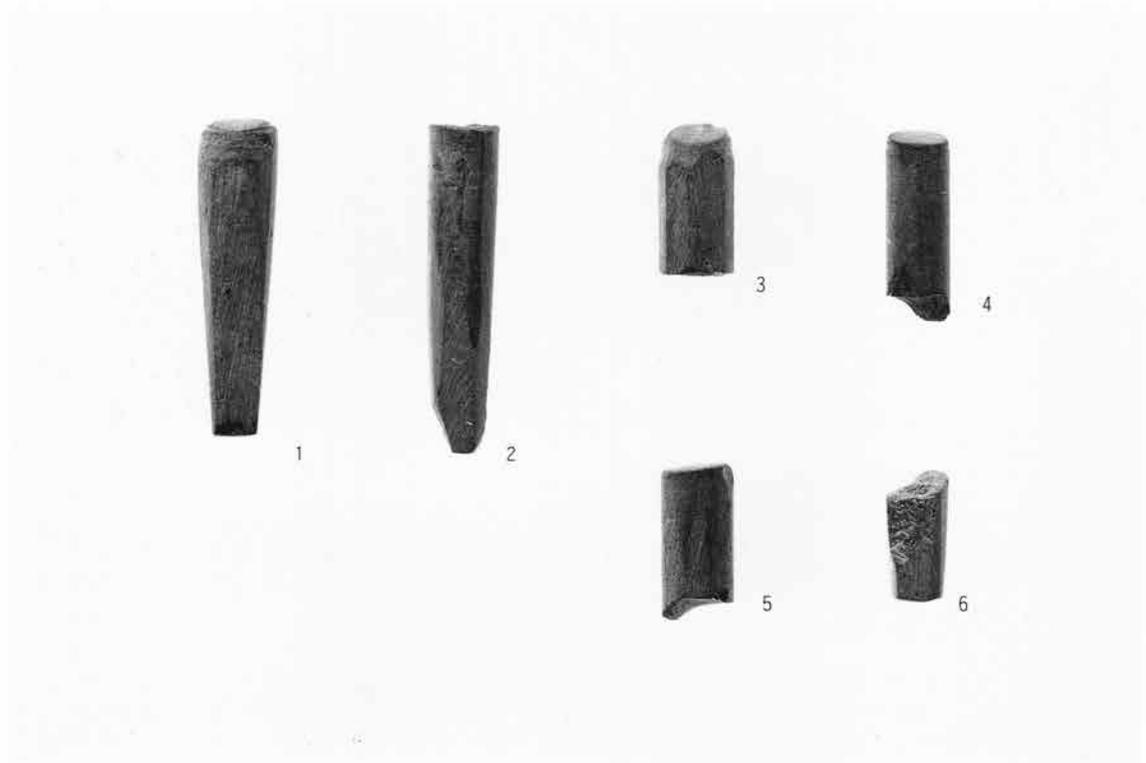


(2) 碧玉の擦切施溝分割過程

図版第24 奈具岡遺跡

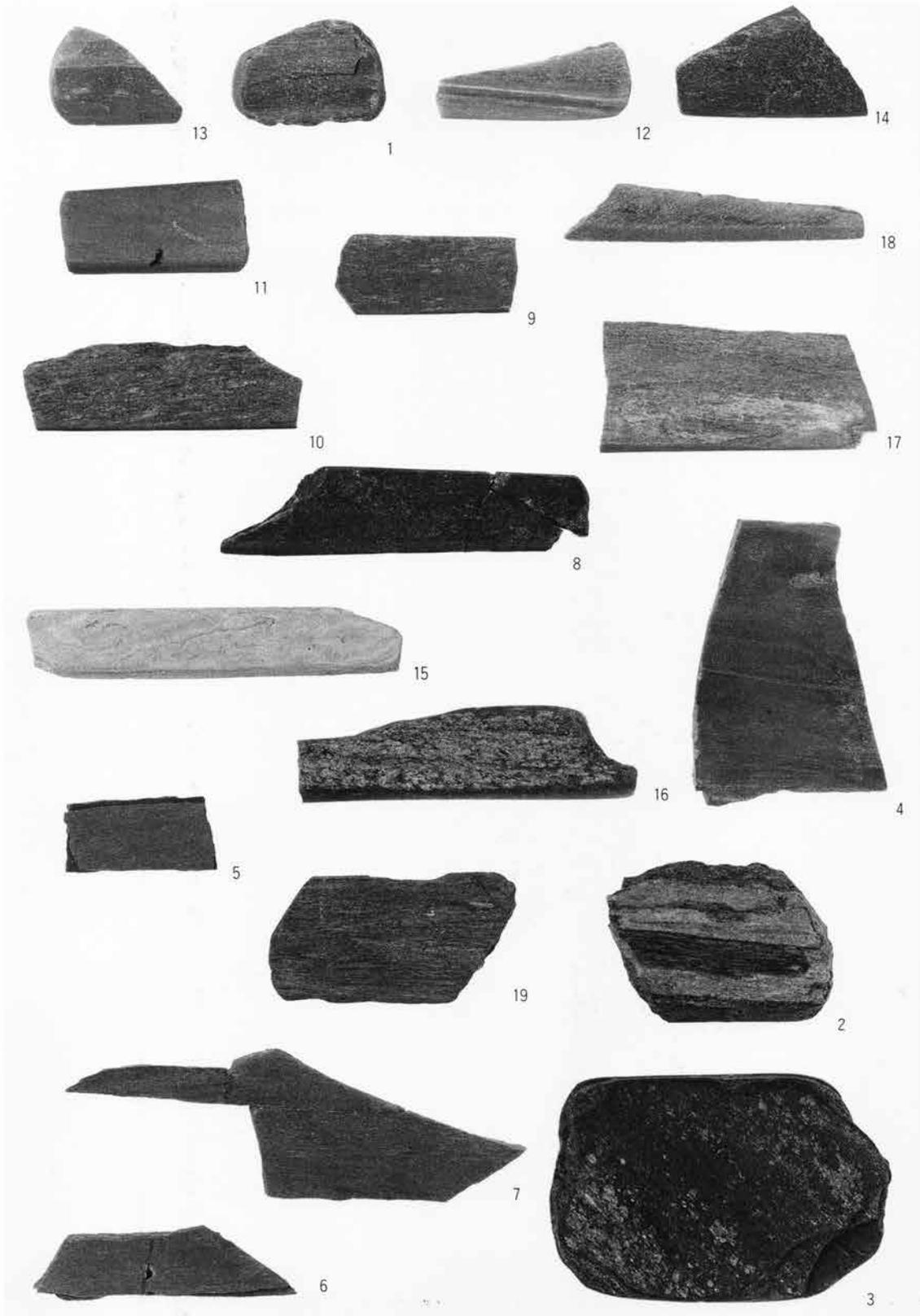


(1) 四角柱 (1~13)・多角柱 (14~18)・管玉 (19~22・24)・角玉 (23)

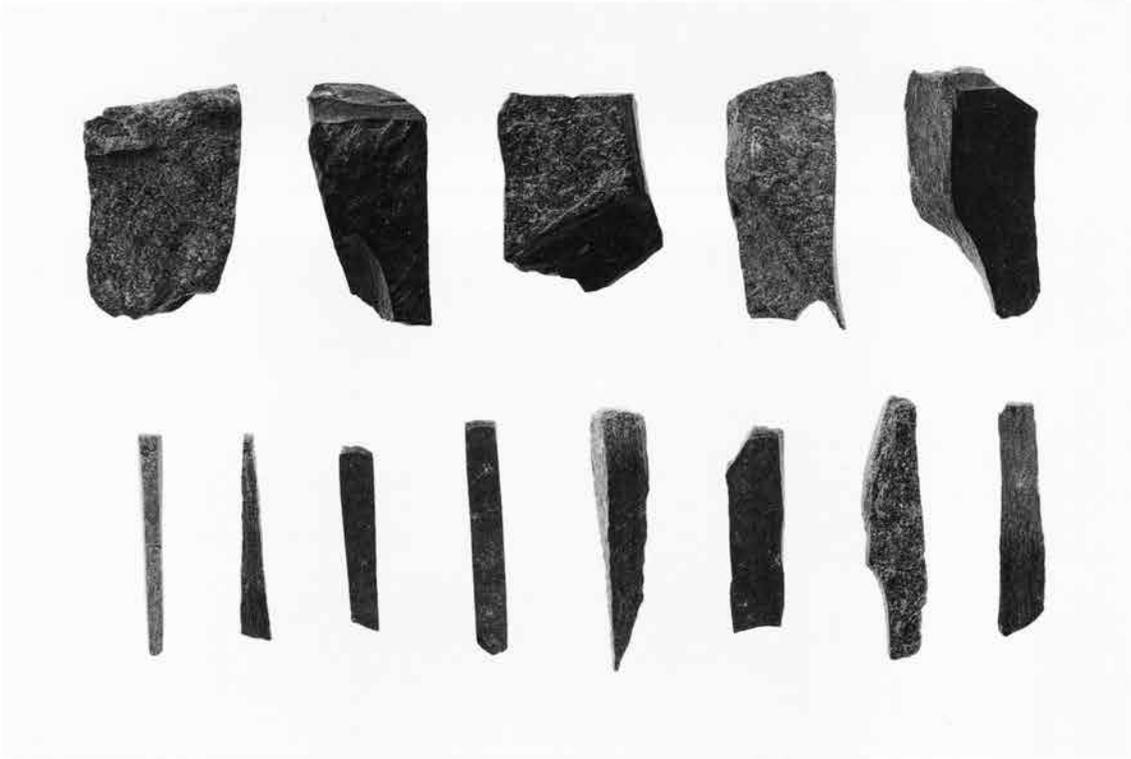


(2) 安山岩製棒状不明磨製石製品
(SH15: 1・2、SH23: 3~6)

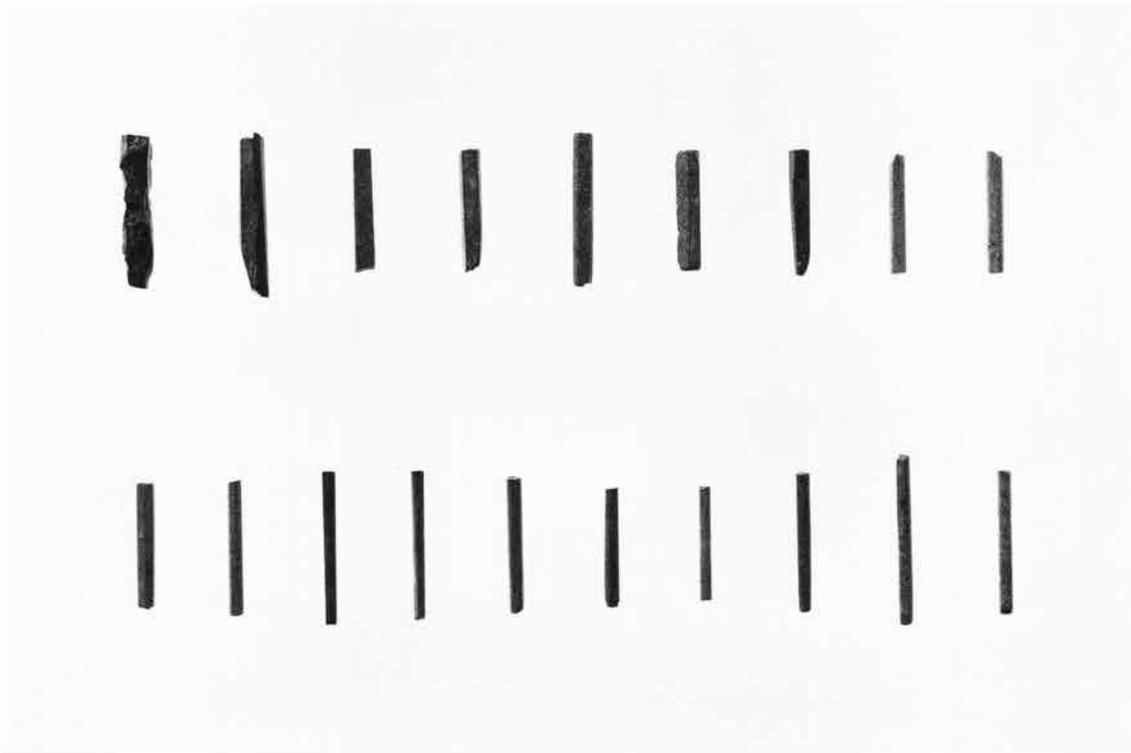
図版第25 奈具岡遺跡



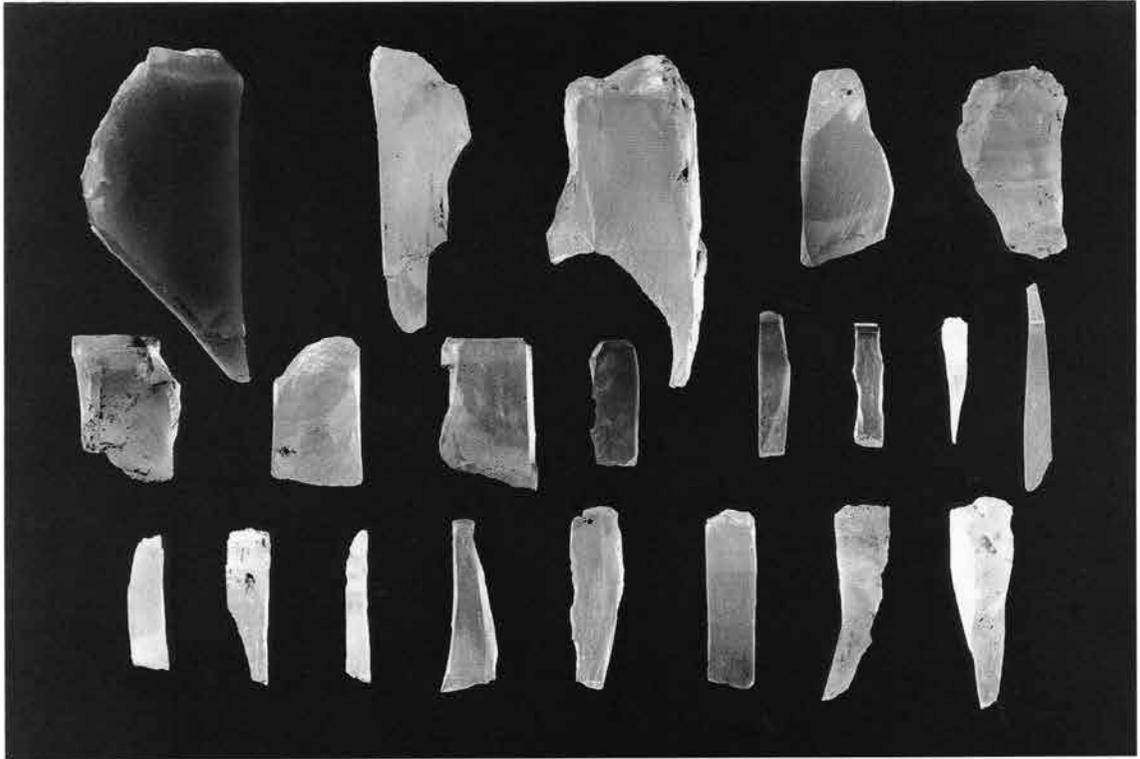
各遺構出土石鋸（番号は第38図実測図に対応）



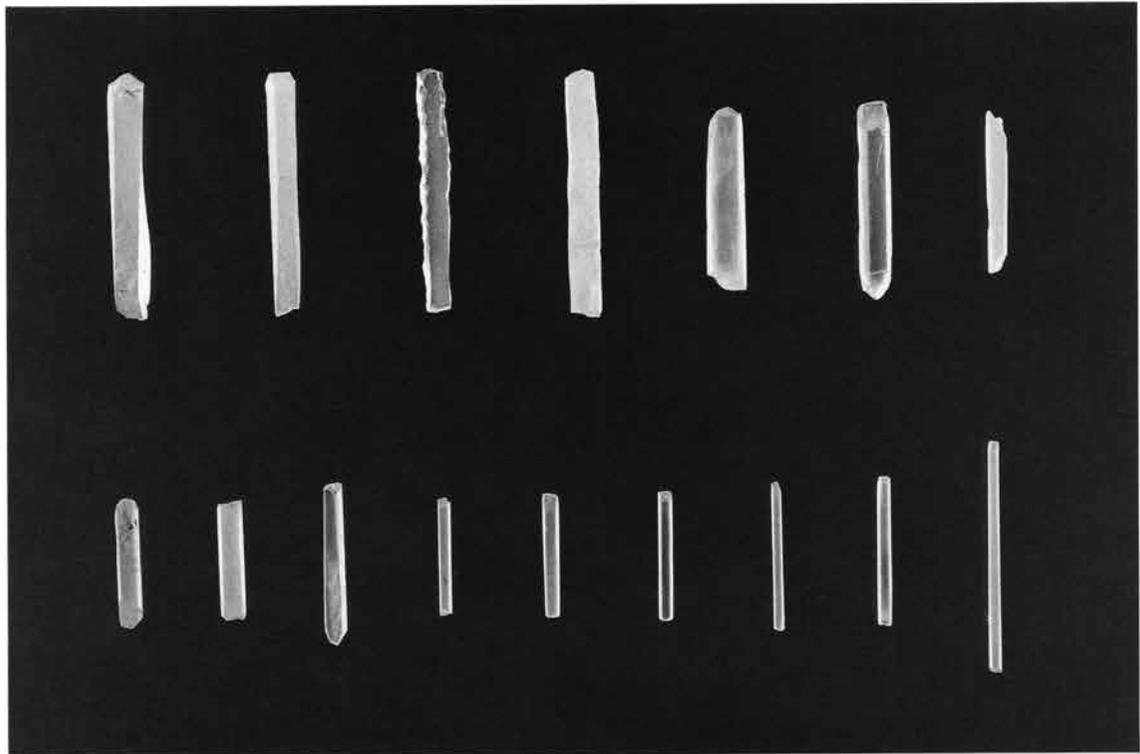
(1) SH23出土石針石核及び角柱体



(2) SH23出土石針角柱体及び成品



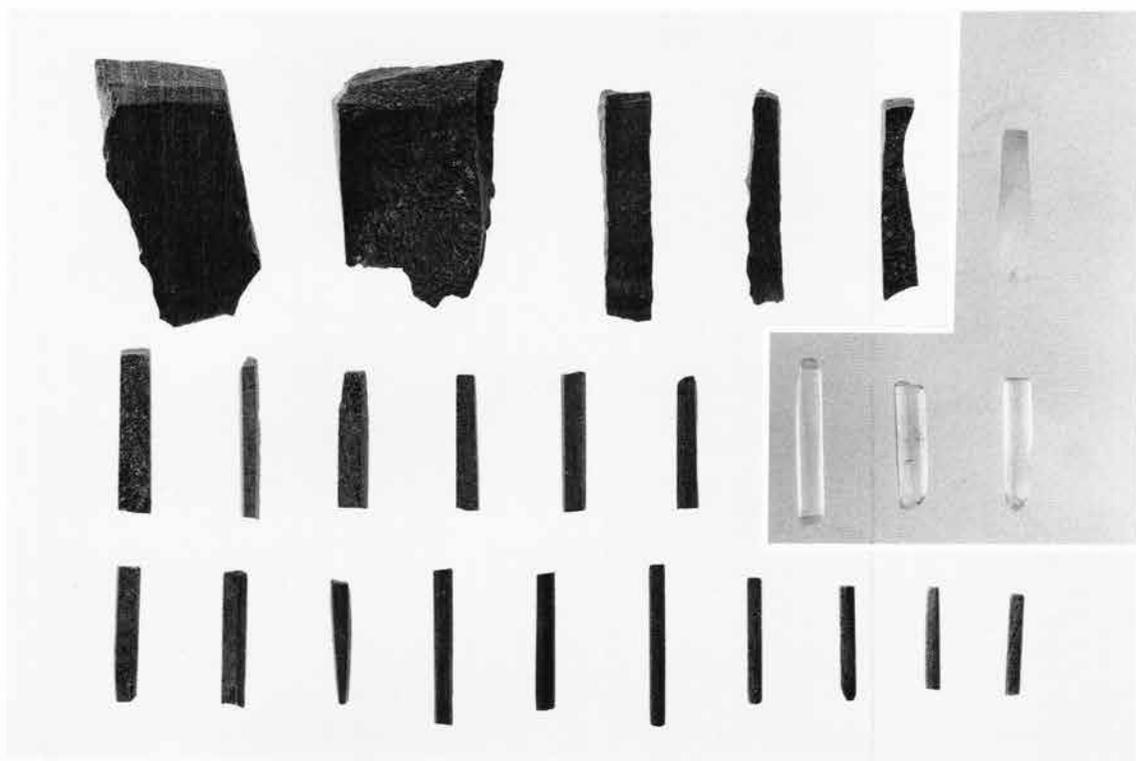
(1) SH23出土瑪瑙製石針石核及び未製品



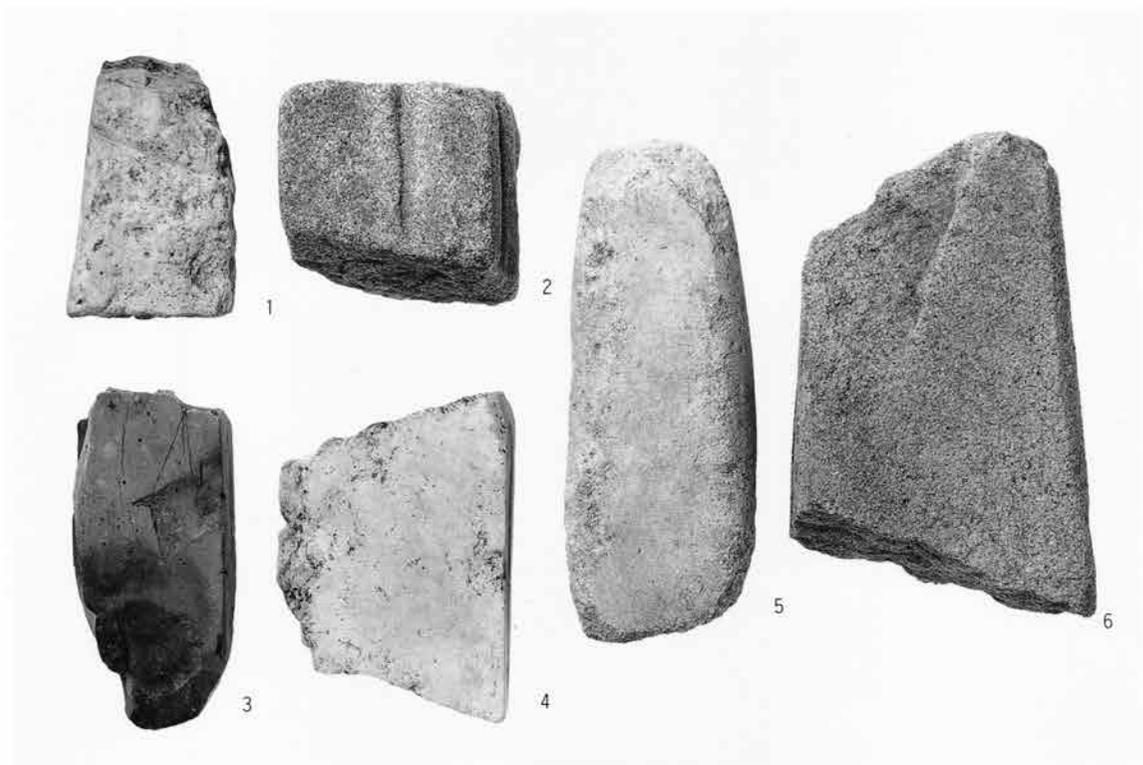
(2) SH23出土瑪瑙製石針角柱体及び成品



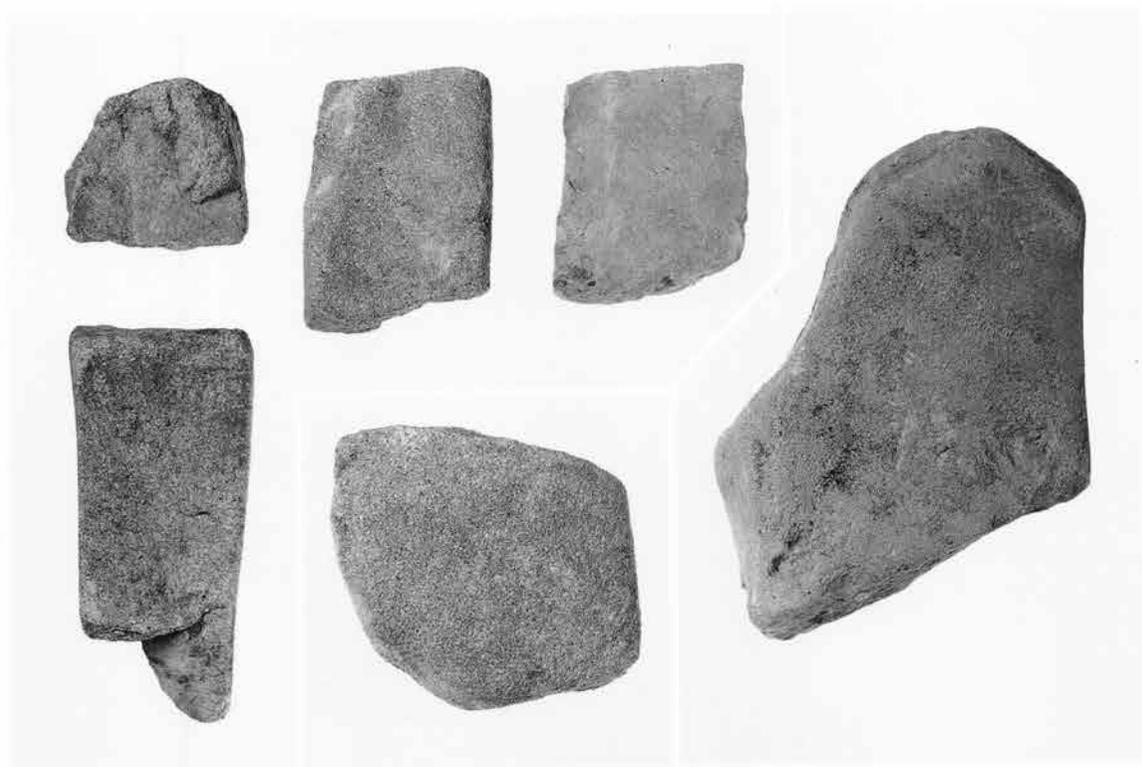
(1) SH23出土瑪瑙製石核



(2) SH15石針石核・角柱体・成品



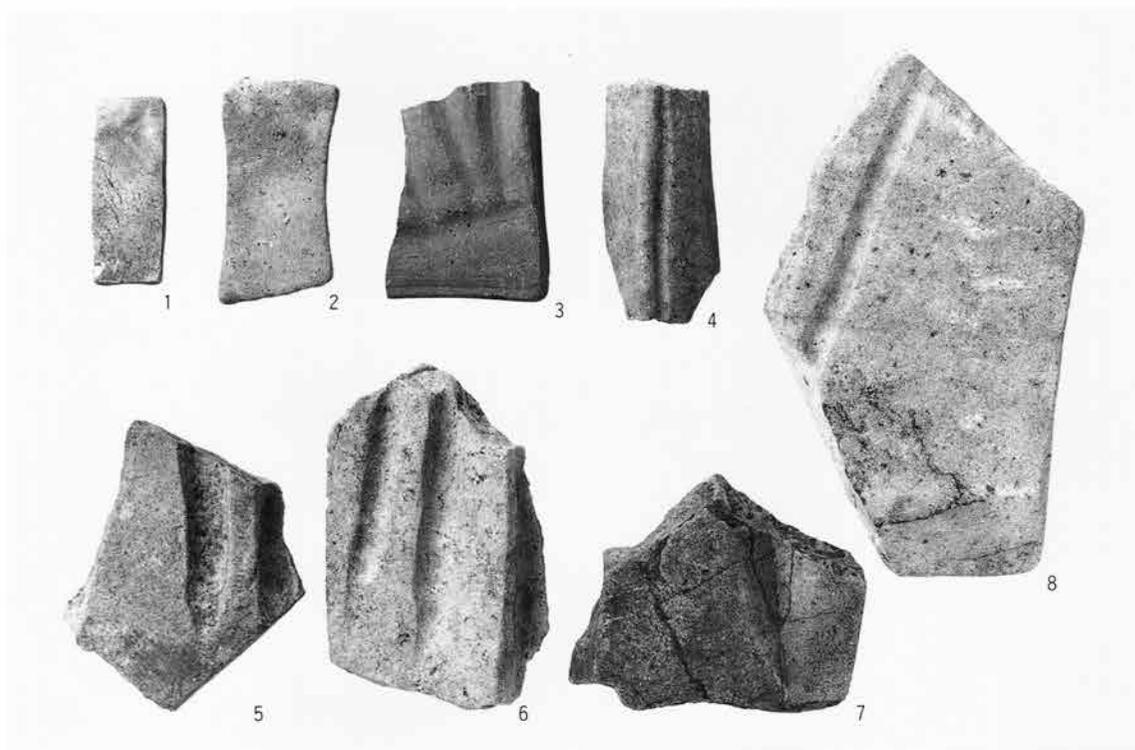
(1) 砥石 (SH01 : 6、SH06 : 5、SH11 : 2、SH19 : 3、SH23 : 1・4)



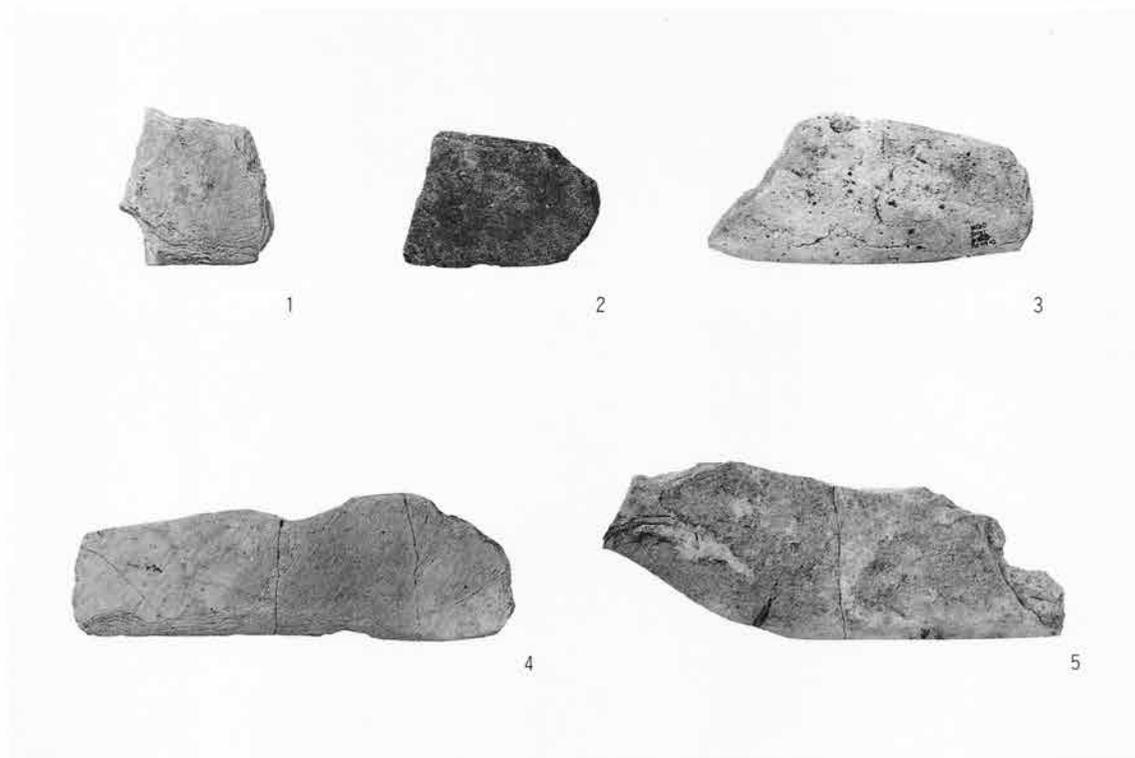
(2) SH23中央土坑出土砥石



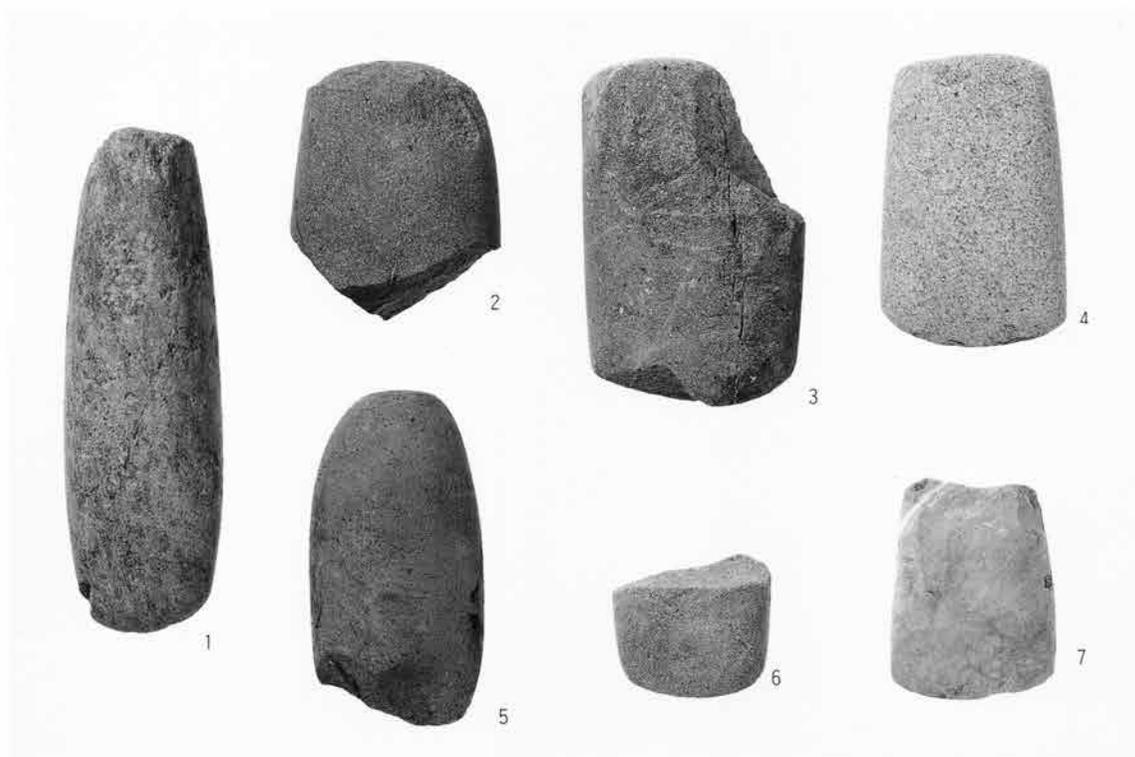
(1) SH17出土筋砥石



(2) 砥石 (SH01 : 3、SH02 : 4、SH03 : 5、SH06 : 1・2・7、SH15 : 8、SH21 : 6)



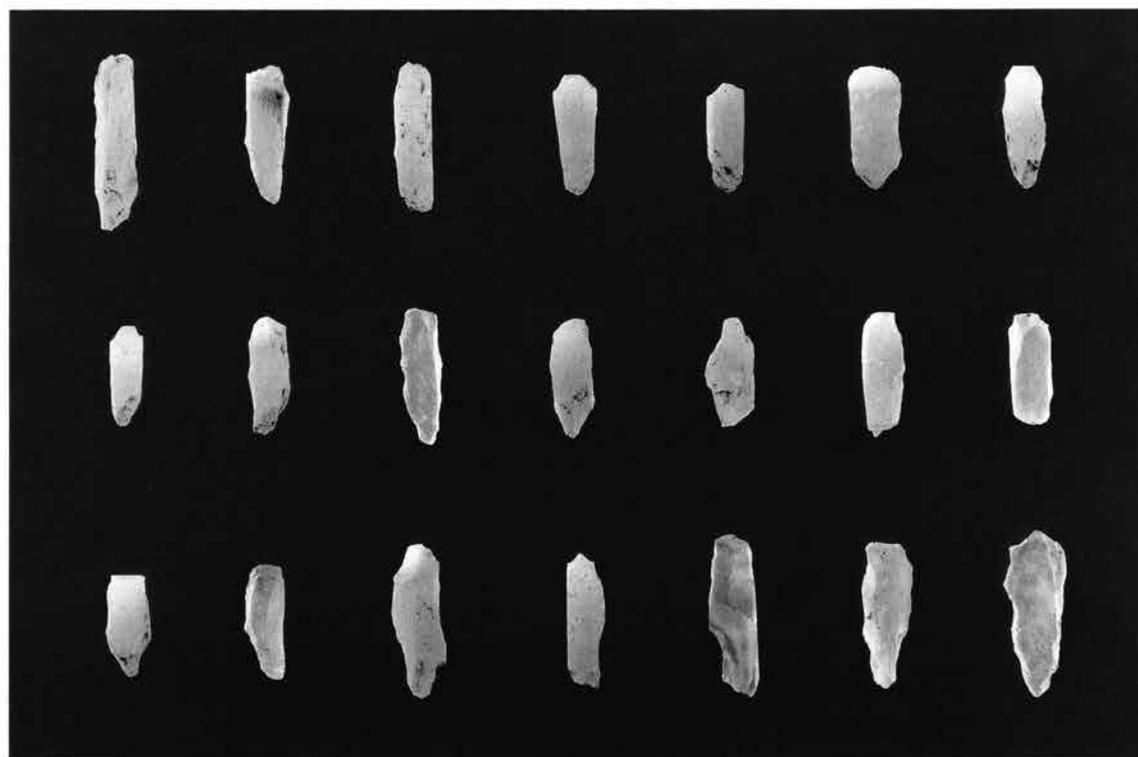
(1) 石庖丁状の磨製石製品 (SH04: 2、SH06: 1・4、SH21: 3、包含層: 5)



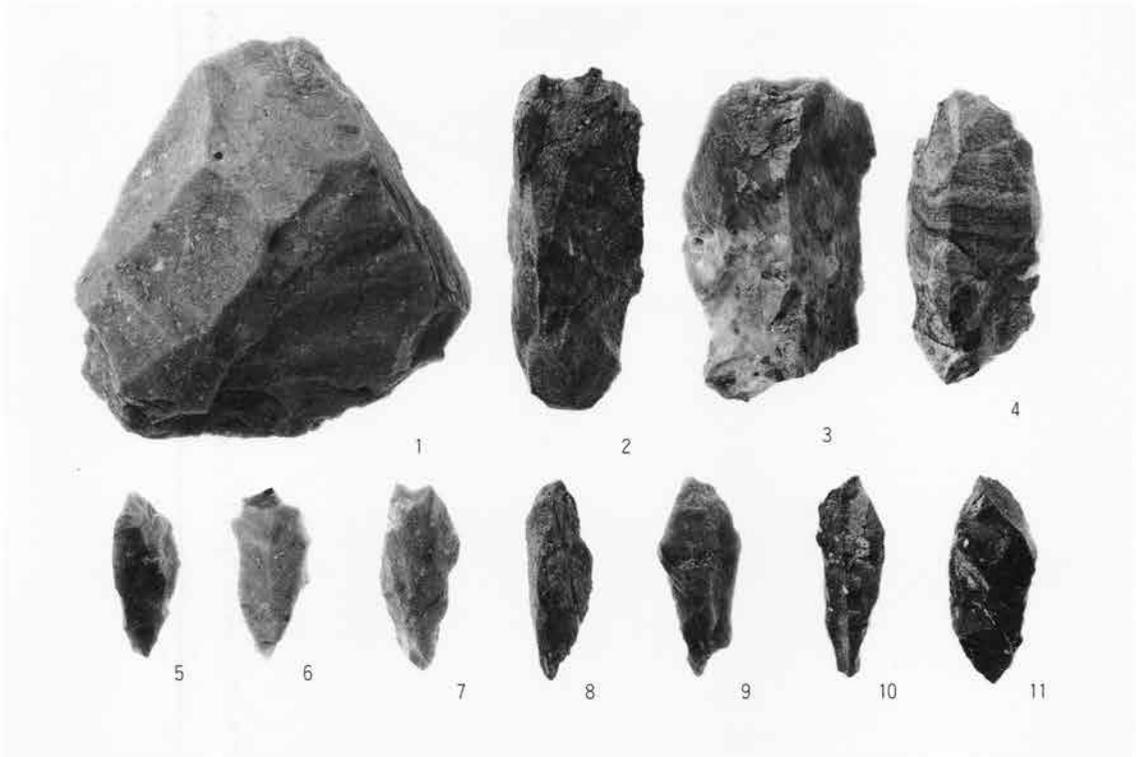
(2) 磨製石斧 (1~4・6・7) と敲石 (5)



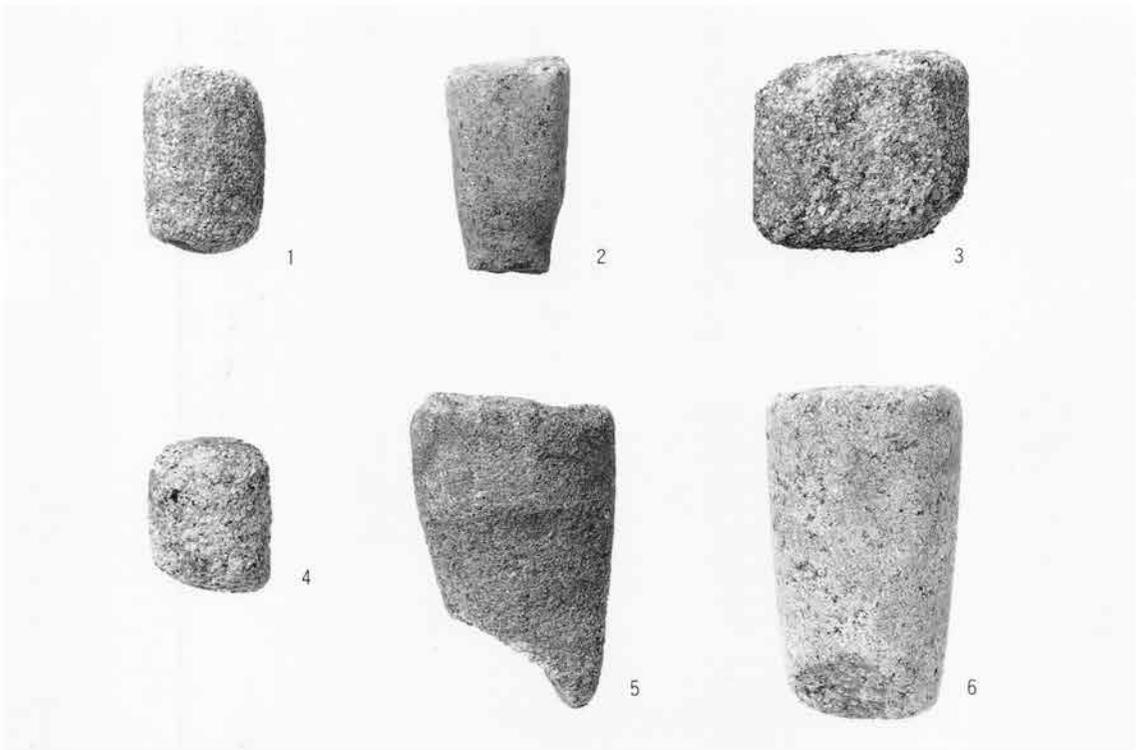
(1) SH21出土瑪瑙製小形錐狀石器



(2) SH23出土瑪瑙製小形錐狀石器

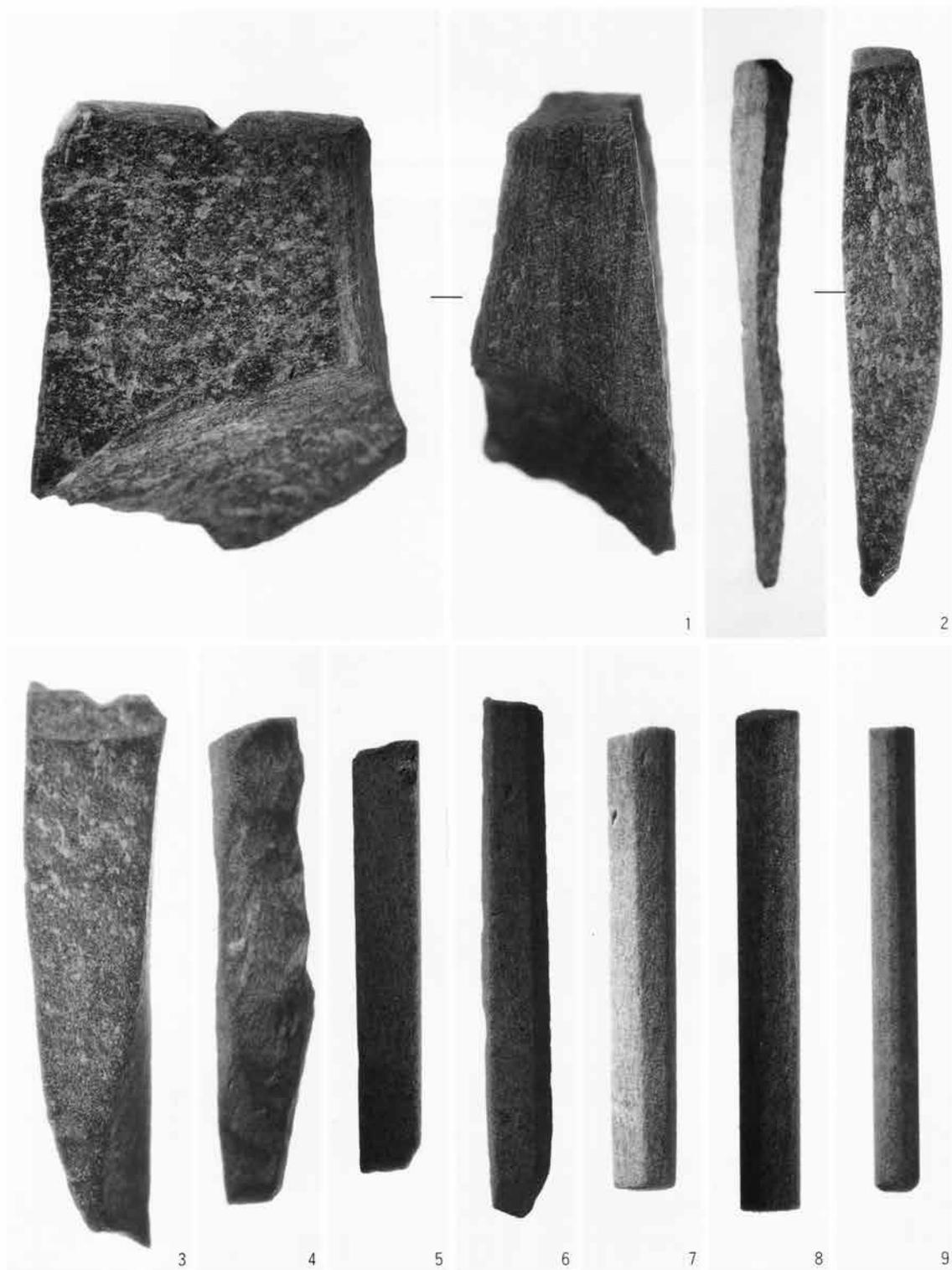


(1) SH21中央土坑出土碧玉製小形錐状石器 (1 ~ 4)



(2) 花崗岩製不明磨製石製品

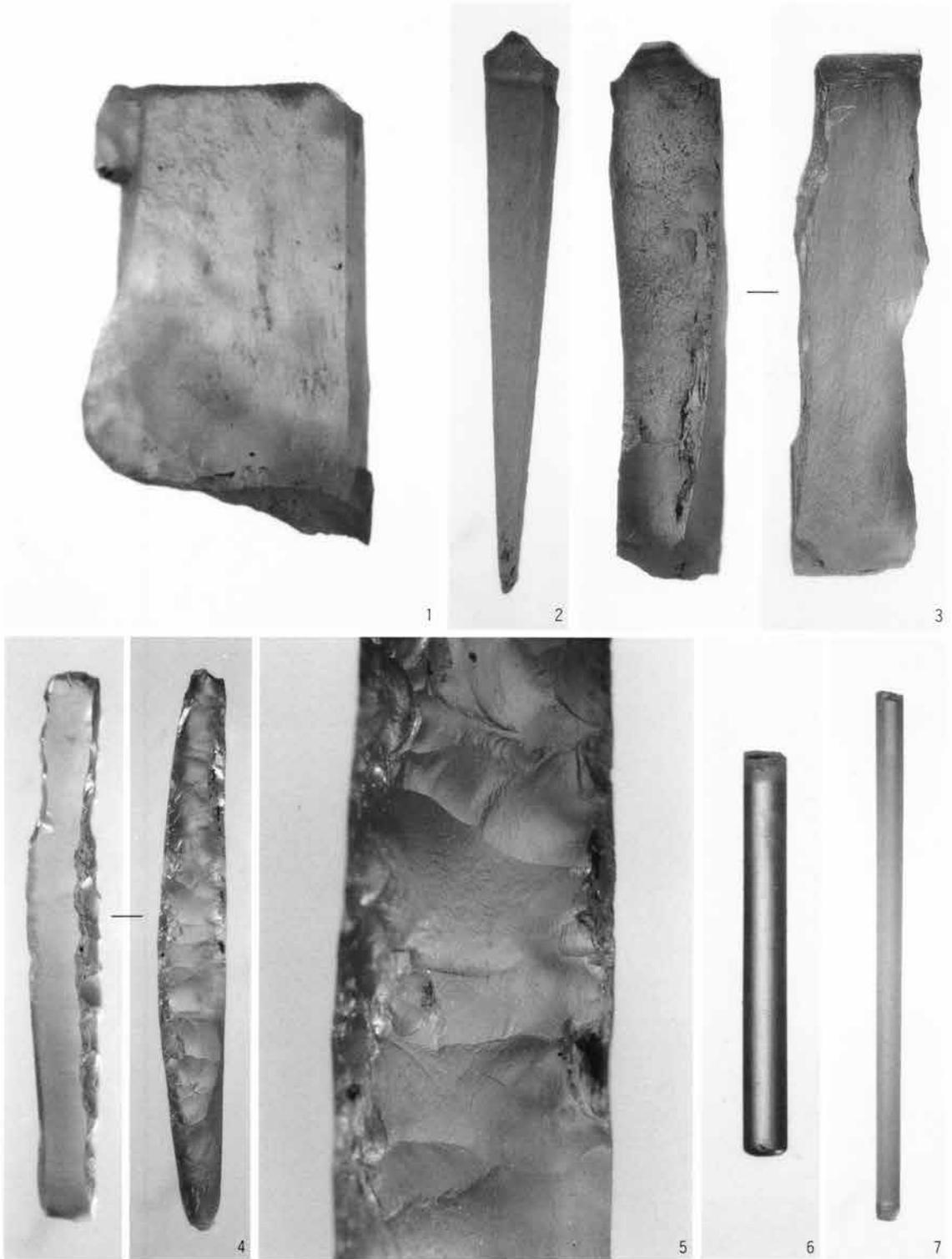
(SH04 : 2、SH06 : 4、SH15 : 5・6、SH19 : 3、SH21 : 4、SH23 : 1)



安山岩製石針製作工程

石核：1 角柱体：2・3 押圧剝離のある角柱体：4

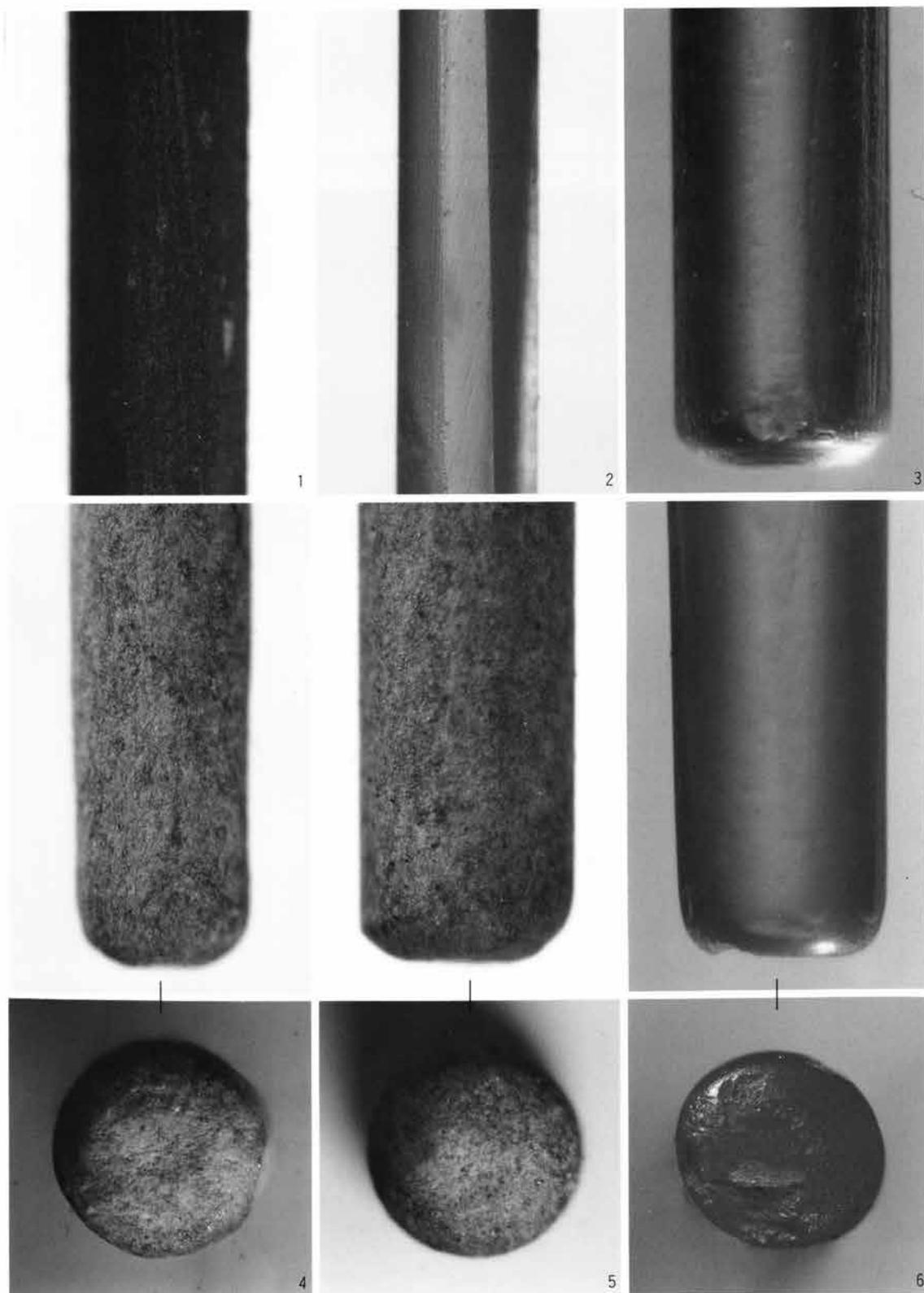
四角柱体：5 多角柱体：5～8 石針：9



瑪瑙製石針製作工程

石核：1 角柱体：2～4 押圧剥離の状況：5（4と同じ）

石針6・7



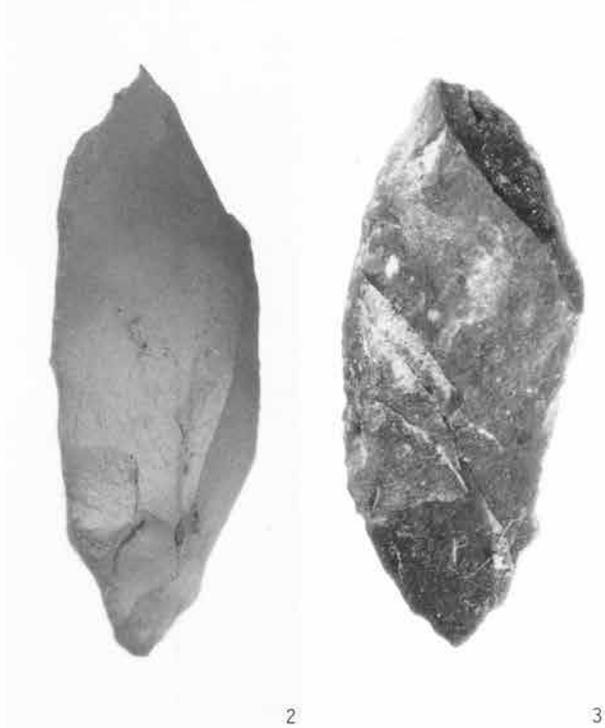
石針の細部

多角柱体の研磨調整痕：1 (安山岩)・2 (瑪瑙)

石針先端の使用痕：3～6 ※3～6は約30倍



4



2

3



6



7

水晶製管玉未製品の研磨状況：1 小形錐状の石器：2・3
石針角柱体頭頂部の施溝分割痕：4・5 石針石核の施溝分割痕：6・7
※1は約40倍、2・3は約7倍



(1) 1～5号横穴全景(南東から)



(2) 4～6号横穴全景(南西から)



(1) 2・3号横穴全景(南から)



(2) 2号横穴全景(南から)



(1) 2号横穴遺物出土状況(南東から)



(2) 2号横穴西袖部遺物・人骨出土状況(東から)



(1) 3号横穴全景（南から）



(2) 3号横穴玄室内遺物出土状況（南から）



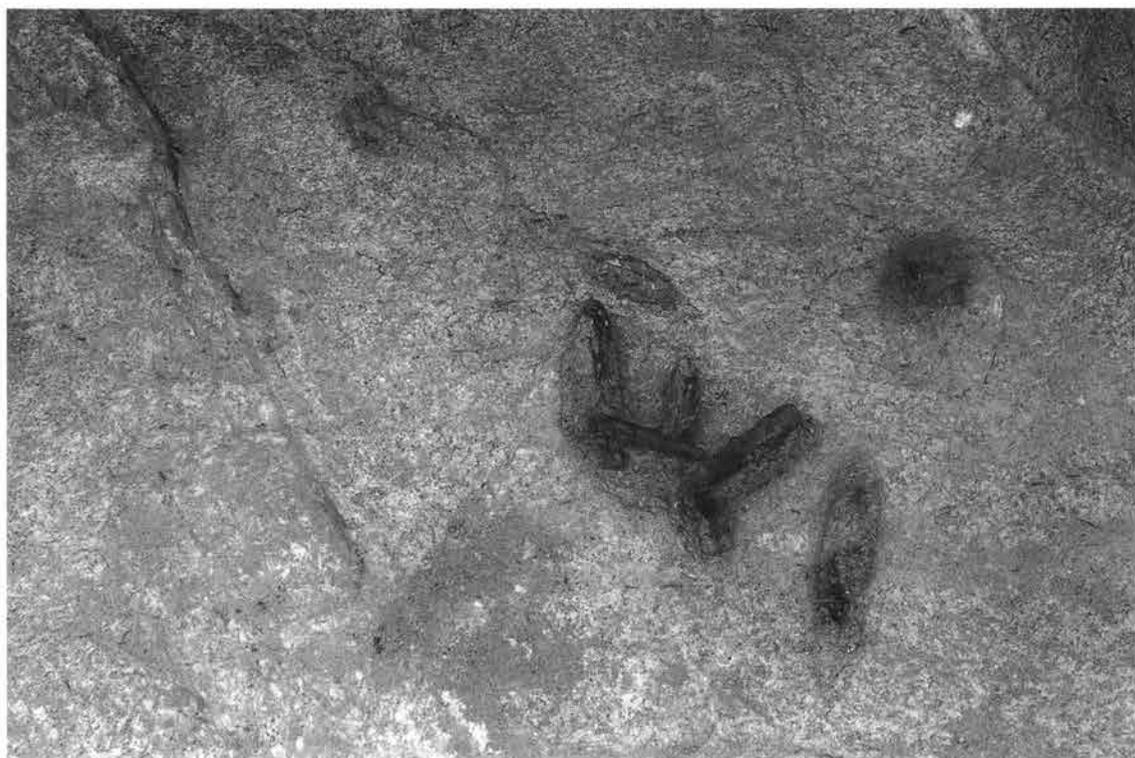
(1) 4号横穴全景（南から）



(2) 4号横穴墓道状遺構（東から）



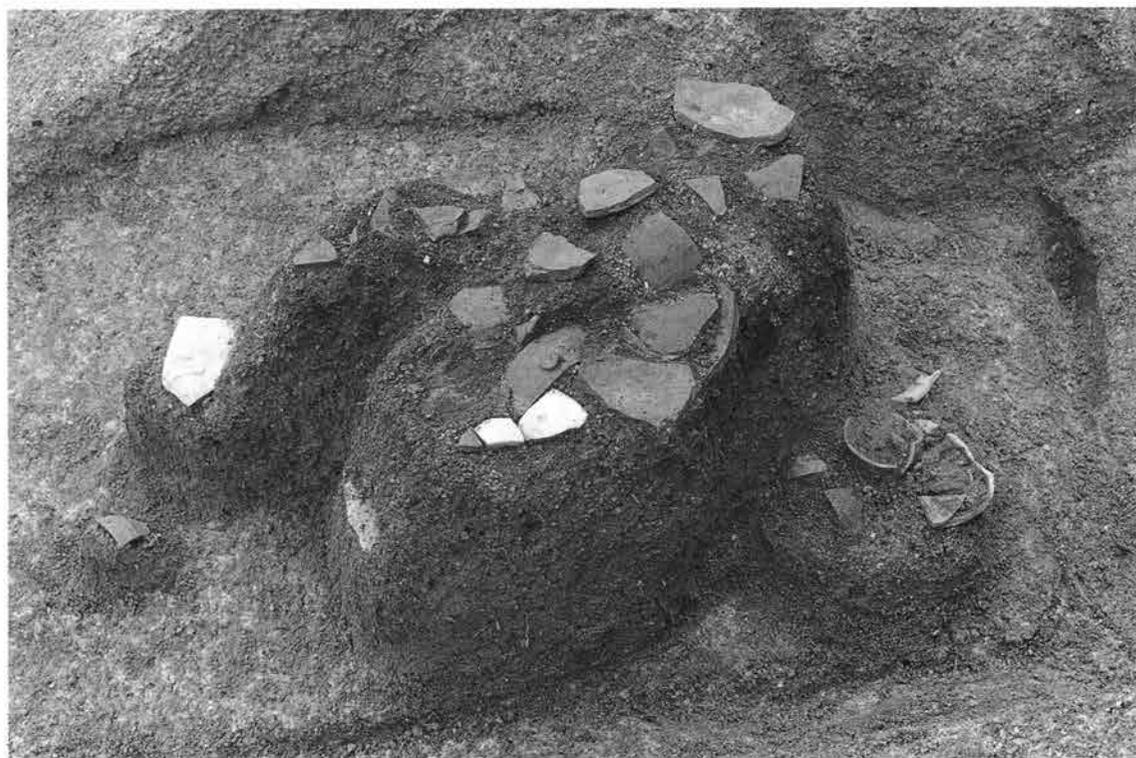
(1) 4号横穴前庭部遺物出土状況（北西から）



(2) 4号横穴玄室内・人骨出土状況（南から）



(1) 5号横穴全景（南から）



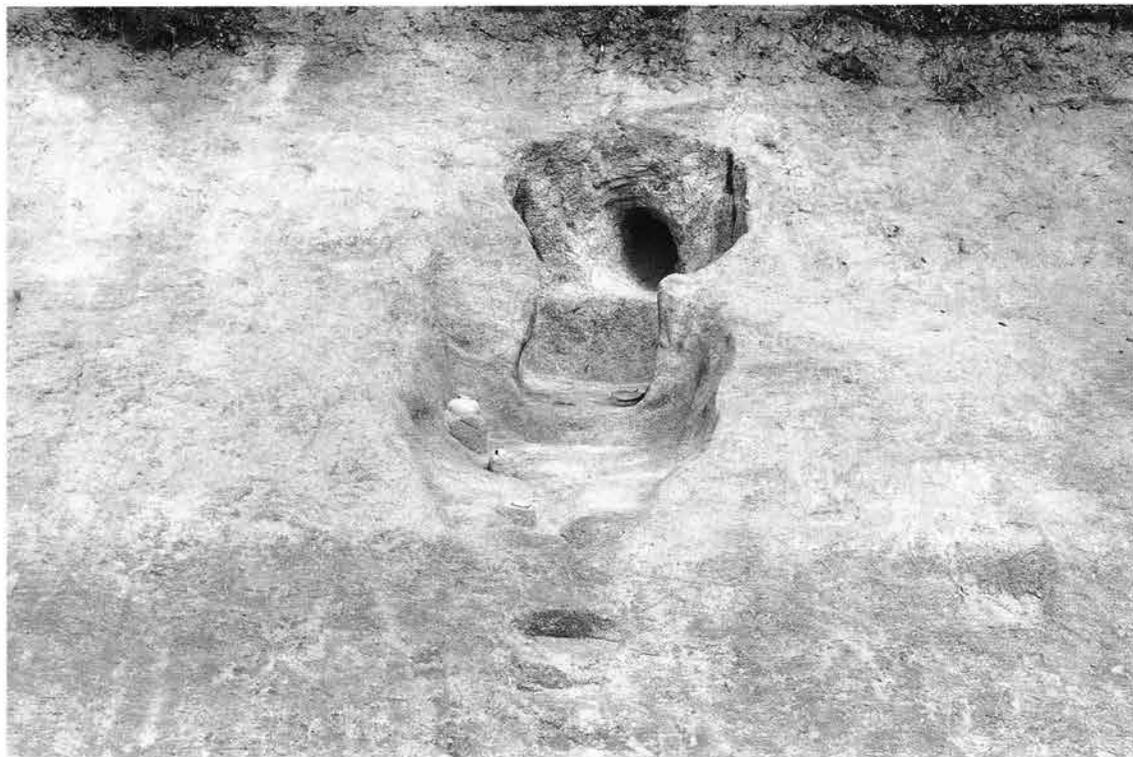
(2) 5号横穴前庭部上層遺物出土状況（東から）



(1) 5号横穴前庭部下層遺物出土状況(西から)



(2) 5号横穴玄室内遺物出土状況(南から)



(1) 6号横穴全景（南から）



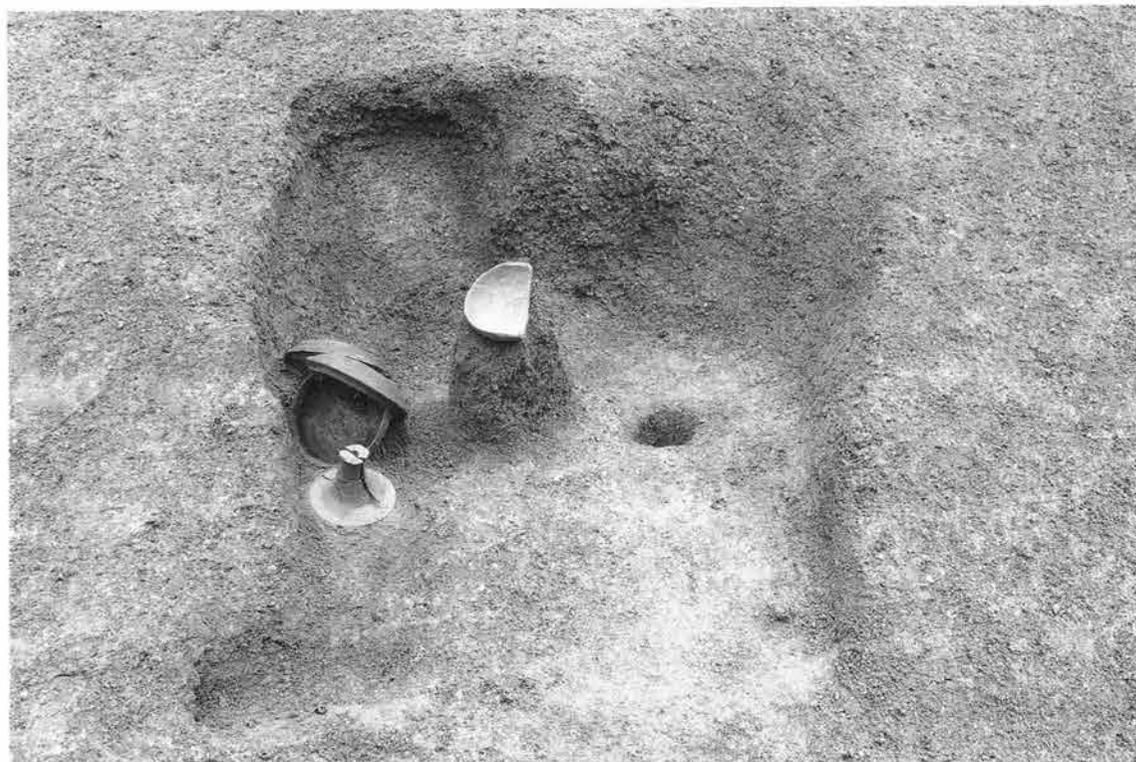
(2) 6号横穴全景（北から）



(1) 6号横穴玄室内遺物出土状況（西から）



(2) 6号横穴前底部土層断面（南から）



(1) SX01全景 (南から)



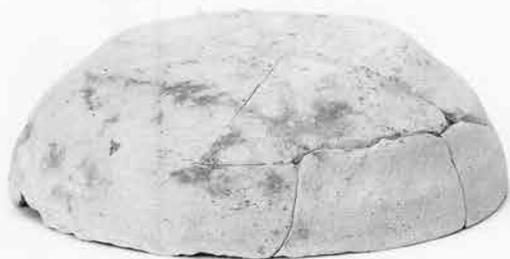
(2) SX01遺物出土状況 (南東から)



2



4



6



3



5



7



9



8



12



13



14



20



19



21



22



26



41



43



31



32



33



39



42



36



37



46



48



55



50



49



53



54



52



51



57



28



18



15



16



17



44



(1) 堤谷古墳群全景（北から）



(2) B-1号墳全景（南から）



(1) B-1号墳墓壙全景 (南から)



(2) B-1号墳墓壙内遺物出土状態 (西から)



(3) B-1号墳墓壙土層断面 (南から)



(1) B-2号墳全景(北から)



(2) B-3号墳全景(北から)



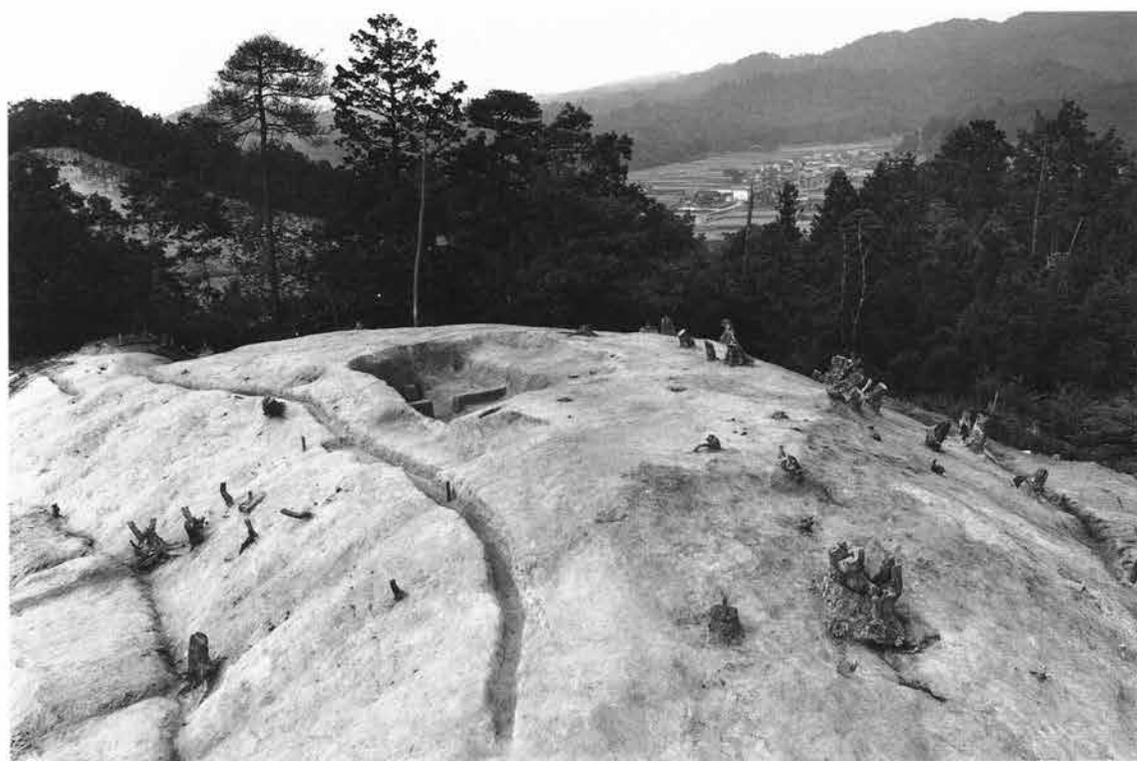
(1) B-3号墳墓壇1遺物出土状態(北から)



(2) B-4号墳墳丘裾遺物出土状態(北東から)



(1) B-5号墳調査前全景（南から）



(2) B-5号墳調査後全景（南から）



(1) B-5号墳墓壙1全景



(2) B-5号墳墓壙1上面土器群



(3) B-5号墳墓壙1棺内土器出土状態



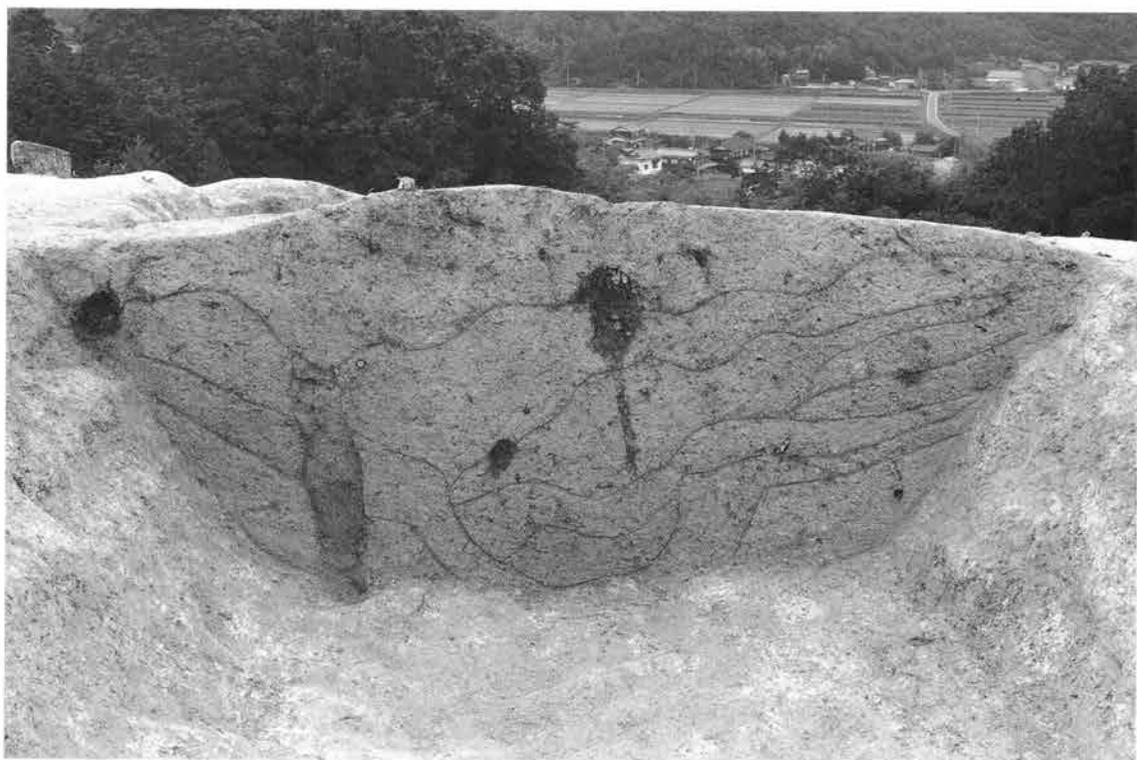
(1) B-5号墳墓壙2全景(南から)



(2) B-5号墳墓壙2上面土器出土状態



(1) B-7号墳墓壙全景



(2) B-7号墳墓壙内土層断面（西から）



(1) B-8号墳墓壙検出状況（北から）



(2) B-8号墳墓壙全景（南から）



(1) B-9号墳全景(南から)



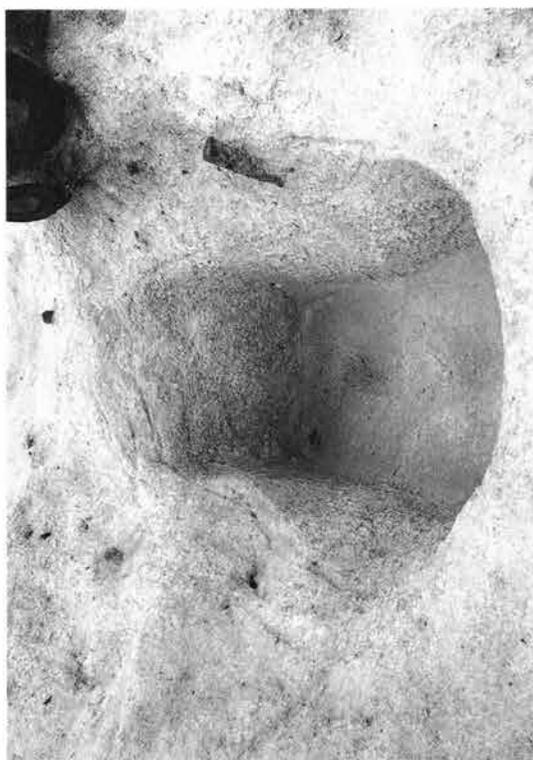
(2) B-9号墳墓壙全景(南から)



(1) B-10号墳墓全景(東から)



(2) B-10号墳墓上面土器群



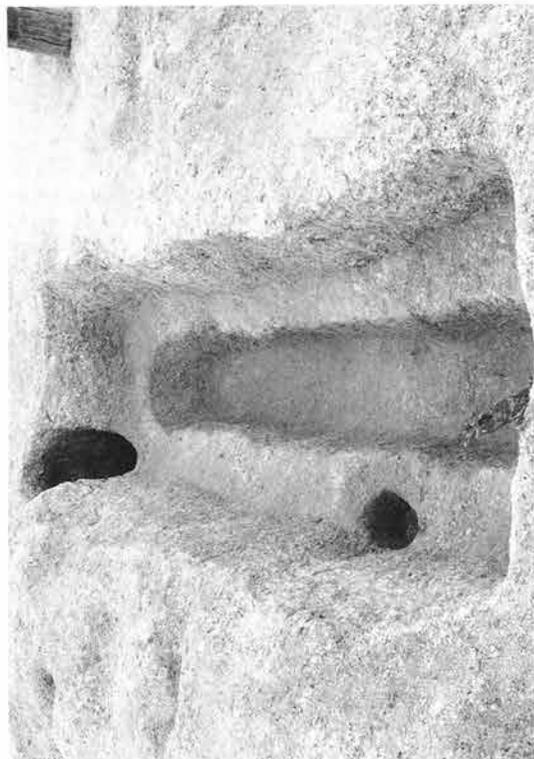
(3) B-10号墳墓2全景



(4) B-10号墳墓3全景



(1) B-11号墳全景 (南から)



(2) B-11号墳墓室1全景 (東から)



(3) B-11号墳墓室3 (土器棺墓)



(4) B-11号墳墓室4全景



1



2



22



20



24



21



25



27



13



15



28



14



16



3



4



5



17



18



19



32



(1) 堀切



(2) 堀切土層断面



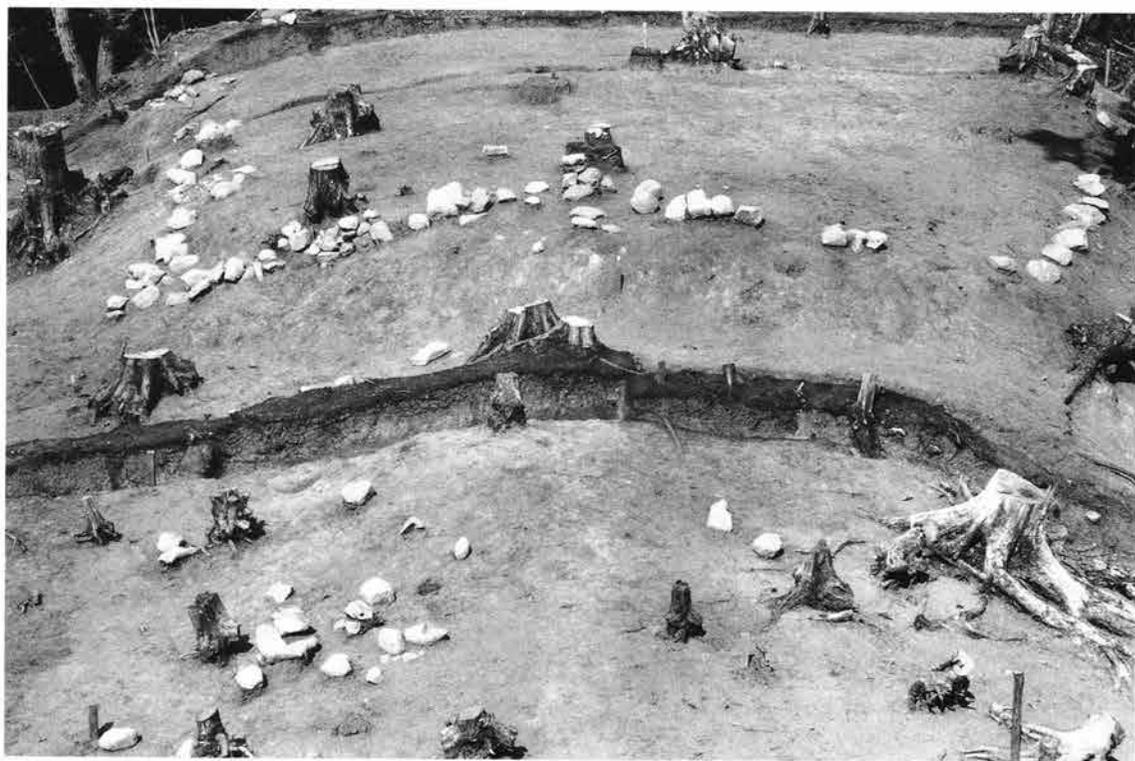
(1) 調査地全景（北東から）



(2) A地区試掘状況（東から）



(1) B地区中世墓群検出状況（東から）



(2) C地区石列遺構検出状況（東から）



(1) C地区石列検出状況（南東隅）



(2) C地区石仏検出状況（石列南辺）



(1) 五輪塔・石仏出土状況 (C地区)



(2) 石仏出土状況 (C地区)









京都府遺跡調査概報 第55冊

平成5年3月24日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel.(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel.(075)441-3155 (代)